

【本編完結】 転生したらブラック鎮守府の時雨だった話 改

chanhaya

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

いろいろあって転生したらブラック鎮守府の時雨だった話とは違う話になりました。

最強の地方鎮守府を作り上げた男、杉野時雨はなんやかんやで嫁艦の時雨とともに殺され、数年後に横須賀鎮守府の時雨として転生する。

→ 転生時雨ちゃん

この作品はpixivにも投稿しています。

あと、この作品はヘルシングや他の艦これ小説の影響を受けまくっています。予めご了承ください。

あと、めっちゃ不謹慎です。

串本鎮守府の外伝↓<https://syosetu.org/novel/286398/>

2022年8月10日 完結しました。後日談も頑張るぞい！

# 目次

プロローグ的な何か

杉野時雨

時雨の日記① 2049年6月～8月

時雨の日記② 2049年9月～10月、11月

証言① 合同大演習

証言② ホン川機動兵器暴走事件

時雨の日記③ 2055年2月～5月

西馬の日記

## 第一章

1話 提督着任①

2話 提督着任②

3話 時雨の戦闘

4話 武蔵の話

5話 言っちゃまったよ

6話 名も無き強者

7話 北の国から(笑)

8話 役者は揃った

9話 元ブラック鎮守府の奮闘

## 第二章 時雨の嵐の前な日常

10話 時雨の回顧

11話 駄目天使時雨の日常①

12話 駄目天使時雨の日常②

13話 駄目天使時雨の日常③

14話 時雨とアホドリ

103 97 92 87 80 70 67 61 54 50 46 43 39 30 24 20 17 14 9 4 1

15話	第零艦隊 v s 横須賀第1艦隊	108
16話	目には目をバケモノにはバケモノを	112
17話	ある意味バカップル	116
18話	常滑鎮守府での暴動	122
19話	ヒトか兵器かバケモノか	128
20話	最近出番無かった奴らの奮闘	131
21話	仙台鎮守府での暴動	135
22話	深海棲艦の力使ってるのに深海棲艦にはなりたくない人	139
23話	姉妹愛は素晴らしい	145
24話	駄目天使というか墮天使	148
25話	深海の真相	152
転しぐ改 外伝 零 神風零式編		
神風零式編		
第三章 時雨の割と甘々な日常		
26話	私は網走の終局の記憶がありません。	160
27話	バカを捜して約100キロ	164
28話	帰ってきたアホウドリ	172
29話	心のおにんにん	177
30話	普通にデート	180
31話	物理的おにんにん	186
32話	時雨、シヨタコンに目覚める。	189
33話	コスプレを…強いられているんだッ!	192
34話	まるでヘル○ング	195
35話	時雨、駄犬になる。	198

36話	ああ、そういうことだったのか	204
37話	一般提督から見た時雨たち	210
38話	呉越同舟って知ってる？	215
39話	時雨、ロシア出張。	218
転しぐ改 外伝 零	網走時雨編	221
第四章	時雨の奇妙な出張	
40話	時雨のロシア出張（旅行）	225
41話	圧倒的思い込み	231
42話	頼りにならないが多分裏切らない味方	234
43話	涼月のロシア出張（旅行）	240
44話	同志ロリババアよ、敵（どんどん狂っていく系主人公）を	247
撃て		
45話	元帥の宣戦布告	252
46話	深海棲艦（及び祖国超兵）Ⅱ吸血鬼説	257
47話	特に誘っているわけではない	262
48話	夕立に沈黙させられた艦隊	268
49話	空中艦隊出撃	272
50話	開戦の刻	275
転しぐ改 外伝 零	白露編	280
白露編		
最終章	時雨の一番長い夜	
51話	こいつ艦長にしたのマジで誰だ	283
52話	ソロモン深海棲姫	286
53話	首都侵攻	293

54話	第零艦隊推参	297
55話	坂本、調子に乗る	303
56話	坂本、調子に乗りすぎる	308
57話	地獄	312
58話	もう”彼”は何処にもいない	320
59話	西馬死す	326
60話	深海神風	330
61話	守り神は墮落した	333
62話	マレー沖深海棲姫	340
63話	提督が提督なら艦娘も艦娘	344
64話	うしろのしろうめんだあれ	351
65話	バケモノ同士の食らい合い(殺し合い)	356
66話	スーパ―煽り散らしタイム	364
67話	救いようのない現実	367
68話	作者がジョジョの漫画を読み始めた結果	371
69話	とある時雨の物語	378
最終話	春時雨が降る夜に	385
番外編	真面目に走れ杉野	394
	転しぐ改アフター 時雨は静かに暮らしたい(フラグ)	
	時雨は静かに暮らしている	403
	時雨は静かに暮らしている…?	407
	ゴー・トウ・網走 前編	410

## プロローグ的な何か

### 杉野時雨

私は元網走鎮守府提督の杉野時雨であり、横須賀鎮守府所属の駆逐艦、時雨だ。

うん、私がなんて言っているのか分からない人がほとんどだろう。私自身まだ分かってないしすぐに理解できるという人は逆に異常だろう。

私はさつき言った通り元々網走鎮守府という場所の提督だった。私は小さい頃から妖精さんが見えたし、なんだったら会話もできたが、提督になろうとはーミリも思わなかった。

なぜ提督になろうと思ったのだった？

そうだね、たしか一応高校を卒業したけど「提督にでもなつて家に金入れろ」って言われて追い出されたから士官学校に入ったんだっただかな？

私が提督になった頃はまだ艦娘兵器思想というのが蔓延していて、私のような艦娘人間主義者は意味不明な異端者として扱われ、網走とかいうクソ寒い場所に配属された。

私があんまり体強くないの知つてて配属しただろあいつら。

そこはその時代の標準でも相当やべえ前任が荒らしまくった鎮守府だった。その前任は資材の横領などの不正が発覚して逮捕されたらしい。

その鎮守府で出会ったのが時雨だった。

彼女は前任の秘書艦だった。初対面はかなり怖がられたのをよく覚えている。

ほかの艦娘たちにも怖がられたが何か月も一緒にいるうちに（といつてもすごい自堕落な生活をしてただけだが）だいぶ打ち解けた。

そういえば着任から半年くらいたった頃にうちの水雷戦隊と別の鎮守府の艦隊で演習したことがあったんだが、敵艦隊さんみんな死んだような目をしていたのを覚えている。そしてなんか普通に勝つて

敵艦隊の艦娘たちがデブに鞭打ちされてるのを見たことも覚えてる。

その後十数年クソド田舎で戦ってたらいつの間にか戦果が海軍の地方鎮守府で1位、全鎮守府中でも5位とかいうすごい鎮守府になってた。

ちなみにいうとさっきの時雨には秘書艦を続投してもらったのだが十数年も一緒にいたらいつのまにやら本当の夫婦みたいになってた。

ところでなぜ私が時雨になっっているかって？

ある日から記憶がぼやけていてよく覚えていないのだ。

唯一はつきり覚えているのは廃墟で大破状態の時雨が悲しそうな顔でこちらを見つめていたことくらいだ。マジで何があったのか。だが、こんなやり取りは覚えてる。

く真つ暗な空間にてく

「お前すごい哀れな男じゃのく」

テンプレ小説で良く見る爺さんがそう言った。

「誰ですあんだ」

「わしは創造主じゃ」

「なんの用です」

「いやく部下をほとんど沈めて嫁さんと一緒に仲良く砲撃で爆散な上記憶を失ってるとは、いやく実に哀れで滑稽な男じゃく」

「…余計なお世話だクソジジイ、てかマジで何があったの」

「おお、それがお主の素か。そうじゃ、せつかくだし少し未来に転生させてやろう。面白そうだし」

「…あの、時雨と一緒に転生とかできませんかね」

「なんじゃお主、神に注文とかなめとるのか？まあそれは転生してからの楽しみということだ」



みたいなやり取りだった。いや、時雨に転生したいとは一言も言っていないだけだね。

ついでにこの横須賀鎮守府、バリバリのブラック鎮守府だった。なに？時雨の人生？艦生？を追体験しろと？

まあ、生き残るために頑張ろうか。

## 時雨の日記① 2049年6月～8月

6月XX日 晴れ

今日から日記をつけようと思う。とりあえずは現在の状況の整理をしよう。

僕の名前は杉野時雨改め白露型駆逐艦時雨。

なんやかんやで死亡し、自称神によりこの世界の艦娘の時雨に転生した。

ブラック鎮守府じゃなかったら最高だったんだがなあ。

ブラック鎮守府の横須賀鎮守府に転生しちゃった。

そういえば自称神に「何かチート能力ないのか」と聞いてみたら「篡奪」という能力を付与されてた。いや、ユウキ・カグラザカにでもなれと言うのか？

あれ？いつの間にか一人称が私から僕になってる。

6月XY日 晴れ

2日目なのだが人手が足りないという理由で第2艦隊で出撃した。ちなみに敵はもっぱら水雷戦隊だったので普通に生き残れた。(自分の戦果は駆逐棲艦2体撃沈)

6月YO日 晴れ

出撃しまくってたらいつの間にか練度99になってた。自分でいうのもなんだが早すぎる。

今日も第2艦隊で出撃してきた。(戦果は軽巡棲艦1体、駆逐棲艦3体撃沈)

そしていつの間にか僕と夕立は第2艦隊のレギュラーメンバーになってた。

そういえば僕についてくる妖精さんの数が異常に多いんだけどどうしてかな？

6月YX日 曇り

とある海域（軍事機密）で猛威を振るっていたらしい駆逐棲艦（フラッグシップ）を仕留めたら他の鎮守府から感謝の電話がきたらしい。

提督が超上機嫌だった。

6月YY日 晴れ

今回の出撃で第2艦隊の旗艦の衣笠が沈んだので撤退戦でみんなを引っ張った僕が旗艦になった。ちなみに一応無許可で撤退したので戻ったら提督に張っ倒された。（戦艦棲艦1体、軽巡棲艦4体、駆逐棲艦5体撃沈）

6月YZ日 晴れ

普通に出撃しまくって帰投する途中で喋る駆逐棲艦を見たような気がしたが、たぶんやばい奴なのでスルーした。

7月XX日 晴れ

早朝からこの鎮守府の第一種指揮権所持、つまりは提督の秘書艦である白露と愚痴ってた。

ちなみに提督は白露が気に入ったようで最近は白露ばかり犯していて他の子には被害が及ばなくなったらしい。白露さん、心中お察します。

7月XY日 曇り

今日は白露率いる第1艦隊と僕の第2艦隊で連合艦隊を組んで出撃した。

白露さん普通に化け物だった。前世がアンデルセン神父だと言われても普通に信じてしまいそうな暴れっぷりだった。シンプルにやるのがなかった。

7月XZ日 晴れ

喋る駆逐棲艦とばったり出会った。てかあいつこの前スルーした

駆逐棲艦じゃね？

僕と白露の二人で攻撃したら「そうだ、これだ、全身の血が沸騰したようなこのハイテンション！これこそ闘いだ！」とか言っていた。あいつと一緒にいたら戦闘狂になりそう。二度と会いたくない。

7月Y0日 曇り

鎮守府の演習で白露が集中砲火を受けていた。あれかな？化け物すぎて深海棲艦とも思われてるのかな？

ところで僕のスキルの篡奪は他のスキルやエネルギーを奪うことが出来るらしい。ただし体が触れている時間だけチビチビ奪っていく感じで。めんどくさい。

7月YX日 晴れ

なんかこの前の駆逐棲艦が駆逐棲姫としてデータベースに登録されてた。

日本刀を振り回すやばいやつと書かれていた。いやもつとあるだろ。戦艦並みの火力と雷巡並みの雷撃とか。

今日は会わなくてよかった。

7月YY日 雨

この前の駆逐棲姫とばったり会って頑張った。

10分くらい戦ったら満足したのか「よく頑張った」と予備の太刀を放り投げてきた。いや、なぜ？

あいつの思考回路がまじで理解できない。

その後、戦艦棲艦相手に試し斬りしたら首がスパクんと斬れた。とんでもない得物を貰ったな。

7月YZ日 雨

太刀で深海棲艦からいい雨（）を降らせまくった。

8月XX日 曇り

8月になったがもちろん夏休みなどというものは無い。ああ、前世が恋しい。

8月XY日 晴れ

雲一つない快晴だったが太刀で暴れまわっていい雨( )を降らせた。夕立に「夏でもマフラーしてて暑くないのか」と聞いたら、「艦娘は艦装つけてれば体感温度が快適らしいっぽい」と言っていた。そういえばみんな艦装を簡易展開してるような。僕が非常識なだけなのか？

8月XZ日 晴れ

なんかこの前の駆逐棲姫とまたばったり会った。チャンバラを挑んだが圧倒された。大破したので全力で逃げた。提督にまた張っ倒された。

8月YO日 雨

「また駆逐棲姫と遭遇した。いい雨でブーストされたのか運よく奴に一太刀与えられた。

駆逐棲姫が「これからが楽しみだな…」みたいなことを言いながら微笑んでいた。まじであいつ何なんだ。自分で強者を作る系の猗窩座か？

8月YX日 晴れ

最近、駆逐棲姫にばかり会うような気がする。流石にしつこかったので太刀で右腕をぶった切ってやった。

「いつの間にかこんなに強くなったんだ？」みたいな顔をした。

8月YX日 晴れ

なんか最近、白露や夕立以外から避けられてるような気がする。夕立に聞いたら「常軌を逸した戦い方過ぎて深海棲艦かそのスパイ

なんじゃないかって疑われてるっぽい」と言っていた。

僕またなんかやっちゃいました？いやめっちゃ思い当たる節あったわ。

8月YY日 晴れ

とある海域（軍事機密）を攻略する前日に白露の第1艦隊と僕の第2艦隊で演習をした。

はつきり言っただけ滅茶苦茶だった敵も味方も全力でFF&集中砲火してきた。まあそのおかげで白露と僕は太刀による砲弾切りを習得したのだが。てか白露いつのまに太刀貰ってたんだ？

8月YZ日 曇りのち晴れ

連合艦隊とある海域（軍事機密）の攻略にいった。

途中で何回か戦闘が起きたが武蔵が小破したぐらいでほとんど被害なしで突破し最後の海域で毎度おなじみ駆逐棲姫さんがやっつけた。

奴は動きがやたら素早い上に砲弾切りを習得してたので結局、白露と僕の二人で戦うことになった。

味方から三式弾によるFFが飛んできて艦装がぶっ壊れたが死闘の末なんとか勝って白露にお姫様抱っこされながら帰投した。

※イメージ

時雨の日記② 2049年9月～10月、11月

9月XX日 晴れ

早朝に工蔽に白露に連れて行かれたら、なんということでしょう。この前の駆逐棲姫との戦闘で（主に味方のせい）ぶっ壊れた時雨改二の艤装の主砲が、夕立改二の艤装にくっついてるではありませんか。いや、なにあれ。

なんでもぶっ壊れたあの日の夜、白露が事後におねだりして白露型の改二の艤装の予備を造船所から運送してもらったらしい。（時雨の艤装は予備が無いらしい）白露、いつも迷惑かけてごめんね。

なんか改造されてるのは明石さんの趣味らしい。あいつテワイズの技術者だったんか。

深海棲器とかいう陸軍が開発した深海棲艦の装甲を素材にした武器が同梱されてた。その中にレンチメイスとかいうどこかの孤児たちのガンダムが持つてそんな鈍器があったのでそれを担いで遠征中に重巡棲艦と遭遇した第4艦隊を助けに行ってきた。

我ながらバルバトスルプスみたいなかつこいい登場の仕方が出来たような気がする。

ちなみに第4艦隊の面々には引かれた。

9月XY日 晴れ

最近、このブラック鎮守府の生活に慣れすぎてこれが普通の生活だと思うようになってきた。白露に「僕そろそろ末期かな？」と聞いたら「それに自覚があるうちは正常」と言われた。

末期なのはこの鎮守府だった。

9月XZ日 雨

出撃してたらこの前データベースに追加されたバスターソードを担いだ空母棲姫を見つけた。艦載機を出してきたが雨のおかげで味方は無傷で撤退できた。

またもや勝手に撤退したので提督にぶん殴られた。

9月Y0日 晴れ

造船所とは違う研究所から艦娘が一体配属されてきた。初月という駆逐艦なのだが、研究所がこの前の駆逐棲姫を回収して見た目を艦娘にしたら完成したやつらしい。(リサイクル艦)ちなみに口調は変わってないのでボクっ娘ではない。やつは白露と相部屋になった。

そういうえば艦装をみたら普通の初月にはついていない日本刀を装備していた。

ついでにいうとやつがりサイクル艦なのは提督と白露と僕しか知らない。

9月YX日 晴れ

初月は僕の第2艦隊に所属することになった。

なんか僕と一緒に無双した。

9月YX日 雨

ケツコンカツコカリ(練度上限を99から175にする)が実装されたので熟練の艦娘たちの艦装が一斉に造船所に送られた。ちなみに僕の時雨改三の艦装はある技術者に「なにこの時雨Ez8」と言われたらしい。いやこれルプスですが。てかなんでそんな古いアニメ知ってんだよ。この時代だと約55年前の作品だぞ。

10月XX日 曇り

データベースを読んでたらいつの間にか大量の姫級が追加されていた。ちなみにそのうちの数体はすでに撃破されているらしい。

姫級一覧

戦艦棲姫



空母棲姫  
重巡棲姫  
軽巡棲姫  
護衛棲姫  
飛行場姫  
駆逐棲姫（新）  
防空棲姫（故）  
潜水棲姫（故）

なんか新しい駆逐棲姫はちゃんとした駆逐棲姫らしい。

ちなみに防空棲姫は大本営直属の特殊部隊に、潜水棲姫は造船所が試作した新型の潜水艦娘たちに撃沈されたらしい。ついでにいうとその潜水艦娘たちは、やまととかレッドスコルピオンとかキングとかアレキサンダーとか言うらしい。絶対原潜じゃん。

10月XY日 雨

今度また新たな海域を攻略するのだが無性に嫌な予感がする。連合艦隊で出撃するのだが、白露辺りが沈みそうな気がする。

本人に言ってみたが「沈みそうなのはいつもでしょ」と笑われた。いつの間にかブラツク鎮守府に毒されていらっしやる。

10月YO日 雨

白露が沈んだ。主に僕のせいで。何があつたのか？

この前書いた新たな海域（軍事機密）を攻略しに出撃して、海域は問題なく制圧したのだが、帰還中に戦艦棲姫と重巡棲姫が海中から奇襲を仕掛けてきて戦艦棲姫の砲撃で僕が大破して、直後に重巡棲姫が砲撃してきて白露がそれをかばって沈んだ。

白露が沈む直前に「私の代わりにみんなを守って」とか言っていた。なぜあんなにひどい連中を守りたいのかよく分からないが、僕は約束を守る男（現在女）なので仲間たちを守ってみせよう。

なんか提督に放送で呼ばれたので行ってくる。

10月YX日 雨

放送で呼ばれた後、一晚中提督に犯された。

なんでも「俺の大事な肉便器兼戦果製造機を沈めた」かららしい。お前白露をその程度にしか考えてなかったのか、下衆が。

最初に臭っせえモノを啜えさせられ、その後のことは脳が理解したくないのかよく覚えてないが、痛くて気持ち悪かった、ような気がする。

出撃した後、提督に呼ばれてまた犯されて、その後秘書艦に任命された。

やばい、もう心折れそう。

10月YY日 雨

出撃した後、提督に呼ばれてまた犯される…かと思いきやなんかすごい量の赤い液体を注射された。注射された後、全身に激痛が走り命の危険を感じたのでドツグに突撃したら、気絶したのか真っ白精神世界で僕と防空棲姫でご対面した。

その後二人で不毛な殴り合いをしたが、急に防空棲姫の背後に僕そつくりの艦娘が湧いて、防空棲姫を殴り倒してくれた。

そのそつくりさんは「提督！」と駆け寄ってきた。もしかして時雨と一緒に転生って、同じ体で転生ってこと？二重人格にしろだなんて一言も言っていないけど言葉不足だったかな？

その後、時雨と相談して取り敢えず頑張ることにした。僕には嫁艦時雨という癒しと、神の寵愛ならぬ自称神の嘲笑が付いてるので多分大丈夫だろう。

そういえば僕のチート能力の“篡奪”は奪うものを念じるとそのものをじわじわ奪っていくらしい。というわけで提督の生命力をじわ

じわ奪っていくことにした。

覚悟しろよ提督。お前が奪っているように見せかけてお前の全てを奪ってやる。

ちなみに目が覚めた後、提督のところに戻ったら「生きてたの!？」と驚かれ、「このことは黙つといてくれ」とか言っていた。取り敢えず初月にだけ言っておいた。

10月YY日 雨

出撃でミスって戦艦棲艦(エリート)の砲撃をもろに食らったが、防空棲姫の能力でも手に入れたのか小破で済んだ。初月以外の仲間は本物のバケモノに見えただろう。

11月■■■日 雨

体中が痛い。気持ち悪い。怖い。

死にたい。

## 証言① 合同大演習

合同大演習。

それは毎年11月に行われる、国防海軍の主力鎮守府によるトーナメント方式の演習だ。

日本全国の鎮守府の精鋭艦隊たちが横須賀鎮守府に集い、その腕と技術を競い合う。

元々はただの演習会だったのだが、全国の鎮守府の艦娘たちが来ると言うこともあり、回を重ねるごとに参加している艦娘たちがお祭り騒ぎな状態になっていった、例えるなら文化祭のような感じだ。

これは転生時雨が暴れた第12回合同大演習の海軍関係者や艦娘たちの証言である。

←大演習の決勝戦の時の編成

横須賀鎮守府 第1艦隊

時雨改三(転生・混血艦) L v. 1 7 5

初月改(リサイクル艦) L v. 1 7 5

夕立改二 L v. 1 5 8

金剛改二 L v. 1 5 3

加賀改二 L v. 1 4 2

曙改二 L v. 1 1 5

佐世保鎮守府 第1艦隊

山風改二(転生) L v. 1 7 5

伊勢改二 L v. 1 4 2

日向改二 L v. 1 3 8

雲龍改 L v. 1 3 6

天城改 L v. 1 2 5

那智改二 L v. 1 2 0

ちなみに金剛、加賀、曙は数少ない時雨を迫害しない艦娘だったりする。

証言① 日本国防海軍 志摩鎮守府 岩戸義幸少佐

私は横須賀鎮守府の艦隊はこれまでの演習から見て戦艦と空母で  
ごり押しするもんだと思っていました。

しかし、出てきたのはまさかの旗艦が駆逐艦で、駆逐艦が過半数を  
占めるという横須賀鎮守府としては前代未聞の艦隊でした。

それを見て、私だけでなく演習を見ていた関係者と艦娘たちは目を  
剥いていました。

しかし、私たちはさらに驚くことになります。

演習開始とともにメイスをもった横須賀の旗艦と素手の佐世保の  
旗艦が急発進して殴打と蹴りがぶつかり合って衝撃波が出たんです。  
こんな光景普通ありますか？ないですよね。

※イメージ

さらに横須賀の他の駆逐艦二人が日本刀を持って突撃していまし  
た。異常すぎるにも程があります。

演習は横須賀鎮守府の圧勝でしたが、佐世保の旗艦が白兵戦で暴れ  
ていて、「ああ、これが艦娘の新時代か…」と感じましたね。

証言② 日本国防海軍 志摩鎮守府 駆逐艦時雨

僕は「すごい時雨がいるらしいから一緒に行こう」と提督に誘われ  
て大演習を見にいったんだけど、なんか、まあ、別のベクトルですご  
かったね。うん。なんか、思ってたのとだいぶ違うけどすごかった  
ね。うん。

証言③ 日本国防海軍 志摩鎮守府 駆逐艦夕立

横須賀の夕立かつこよかつたつぽい！夕立もあれに負けなくらい  
強くなるつぽい！

←かつこいい夕立

※志摩の時雨と夕立はまだ未改造です。

証言④ 日本国防海軍 横須賀鎮守府 戦艦武蔵

いつも見えて思うんだが、やっぱりあいつら深海棲艦なんじゃないか？艦娘にあんな本物のバケモノがいてたまるか。

## 証言② ホン川機動兵器暴走事件

### ホン川機動兵器暴走事件

それは2053年10月16日に、中国広西チワン族自治区の南部に位置する東興市にて中華共和国軍（革命軍）が誤って、中国人民解放陸軍が建造し第三次世界大戦末期に封印した機動兵器の一つ“革命人形十三号”を起動させてしまい、それが暴走しホン河を南下しながら東興市などの市街地を破壊した事件である。

また、この事件は中国軍、ベトナム軍、日本軍（艦娘）、深海棲艦が一時的ながら共闘したことでも知られている。

←革命人形十三号

ちなみに、なぜ横須賀鎮守府の艦隊がホン河に行ったのかというと、暴走した機動兵器を抑えるためにベトナム当局は日本政府に救援を要請し、それが回り回って横須賀鎮守府の任務になったからだ。

ついでにいうと深海棲艦も参戦した理由は、機動兵器が装備しているビーム砲は深海棲艦にとってもかなりの脅威になるため今のうちに回収しようと考えたからである。

### 交戦勢力

中国人民解放陸軍

vs

中華共和国陸軍

ベトナム人民陸軍

日本国防海軍

深海棲艦

←その時の横須賀鎮守府の艦隊

時雨改三  
初月改  
夕立改二  
金剛改二  
加賀改二護  
イントピレツド改

ちなみにイントピレツドは新人で、時雨たちを迫害しない数少ない艦娘だったりする。

証言① 中華共和国陸軍 第6師団 32式戦車56号車戦車長  
李樂際少尉

なんか、上官の命令でよくわからん穴？みたいなところに行っただすよね。そこに何かがあるのかは知らされてなかったんですが、まあ大丈夫だろう。と思っただんです。そしたらその穴のすぐそばに姫級？とかいう真つ白なお嬢さんがいたんですよ。いや〜可愛かったな〜。ゲフンゲフン。そしたらその姫級が「やめろ！近づくな！特に戦車！」と大声で言ったんですよ。まあそれを無視して進んだんですけど。次の瞬間、「敵兵器認識、革命人形十三号、再起動」と機械的な声が聞こえたんです。本能的に「ヤバイ！」って感じて操縦手に命令して戦車を後退させました。そしたら穴から人型が出てきてアニメみたいなビームが飛んで来たんですよ。間一髪で当たらなかったんですけど。後退してなかったら溶けてましたね。やつぱり俺って運いいのかな。その後のこと？気絶してたのかよく覚えてないですね。とりあえず川で女の子が大剣振り回して機動兵器をぶっ壊したのは見えましたね。同僚に聞いたんですがあれ日本の艦娘とかいうやつなんです。なんか、イメージと違いましたね。てか主砲使えよ！って思いましたね。うん。

証言② ベトナム人民陸軍 第13師団モンカイ駐留部隊 リョウ・フリー・ミン上佐



我々は東興市が大騒ぎになっていたのので上に許可を取って東興市に突入しました。そして見るからにヤバイ兵器を視認しました。敵はビーム砲やミサイル、ビームの刃の付いたワイヤーで攻撃してきたため、それに対して我々は戦車砲や榴弾砲で応戦しました。結果的に秒で壊滅しました。敵は我々の砲撃がほとんど効かなかったのです。

その後半日ほどゲリラ戦のように隠れながら追跡していたら、日本の艦娘？とかいうものと深海棲艦が共に立ち向かっていました。だいぶ劣勢でしたけど。しかしその後来た、メイスのようなものを持った艦娘が目を赤く光らせながら大暴れして、深海棲艦から奪ったバスターソードで敵を切るというか殴打して撃破していました。なんか凄かったです。（語彙力）

おまけ

白露の遺志を継ぐという決意も込めてイメチェンした時雨改三

防空棲姫から奪った力で半深海化した時雨改三

## 時雨の日記③ 2055年2月～5月

2月XX日 雪

なんかすげえ久しぶりに雪を見たような気がする。

まあ網走では毎年見てたし、雪が降ってて何か変わるかと言われても何も変わらないんだけどね。

ところで明石が整備士兼時雨の機付長兼主治医って名乗り始めたんだけど、何？僕何かの病気なの？なんか抗うつ剤渡されたんだけど。

2月XY日 晴れ

久しぶりにデータベース見てたら同じ姫級が別々の海域で同時に発見される事例が増えてるらしい。それ単純に姫級が量産されてるだけだろ。

そういえば明石が時雨改三の艦装をオーバーホールしてついでに改修するって言った。てかついこの前気づいたんだけどあの明石滅茶苦茶整備の腕と要領いいな。12.7cm連装砲くらいならちやちやつと10秒くらいでばらしちやうからな。

2月XZ日 晴れ

明石が「完成したから来て」と言ってたので工廠に行った。

時雨改四はバルバトスルスレクスだった。

※イメージ

なんでも何年か前に「革命人形十三号」からパクってきたワイヤー

に余ってた太刀をくつつけたらしい。名前はテイルワイヤらしい。うん。完つ全にテイルブレードだ。

ちなみにワイヤーを操るのに脳に負荷がかかりまくるので深海棲艦にしか扱えないらしい。つまりは僕と初月専用ということか。てかなんでお前、僕が混血艦ってこと知ってるんだよ。

(初月がこっそり教えたらしい)

2月Y0日 晴れ

昼休憩に読んだ朝刊によると某鎮守府で働きづめだった艦娘が深海棲艦になったらしい。

これあれだろ、D事案かなんかだろ。前世で資料読んだわ。

てか昼休憩に読んだ朝刊ってなんだよ。日本語が意味わかんねえ。

2月YX日 曇り

姫級などの一部の深海棲艦を撃沈したら沈んだはずの艦娘が湧いたという事象が発生したらしい。うん。確実にD事案だ。

2月YX日 曇り

書類を整理してたら提督がめっちゃくっちゃ不正してた。

証拠を集めて通報しよう。

生命力を奪いつくす前に憲兵に通報して逮捕された後、衰弱死するっていう二重の苦を味わってもらおう。

2月YX日 晴れ

何故か背後から冷たい無数の腕が忍び寄ってくるような錯覚を感じ始めた。末期症状で幻覚でも見え始めたのかな？

その幻覚が見えるとき「カラダ返せ」となんか防空棲姫みたいな声が聞こえる。あいつまだ生きてたのか。

3月Y0日 曇りのち雨

半分深海棲艦になってから■■■とか言うやつと惹かれ合うような感覚を感じる。

もしやあいつ深海棲艦なのでは？

試しに奴を半深海化（要は赤い瞳）で睨み付けてやったら睨み返してきた。

4月XX日 晴れ

■■■のことを調べてみたのだが、どうやら前の提督の時代からいたらしい。白露の同僚だったのかあいつ。

4月XY日 晴れ

なんか最近、艦娘たちが僕に馴れ馴れしい奴と全力で謝ってくる奴と全力で避けてくる奴の三つに分かれてる気がする。

マジで何なんだこいつら。

仕方ないので艦娘たちに親身になったり関わらなかつたり、望む行動をとってやることにした。

4月YO日 雨

球磨が体調崩して寝込んだと聞いたので見舞いに行ったらなんか深海棲艦化が始まった。

いや、どういうこと？お前ほとんど出撃ないじゃん。某鎮守府で深海棲艦化した奴ってたしかワーカーホリック気味だったって聞いたけど？

仕方ないので僕の部屋に連れ込んで篡奪で深海棲艦の部分を奪うことにした。

4月YX日 晴れ

ようやく球磨から深海棲艦の部分がとれた。

5月XX日 晴れ

今度は如月がダウンしやがった。お前らは僕を過労死させたいのか？

深海化の理由は球磨と同じく過労死しそうな時雨に何もしてあげられなくて狂ったかららしい。ぶん殴ってやろうか？

一瞬こいつから思考能力奪って人形にしてやろうかと思った。

まあちゃんと治すけど。

## 西馬の日記

12月XX日(2049年)

時雨のやつを日記を読んでたら奴が杉野時雨が転生した奴だと分かった。

とりあえず坂本大将に相談してみたが「まあ、あり得るかも知れん」とだけ答えた。いや、答えるならちゃんと言えろクソ上司が。

まあ、今夜もあいつを殴った後可愛がってやった。

12月YX日(2049年)

坂本大将が「時雨は杉野時雨で間違いない(多分)」と言っていたので多分杉野なのだろう。

生前の杉野の野郎は滅茶苦茶ムカつく奴だった。

新米だった頃の俺のミスを嗤ったり、作戦ミス、いや俺のせいじゃなくて考えた白露のミスで敵に防衛ライン突破されたとき「お前士官学校からやり直せ」と言っただけで部下の艦娘共派遣して何とかしたり、(以下中略)本当にムカつく野郎だった。お前は基本的に艦娘共が優秀なだけでお前は補給しか出来ないだろ！

書き連ねたらまたストレスが溜まってきた。このストレスは本人で発散するか。

今日は時雨のアナル処女を奪ってやった。

動かしすぎて裂けて血が出たり泣き叫んだりしてて、最高にスカッとした。

1月XX日(2050年)

つまらないから時雨を飛ばして遊ぼうと思って食堂に行ったら時雨が他の艦娘共にリンチされているのを見かけた。

とりあえずビデオ撮って坂本大将に送っておいた。

4月XX日(2050年)

時雨のやつ、なんか演習で左目が潰れたらしい。まあ入渠はさせないけどな。

4月XX日(2050年)

案の定時雨の左目は失明したらしい。別にどうでもいいが。

6月XX日(2050年)

なんか飽きてきたから時雨で縄プレイをしてみた。  
ところで時雨のやつ、ようやく喘ぐようになった。

4月XX日(2051年)

いつも通りに夜に時雨とやってたら「もういやだよお！」と泣き喚ぎました。

うるさかったから蹴飛ばしてもう何回かやった。

5月XX日(2051年)

今日は趣向を変えて時雨のオ○ニーを見ることにした。

まあ、いわゆる自慰の強要ってやつなんだが。最初は抵抗していたものの、ペンチを見せつけたらあっさりと折れて、結局最後までやった。

俺も結構興奮したし満足したので良しとする。

7月XX日(2051年)

最近、時雨をいじめることにも飽きたのでトイレ&時雨の部屋にカメラを仕掛けておくことにした。

これでいつでも好きなききにあいつの痴態を見ることができるぜ。

8月XX日（2051年）

時雨の部屋のカメラを見たらちようど時雨が一人でシていた。

とりあえず録画モードにして、あいつの目の前で再生したら顔を真つ赤にして涙目になっていた。

最高に可愛かったので犯してやった。

9月XX日（2052年）

相変わらず時雨を苛めるのは楽しい。

最近は時雨の方からおねだりするようになってきた。

1月XX日（2053年）

時雨と首絞めセックスをした。

途中までは苦しそうだったが、だんだん気持ちよくなってきたのか、「もつと強く締めてえ……」とか言ってた。

なんかだんだん時雨が壊れて行ってる気がする。

えくつと、大丈夫かな？まあ、どうせ時雨だし、問題ないか。

4月XX日（2053年）

飽きたから瑞鶴……だったか？そいつの提案で時雨を友人と一緒に輪姦することにした。

めっちゃ楽しかった。

あと、カッターで切りつけたり、ペンチで爪剥いたり、トンカチで関節潰したりいろいろやったが基本的に「ぎゃああああ」と絶叫してるか泣いてるかのどちらかだった。

まあ楽しかったからいいんだが。

あと、いろいろやった後、一応入渠させてやったんだが、入渠ドツ



クへの往路で瑞鶴とゆかいな仲間たちにランチされていた。  
あいつら仲悪すぎだろ。まあ、それを見てるのも楽しかったんでO  
Kだが。

8月XX日(2053年)

なんか最近時雨の様子がおかしい。

何かブツブツ呟いてたり、たまに意味不明なことを口走ったりして  
いる。まあ、気にしないでおくか。

9月XX日(2053年)

最近出撃以外だと上の空でぼーっとしてることが多い。

まあ、これも気にせず放っておこう。

10月XX日(2053年)

なんか時雨が発狂し始めた。

何があつたか知らんがうるさいのでペンチを太ももにぶつ刺した  
らおとなしくなった。

12月YX日(2053年)

暇だったので部屋にいる時雨を見に行ったら、時雨は虚ろな目でぶ  
つぶつと独り言を言いながら自分の腕をカッターで切っていた。

切られたそばから傷が再生していくから、なんかキモかった。

まあ、いつも通り放置したけど。

3月XX日(2054年)

最近、艦娘共が時雨のことを怖がっているようだ。

理由を聞いたところ、戦闘時に狂気に満ちたすげえいい笑顔で深海  
棲艦を狩ったり、急に瞳が赤く光ったかと思えば数秒後には相對して

いた深海棲艦がミンチになっているいる等々。

まあ、そんな感じらしい。

俺にはよく分かんが。

ちなみに時雨の方も艦娘共を怖がっているらしい。まあ、いつも殴られたり罵声を浴びせられたりしてたらそうなるか。でも、俺の言うことは聞くみたいだから特に問題はないだろう。

4月YX日(2054年)

今日も時雨をやった。

いやあ、最高だったな。

とりあえず中出しして、終わった後に指突っ込んだら「あう……ダメだよ……」って言われてまた勃起した。

んで、そのままもう一回やった。

いやあ、いいもの見れたわ。

5月XX日(2054年)

最近、時雨が「僕はもう嫌だよ……。助けてよ……。提督……」ってうるさい。

うざったかったので殴って黙らせたたら大人しくなった。まあ、どうせそのうち飽きるだろう。

つか、時雨含む艦娘共は俺の道具みたいなもんなんだから助けを求めるのは間違ってると思うんだが。

6月XX日(2054年)

今日は時雨がやけにしおらしくなっていた。

なんというか、まるでレイプされた後のJKのような雰囲気だった。

まあ、いつものことだからほっとくことにした。

11月XX日(2054年)

なんか最近時雨が立ち直りだしてきた気がする。

俺に対しては従順だが、一部を除いた艦娘に対する態度は冷たい。

これは立ち直ったというよりダメな方向に吹っ切れただけかも知れねえな。まあ、どうでもいいか。

2月YX日(2055年)

なんか時雨のやつ、俺の不正の証拠を掴んで大本営に告発するつもりらしい。

まあ、俺はじきに深海提督にキャリアアチェンジする予定だし、問題ない。

3月XX日(2055年)

時雨が俺の部屋に侵入、そしてパソコンを起動させて動画ファイルを開いた。(俺は監視カメラで見てた)

ちなみにその動画は時雨が排泄しているところを盗撮したもので、時雨の顔は真っ赤になっていた。

まあ、バレたんならしょうがないと開き直って、とりあえず時雨を犯そうとしたら、「僕の負けです」と言っただけで土下座してきた。

なんか意味が分からなかったので取り敢えず犯しておいた。

## 第一章

### 1話 提督着任①

side提督

私の名は荻原大輔少佐。今日付けで横須賀鎮守府に着任する提督だ。

今から約25年前、第三次世界大戦の最中『深海棲艦』という存在が突如として姿を現し、人類と戦争を始めた。

人類はこれに立ち向かった。しかし、奇跡的に核兵器は使われていなかったものの、数年の大戦争により疲弊した人類はじりじりと制海権を失っていった。

ちなみになぜ深海棲艦と名付けられたのかという点と見た目や機能が艦これとかいうゲームに出てくる深海棲艦という敵にそっくりだったかららしい。

(艦これとは三次大戦のときにDMM本社が爆撃で吹っ飛び終了した)

深海棲艦の出現から半年がたち、人類に厭戦気分が起り始めた頃、日本で『妖精さん』と呼ばれる存在が現れた。それは限られた人間にしか見ることが出来ないものだった。しかし、深海棲艦の出現から1年がたった頃、その限られた者たちは妖精さんの協力により深海棲艦に対抗できる存在を作り出した。それが『艦娘』だった。

最初に建造された吹雪・叢雲・漣・電・五月雨の五体は初期艦と呼ばれ、日本近海の制海権を奪還していった。しかし、深海棲艦は巡洋艦、戦艦、空母、潜水艦と種類を増やしていき、それに対抗して国防海軍も建造を繰り返し艦娘の数と種類を増やしていった。

艦娘を指揮する海軍の軍人は『提督』と呼ばれるのだが、その提督になるには妖精さんを視認できることが絶対条件だった。故に提督は慢性的に人材不足だった。

大本営は増えた艦娘を指揮するため海軍の基地を流用して『鎮守府』をつくった。そこでは原理は全くもって不明だが座して待つだけ

で勝手に燃料、弾薬、鋼材、ボーキサイトの4つの『資材』が増えていった。

『妖精さん』『艦娘』『提督』『資材』があつて人類（というか艦娘を開発した日本）は漸く深海棲艦に対抗できるのだ。

そして、艦娘は替えがきく。

妖精さんや提督は希少な存在だが、ほつとけば湧いてくる資材と妖精さんが作った艦娘核（原料は人間の死体）さえあれば艦娘は幾らでも建造できるのだ。

それ故に、艦娘兵器思想とともに捨て艦戦法という悪質な指揮が蔓延してしまった。

その結果、多くの艦娘が轟沈し、深海棲艦の戦力が増大した。

原理は全くもってわからないが、艦娘たちの恨みが蓄積して深海棲艦を生んだのかもしれない。

それによって悲劇が起きた。2047年深海大侵攻。捨て艦戦法や盾艦戦法、大艦巨砲主義を掲げ、とてつもない数の艦娘を轟沈せしめた室蘭鎮守府、大湊鎮守府、そして艦娘人間主義を掲げ二つの鎮守府よりは遥かにマシだったものの最近轟沈数が増加傾向にあった網走鎮守府が深海棲艦の大侵攻を受け、提督も含めて全滅したのだ。

この事実を受け、大本営は方針を転換した。提督らの反対を押しつけ、艦娘を軍人として扱うよう命じた。そして、提督が大本営の意志に反した場合のため海軍警察、通称『憲兵』の権限を強化した。

これが功を奏したのか年々艦娘の轟沈数は減っていった。

しかし、裏ではいまだに同じことが続いているのか深海棲艦の侵攻は止まらなかった。

私がこれから着任する横須賀鎮守府にて不正が発覚した。捨て艦戦法や盾艦戦法、大艦巨砲主義に加え、艦娘を性欲の捌け口にするという下衆の極みのような悪質な鎮守府だった。

車をおりると横須賀鎮守府の大淀が冷たい目で警戒してきた。

この状況を打開するためにはなにか会話をしなれば！

「鎮守府には何人の艦娘がいるんだ？」

「……ここに所属しているのは約80名です」

警戒色の濃い声音でそう応える大淀。予想よりも多く艦娘がいた。資料にも轟沈した数は少なかった。

「…失礼かもしれないが…多くないか？」

「…この鎮守府には、守り神がいますから」

守り神？ どういうことだ？ その守り神のお陰で彼女らは今まで生き残った？

そんな会話をしていたら、私たちは執務室のドアの前についていた。少々力みながらドアを開ける。

なんか机に突っ伏して寝てる艦娘がいるような気がするが気にしない。

「新しくここに着任する提督をお連れしました」

「ああ。大淀、ありがとう」

彼女は大淀にお礼を言い、そして私の目を見た。見定めるかの様な、鋭い目で。

「あなたが提督か。私は大和型戦艦二番艦、武蔵だ。よろしく頼むぞ」  
武蔵はそう言って手を差し出してきた。こういうのは第一印象が大事なのだ。

「ああ、私は荻原大輔。階級は少佐だ。これからよろしく頼む」

差し伸べられた手をしっかりと握る。

それに驚いたのか艦娘たちは一斉に目を剥く。そしてすぐに元の真剣な表情にもどる。

「さて、他の面々と役職を紹介しよう。私は戦艦総括で、隣にいるのが正規空母加賀、役職は空母総括だ」

「ご紹介に預かりました。空母総括を務めさせている加賀です」

「次に重巡総括の古鷹型重巡洋艦2番艦、加古」

「加古だよ。よろしく」

「軽巡総括の球磨型一番艦軽巡洋艦、球磨」

「球磨だクマ。よろしくクマ」

フアーヨクネター

「駆逐艦総括の秋月型駆逐艦4番艦、初月」

「初月だ。よろしく頼む」

全員が手を差し伸べてきたが、瞳には警戒色が色濃く出ていた。

「あと、ここにはいないが第一種指揮権所持で第一艦隊旗艦の時雨が  
いる」

アレ？ナンカムシサレテネ？

「はっ」

思わず声に出してしまった。

第一種指揮権を持っているということとは前任の秘書艦だったとい  
うことで、尚且つ一番出撃頻度の多い艦隊の指揮する立場にあるとい  
うことだ。どんだけワーカーホリックなんだと一瞬思ってしまった。  
「…まあ、そうなるな」

武蔵が後悔に塗れたような声でこぼす様に言う。

オーイムシシナイデー

「どういうことだ？」

武蔵たちは目と目で相談している。私は完全に蚊帳の外だ。

「…提督、今から話すのは、言ってしまうえばこの鎮守府の闇そのもの  
だ」

闇そのもの。その言葉は、限りなく重い。ひとまず聞いてみるほか  
なからう。

「時雨は…」「おゝい、無視しないでよ」  
「「「ツツツ!!」「」」

若干ドスの効いたその声に私を除く全員が息を呑む。

「いつからそこにいたんだ!」という顔で見つめる艦娘たちを無視して、珍しいロングヘアの時雨は私の目の前に歩いてきた。  
片目に若干イライラしたような感情を浮かべながら。

side 時雨

転生時雨は激怒した。

必ず、目の前の連中に存在をしめさねばならないと決意した。

『いや提督なんでメロスみたいなナレーションしてるんだい』  
うるさい。雰囲気無しじゃねーか。

『僕の姿でアホなことをされると風評被害がヤバイからね。実際に p  
i x i v 版の別の転生時雨が魚雷（意味深）をやったせいで風評被害  
が出てるしね』

メタいからやめてくれ。キレル気力も無くなってきた。

『さつきから気になってたんだけどどうして怒ってるんだい?』

ああ。それはな…

(回想)

いつものように提督に犯された後。

「あく提督が逮捕されるの楽しみだなく。あつそうだ。憲兵隊が来る  
のは早朝だから来るまで提督の机で待機してよつと」

スピー

(回想終わり)

『…それでそのまま寝ちゃったと?』

ああ。子供の身体って不便だよな。

『それ提督の自業自得だよね…』

ところで今、絶賛艦娘たちに無視されてるんだが。



「あと、ここにはいないが第一種指揮権所持で第一艦隊旗艦の時雨が  
いる」

……ここにいるけど？

『あれかな？僕は、どこにもでもいるし、どこにもいない』みたいな』  
なにそのシユレディンガー准尉。

「…提督、今から話すのは、言ってしまうえばこの鎮守府の闇そのもの  
だ」

なんか武蔵の奴勝手に何かしやべろうとしてるな。

「時雨は…」「お、い、無視しないでよ」

何気に転生してから初めてドスの効いた声を出した気がする。

「」「ツツツ!!」「」

そりゃ驚くだろうな。

side 提督

急に体がこわばった。

時雨からは覇気も威圧感もほとんど感じないのに、本能が『コイツ  
はヤバイ、強すぎる。死ぬぞ』と脳に直接叫んでいる。

だがそんなものはすぐに消えた。

「僕は白露型駆逐艦時雨。これからよろしくね」

彼女はそう言って手を差し伸べてきた。彼女の右目からは歓喜や  
好奇心が感じられた。

地味にノイズが走っているように不明瞭で、はっきりとは感じ取れ  
ないが、負の感情は一切入っていないかった。

「じゃあ、邪魔になりそうだから僕はそろそろ行くね」

そう言うとき雨はそそくさと執務室を出て行った。

静寂が執務室を支配する。

艦娘たちからは様々な感情のこもった視線を向けられている。

このままでは私のSAN値が持たないのでひとまず武蔵に疑問を投げかける。

「なあ、あの時雨は左目が見えないんじゃないのか？」

「っ！あれだけで気づいたのか!?…さすがだな…ああ、ほぼ確実に失明しているな」

話忘れたが、私は相手の目を見るだけで相手の感情や思考が大まかに読めるという才能？というか能力を子供のころから持っている。

私が海軍に入ったのは、その能力のせいで嘘や偽りで塗り固められた人々の思いを感じ取りまくり疲れてしまったからだ。いや、社会から逃げたと言った方が適切かもしれない。

時雨からは最初、右目からしか怒りを感じず、穏やかな笑みを浮かべている時も右目からしか感情を感じられなかった。

「時雨についてはまた今度話す。私のSAN値がもうすぐ限界を迎えそうだからな」

(いやお前もかよ)

武蔵がそう言うると他の艦娘たちも執務室を出ていった。

「…先は長そうだな…」

誰もいなくなつた執務室で私は誰かに言うわけでもなくそうつぶやいた。

だが、この時の私は気づけなかった。あの時雨がとんでもない爆弾を抱えていることに。

side時雨

提督と会った後、僕は自分の部屋に戻ろうと廊下を歩いてた。すると前方から見覚えのある人物が近づいてきていた。

「あ、時雨ちゃん……」

……誰だっけ？この芋くさい奴は……吹雪か。何か言いたいことがあるらしいみたいだね。何の用だ？

「何の用だい？」

「えっと……」

僕の顔は自然と険しくなる。吹雪は何とも言えないような微妙な表情をしていた。まるで何かを言いかけて、躊躇っているようだ。

こういうのが一番面倒くさいんだよな……。

「……大丈夫だよ、吹雪」

安心させるように、なるべく優しく言う。

だが吹雪は黙り込んだままだった。

やっぱりめんどくさいなコイツ……。早くしてくれ。僕だってそこまで暇じゃない。

「焦らなくていいよ。待つてるから。言いたいこと、早く言って？」

なるべく優しい口調で言うように努めるが、やはりどうしてもトゲのある声になってしまうな。

まあいいや。

そう思案しながらしばらく待っているとやっと決心したようで、口を開いた。

「……時雨ちゃん。……司令官が変わったの。次の司令官がどんな人なのかまだ分からないけど……その、時雨ちゃんに負担をかけるようなことにはさせないから……！」

吹雪が涙ぐみながら言うてくるのを、無感動に聞いていた。正直言うてイラつくだけだ。

まあ、とりあえず返事だけしておこうか。適当で良いだろう。

「分かった。それじゃ」

「あつ……」

吹雪は僕のことを心配しているような顔だった。その表情に、心の中で舌打ちをしたくなった。なんだその、哀れむ様な顔は。

「僕は忙しいんだ。君にかまっている時間は無い」

自分でもびつくりするくらいに冷たい声が出た。そのせいかな、吹雪

は完全に固まってしまっている。だがそれも一瞬で、ハツとした顔をした後

「……そつか。ご、ごめんなさい……」と言いながら走り去っていった。

「……………ッ!!」

クソ、腹立つ!

僕は拳を力いっぱい握り締める。血が出る程ではないにしてもかなり痛かった。だけど痛みを感じるほどに、その衝動は収まった気がした。

気持ちを落ち着かせる。深呼吸を繰り返すうちに、徐々に冷静さが戻ってきた気がした。

## 2話 提督着任②

その後、荻原の放送によって一週間の哨戒も任務もない完全な休みが知らされ、続けて着任の挨拶も含めた着任式（という名の前任追放記念パーティー）が行われることになった。

ちなみに会場は無駄にだだっ広い食堂である。

「…予想以上にたくさん来たな…□□さんの鎮守府が終わってたのかこの鎮守府が変なのか…」

荻原の先輩が着任した元ブラック鎮守府では着任の挨拶に顔を出した艦娘は半分以下だったと聞いていたが、まさかの勢ぞろいだった。

艦娘たちの視線は新任の提督に向いている。

その新たな提督を見る目には僅かながら憎悪や敵意が混じっていたがほとんどは疑心にあふれていた。

荻原は不思議に思った。彼女たちが受けた仕打ちを考えれば憎まれても仕方がないと言えるのに、敵意を見せる者がごく一部しかいないことに疑問を覚えた。

「…今夜は私のために集まってくれてありがとう。別に強制ではなかったんだが…これほど集まるとは思ってもいなかった。」

ひそひそと「これって強制じゃなかったの!?!」とか「しー!聞こえたら狂犬に殺されるわよ!」とか聞こえた気がしたが多分気のせいだろう。時雨と初月がそつとほくそ笑んだ気がしたが、うん。きつと気のせいだ。悪い夢だ。忘れてしまえ。

「…私の名は荻原大輔。階級は少佐だ。これからお前たちを指揮することになった。今は疑心に満ちているかもしれないし、中には恨んでいる者もいるかもしれない。だが、私は前任がやったようにお前たちに不当な扱いをするつもりなど毛頭ない。私はこの鎮守府を日本一強くて笑顔のあふれる鎮守府するつもりだ。だが、私はまだ若輩だから目標を達成するにはお前たちの力が必要不可欠だ。どうか、お前たちの力を私に貸してほしい」

そう言つて萩原は頭を下げ：数秒で上げた。さすがにシーンとしてジロジロ見られてるなか一人だけ頭を下げているのに羞恥心が耐えられなかつたらしい。

「……………（やべえどうやって話題変えよう）」

そう悩んで萩原がとつた行動は：

「（助けてシグレエル!）」

と目で時雨に訴えかけることだった。

side 時雨

「……………は？この後輩ふざけてんだろ、僕も前世から演説は苦手なんだよ）」

『ああ、だから初対面の時「今日からこの提督になったからよろしく」としか言わなかつたんだね』

「（ギクツ）」

『は~~~~~（クソデカため息）仕方ない、あの提督がかわいそうだから代わりに僕がやってあげるよ。ほら、体の主導権ちようだい』

「（アツハイ）」

◇

「（助けてやるから頭を下げろ）」

そんな意志を時雨の目から感じた萩原はすごい勢いで頭を下げた。艦娘たちは怪訝な顔をしていたという。

「提督。頭を上げてください。貴方が頭を下げる理由がありますか？」

「提督。一言、こう言えばいいんです『私についてこい。そうすれば、素晴らしい景色を見せてやる』ってね。それだけで、僕たちはついていきますよ」

その声色には慈しみがこもっていたが、目は全く笑っていなかったという。

「(「なんだこの三文芝居…」)」

だいたいの艦娘たちはそう思ったが何も言わない。なぜなら時雨は鎮守府の絶対的強者なうえ、彼女のやることなすことは大体最適解なのだ。故に誰も何も言わない。

(重圧から救ってくれて) ありがとな、時雨

「うん。さあ、着任の挨拶の挨拶も終わったしご飯食べようか」

「ん？ああ、お前ら食っていいぞくじゃんじゃん食えく」

二人の言葉に艦娘たちは次々と料理を取りはじめる。

『…パーフェクトだ。時雨』

「(ふふ、これくらい造作もないよ)」

『そろそろ主導権返してくれ。飯食いたい』

「(…断る)」

『冗談は史実の幸運エピソードだけにしろ』

「(だって提督いつもご飯食べてるじゃないか)」

『それとは話が別だろ!?』

そんな話をしながら時雨も料理を取った矢先…

ドカーン

ガラガラガツシャーン

「僕の唐揚げー!!!」

時雨は爆発の衝撃で皿を落としてしまった！

「敵襲！敵襲です!!」

おまけ 第六駆逐隊を説得脅迫してきた時雨と初月

「暁たちは行かないわよ！」

「怪しいのです！」

「今度の司令官はまともかもしれないよ」

「…どうしましょ」

「明日の太陽を拝みたかったら…」

チャッ

「い、行くわよ行けばいいんでしょ！」



### 3話 時雨の戦闘

side提督

「敵襲！敵襲です!!」

食堂に大淀の声が響く。

ふと時雨の方を見てみると皿にのせた唐揚げが皿ごと落ちて俯いていた。

どうしようかと考えていたら時雨が

「第1艦隊出撃！唐揚げの仇…じゃない！敵を血祭りにあげろ！」

と怒鳴って出撃ドックに走っていった。その目は怒りや憎悪などの負の感情がこぼれた煮になったような鬼も泣き出しそうな目だった。いやなんで唐揚げでそんなに怒れるんだ。

そうしたら第1艦隊のメンバーと思われる艦娘たちも出撃ドックに走っていった。

「おい待てお前たち…あ、行っちゃった」

「敵艦隊は戦艦棲姫を含む戦艦4体、空母7体、重巡5体、駆逐10体です！」

「…近隣の鎮守府に救援要請を出せ！」

十数分後…

「援軍無しで敵を殲滅したら幸いです」

「マジで？」

side時雨

転生時雨は激怒した。

必ず、晩飯の仇を駆逐…じゃなくて深海棲艦を十年以内に0にしなければならないと国連で世界に誓った。

『意味不明すぎるからやめろ。そしてどうして君は唐揚げ一つの犠牲でそんなに怒れるんだ』

「(士官候補生時代は金なさ過ぎて唐揚げの一つも貴重だったんだよ)」

『貧乏性かよ…』

そうこう言つてたら味方が追いついてきた。

◇

「敵艦発見！戦艦4体、空母7体、重巡5体、駆逐10体！」

「いや多いっばい」

「取り敢えず加賀さんとイントピレッドは制空権確保、金剛さんは空母をやつて。他は僕についてきて」

「了解！」

時雨は戦艦棲姫とエンカウントした。

「今度こそ貴様を殺す！」

そう言うのと戦艦棲姫は16インチ三連装砲3基を時雨に向けて砲撃した。

「殺れるもんならやつてみな！」

時雨は主砲と太刀で砲弾を迎撃しながらテイルワイヤを海中に潜ませる。

「沈めえ！」

戦艦棲姫はそう言いながら第二射を撃つ。

「隙あり！」

潜ませておいたテイルワイヤで艀装の左腕をぶった切る。

「なっ…!!!」「学習しろ」

そう言いながら時雨はレンチメイスを取り出すと戦艦棲姫に急接近し、レンチメイスを叩き付ける。

「…？っ！硬え！具体的に言うのと防空棲姫並みに硬え！」

「フン、進化するのは艦娘だけではないぞ！今の私は戦艦棲姫改だ！」

時雨は一旦戦艦棲姫と距離をとる。

「どうした？怖気づいたか？」

「…深海制御術式第三号解放」

補足

時雨の日記には書き忘れたが、時雨は防空棲姫の力を制御するため何か能力を得ようとして自称神にランダムに色々と篡奪を仕掛けたのだがその能力の中で一番使えそうだったのが”変成魔法”とかいう魔法だった。

また、時雨の”篡奪”は殺した相手から一瞬で全てを奪えるということが判明したので、深海棲艦を沈めた瞬間に篡奪を使っていろいろ奪うようになった。

それらをいろいろやって奪った深海棲艦の力を制御する術式を作った…らしい。作者はこれ以上書くのが面倒くさいので解釈は読者の皆さんにお任せしますが、端的に言えばアーカードみたいな事ができます。

時雨の目が赤く光り、両手の甲に魔法陣が現れる（グローブで隠れて見えない）。戦艦棲姫は本能的にヤバイと感じたが、時すでに遅し。戦艦棲姫に百体以上の量産型深海棲艦と防空棲姫の力で半深海化した時雨を止める術はなく、顔面にストレートを食らった戦艦棲姫はそのまま海に沈んでいった。もちろん、いろいろなモノを奪われて。その後、時雨が大暴れして敵艦隊は全滅した。

く提督が驚いていたところのとある倉庫にてく

『…おい■■■、今日って本当に新任の提督が着任した日なのか？艦隊が全滅したんだが』

「あの転生者があれほど強いとはさすがに思っていないませんでした」

『…まあいい。今日はいいい司令官が手に入ったからな。お前はまだ動くな。命令は追々連絡する』

## 4話 武蔵の話

side時雨

時雨が戦艦棲姫を文字通りワンパンで撃破した日の深夜、時雨は寝ていたが精神世界でこんなやり取りをしていたという。

「…なあ時雨、何個か聞きたいことがあるんだが」

「ん？どうしたんだい提督？」

「どうしてこの世界がMANKAI寮のリビングみたいになってるんだ？」

「ああ、提督にリラックスしてもらいたくてね。提督の変成魔法？とかいうのを使ってこの世界に家を作って外の亡者どもと隔離したんだよ。ねえ提督、褒めてよ」

「え？いやどういことd「褒めてよ」「え？いやちよt「ねえ、ねえねえねえねえ」

「…ああ、よくやった時雨（なんでこの人ヤンデレになってるの？）」

「…ところでもう一つ聞きたいんだが」

「次はなんだい？」

「…いや…あの…なんで防空棲姫が縛られてるんでしょうか？」

「解放シロ」

「ああ、彼女がすごく反抗的でね。調教してたんだよ。はいこれ紅茶「ズルズル」

「貴様く縄ホドイテツイデニ体モヨコセ」

「提督は貴様じゃないよ。マスターだよ」

バシイッ

アアン

「いやなんでこいつのマスターにさせられそうなんだ？そしてなんだこれはSMプレイか？防空棲姫の股から液体が漏れ出たような気がしたんだが」

こうして夜は更けていく…

◇

荻原が時雨たちの戦果に啞然とした翌日の正午、今後のことを話し合った荻原と時雨は食堂に来ていた。

話し合いの内容はショッピングに行くとか本やゲーム機を買うとかそんなかんじだった。ちなみに時雨は図々しくもデスクトップのゲーミングパソコンを買ってもらおうとしたが、荻原の財布が大破する可能性があったのでマ○スコンピューターのゲーミングノートパソコンで妥協した。

二人が食堂に入るとやっぱり艦娘たちが怪訝な顔をしていたが、そんなものは無視して間宮と鳳翔のいる厨房に行った。

「え、えーとご注文は何でしょうか…」

「えくとじゃあこのエビフライ定食で」

「僕はカレー特盛りと唐揚げで」

「いやお前そんなに食うの!?!」

荻原は驚いたが、昼食を食べながら新聞を読む姿を見てこう思ったという。

「(こいつの中身相当おっさんだろ…)」

ようやく勘付いた。

◇

その日の夕方、時雨が自室に帰った後、荻原は書類を棚に入れていたら執務室のドアをノックする音が聞こえた。

「どうぞ」と言って入ってきたのは武蔵だった。

「すまない、昨日の話をしに来た」

「……聞かせてくれ」

武蔵をソファアに座らせ、荻原も椅子に深く腰かけ、武蔵の言葉を待つ。

「時雨は今からおよそ6年前にここに着任した。ちなみに私は6年半前だな。そんなに変わらない」

武蔵によると、聞いた話だが、前々任の提督が不慮の事故で亡くなった時、前任は横須賀の副司令官だったようでそのまま横須賀の提督になったという。前任は副司令官だった頃は無口でただ淡々と仕事をこなす冷静沈着で艦隊指揮も優秀な人物だったようだが、化けの皮が剥がれたのか初めの頃は休みなく出撃。それがどんどんエスカレートしていき、捨て艦戦法や性欲処理をし始めたという。彼女は今から半年ほど前、前任の秘書艦だった白露が沈んでから自身から身を売り、他の娘らを庇った。結果的に全てが時雨に集中した。

大破状態でなければ入渠はさせてもらえず、一日に休みなく何度も出撃し、休暇など存在しなかった。前任に報告をしに行くたびに暴力を振られ、暴言を吐かれ、夜伽を強制させられる。彼女は泣き言一つ言わなかった。

だが、白露や時雨、初月、夕立にはある噂が流れていた。それは彼女たちが深海棲艦かもしくはそのスパイなのではないか。という噂だった。

一時期はこの鎮守府の半分以上の艦娘がその噂を信じていたこともあった。彼女たちの戦鬪が、白兵戦があまりに異常すぎたからだ。

そもそも白兵戦を始めた経緯が怪しすぎた。気の狂った姫級の深海棲艦に太刀を渡されたと言うのだ。

その噂のせいで時雨と他の三人は何度も死にそうになった。出撃

では故意のFFを浴び演習では集中砲火を浴び、休憩の時には罵詈雑言を浴びた。

噂は今年の春にピタッと消えた。不自然なくらいに急に消えた。不自然すぎて誰かが艦娘たちをコントロールしていると考える者もいたが、大方、艦娘たちが時雨たちがこの鎮守府を裏切る理由など無いことに気づいて誤解が解けたからだろう。

「…そうだったのか…ところで時雨の左目の話は？」

「…ああ、それはな…私たちが一部の戦艦が原因なんだ…」

「…どういうことだ!？」

「…あれは何年か前だったな。時雨の第1艦隊と私の第3艦隊で演習をしたんだ。演習の前に比叡が金剛お姉様に寄り付く深海棲艦どもを追い払いたいと言ってきてな。言い訳するつもりではないが私は乗り気ではなかったが実弾の三式弾を使うことになった。演習が始まって時雨は集中砲火を浴びたんだがそのほとんどを撃墜した。だが、なぜか殴りに行こうとして接近した比叡に気を取られたのか避けきれずに誰かの三式弾が時雨の左目に命中したんだ。だが、データ上の損傷は小破だったから入渠できずにそのまま放置していたら修復材でも治せなくなったららしいんだ」

「……………」

「他の時雨の話を知ったかと思ったら他の総括の艦娘に聞くといい。私からは以上だ」

そう言つて武蔵は執務室を出て行った。

「……………先輩の鎮守府とは別のベクトルでヤバイわ。この鎮守府」

荻原は自分の着任した鎮守府のヤバさに嘆いたという。

## 5話 言っちゃまったよ

あくる日、荻原はいつも通り執務を終えてソファでのんびりしていた。

ちなみに時雨も執務を手伝っていたのだが、割とすぐ自分の分を終わらせて自室に帰って行った。

「あく疲れた」

すると執務室のドアをコンコンする音が聞こえた。誰だろうと思いながら扉を開ける。

立っていたのは第六駆逐隊の面々だった。全員揃っている。

荻原が「何しに来たんだ？」と思っていると、暁はこう言った。

「少し相談があるんだけど……入ってもいいかしら」

荻原は「ああ、別にいいぞ」と言っていて中に入れる。みんなが執務室の椅子に座るとまずは響が口を開いた。

「提督は……この鎮守府の現状を知っているかな？……いや、知っているよね。武蔵さんとも知り合いだしね」

「そうだな」

その一言で響以外の全員が顔色を悪くする。まあ仕方ないか。この雰囲気では誰も喋ろうとしないしな。

「知ってるぞ、一応」と荻原は返す。

「それで相談つてのはなんだ？……もしかして時雨のことか？」

察して先に聞いてみる。どうやら当たっていたようだ。

「そ、そうよ、時雨のことよ」

「で、時雨がどうかしたのか？」

荻原が聞くと暁達は暗い顔をしながらも少しずつ話し始める。

曰く、第六駆逐隊を含む横須賀所属の艦娘のほとんどが時雨に嫌われているという。理由は、彼女たちが深海棲艦の回し者であるという誤った情報が、いつの間にか艦娘らの耳に入っていたということだ。時雨はそのことを聞かれた時には必死になって否定したという。し



かし、艦娘たちはそれにさらに疑念を強め、時雨へのあたりが強くなつていったようだ。

特に駆逐艦の子らはその傾向が強かつたらしい。そして、彼女に暴力や暴言を浴びせる艦娘も出てきていたようだ。

さらに、一部の艦娘たちは演習や実戦で時雨に故意のFFを撃つなどといったことを行い始めた。

彼女たちは戦闘時に時雨の指示に従わず自分たちの判断で勝手に動いていたため被弾することも度々あつたようで時雨がそれを庇つたりすると更にその行為が激しくなつた。

中には故意に他の味方を巻き込むような攻撃もあつたらしく時雨はかなり追い詰められていたようだ。それでも時雨は何も文句を言わなかつたらしい。ただ、時々泣いているところを見かけたという話を夕立がしていたそうだ。

時雨は元々は優しくかつたらしいが、今では見る影もなく、艦娘にもあまり笑顔を見せないようになったという。度重なる出撃や性欲処理、艦娘たちのいじめのせいで性格が歪んでしまつたのではないかと言っていた。

それを聞いた萩原はあまりの酷さ、時雨があまりにも可哀想なことで、その元凶となつた奴らに対する怒り、その他色々な感情が混ざりあつてなんと言つたらいいか分からないほど複雑な気持ちになつた。「なるほどな、大体は分かつた。確かにこれは酷いな」

「そうでしょう!? 私達がなんとかしようと思つたけど、時雨には『気にしていないから放つておいて』と言われたの。でもやつぱり見てもらえないのよ!」

「うくん、なあ暁、時雨がどこにいるかわかるか?」

「え?...多分自分の部屋じゃないかしら。でもどうしてそんなことを?」

「ちよつと話がしたいんだ。だから案内してくれないか?」

「え!?今から行くの?」

「ああ、なるべく早い方がいいからな」

◇

萩原は執務室を出た後、時雨の部屋の前まで来た。コンコンとノックするが、中からの反応はない。

「時雨、私だ。開けてくれるかい？」

「……うん、大丈夫だよ。ごめん、待たせたかな？」

中からの返事があった。どうやら鍵はかけていなかったようだ。

萩原はドアを開けて部屋の中に入る。

中に入ると時雨がいた。だが少し、いやだいな様子を変だ。

服は乱れて髪はボサボサだった。目は若干虚ろでクマもあるし、なんだか痩せこけているように見えた。そして、少し血生臭い匂いがした。

そして、その右目は逆に何も感じ取れないほど多くの思考が錯綜していた。それも、支離滅裂で滅茶苦茶な。

そう思っただけ確認のために時雨に話しかける。

「少し話したいことがあるんだ。いいかな」

「僕に話す事なんて無いよ」

時雨はそう言いながら血の付いたカッターナイフを隠した。

おいおいマジかよ……予想以上じゃねえか……。これ下手したら取り返しつかないくらい拗れてるぞ……！これがこの鎮守府の闇か……。

「……君は一体何が目的でこんなことをしているの？僕の事が嫌いなら嫌ってくれればいいし、殴りたいのなら殴ってくれてもいいよ。……ほら、どうぞ。遠慮しないでやっていいんだよ？提督」

時雨が自虐気味に言う。萩原はそれが余計腹立つと同時に、とても悲しい気持ちになった。

時雨を抱きしめてやりたい気分だった。そして、彼女の頭をそっと撫でる。時雨の身体が小さく震えた気がした。少しの間沈黙の時間が流れる。

やがて萩原は静かにこう切り出した。

「君は何も悪くない。私は知ってるぞ。本当は優しい娘だっことも。みんなに誤解されながらも頑張ってきたことも。今までよく耐

えたな。もう大丈夫だから、私が全部受け止めるから、全てさらけ出して欲しい。ここには君を傷つける奴も汚す奴もない。もしいれば私が守ってやるから」

時雨の目からはポロリと涙が流れ出す。それを手で拭いながら荻原は語りかける。

「君は何も悪くない。悪いのは周りの方さ。君は決して悪くない。だから自分を責めなくていい」

時雨は泣き出しそうになっていたが、何とか我慢して荻原の胸に顔を押し付けて声を押し殺して泣いた。

それからしばらくの間時雨を慰めた後、荻原は自分の胸の中で寝てしまった彼女をそっとベットに運び布団をかけると、そっと部屋から出て行った。

ちなみにその後、通りかかった艦娘達に話を聞いたところ、彼女らは相当ストレスが溜まっていたらしい。

時雨は誰にも迷惑をかけないようにしていたがそれは逆効果でさらに艦娘達の不満を大きくさせたようだ。そのことがさらに時雨を追い込んでいく悪循環に陥ったという。

翌日、荻原はとりあえず艦娘達に話を聞いて回った。そして時雨への態度を改めるよう促した。

だが、「全てさらけ出して」という荻原の言葉によって、時雨が今まで抑え込んでいたものをぶちまけた結果、えらいことになるのは誰も想像できなかったであろう。

## 6話 名も無き強者

荻原が横須賀鎮守府に着任して1ヶ月がたった。その頃には既に荻原は艦娘たちに殆ど受け入れられていた。荻原と時雨の奮闘によって会話は長続きしないが、挨拶程度なら緊張せずに行えるようになっていた。

荻原も徐々にだがこの環境に慣れてきていた。そんなある日、執務室に大本営からの書類が届いた。その中身を見た荻原は目を見開いた。そこにはある作戦の内容が書かれていた。それは……南方海域攻略作戦。

そう書かれた書類には敵勢力の詳細や、作戦の概要などが書かれていた。そして最後にこう書いてあった。

〈この作戦において貴官らの活躍を期待する〉

おそらく、大本営のお役人共は「これまでも意味不明な戦果を挙げ続けてきたんだからいけるやろ」みたいなことを考えているのだろう。

しかし、そんなことを言われても困るとというのが荻原の本音だった。戦略など考えたこともないし、考えようと思ったことも無い。

そもそも、今回の作戦で自分は何ができるのか？何もできないのではないか？時雨を筆頭に横須賀鎮守府（特に第1艦隊）はバケモノ揃いで、自分は天才呼ばわりされているが演習しかしたことが無いのだ。

「まあ、なんとかなるか……」

しかし、彼はすぐに気持ちを切り換えた。とりあえずやってみてダメならその時考える。それでいいじゃないか！ そんな感じで彼の思考回路は出来ていた。

その後時雨を呼んで相談したが、時雨の思考回路も同じようになっているのでほとんどノープランで出撃することになった。

◇

一週間後、時雨率いる横須賀鎮守府第1艦隊は南方海域に出撃していた。

「まずは制空権確保して戦艦部隊による砲撃、駆逐艦による白兵戦をしかける」

「了解」

時雨が返事をする空母機動部隊に発艦命令を出す。

「第一次攻撃隊、全機発艦！目標、敵軽母又級」「イントピレッド航空隊各隊、発艦はじめて！」

加賀、イントピレッドから艦載機が次々と飛び立つ。

制空権を確保して攻撃に移る。

「金剛さんは砲撃、他は白兵戦用意！突っ込め！」

「うおー！」

1ヶ月前、20体ぐらいの深海棲艦の艦隊を殲滅した横須賀の第1艦隊にジャワ島沖にいた艦隊は勝てるはずもなく各個撃破されていった。

その後、艦隊はソロモン海北方に突入し、3ヶ月前に確認された姫級『南方棲戦姫』の待ち構える最終海域を目前にした。

side 南方棲戦姫

『南方棲戦姫さん！横須賀の艦娘どもが突入してきます！』

「まずいな…私たちの戦力ではあの悪魔を止めるのは困難だ。てか、上層部は何やってるんだ！報告したのか!？」

『ええ、報告したのですがなんか実戦評価のために新型戦艦を1体とそれの回収のためのヨ級フラッグシップを派遣したらしいです』

「はあ!?こんな時に実践評価なんて悠長なことしてる場合か!?!上層部はマジで何考えてんだ!?!」

『ちよっ、ちよっと待って落ち着いてください!』

『あゝ』

「あ?ああ、お前らが増援のゝ」

『ヨ級です』

「ああ、それでそいつが新型戦艦か？」

『ええ。あと戦闘時は私とこの新型以外は海域を離脱してください』

「は？なぜだ？」

『機密保持のためですね。あとこいつプロトタイプだからか敵味方の判別がつかないうえにアホみたいなスペックなんで普通に巻き込まれて死にます』

「マジか…がんばれ」

そう言いながら南方棲戦姫は残存戦力を率いて中枢海域に撤退した。

◇

時雨率いる第1艦隊は最終海域に突入した。

が、そこには未確認の戦艦棲艦1体（レ級改）が無表情で突っ立っているだけだった。

「なんだコイツ……」

時雨は一瞬戸惑ったがすぐに気を取り直して指示を出した。

「取り敢えず砲撃開始！・目標、敵新型戦艦！」

時雨の言葉に反応した全ての艦娘が一斉に砲撃を開始する。

しかし、それは全て装甲の前に弾かれてしまった。

「うそ〜ん」

仕方ないので時雨、初月、夕立で白兵戦を仕掛けることにした。

「いくっぽいー！」

「よし、僕に任せてくれ！」

3人は同時に動き出した。

そして、時雨の初撃は敵の右腕を切り飛ばした。だが次の瞬間、時雨は信じられないものを見た。切ったはずの腕が瞬時に再生されたのだ。しかもその速度は今まで見たことがなかった。（ちなみに時雨は命のストックを使えば同じように再生する）

「なんだよこれ!?!」

「くらえ!」

初月が太刀を敵の肩を切り落とす。（初月は元駆逐水鬼で腕と艀装の腕が統合されているので意味不明な腕力をしている）

しかし、それもすぐに修復されてしまう。

「くそ!」

「どうなってるんだいこれは?」

「ぽい〜」

仕方ないので時雨は半深海化して敵に切りかかる。

しかし、これも無駄だった。敵はいくら切ってもすぐに再生されるのだ。

「くそ!こうなったら!」

時雨は61cm五連装酸素魚雷を発射した。

魚雷は高速で敵に迫り、そして命中した。

「やったか!」

「いや、まだっぽい」

「クソ!なんだあいつ!?!某チート吸血鬼かよ!?!」

「はあ……はあ……はあ」

「大丈夫かい?時雨」

「うん、なんとか」

「でも、どうやって倒すっぽい?あれだけ切ってもすぐに回復するっぽい」

「そうだね……とりあえず……」

「えーっと、初月と夕立は敵の両腕を掴んで止めて、僕は奴の心臓を潰すから」

「わかったっぽい」「了解だよ」

時雨はそう言つて敵に飛び込んだ。

「死ねやゴラア？ (???)?!」

時雨は敵の胸めがけて太刀で突く。

だが、それは避けられてしまう。

「チツ」

舌打ちをしながら時雨は敵から離れる。

(コイツ、速い！さすが新型だ！)

敵はお返しと言わんばかりに尻尾？のような艦装についた20インチ砲を撃つてきたが、間一髪で避ける。

「危ないなあ、もう」

「ぽいっ！時雨ちゃん！後ろ！あぶないっぽーい」

「え？」

振り向いた時には遅かった。

敵の放った砲弾が時雨に迫る。

「うわっ！」

時雨は吹っ飛ぶ…と思われたが艦装についたテールワイヤで切り落とせた。

「ふう……助かった……」

「時雨ちゃん、油断しちゃダメっぽい」

「ああ、わかってる」

そう言った後、時雨は敵を見据える。

「さて、どうしようかな…てかあいつ速いなおい！うちの島風の2、3倍は速いぞ!」

そう。敵の新型戦艦（レ級改）は戦艦の割にめちゃくちゃすばしっこい上に小回りが利くのだ。

さらに、砲撃は戦艦とは思えないほどの速度で放ってくる。

はつきり言うとおめっちゃ強い。なぜか艦載機は飛ばしてこないが、多分試作だからまだ積んでないのだろう。

「時雨、僕が抑えてる間に君が決めてくれ」

「ああ、分かった」

初月と夕立が敵の注意をそらしてくれるうちに時雨が決める。そ



れが今回の作戦だ。

「よし、行くよ！」

時雨は敵に突っ込む。

敵の砲撃を避けながら懐に入る。

そして、思いつきりジャンプし、敵の後ろに着地する。

「死ねやゴラァ！（2回目）」

時雨は背中に突き刺すように刀を突き立てる。

刀は敵の心の臓を貫通し、敵は力なく倒れ、そのまま沈んでいった。

「よし！勝った！」

時雨達は喜び、そして帰路に着いたのであった。

side???

「フウン。やっぱりあのバケモノは早く始末しないとネ」

『ああ、全くもってその通りだ。西馬君、早速、横須賀鎮守府を襲撃するプランを立ててくれ』

「アツハイ（くそ、俺は深海棲艦の提督だぞ。なんでこんなやつらに従わなければいけないんだ）」

『ん？何か不満があるのかね？』

「いえ、別にありません」

『よろしい。では、頼むよ。くれぐれも、しくじるなよ』

「はい」

ピッ

「クソが！時<sup>あのクソ転生者</sup>雨のせいで計画がめちゃくちゃだ！拳句の果てに俺を殺して、おかげで俺はこんなターミネーターみてえな体になっちまった！あいつは俺がぶっ殺してやる！」

「ハイハイ、落ち着きましようネ、子供じゃないんだから」

「うるせえ！黙れ！この化け物姫級が！」

「あらら、酷い言われようダ」

「いいから、さっさと仕事しろ！」

「ハイイ」

「まあいい。取り敢えず、まずは……………」

## 7話 北の国から（笑）

荻原が着任してさらに1週間がたった。

時雨達の活躍により、南方海域は解放され、ソロモン海の制海権は取り戻された。

そして、荻原は大本営に作戦結果を報告した。

「以上の結果により、我が横須賀鎮守府は作戦成功とみなします」

「うむ。よくやった。これから励んでくれたまえ」

「はい。ありがとうございます」

『それでは失礼する。』

「はい」

ピッ！

ピッ！

「？」

山本元帥とのビデオ通話を切った直後、坂本大將がビデオ通話してきました。

『ああ、今大丈夫かな？』

「はい。どうしましたか？」

『実はだね、頼まれてもらいたい任務があつてだね』

「はあ」

『まずはこれを見てくれたまえ』

画面に映ったのはどこかの島だった。

『これは先日、近海に新種の姫級が発見された千島列島の北東部にある島、パラムシル島幌筵島だ』

「ほう、なるほど」

『この島は深海棲艦の攻撃で島民が全滅してからつい最近まで無人島だったんだが、稚内鎮守府の艦娘が放った偵察機が偵察中にその幌筵島近海で新種の姫級を発見して、我々は北方水姫と名付けたのだよ』  
「へえ」

『それでだね、北方水姫は島の沖に停泊していたんだよ。だが、突如として動き出して、現在、北方水鬼は根室半島方面に進行中だ』

「え？」

『そこでだ。君は北方水姫を撃沈してほしい』

「いやなんで横須賀がやるんですか？そんなの他のところに任せればいいでしょう？」

『それはそうなのだが、稚内鎮守府の戦力ではどうあがいても無理だし、室蘭鎮守府はアリユーション列島での小競り合いで手一杯らしいし、大湊は復興中だから…ね？』

「まあ、そうですね……」

『だから頼めないか？』

「はい。わかりました。やりますよ」

『おお、引き受けてくれるか！助かるよ』

「はい。それでいつやるですか？」

『ああ、そうだね。1週間以内で頼む』

「了解です」

『では、また今度』

「はい」

ピッ！

「みたいなことがあったんだ」

荻原は坂本大将との対話の内容を時雨に話した。

「ふーん、マジか。めんどいね」

「まあ、そういうなよ。じゃあ、がんばれ」

「はいはい」



3日後、時雨達は出撃準備を整えた。

『よし、行ってこい！』

「了解！」

時雨達は出撃した。

そして、10時間後、時雨達は幌筵島にたどり着いた。

「ここが、幌筵島か」

「うん。で、どうする？・上陸する？」

「うくん。取り敢えず、上陸するか」

時雨達は島に上陸した。

そして、北方水姫を探すために索敵を開始した。

「敵影無し」

「同じく」

『よし、そのまま周辺警戒だ』

しばらくすると、裸マントの深海棲艦：北方水姫が現れた。

時雨は主砲を撃ちながら日本刀を構えて突撃する。

しかし、次の瞬間、北方水姫は、時雨に急接近して殴りかかってきた。

時雨はそれを刀で受け止める。

ドゴオン!!?

「ぐうー」

時雨はそのまま吹き飛ばされたが、すぐに体勢を立て直すと再び斬りかかる。

しかし、今度は北方水姫が主砲を発射してきた。

時雨はギリギリで回避するが、少しかすって出血してしまった。ただし、すぐに元通り。

「なんだこいつ!?このバケモノめ!」

北方水姫は再び時雨に接近してくる。

そして、時雨の目の前で突然ジャンプして空中で回転しながら砲撃してきた。明らかに見えちゃいけない場所が見えていたが気にしてはいけない。

時雨は砲弾を回避しつつ、北方水姫に向かって突っ込んでいく。

そして、すれ違いざまに斬りつけるが……。

ガキンツ!

北方水姫の装甲は意外と硬く、斬れなかった。

「硬すぎだろ!!」

北方水姫は時雨を殴ろうとするが、時雨は後ろに跳んで避けて距離

をとる。

その時、荻原から無線が入った。

『おい！聞こえているか？』

「何だよ！今戦闘中だよ！」

『三浦半島沿岸に深海棲艦の大艦隊が現れた！目標はこの横須賀鎮守府らしい！至急戻ってきてくれ！』

「くそっ！しようがない。撤退するぞ！」

「え？でも、まだ敵は倒していないっぽい」

「そんなの放つとけ！いいから撤退だ！」

時雨達は大急ぎで撤退した。

side 荻原

時雨が北方水姫とドンパチしていた頃、横須賀には深海棲艦の大群が押し寄せていた。

数はざつと50体くらい。

「なんでこんなにいるんだよ！」

「知るか！」

「提督！大変です！」

「どうした？」

「敵の駆逐艦が湾内に侵入しました！」

「何だと!？」

私は急いで双眼鏡で確認した。

確かにいた。駆逐イ級だ。

「総員、第一種戦闘配置だ！奴らを地上に上げるな！」

「了解！」

私が指示を出すと同時に艦隊は迎撃態勢に入った。

しかし、敵は次々と湾内に入ってくる。

「クソッ！一体どうなっているんだ？」

「提督！潜水艦型が現れました！」

「チイツ！」

そう言っている間にも潜水艦型はどんどん出てくる。

「対潜攻撃用意！」

「はい！」

俺が命令を出した瞬間、駆逐艦や海防艦から一斉に爆雷が発射された。

その爆発によって海面は荒れ狂い、大量の海水が飛び散った。

そして、海面からは潜水艦型の残骸が浮かび上がってきた。

「よし！これで、しばらくは大丈夫だろう」

「そうですね」

「しかし、いつまで保つことやら……」

念の為、千島列島に出撃している時雨の第1艦隊を電話で呼び戻した。戻ってくるまで全速力で3時間かかるという。

それから2時間後、ついに敵艦隊の本体が現れた。

「来ました！敵の数は約150体です！」

「なに!？」

「嘘だろ!？」

「もうダメなのか？」

「いや、まだ諦めるのは早い」

「そうだな」

「よし、全艦砲雷撃戦用意！」

「了解！」

戦艦や重巡による艦砲射撃が始まった。

そして、空母の艦載機も発進する。

しかし、それでも数の差がありすぎたのか、戦況はあまりよくならなかった。

「クソッ！このままではマズい！」

「どうしますか？」

「こうなったら、最後の手段を使うしかないか」

「それは、どういうことですか？」

「まあ、見ているよ」

私は執務室にある電話で山本元帥に電話をかけた。

『もしもし、私だ』

「山本元帥、私です。荻原です」

『おお、荻原君か。どうかしたかね?』

「実はお願いがありました」

『何だい?』

「：第零艦隊をよこしていただきたいのですが」

『はあ!?!』

「だから、私が指揮を取るのです、第零艦隊を貸してほしいと言っています」

『：まあよかろう』

「ありがとうございます。それで、いつ着きますか?」

『30分後だ』

「分かりました。それでは、失礼します」

私は電話を切って、司令室に戻った。

side西馬

「さあ、長らく続いた馬鹿踊りも今日で終いだ。横須賀鎮守府、そして

…

杉野時雨」



## 8話 役者は揃った

side荻原

30分後、ようやく第零艦隊が到着した。

旗艦の神風と艦隊のメンバーの乗っているヘリが着陸し、その後からゆっくりとした足取りで第零艦隊のメンバーが出てきた。

私は彼女らを出迎える…時間なんてないので、そのまま歩きながらすぐに状況を説明した。

「……ということだ。分かったか?」「ええ、理解しましたわ」

「そうか。なら、早速だが頼むぞ」

「はい、お任せくださいまし」

第零艦隊は敵に向かって突撃していった。

まず、神風が短刀6本をナイフ投げの要領で投げ、それにリボルバー型の14センチ単装砲を撃って加速させて戦艦棲艦（フラッグシップ）2体を撃沈させる。そして、その次に叢雲が槍と薙刀を合体させたような武器を振り回し、駆逐艦達を次々と破壊していく。

他のメンバーは砲撃したり、拳銃を撃つたりして敵を沈めまくっている。

流石は世界最強クラスの艦隊だ。

しかし、それでも数が多すぎて倒しきれない。

その時だった。

「提督…なんか来たぞ?」

「なんか降ってきた!」

時雨が上空からやってきた。（ちなみに第1艦隊の他のメンバーは銚子沖を航行中）

彼女の手には緋色に光る鎖でぐるぐる巻きにされた北方水姫の死体が握られていた。

side 暁

重巡棲艦が私に砲撃してくる。私はそれをかわす。

しかし、重巡棲艦の砲弾は着弾と同時に爆発するタイプだったので、爆風により吹き飛ばされてしまった。

「くっ！」

なんとか受身を取って立ち上がる。そして、主砲を構えて撃つ。

しかし、相手は装甲が厚いタイプの敵なのであまり効かない。

そうこうしていたら雷巡棲艦が魚雷を発射してきた。

「うそ?！」

慌てて回避しようとするけど間に合わない!

姉妹や仲間たちの悲鳴が聞こえる。もうダメだと思い目を瞑った。

……あれ?なんともない。

目を開けるとそこには見たことのない深海棲艦（北方水姫）の死体を持った時雨がいた。

時雨はそのまま重巡棲艦に近づき、日本刀を額にぶっ刺して撃沈した。

時雨が私の方を向いて言った。

「大丈夫かい?」

「うん、大丈夫だけど……」

「よかった。でも、ここは危ないから早く安全なところに逃げなよ」

「わかった」

私はみんなを連れてその場を離れた。

side 時雨

「ふう、まさか北方水姫がプライベートジェットならぬプライベートミサイルを持つてるとは。まあ、それにしがみついたおかげで速く戻ってこれたからな。盾になってくれてありがとう北方水姫」↑状況説明

時雨はそう心の中で言いながら北方水姫だったモノ（原型をとどめてない）を篡奪した後、海に投げ捨てた。

どこからか「時雨が帰ってきたぞ!」とか「これで勝てるわ!」とかいう声が聞こえた。

「さあ、次だ」

時雨はそう呟きながら次の敵に斬りかかった。

そして空母を撃沈したとき、横須賀鎮守府の一面から火柱が上がった。

「なに!？」

「あそこは確か……」

「司令官!」

「提督たちが心配だから見てくる」

僕はすぐに司令室に向かった。

そして、そこで目にしたのは倒れている提督の姿だった。

「嘘だろ!？」

急いで駆け寄る。すると、一応意識はあった。

とりあえず生きていることに安心した。

「良かった。生きてたんだ」

「ああ、何とかな」

「一体何があった?」

「いや、あの、時雨、元凶が目の前にいるんですけど」

「へ?」

そこには、この前沈めた戦艦（レ級改）と時雨が殺したと思っていた……前任の提督、西馬義時が立っていた。

## 9話 元ブラック鎮守府の奮闘

「久しぶりだな、時雨」

「お前……生きていたのか」

「ああ、色々あつてな」

「……そうか、死ね」

時雨は西馬に向かって12.7センチ連装砲B型を放った。

しかし、それはターミネーターもどきと化した西馬には簡単に避けられてしまう。

「おいおい、いきなり攻撃してくるなんてひどいじゃないか。……そうだ、今度こそ俺の物になれ。そしたら、お前の大切な人らの命は助けてやるから」

「ふざけるな」

「……そうか、なら仕方がないな……杉野時雨中佐」

「な、なぜ、その名を？」

「そんなことどうでもいいだろう？それより、一緒に来い」

「断る。死んでしまえ」

時雨は西馬を睨みつけた。

「そうか、ならいいさ。殺して連れていくだけだからな。やれ、レ級改」

『リョウカイシマシタテイトク』

※レ級改は遂に言語機能(グーグル翻訳の発音)が実装されました。

そしてレ級改は時雨に向けて20インチ連装砲を撃ってきた。

「くっっー」

時雨はそれを紙一重でかわす。しかし、そこにレ級改の飛び魚艦爆2型が襲いかかる。

「ちいー」

時雨は大急ぎで深海制御術式第2号を解放し、緋色の鎖とテールワイヤを振り回して艦載機を叩き落とす。しかし、それでも数発が被弾してしまった。

「ぐあっ！」

※秒で治ります。

「ほほう、流石は世界最強の艦娘もどきだな。だが、まだまだこれからだぞ?」

「うるさい!黙ってる!」

時雨は再び西馬の方に主砲を向けた。しかし、その時にはすでに西馬は消えていた。

「しまった!」

「遅い」

いつの間にか背後にいた西馬が時雨の左腕をナイフで切り飛ばす。そして、思いつきり蹴飛ばした。

「っ!?再生できねえ!どうなってる!」

「っは!そのナイフには毒が塗られてんだよ!まあ、普通の艦娘や深海棲艦は刺された瞬間死ぬんだが、お前にとっては回復阻害程度の効果しかないがな」

「くそ!」

時雨は必死に起き上がろうとするが、うまく体が動かない。

「終わりだな」

西馬がそう言ってレ級改が時雨にとどめを刺そうとしたその時だった。

「ウオオオオオー!!!」

荻原が西馬に跳びかかった。

「な、なんだ貴様!?!」

「うるせええ!!てめえだけは許さねえ!!」

「邪魔をするなあ!」

西馬は時雨への攻撃を中断し、代わりに荻原を蹴り飛ばす。

「がはっ!」

「提督!」

荻原は吹っ飛ばされ、司令室のモニターに叩き付けられる。

「ぐあ!」

「ふん、もういい。やれ」

『リョウカイシマシタ』

レ級改が時雨を始末しようとして砲塔を向ける。

「つー……深海制御術式第1号、部分解放。行くぞ、防空棲姫」

時雨がそう言うのと、肘から切り落とされた左腕から禍々しい液体のようなものが吹き出し、それが地面に流れ落ちて溜まり、そこから

……? 亀甲縛り+猿ぐつわをされた防空棲姫が出てきた。

「……?!?!」

『!?』

西馬とレ級改は目を大きく見開いて驚いている。

「……あ、スマン。外してあげるから、やれ」

時雨はそう言うのと縄を解いて猿ぐつわを外した。

『YES, MYマスター!』

「!?」

防空棲姫は時雨に向かって敬礼すると、すぐに西馬とレ級改に向けて発砲する。

「うおおっ!?!」

「ガアッ!」

2人はなんとか回避したが、時雨への攻撃は中断させられてしまった。

「ふう……助かったよ、ありがとう」

『イエ、マスターノタメナランナリト(逆らったら嫁時雨に殺される…)』

「そうか」

時雨は防空棲姫の頭を撫でた。

「クソが…撃て!撃て!」

西馬はレ級改に命じて砲撃させる。しかし、防空棲姫の弾幕(+狙撃スキル)によって全て撃ち落とされてしまう。

「ば、バカな……」

西馬は呆然と立ち尽くす。

時雨は西馬に急接近し日本刀で斬りかかる。

「ちいー!」

西馬はギリギリでかわすが、その隙を突いて時雨は12・7センチ砲を撃つ。

砲弾は西馬の右肩に当たり、吹き飛んだ。

「…お前、機械か？」

「ああ、そうだ。お前に殺されたからな。ついでにお前に日記も見させてもらったぞ」

「そうか、死ね」

時雨は西馬を斬ろうとした。しかし、それを西馬は避けようとする。しかし、そこに防空棲姫の放った銃弾が西馬に命中した。

「っ！」

「よし、今度こそ終わりだ」

時雨は西馬に刀を振り下ろす。しかし、レ級改によって阻まれる。

「ちい！」

「よくやったレ級！やれ！」

しかし、西馬がレ級改に命令した瞬間、司令室の天井の穴から6本の短刀が凄まじい速度で飛び出してきた。

「なに!？」

『!？」

レ級改はその攻撃を避けられず、全ての短刀がレ級改の体に突き刺さった。

『ガアアッ!』

「レ級!？」

短刀の1本が脳髓を貫通して心臓に突き刺さり、レ級改は機能停止し、その直後、14センチの砲弾が殺到しレ級改は爆発した。

「なっ!？」

西馬は何が起こったのか理解できず混乱している。

天井から第零艦隊の神風が飛び降りてくる。

「大丈夫ですか荻原少佐！いやちよつと待て防空棲姫!?!どういう状況だ!?!えくつと見敵必殺!！」

神風は防空棲姫を見てさらに困惑して防空棲姫に襲いかかるが、時雨が制止する。

「待て、コイツは僕の使い魔ならぬ使い棲艦だ」

「は？この異端艦が。切り殺すぞ？」

「まあ聞けつて。あと、お前誰だよ」

「第零艦隊旗艦、神風零式」

「……ふくんとところで早くどいてくれないかい？前任を殺したいんだけど」

「ああ、悪いな」

神風は西馬から離れ、西馬は慌てて逃げ出そうとするが、その前に防空棲姫が立ち塞がる。

「クソが！なんなんだ貴様らはあ!!」

西馬は叫びながらリモコンのようなもののボタンを押す。

「あいつに頼るのは癪だが…」

すると、司令室の壁の一部が破壊され、身体の所々が紅くひび割れ、長い白髪で紅く禍々しいオーラをまとった深海棲艦が現れる。

「どくもく中枢棲姫で〜ス」

「な!?!」

「こいつはまだ死なせるわけにはいかないんだよね。だから撤退させてもらうワ」

「逃すか!」

時雨は神風と共に中枢棲姫に斬りかかる。しかし、それは突然現れた黒い球体により防がれてしまう。

「ちい!」

「じゃあネ。また会おう」

西馬とレ級改(残骸)は中枢棲姫とその随伴の戦艦水鬼に抱えられ、その場から姿を消した。

時雨はとりあえず、防空棲姫を回収して左腕をもとに戻した。

「時雨、大事なことを忘れてる気がするんだが」

「奇遇だね、僕もだよ」

「荻原少佐どうしよう」「提督どうしよう」

二人の目線の先には息絶え絶えとなった荻原が倒れていた。

神風が何を考えたのか荻原に高速修復剤をぶっかけると、艦娘じや



ないのに傷が全て塞がった。

「おい、生きてるか？」

時雨がそう言うのと萩原の意識が戻る。

「……あれ、なんで生きてるんだ？深海提督はどうした？」

「アイツは逃げたよ」

「……そうか」

時雨の言葉を聞いた萩原は起き上がる。そして、時雨に頭を下げた。

「すまん、お前らの力を借りないと私はダメだったようだ」

「気にしないでください。僕はあなたの部下ですから」

「ありがとう、時雨。それに、神風さん」

「気にしないでください。仕事ですから」

「ああ、そうだな」

side 第1艦隊の連中

「やつと横須賀に戻ってきたデース！」

「長かったっぽい」

「まさか時雨さんが北方水姫と一緒に飛んでいくとは……」

時雨に置いて行かれた第1艦隊はようやく横須賀鎮守府に帰還していた。

「Oh, 鎮守府がえらいことになってマース」

「深海棲艦も50体くらい残ってるっぽい」

「これは大変ですね」

金剛、夕立、加賀はそんなことを言いながらも、楽しそうに笑っている。

「まあ、私たちはいつも通りやればいいだけデショ」

「っぽい！」

「そうですね」

「ヴァーニングラアアアブ！」

「ソロモンの悪夢、見せてあげる！」

第1艦隊の連中はそう言いながら敵艦に攻撃を開始する。

金剛は35・6センチ連装砲改と53センチ連装魚雷によって敵艦が次々と沈めていき、続いて夕立と初月が日本刀と魚雷を持って敵に突入し、投げナイフの要領で魚雷を投げつけたり日本刀で敵を切り倒す。加賀の烈風改とイントレピッドのF4U-1Dとフライングパンケーキが敵艦載機を墜とし、味方が撃ち漏らした敵艦を仕留めていく。

周りの艦娘達から「第1艦隊が戻ってきたよ!」とか「これで勝てる!」とか聞こえてくるが、彼女たちは気にも留めずに敵を殲滅していく。

一方その頃、深海棲艦側のリーダー達、つまり姫級たちは大混乱に陥っていた。作戦の責任者である提督（西馬）がレ級改を連れてどこかにいったきり戻ってこないからだ。

「提督どこいったああああああああああ!」

「落ち着け重巡棲姫! 叫んでも出てこないから!」

「うわあああん! 帰りたいあああ!!」

「泣くな軽巡棲鬼! 私だって泣きたいよお!!」

「提督、どこに行っただんですかああ!!」

「あーもう! あのクズ帰ってきなさいよ!!」

「みんな落ち着いて。まだチャンスはあるはずだよ」

「ああああああああああ（発狂）」

「戦艦新棲姫、落ち着いて!」

「なんか上から降ってきたぞ!」

「「「?」」」

「なんだあの艦娘!」

「ここにちは」

降ってきたのは時雨（深海制御術式第2号解放）だったという。

「さあ、始めようか」

時雨は不敵に笑いながら刀を構えると、姫級達は一斉に砲撃を開始した。

「無駄だ」

時雨は砲弾を全て斬り捨てると、そのまま姫級の群れの中に入った。行って行った。

「僕に勝つのは（レ級改みたいな再生能力がないと）不可能だ」

時雨の高速移動と斬撃の前に次々と姫級達が沈んでいく。

「嘘だろ!？」

「あんな駆逐艦がいるなんて聞いてねえ!」

「死にたくない!」

「誰か助けてくれえ!!」

「大丈夫、すぐに楽にしてあげるよ」

時雨は最初に近くにいた重巡棲姫に斬りかかる。

「ぎゃあああ!!」

「次は……そこっ!」

時雨は次に軽巡棲鬼を斬りつける。

「ぐうツ!」

「最後はお前だ」

時雨は戦艦新棲姫を睨みつけた。

「ひっ」

「お前らのせいで、提督が傷ついた」

時雨の全身から赤黒いオーラのようなものが溢れ出す。

「ぶっ殺す」

「うわあああああ!!」

時雨のオーラで錯乱した戦艦新棲姫は主砲を撃ちまくるが、全て時雨に避けられる。

「遅いね」

「ひいっ!」

「あばよ」

時雨が戦艦新棲姫を一閃すると、彼女は爆発して消えた。

「すごい……これが時雨さんの実力……」

「すごい……」

「雰囲気は深海棲艦より深海棲艦してる……」

周りにいた艦娘達は呆然としていた。

「ふう、終わったかな?」

時雨はそう言うとおーラを引っ込めて元の普通の状態に戻った。  
「さすがですね」

そこに一時的に第1艦隊旗艦を任せていた金剛が現れる。

「お疲れ様です、金剛さん」

「そちらこそ、お疲れさまです。敵はほとんど沈んで生き残りは外洋に逃げていったネ」

「じゃあ、もう大丈夫ですね。提督のところに戻りましょうか」

「了解デース!」

艦娘達は荻原の元に戻るため、横須賀の港へと向かっていった。

◇

戦闘から帰還した艦娘達はすぐに司令室に向かった。鎮守府の建物は半壊し、瓦礫が散乱している。

「提督!」

「おお、みんな無事だったか」

「はい、なんとか全員帰還しました。ただ、敵の数が多すぎて完全には駆逐できませんでした」

「そうか、まあ仕方ないな。敵の指揮官級の連中を潰したんだからしばらくは来ないだろう」

「それは良かったネー」

「前任は逃したし、鎮守府も半壊したが死者はいないんだ。完全な勝利とは言えないが、それでも十分な戦果だ。みんなよくやった!」

荻原の言葉に艦娘たちは喜びの声を上げる。

「ところで鎮守府半壊したけどどうするんだい?」

「こうなったのは第1艦隊を北方に行かせた坂本大将のせいでもあるからな。再建の時の領収書は全部坂本藤雄名義で出してやる(なかなか鬼畜)」

「いいのかそれで」

「まあいいんだよ。あいつは私が提督になる前から無茶苦茶やってたらしいからな。それにXX億円くらいならあいつのポケットマネーで払えるだろ」

「そっかー（棒読み）」

こうして、今回の騒動、横須賀鎮守府防衛戦は一応の終わりを迎えた。

この後、ニュースで『元ブラック鎮守府の奮闘！』というほとんど事実とは異なっていて西馬がいなかったりする特集が組まれたり、荻原が中佐に出世したり、時雨が荻原に自分の秘密を話したり、大本営が時雨を危険視したり、鎮守府の一部で時雨深海棲艦説が再燃したりするのだが、これはまた別の話である。

## 第一章 完

## 第二章 時雨の嵐の前な日常

### 10話 時雨の回顧

横須賀鎮守府がまだブラック鎮守府だった頃、変な噂が流れた。

時雨は、深海棲艦の内通者、或いは深海棲艦そのものではないかと。

それから、僕には常に疑いの眼差しが向けられた。

当然だよ。轟沈者はほぼゼロな上、僕だけが無傷なんだから。

そんな日々が続いたある日のこと。僕を疑っていたある軽巡が、僕を問い詰めた。

「あんた、何企んでんの？」

「……何も」

「嘘ね！だってあんただけいつも傷一つないじゃない！」

そうやって彼女は僕を殴った。痛かった。けど僕は表情を変えなかった。だってこの痛みには慣れていたから。殴られるのも、蹴られるのにも。

「もういいわよ。どうせあんたなんか誰も信じてくれないんだし」

その言葉を聞いて少し胸がチクリとした気がしたけれど、きつと気のせいだろう。

次の日、僕の部屋の前に沢山の手紙があった。全部同じ人からだった。内容はどれも僕に対する罵声だった。

『裏切り者』『死ぬ』などの言葉ばかりだった。僕はこれを全て燃やして処分した。

ある日、僕の部屋の中に何かが投げ込まれた。それは大量の小石だった。中には鉄屑とかもあった。僕はただ黙ってそれを見た後、それらを全てゴミ箱に入れた。

数日後、また部屋の中に投げ込まれるものがあった。今度は花瓶だった。中には何も入っていなかった。僕はそれを割って捨てた。

それから毎日のように僕への嫌がらせは続いた。

ある日のことだった。食堂で昼飯を食べていたら、どこからか

「時雨は どうして あれに 耐えら れるの?」「私なら 自殺する」「やっぱり あいつ 艦娘 じゃないんじや……」 という ヒソヒソ 話が 聞こえて きた。 その 瞬間、 僕は 頭に 血が 上る 感覚を 覚えたが、 いちいち 構って いた らきり が ない ので 無視 する こと に した。

すると 今度は 「私、 あいつ の 部屋 の 近く で 寝て る だけ ど…… 夜中 になると 毎晩 すすり 泣く よう な 声 が 聞こえ る のよ…… 気色 悪い わ」 な んて 言う 奴 が 現れ た。 僕は 思わず 立ち 上が った。 しかし 周り に いた 人 たち から は 冷たい 視線 を 浴び せ られ た だけ だ っ た。

その 日 の 夜、 僕は 部屋 の 中 で 泣い た。 悔し くて 悲し くて 仕方 が な かった。 僕は 何 も して ない のに……。

数日 後、 僕 の もと に 手紙 が 届い た。 その 内容 は 僕 に 対す る 誹謗 中傷 の オンパレード だ っ た。 僕は それ に 一通り 目 を 通し た 後、 火 を つ けて 燃や した。 その 時 ふ と 思っ た。 ああ…… 僕 っ て こん な こと さ れ て も 何 も 感じ なく な っ て き ち や っ た ん だ な っ て。

悲しい は ず な のに、 辛い は ず な のに、 涙 す ら 出 なく な っ た。 いつ の 間 に か 心 が 麻痺 して しま っ た み た い だ。

僕は もう 疲 れ た よ。 早く 楽 に な り た い。

『どうして こんな 目に 合わ なく ちや い け ない?』

『恩 知 ら ず 共 め』

『早く 楽 に な り た い』

『ナイフ で 刺 せ ば 楽 に な れ る か な……』

『縄 の 輪 に 入 れ ば 楽 に な れ る か な……』

『睡眠 薬 を 飲 め ば 楽 に な れ る か な……』

『何 力 壊 し たい。 壊 さ な イ と 僕 が 先 に 壊 れ ちや う』

『艦 娘 共 が……』

『…… 僕 っ て な ん だ っ け……』

ど っ どん 曖 昧 に な っ て い く。 思 考 も、 記 憶 も。

敵を殺して残機にしたり、前任に汚されたり、艦娘共鉄屑に黽られたり、その度に混ざっていく。

僕の、本来の表の僕が裏の黒い僕と混じり合って消えていく。まるで白い紙に水に溶かした黒い絵の具をぶちまけたように広がってゆく。そして、少しずつ黒くなるのだ。そしていつか完全に黒く染まる。

僕はもうダメかもしれない。もう二度と戻れないかもしれない。

……僕は人間として大切な何かを失ってしまったのかもかもしれない。それが何かはわからないけど。多分人間性のようなもの。人として一番大事な部分を失ったのだと思う。

ある日のことだった。

「こんにちは。時雨さん」

「……お前は……■■……だったか」

「覚えていてくださり光栄です」

「それで、なんの用だ？」

「いえ、大したことではありません。あなたがだんだん壊れていくのを見るのが楽しいだけです」

「っ!?!お前……」

「ええ。私は深海棲艦ですよ。あなたの大事なものを奪ってやりました。まあ、まだ始まりに過ぎませんが」

「どういうことだ」



「すぐにわかりますよ。ではまた会いましょう」

「おい待て！」

僕は■■■に殴りかかった。

「時雨さん、暴力はいけませんよ？あと、後方注意」

「は？」

後ろを振り向くと■■■、さらにその後ろには■■■の仲間数人がいた。

「な、なんでいるんだい!?!」

「それはこっちのセリフよ！あんた、■■■になんてしてくれてんのよ!!?」

そうやって■■■は僕を蹴り飛ばした。

「ぐあつ！」

そのまま壁に激突する。

「時雨、今ので終わりだと思ってないでしょうね？みんな、こいつリンチするから手伝ってくれる？」

「はい、先輩」「了解しました」「任せて下さい！」

他の艦娘達も僕のことを囲み始めた。

「ま、まって、やめて、くれ」

「うるさいわね。口答えしないでもらえるかしら？ねえ、■■■?」

「ええ、その通りよ。時雨さん、黙っていてください」

それから数十分後、そこにはボロ雑巾のようにされた僕と、満足そうな顔をした艦娘たちの姿があった。

「はあく楽しかった」

「そうですね、■■■」

■■ 姉妹と仲間たちは満足そうに去って行った。

僕はボロボロになった身体を再生させながら、先程のリンチの時間いた耳に付く言葉を思い出していた。

『■■■時■■！あな■■のせいで■■■はー！』

『あ■■たさ■■いなけ■■ば…』

不思議とその思い出せない言葉が頭から離れなかった。いつかどこかで聞いたことがあるような気がしたからだろうか。

目が覚めた。いつの間にか寝てしまっていたみたいだ。  
窓から見える空は既に暗くなっている。

僕はゆつくりと起き上がり、ベッドから抜け出す。少し体が重いなあ。どうしようかな？ 食堂でも行こうか。

その時、扉がノックされる音が響いた。

「……はい」

僕の返事と同時に扉が開かれる。そこに居たのは、あの時僕を問い詰めてきた軽巡——五十鈴だった。

「なに？ 何か用事でもあるの？」

僕の言葉を聞いているのか聞いていないのか、五十鈴は何も言わずに近づいてくる。

「……えっと、なにさ？」

困惑気味に問うと、五十鈴はいきなり頭を下げて、

「ごめんなさい！」

……なにそれ。なんで謝るのさ。意味わかんないよ。

「なにがしたいの？」

思ったことをそのまま口にすると、五十鈴は顔を上げて、

「私は貴女のことを何も知らなかった。ただの噂を信じて、貴女を一

方的に悪者にしてしまった……。本当にごめんなさい……」

今にも泣き出してしまいそうな表情だった。僕は、別に気にしていないのに。

「……いいよ、もう。過ぎたことだし」

「でも！ 私のこととは許されないことで、その償いはしないといけないの！」

僕の言葉に被せるように、叫ぶ。その必死さが伝わってくる。

僕は、別に怒ってなんかいない。だから、償う必要なんてないのに。

僕は彼女に歩み寄る。そしてその肩に手を置く。びくりと震える彼女を見て、思わず優越感を感じてしまう。嗜虐心がそそられてしまう。多分、僕の口は三日月のように歪んでいると思う。

無意識の内にこうなってしまうのだ。否が応でも自分が壊れていることを実感する。

「ねえ、五十鈴さん。僕は怒っていないんだよ。だって、僕はこの鎮守府の皆のことが好きだから。もし仮に、僕が深海棲艦だったとしても、それは変わらない」

ただの建前だ。前はこんなことを思っていたのかもしれないが、今は違う。お前らなんて大嫌いだ。

僕をそんな目で見るんじゃねえよ鉄屑が。

そんな汚い言葉が溢れ出す。だけど、僕はそれを心の奥底に押し込んで、微笑む。

「だからさ、もう気にしなくて良いよ。ほら、僕が許してあげるからね？」

僕はそう言うのと部屋を出ようとしたが、五十鈴に腕を掴まれたので振り返る。

彼女は俯いていた。その頬には一筋の雫が伝っている。

「ありがとう……。それと、ごめんね……」

消え入りそうな声で呟くと、僕の手を引いて抱き締めた。

……なんだコイツ？ 鬱陶しいんだけど？僕は彼女の体を軽く押す。だけど、彼女は離れようとしなない。

「離してくれろ？」

冷たく言い放つと、ようやく離れた。

「あ、うん。ごめんね」

「いや、別にいいけど。そろそろお腹減ったし食堂に行くから」

それだけ言って、僕は部屋を出る。

後ろから五十鈴の声が聞こえたが、無視した。……ああ、苛つくなあ。

## 11話 駄目天使時雨の日常①

僕は横須賀鎮守府の戦いの後、提督に全て話した。僕が転生者であること、網走鎮守府の提督だったこと、その他、深海制御術式とか色々暴露した。

結果、提督は苦笑いしながら「道理で仕草がおっさんっぽくて言動が荒々しいわけだ」と言っていた。ひでえ。

現在は提督の秘書艦を統投している。秘書艦と言ってもほとんど雑用だが。あと、たまに訓練の監督をしたりもする。

いろいろあって何故か、提督の秘書艦兼友人兼先輩兼セフレという立ち位置になってしまった。なぜだ。

そして現在午前8時、提督の自室のベッドで布団にしがみついている。提督は食堂に朝食を取りに行っていて今ここにいない。

『そろそろ起きなよ』

そう言うのは僕の二重人格の通称嫁時雨だ。

「……うくんあと5分」

『もう朝だよ？早くしないと提督が戻ってくるよ？』  
「うつかい」  
『もう朝だよ？早くしないと提督が戻ってくるよ？』  
「うつかい」

『とりあえず起きる？』（謎の圧）

「クソツ」

時雨に促されて僕は体を起こした。

鏡を見ると、寝癖で髪がボサボサになった時雨が映っている。

とりあえず身だしなみを整えよう。

「ふう、こんなもんかな」

顔を洗って着替え、髪をセットした僕は食堂に行くことにした。

◇

「おはようございます、提督」

「おはよう。今日もかわいいぞ時雨」

「はいはい、ありがとう」

「むう、反応薄いなあ」

「はいはい、ありがとありがと」

いつものように適当にあしらひ、間宮さんに挨拶して料理を受け取る。

今日の献立は鮭定食だ。

前世からの癖で周りが引くくらいのスピードで完食したが、足りなかったので某10秒チャージゼリーをいくつか飲んで腹を満たした。

「ごちそうさまでした」

食器を下げて執務室に向かう。

扉を開けると提督が書類仕事をしていた。

「提督、今日の仕事は？」

「ああ、これやっといてくれ」

提督から書類を受け取り内容を確認する。

内容は資材運用状況や装備開発、艦娘の建造など多岐にわたる。

「提督、この量は流石に多いんじゃないか？」

「仕方ないだろ。ここ腐っても戦果1位の鎮守府だからな。仕事は多いんだよ」

提督は椅子にもたれかかりながらそう言った。

「はいはい、わかりましたよ」と

僕は書類に目を通し始めた。

……………数時間後

「よし、終わったー」

「お疲れ。ほら、差し入れ」

そう言っ提督はコーヒーの入ったマグカップを差し出してきた。僕はそれを受け取って飲む。

「あー、染み渡るわー」

「オッサンくせえな」

「うるさい」

そんなやり取りをしながら僕達は仕事を終えた。

「提督、そっちの進捗は？」

「まあまあかな。とりあえず今日中に終わらせる予定」

「じゃあ僕は帰るから、頑張れ」

「おう、また明日な」

僕は執務室を出て工場に向かった。

目的は明石さんが制作したいという新しい機械のプランを見に行きたためだ。

ちなみにその機械の名前は『シンカクイレカエール』という頭悪そうな名前である。

まあいいや、さっさと行こう。

工場に着くと、早速設計図を見た。

僕は機械なんて1ミリもわからないがなんとなくすごいということがわかるレベルのものだ。

「いや、そもそもこれ何に使うの?」

そう呟いた瞬間、後ろから声をかけられた。

「それはですねー、生物と生物の人格を入れ替える装置です!」

振り返るとそこには明石さんがいた。

「需要あるんですか?」

「はい! 鹵獲した深海棲艦と艦娘の人格を入れ替えて、敵の戦力を削ぐのに使います!」

「なるほど。とんでもねえマッドサイエンティストだな。気狂ってんだろ」

「褒め言葉として受け取りましょう」

「はいはい」

なんかもうどうでもよくなってきた。

「で、いつできるんだい? それ」

「そうですねー、あと2週間くらいですかね」

「へえ、言つとくけど予算出さないよ? こっちも色々大変だし」

「わかっています。なので……前に作った試作の装備をいくつかあなたにあげます。賄賂ってやつですね」

「……へえ、どんなの?」

「こちらになります」

明石さんが取り出したのは二つの武器だった。一つは拳銃のような形をしたもので、もう一つは銃剣のついたマシンガンだった。

「これは？」

「20・3センチ砲と同威力の南部拳銃と、一〇〇式機関短銃の見た目のボフォース40ミリ機関砲です。銃剣付きなので白兵戦もできます。あと、どちらも妖精さんの力で装弾数100万発になっます」

「ふむ……（ヘル〇ングかよ）」

僕は少し考えたあと、「試し撃ちしたいんだけど、いいかな？」と言った。

「構いませんが、演習場でお願いしますね」

「了解」

僕はそう答えて工廠を出た。

そして僕は出撃ドッグに向かい、無断で出撃して手頃そうな駆逐艦に向かって発砲する。

弾丸は一直線に飛び、敵に着弾し、一撃で撃沈した。

「うん、悪くないね」

しばらくして軽空母を含む敵艦隊を見つけ、交戦した。

僕はマシンガンを構え、引き金を引いた。

ダダダダダッ!! 連射された無数の銃弾が敵の艦載機に吸い込まれていく。

「おお、いいね」

続けて今度は銃剣で刺突攻撃を繰り返す。ちなみに軽空母は死にました。

「んー、悪くないか。てかこの銃剣何でできてんだ？」

いろいろあって工廠に戻ってきた。



「……パーフェクトだ、明石。あの気の狂った装置作っていいよ」

「ありがとうございます！（へ○シング？）」

「ところで、あの気の狂った装置いくら？」

「えっ？」

「いや、だからさ、あの頭のおかしい装置は一体いくらかなあ〜と思つてさ」

「あー、あれですか。うーん……3億くらいですかねえ？」

「……提督と相談してくる」

その後、明石は例の装置を完成させて、結果ある艦娘を救ったとか  
なにか。

## 12話 駄目天使時雨の日常②

提督との相談という予想外の残業を終わらせた僕はとりあえず昼飯を食おうと思い食堂に来た。

カレーライス特盛りと唐揚げを頼んで席に着いた。

「いただきますーす」

……………数分後

「ごちそうさまでした」

完食しました。美味しかったです。

ちなみに隣では赤城さんが加賀さんと大食いチャレンジをしていた。た。

頭のおかしい量のカレーライスを二人で食べていた。上には上がいるということだ。

ちなみに僕は早食いが得意だ。

「さて、これからどうしようか」

やることないし部屋に戻って寝ようかなと思っていた時、目の前に誰かが現れた。

「あ、あの、時雨さん」

誰だっけこいつ。確か……………誰だっけ。

「……………」

懸命に思い出そうとしていたら向こうから話しかけてきた。

「あ、あの私、磯波です」

ああ、この前着任した奴か。忘却の彼方だったわ。

「ああ、思い出したわ。で？何か用かい？」

「えつとその……………よかったら訓練につき合ってくださいませんか？」

……………面倒くせえ。

まあいいや、暇つぶしになるだろうから引き受けるか。

「いいよ。じゃあさっそく行くこうか」

「えっ!? いいんですか?」

「いいよ別に」

僕は立ち上がり、磯波を連れて訓練場に向かった。  
訓練場で僕と磯波は向かい合っていた。

「さて、まずは何をやる？」

「え、えーっと……」

「何でもいいよ」

「じ、じゃあ、模擬戦してください！」

「OK」

僕はそう言って太刀とさつき貫った南部拳銃を取り出し、構える。  
対する磯波は主砲を構えた。

「行きます!!」

直後、磯波は砲撃を放った。

砲弾は真つ直ぐに飛んでくる。

「甘いな」

僕は横に動いて回避し、反撃の銃撃を放つ。

磯波は銃弾で吹っ飛んで訓練場の壁に叩きつけられた。

「がはっ……ゲホッ、ゲホ」

「終わり？もうちよつと頑張ろうよ」

僕は呆れながら言った。

「まだ……負けていません……」

磯波はフラつきながらも立ち上がった。

「……そう来なくちゃね」

それから何回か手加減しながら戦ったあと、結果は普通に僕の勝ちで終わった。

「はい、終了」

「うう……また勝てなかった……」

僕は息を整えつつ、拳銃をホルスターに収めた。

「まあ、レベル一桁の割にはよくやった方だと思うよ。筋もいいしこれからに期待だね」

「あ、ありがとうございますー!」

「はいはい」

なんか懐かれた。まあいいか。

◇

磯波との模擬戦を終えたあと、執務室に戻ったら提督がぐったりした様子で机に突っ伏していた。(ちなみに現在午後6時)

「お疲れ様です、提督」

「うーん、時雨か。私もそろそろ歳かなあ」

「いやお前まだ25だろ」

僕は思わずツツコミを入れた。

「そういえばそうだね。時雨、お茶頼むよ」

「はいよ」

僕はポットのお湯を急須に入れ、茶葉を入れて蒸らす。

「はいどーぞ」

「ありがとう」

提督はゆっくりとお茶を飲み始める。

「ふー、美味しいねえ」

「そりや良かった」

「ところで時雨」

「なんだい？」

「これから空いてるか？」

「特に予定はないよ」

「そうか、鳳翔が今日から居酒屋始めるらしいから付き合ってくれ」

「いいよ。じゃあ準備したら行くわ」

「おう」

僕は提督と別れて部屋に戻り、着替えてから居酒屋に行くことにした。

「さて行くか」

僕は部屋を出て、鎮守府内を歩いていく。

そして居酒屋『鳳翔』の前にやってきた。

中に入ると、既に提督がカウンター席に座っていた。

「来たな時雨」

「待たせたかな？」

「いんや、全然待つてねえぜ」

「ならいいんだけど」

僕は提督の隣に座り、メニューを見る。

「さて、何食うかな……」

「俺はとりあえず生で」

「じゃあ僕も同じので」

注文してしばらくするとビールが出てきた。

「よし、乾杯」

「ああ、乾杯」

ジョッキ同士をぶつけ、ビールを飲む。

「くうー！やっぱこれだね！」

「おっさん臭いぞ時雨さん」

仕方ないじゃない。中身おっさんだもの。

「で？何か話があるんじゃないのかい？」

「ああ、実はだな……」

「はいお待ちどうさま」

その時、料理を持った鳳翔が話しかけてきた。

「おお、きたきた」

提督は早速焼き鳥を食べ始めた。

「あー美味い」

「それはよかったです」

「んで、提督。僕に用事があったんだろ？」

「ああ、そうだった。忘れるところだった」

「それで、どんな要件だい？」

「最近色々と忙しくて書類仕事ばかりで嫌になってきてな。だから気分転換にどこか行こうと思うんだよ」

「ふむ、どこに行きたいのさ」

「温泉とか行きたくなってるな」

「なるほど。つまり僕と一緒に行けと？」

「そういうことだ」

提督はニヤリと笑った。……全くこいつは……。

「分かったよ。今度一緒に行ってあげる」

「マジで!? やったぜ!」

「ただし、ちゃんと仕事を終わらせてからだよ」

釘は刺しておく。でないと後で困るのはこいつだしな。

「分かっているさ。じゃあそろそろ戻るよ」

「はいはい」

提督は立ち上がり、会計をして店から出ていった。

僕は残った酒をちびりと飲みながら小さく呟いた。

「……本当に、私に似ているな……」

僕はその言葉を最後に酒を飲み干し、立ち上がった。

そして勘定を済ませて店を出た。

外に出ると雪が降っていた。

「寒いわけだ……」

僕はため息を吐きながら駆逐艦寮に帰った。

### 13話 駄目天使時雨の日常③

自室に戻ると、相部屋の夕立がいた。どうやらさつき食堂で晩飯食ってきたようだ。

「おかえりっぽい〜」

「ただいま」

「時雨、お風呂入るぽい？」

「うん」

「じゃあ一緒に入るっぽい」

「いいよ」

僕は寝間着を取り、脱衣所に向かう。

脱衣所なので当然服を脱ぐのだが、鏡が設置されているの他の艦娘達も服を脱いでいるので1年半経つてのにまだ慣れない。

そのため全力で目を背けながら服を脱ぐ。

「おーい、時雨。早くするっぽい」

「ごめんすぐ行くよ」

急いで脱ぎ、タオルを持って浴室に向かった。

浴槽にはお湯が張ってあった。僕はシャワーを浴び、湯船に浸かる。

「あぁー……」

やっぱり湯船はいいよね。疲れが取れる気がするよ。それから10分ほど浸かり、身体を洗う。

「時雨、背中流すっぽい」

「んー、じゃあお願いしようかな」

「任せるっぽい！」

夕立は僕の後ろに立ち、スポンジで優しく撫でるように洗い始める。

とても気持ちいい。

「痒いところないかしら？」

「大丈夫だよ」

「じゃあ次は前よ♪」

「ええっ!?!前は自分でやるからいいよ!!」

僕は慌てて逃げようとするが、あっさり捕まり、胸までしつかり洗われてしまった。

「時雨の肌すべすべしてるっぽい」

「ちよ、ちよっとーもういいでしょ?」

「まだまだこれからよ」

「やめてー!!やめてくれえー!!」

結局僕は隅々まで綺麗にされてしまいました(白目)

この醜態を見せつけながら「こいつ前世男なんですよ」と紹介されてそれを信じる人がどれほどいるだろう。いないだろうな。多分。

ちなみにこの後めちやくちや湯船でイチヤイチャした。嫁時雨が般若さんの幻覚を発生させてきたが、気にしてはいけけないのだ。

風呂から出た後は髪を乾かし合いっこして就寝時間になったのでそのままベッドに入った。

ちなみに夢の中で嫁時雨がハイライトの消えた目で見つめてきたがスルーした。だって怖いんだもん。

防空棲姫が「ナンダコノ痴話喧嘩ハ……」と言つて嫁時雨にしめられていた気がするが、僕は何も見ていない。いいね?

◇

翌日。僕は執務室で提督と仕事をこなしていた。(ちなみに現在午前11時)

「私と一緒に大本営に行くぞ」

「了解。てか仕事は?」

「終わったよ」

「早いな」

「まあな」

提督は最後と思われる書類に判子を押し、引き出しにしまう。



「よし、これでOKだな」

「じゃあ行こうか」

「おう」

僕達は部屋を出て、エレベーターに乗る。そして地下に降り、外に出た。

「おお、寒い」

「そりゃ冬だからね」

僕はマフラーを巻き直し、歩き出した提督の隣に並ぶ。

「しかし、なんで急に？なんかあった？」

「最近深海棲艦の侵攻が激しくなってきたているだろ。それで、提督会議があるんだ」

「へー」

「それにお前も連れて行く」

「僕が？何で？」

「私の秘書艦としてだ」

「……分かったよ」

……どうせ拒否権はないんでしょ？分かってますよ。あく大本営のアホンダラどもが。

そんなこんな話しているうちに車に乗り、大本営に着いた。

駐車場に入り、車を停める。そして、僕らは建物に入っていった。

「お久しぶりです先輩」

「ああ、久しいな。元気そうじゃないか……俺と違って」

提督に先輩と話しかけられたハg……いや坊主頭を軍帽で隠している男性はため息を吐いた。

「ん？萩原、こいつお前の秘書艦か？」

「そうだ」

「ほう……」

「初めまして、萩原提督の秘書艦の時雨だよ」

「俺は串本鎮守府提督、石川公爾中佐だ。よろしく」

握手を求められたので応える。

「時雨、彼は私の先輩で、学生時代に美術の時間に先生の1物を描いて

『芸術作品』と言って提出したらその絵が最優秀賞を取ったという伝説の持ち主なんだ」

「ぶっ！」

「……時雨ちゃんだったかな？」

「何だい？」

「いや、横須賀も元ブラック鎮守府って聞いたけど、うちの時雨と違ってビクビクしてないなって思ってたさ」

「まあ、色々とあったからね」

「ほおー。ん？…そろそろ時間だな。会議室行こうぜ」

「ああ、そうだな。じゃあ時雨、ついてこい」

「うん」

僕達が会議室に着き、扉を開けると既にほとんどの提督とその秘書艦は着席していた。

その中には前世で同期だった東郷優司少佐の姿もあった。相変わらずパツとしない普通顔してんな。

「遅かったな。早く座れ」

僕達も空いている椅子に座り、山本元帥がホワイトボードの前に立つ。

「ではこれより定例会を始める。まず最初に、深海棲艦が今までにないほど強くなっているという報告が上がっている」

「それについてはこちらの資料を見てほしい」

一人の提督が資料を配り始める。

そこには「これまでに確認された新型深海棲艦」という題目で書かれていた。

- ・ 戦艦ル級改フラッグシップ
- ・ 戦艦タ級改フラッグシップ
- ・ 戦艦レ級改フラッグシップ
- ・ 空母ヲ級改フラッグシップ
- ・ 重巡ネ級エリート
- ・ 駆逐ナ級

- ・戦艦棲姫改
- ・戦艦新棲姫
- ・戦艦水鬼
- ・空母水鬼
- ・装甲空母姫
- ・中間棲姫
- ・中枢棲姫

ちなみにこれらは全て本土近海で確認されている。

「今のところ本土には到達していないが、いつ上陸してくるか分からない状況だ。そのため、各鎮守府の戦力の強化を図る必要がある」

「具体的には？」

「全ての艦娘の練度向上。そして、新しい海域の攻略だ。あと、鎮守府の数も増やす」

「提督の数を増やして大丈夫なのか？」

「正直これ以上は不安しかない。だが、このままだといずれ日本は沈む。ならば少しでも生存確率を上げるために戦力を増やすしかあるまい」

「確かにな……」

「以上だ。何か質問はあるか？」

「はい」

「どうして東郷少佐は秘書艦を連れてきたのでしょうか」

そう、僕も気になっていたのだ。たしか東郷のやつは10年くらい前に艦娘のいない窓際の鎮守府に左遷されたはずなのだ。なのになぜここにいるのか。

「轟沈したはずの銚子鎮守府の朝潮が海岸に流れ着いていたので引き取りました。銚子鎮守府の提督は逃走中に死亡……じゃなくて名誉の戦死を遂げられたので文句はないでしょう」

「な、なるほど……」

「他に何かないか？」

特にないようなので定例会は終わった。

「では、これで終わりだ。解散」

提督達は次々と会議室を出ていく。僕も帰ろうとした時だった。

「おい待て」

振り向くと、そこには舞浜鎮守府提督の齋藤哮一少将がいた。

「お前が荻原の秘書艦の時雨か」

「はい。あなたは？」

「俺は舞浜鎮守府提督の齋藤だ。よろしく頼むよ」

「よろしく願います」

「……」

「あの、どうかしました？」

「いや、すまん。杉野という知り合いに仕草が似てたもんでな。気にしないでくれ」

「……え？なんでこの人わかんの？本人だよ？」

「それで、どういったご用件で？」

「いやさっきのが本題だ。すまん戻っていいよ」

「なら失礼します」

僕はその場を後にする。

どこからか睨むような視線を感じたが、無視して横須賀に帰った。

## 14話 時雨とアHowardリ

横須賀鎮守府に戻ったら、提督の仕事がやっぱり終わってなかった  
ので手伝っていたらすっかり夜になってしまった。

「時雨、お疲れ様」

「疲れた〜」

「ああ、そうだな。でもまあいつもの事だしもう慣れたけどな」

「そうだね」

「よし！飯食うぞー！」

「うん！」

2人で食堂に行き、夕食を食べる。

「時雨、明日の予定だが」

「なにかな？」

「いろいろあって大本営の第零艦隊と演習することになった」

「ふーん。そうなんだ……………ん？第零艦隊!？」

「そうだ」

第零艦隊は海軍の中でもトップシークレット扱いされている部隊  
で、その実力は謎に包まれている。ちなみにこの前の横須賀鎮守府防  
衛戦で加勢してきた連中で、零式艦娘と呼ばれる戦争初期に作られた  
艦娘で編成されている。

「何で第零艦隊の連中と演習するの?」

「向こうから言い出してきたんだよ。まあ、断れないんだけどね」

「お、おう……………大本営のクソ役人共が……………」

「お前マジで口悪いな。一応上司だから敬語使えよ」

「はーい」

そんな感じの話をしながらご飯を食べ終える。

その後部屋に戻ろうと廊下を歩いている時に見覚えのある顔を見  
つけた。

「……………お前は…瑞鶴か」

「っ!!あんたは!!」

「久しぶりだな。元気だったか?」

「……ふんっ」

「相変わらずみたいだなアホドリ」

「黙れクソ野郎!!」

「また会ったな」

「……どつちが上か教えてあげる」

「ハッ、できるといいな」

僕は去ろうとするが呼び止められる。

「ねえ、ちよつと話があるんだけど」

「は?なんの用だ?」

「私と勝負しろ」

「断る。面倒くさいし■■と一緒にいないと弱いような奴と戦っても意味ないからな」

「言ったわね!後悔しても知らないわよ!」

「それはこっちのセリフだ。はあ。やってやるから負けても泣くんじゃねえぞ」

「はあ?」

そんな会話をしながら僕とアホドリ瑞鶴は演習場へと向かった。  
「ルールは簡単だ。どちらかが戦闘不能になるか降参するまで続ける」

「分かったわ」

「じゃあ、始めようか」

「来なさい」

「行くぜ」

瑞鶴は矢を同時に3本射るといふ高等テクニクで大量の紫電改  
二、流星、彗星を発艦させる。

僕は回避行動をとりながら主砲と機関短銃で応戦する。

「くそッ!ちよこまか逃げるじゃないわよ!!」

「そりゃ逃げるに決まってるだろ」

「ふざけんな!!」

「ふざけてんのはテメエだろうが。いきなり喧嘩売ってきやがって」  
「うるさい!!私が勝っちゃったらどうしようかしら?ああ、そうね。」

裸にして晒し者にしてあげましょうか」

「お前……それ本気で言ってるのか？」

「もちろん本気だけど？」

「へえ。ならいいことを教えてやる」

「なに？」

「僕の知り合いにお前みたいなバカがいるんだよ。そいつな、網走鎮守府ってところに所属してた正規空母んだけどさ、提督の命令を無視して単騎で敵艦隊に突っ込んでいって大破して、翔鶴ってやつがそれを庇って沈んで、逆ギレしてその提督を殺そうとして逆に制圧されて捕まったけどなんやかんやあつて恩赦で他の鎮守府に転属になったんだよ」

「それ私じゃない！ぶっ殺してやる！」

「やっぱお前だったのかよ!？」

僕は呆れてため息をつく。

「さて、そろそろ終わりにするか」

「くたばれクソ野郎!!」

瑞鶴が放った艦載機が襲いかかってくるが、僕は避けずにそのまま突っ込む。

そして、全ての爆撃を受け、煙の中から無傷のまま現れる。

「嘘……」

「どうした？もう終わりか？」

僕はそう言いながら深海制御術式第3号を解放する。

「さあ、格の違いを見せてやろう。アホウドリ瑞鶴」

「うっさいわね！まだ終わってないし！」

「残念だったな。これで終いだ」

僕は瑞鶴に肉薄すると艀装に折りたたんで取り付けていたレンチメイスで殴打する。

「クソ雑魚が調子に乗るからこうなるんだぞ」

「ぐう……クソお……」

「あーあー。負けた時の言い訳を考えといた方がいいぞ。まあ、お前が勝つなんて方に一つもないと思うがな」

「う……うる……さい……」

「じゃあ、帰るからな。次会う時はもう少し強くなつてると良いな」  
僕はダウンしている瑞鶴を放っておいて部屋へと戻る。

side 瑞鶴

「ぐう……」

あの人でなしが生まれ変わった時雨とかいうバケモノ。

あいつは本当に許せない。

私の人生を滅茶苦茶にして、身体を弄び、私をアホドリと呼んだ……いや呼んでいる。絶対に許さない。

「絶対……殺す……!」

私は起き上がって拳を壁に叩きつける。何度も、何度も殴りつけて血まみれになる。

「クソ……クソ……」

悔しい。あのクソ野郎に負けるのが。何もかもが気に食わない。どうしてあんな奴が……。

『君は私のことをクソ野郎と呼ぶが、私は君のことをアホドリと呼んでもいいかな?』

「っ!!」

思い出すだけでも吐き気がする。アイツと秘書艦杉野時雨の顔と声。

私をゴミのように見下してくる目が脳裏に焼き付いて離れない。

「瑞鶴!」

「え? 翔鶴姉?」

「大丈夫? 何があつたの?」

「あ、うん。なんでもないよ。ちょっと考え事してただけ」

「でも、凄い怪我よ? もしかしてあの時雨にやられた?」

「……うん」

「あの野郎。今度あつたら殺してやるわ」

「翔鶴姉。落ち着いて」

「ごめんなさい瑞鶴。ついカツとなつてしまつて」

「ううん。いいの。悪いのは私だから」



「ねえ、瑞鶴」

「なに？」

「無理はしないでね。何があっても私が守るから」

「ありがとう。翔鶴姉」

## 15話 第零艦隊 V S 横須賀第1艦隊

次の日、僕は提督とともに演習相手の第零艦隊の連中を待っていた。

「なあ、時雨」

「なんですか？提督」

「その口調気持ち悪くないか？」

「は？なんですって？」

「だってなんか違和感あるじゃん。いつもみたいに話せよ」

「第零艦隊も大本営のクソ役人の一員だから口調にはうるさそうなので」

「いや敬語で話すお前違和感しかないから」

「なんだとくどういう意味だコラ」

「お前そういうキャラじゃないだろ」

「はいはいわかったよ。じゃあ普通に喋りますよつと」

そんな生産性ゼロなやり取りをしてたら元帥と第零艦隊を乗せたヘリがやってきた。

「我が横須賀鎮守府にようこそ。元帥殿」

「やあ、荻原君。今日はよろしく頼むよ」

「こちらこそ、わざわざ来ていただいて感謝します」

「いやいや、構わないよ。それより早速だが始めさせてもらおうよ」

「はい」

演習のルールは簡単。

どちらかの艦隊の全員が戦闘不能になるか降参すれば終了。

←ちなみに双方の艦隊の編成

大本営 第零艦隊

神風零式 L V. 175

叢雲改二 L V. 175

陽炎零式 L V. 175

磯風零式 L V. 175

龍驤改二 L v. 169  
大和改二航 L v. 138  
横須賀鎮守府 第1艦隊  
時雨改四 L v. 175  
初月改 L v. 175  
加賀改二護 L v. 169  
夕立改二 L v. 167  
金剛改二丙 L v. 165  
イントレピッド改 L v. 149

「では、演習開始！」

山本元帥の合図で双方が動き出す。

空母から艦載機が発艦し、戦艦からは砲撃が始まる。

時雨はまず指示を出す。

「加賀さんとイントレピッドは戦闘機で敵艦載機を撃墜しつつ、攻撃隊で敵の空母を叩いてください」

「わかりました」

「金剛さんは…まあ撃つてて、駆逐艦は遊撃して」  
指示がだんだんめんどくさくなつた。

とりあえず最速で空母を落とすために突撃する。

相手の神風と叢雲も同じことを考えたのか途轍もないスピードで僕に向かってきて、すれ違う。

「あら、あなたが相手なのね」

「へえ。君が僕の相手をしてくれるんだ」

とりあえずすれ違いざまに叢雲を殴ってノックアウトさせる。

「ヘグッ！」

「まあこんなもんだね」

時雨は龍驤の背後に回り込んで蹴り飛ばした。

「ほげっ!？」

「おーい。しっかりしろよ」

ちなみに向こうを見ると神風の投げナイフならぬ投げ短刀をイン

トレピッドが食らって戦闘不能になっていた。

別の方向では夕立と初月が磯風と戦っている。

「食らうっばい！」

「食らえ！」

「当たるかそんな攻撃！」

磯風は夕立の投げ魚雷と初月の斬撃を避けて反撃する。

「ぐっ！」

「くそ！この野郎！」

「ふむ。なかなかいい腕をしているな。だが私に勝てるかな？」

「やってやるばい！」

「負けるか！」

磯風の攻撃を二人はなんとか避けているがダメージを食らい始めている。

「いいぞ。もっと私を楽しませてくれ」

「ふざけるな！」

「死ねっ!!」

「甘いな」

磯風は二人に急接近して蹴飛ばした。

「ガハッ！」

「うう……」

「これで終わりだ」

「させないよ」

磯風の後ろに時雨が現れて斬りかかる。

しかし磯風は時雨の攻撃を避け、逆に時雨を攻撃する。

「うわあ!？」

「時雨ちゃん！」

磯風の攻撃はカスダメだったので特に問題はなく、すぐに体勢を立て直して磯風をレンチメイスで殴打した。

「グフッ！」

「よし、次は……」

ふと加賀と金剛の方を見たら神風にボコられて戦闘不能になって

いた。

「oh……ジーザス」

「どうしました？そんなに呆然としていて」

「いや、別になんでもないよ」

「そうですか。では続けましょうか」

「そうだね。早く終わらせよう」

僕が大和と陽炎を戦闘不能にしたので周りを見てみたら、夕立と初月も神風に戦闘不能にされていた。

「おいおいマジかよ」

「もう降参しますか？」

「いや、まだ終わっていないよ」

「ならさっさとかかってきなさい」

「言われなくとも」

時雨と神風はともに近づいていき、少しすれ違ったところで――

「死ねやオラァ！」

お互いの武器を振りかざした。

神風の短刀と時雨の太刀がぶつかり合う。

## 16話 目には目をバケモノにはバケモノを

時雨と神風はともに近づいていき、少しすれ違ったところで――

「死ねやオラア！」

お互いの武器を振りかざした。

神風の短刀と時雨の太刀がぶつかり合う。

「はっ！」

「せいっ！」

神風は時雨の腹部を蹴り飛ばし、時雨は吹き飛ばされた。

が、時雨はすぐに態勢を立て直し、神風に向かって走り出す。

そして時雨は神風の首を目掛けて日本刀を振るった。

「ちっ！」

神風はそれを間一髪で避ける。時雨はそのまま回し蹴りをして、今度は首を狙った。

「ふん！」

神風はその足を掴み、時雨を投げ飛ばす。

時雨は空中で受け身を取って着地し、再び神風に向かって走る。

今度は神風が時雨の首を狙って短刀を突き刺そうとするが、時雨はしやがみこんでそれを避ける。

「はあっ！」

時雨は立ち上がりながら太刀で神風の足を薙ぎ払う。

神風はバランスを崩して倒れそうになるが、そのままバク転して時雨から離れた。

「危なかったですね」

「それはこっちのセリフだよ」

時雨は神風に南部拳銃を撃ちまくるが、神風は飛んでくる弾丸を全て回避する。

「無駄ですよ」

「くそっ！」

「ふむ。あなたの実力はよくわかりました。ですが私の敵ではありませんね」

神風は時雨に急接近し、短刀で右腕を切りつける。

「ぐあああー!」※秒で再生します。

「これで終わりです」

時雨は右手に持っていた太刀を落とした。

神風はそれを確認すると、時雨の胴体めがけて短刀をぶつ刺した。

「チエックメイト」

神風が勝利宣言をした瞬間、神風の体に衝撃が走った。

「え?」

神風は何が起きたのか理解できずにいたが、時雨が神風の腹を蹴り飛ばしたのだと気付くのに時間はかからなかった。

「残念だったね」

「っ!?……バケモノが!」

「その言葉は君にも当てはまると思うけどね」

神風はすぐに態勢を立て直すと、懐から8本の短刀を取り出し、それを時雨に向けて投げた。

時雨は南部拳銃を片手に、投げ短刀を避けようともせず突撃する。

「死ね!!」

「無駄だよ」

投げられた短刀は全て時雨に命中したが、傷は秒で治っていく。

「なんなんだお前! 本当に艦娘なの!」

「僕は普通の艦娘じゃないんでね」

「バケモノめ!!」

「そういう君もバケモノじゃないか」

時雨と神風は互いに凄いスピードですれ違い、時雨は拳銃を撃ち、神風は短刀で時雨の両腕を切断した。

しかし、やっぱり秒で元通り。

「クソッ!」

「僕の勝ちだね」

「ふざけるな!」

神風は後方にステップして距離を取ると、両手に握った8本の魚雷を時雨に投げつけた。

時雨は主砲と拳銃で魚雷を迎撃する。魚雷と砲弾がぶつかり合い爆発した。

爆風によって神風の姿が見えなくなる。

「終わりかな」

時雨はそう呟いたが、次の瞬間、時雨の背後に神風が現れて、彼女の背中に短刀を突き刺し、心臓を貫いた。

「あ……」

「勝った……っ!？」

神風が勝利を確信していると、いつの間にか目の前に移動していた時雨に殴られて吹き飛ばされた。

「ガハッ!」

「油断大敵だよ」

「……………チッ!」

神風は時雨を睨みつけ、再び立ち上がる。

「まだやる気かい?」

「当たり前でしょう? 私はあなたが死ぬか降参するまで戦いをやめませんよ」

「じゃあさっさと終わらせようか」

時雨はそう言って神風に向かって走り出した。

「死ねええ!!」

神風は再び大量の短刀を投げつける。時雨には当たってはいるが効き目がない。

時雨は避けずに神風に接近していく。

「死になさいよお!!」

神風が短刀を投げると同時に、時雨は神風の腹部を殴って地面に叩き落とした。

「かはっ!」

神風は口から血を流しながらも、すぐに起き上がって時雨から離れる。

時雨は神風の方に振り返り、ゆっくりと歩き出す。

「……………、このバケモノめ!」



「それは君も一緒だろうか？」

時雨が神風を斬りつけようとしたその時――

「演習終了！」

マイクで拡声された元帥の声が響いた。

「元帥殿、勝敗は？」

荻原が元帥に聞く。

「勝敗は……横須賀鎮守府第1艦隊、戦術的勝利！」

「っ！負けたか」

神風は悪態をつく。

「君の負けだよ」

「わかっているわ。でも……あんたみたいな艦娘モドキは大本営の第13課こと私たち第零艦隊が必ず殺すから」

「へえ、頑張れー」

時雨は棒読みでそう言うと、その場を離れた。

その後ろ姿を見ながら、神風はボソツと呟く。

「絶対に殺してやる……艦娘の皮を被ったバケモノめ」

side???

ある部屋で男はモニターを見ていた。そこには横須賀の時雨と大本営の神風の戦いが映っていた。

「おお、これは最高だな。こいつは私の人生で最高の敵になるかもしれないな」

男の表情はとても楽しそうなものだった。

「На<sup>ミ</sup>П<sup>レ</sup>И<sup>ニ</sup>С<sup>ア</sup>Т<sup>ム</sup>Ыの連中はА<sup>英</sup>Н<sup>国</sup>Г<sup>国</sup>Л<sup>国</sup>И<sup>国</sup>Яでくたばったが、あのバケモ

ノはもうあの力を使うことはできない。ならば我々は……

Я<sup>日</sup>П<sup>本</sup>О<sup>本</sup>Н<sup>本</sup>И<sup>本</sup>Яで！やろうではないか！一心不乱の大戦争を！あの興奮をもう一度！」

男は狂ったように笑いながらそう言った。

「さあ、始めようか。楽しい楽しいВ<sup>戦</sup>О<sup>争</sup>Й<sup>争</sup>Н<sup>争</sup>а(ヴァイナー)の時間だ」

男の背後には鎌と槌と赤い星の描かれた赤旗が掲げられていた。

## 17話 ある意味バカップル

一週間後、僕と提督は熱海に来ていた。この前の温泉に行こうという約束を果たすためである。

ちなみに熱海鎮守府での仕事のついでに来た。

「お待ちしておりました。どうぞこちらです」

旅館の女将さんに案内され、部屋に通される。結構広いな。

「それではごゆっくり」

女将は笑顔で言う。

「ああ、ありがとう」

僕は軽く会釈した。

「いい人ですね」

「そうだね」

僕たちは荷物を置いて、早速温泉に入ることにした。

「ふう、生き返るね」

「気持ちいいな」

僕は露天風呂に浸かり、肩まで湯船に沈む。

「あく極楽だなあ」

「なにジジ臭いこと言ってるんだよ」

「いいだろ別に」

提督は呆れたような顔をして、体を洗うために洗い場に行った。

「ふう……」

僕も体と頭を洗い終わると、再び湯船に身を沈め、手足を伸ばす。

そして目を瞑った。

しばらくして外を見ると館山鎮守府の東郷と朝潮が歩いていた。

あいつら何しに来たんだ。まあ、多分暇なんだろうな。窓際だし。

その後、風呂を出て牛乳飲んだり、卓球したりして遊んだ。

部屋に戻ると布団が敷かれていて、その上に寝転ぶ。

「あく、疲れた」

「少し休むか？」

「いや、大丈夫」

「そうか」

「ねえ、提督？」

「なんだ？」

「僕の事好きになった？」

「なるわけないだろ」

「即答!？」

そんなにはつきり言わなくても……。ちよつと傷ついた。

「だつてお前中身おっさんじゃん……」

はははっ……確かにそうだけど、もう少しオブラートに包んでほしい。

「じゃあさ、見た目は？」

「普通」

「ぐはっ!」

「冗談だよ。俺の好みは年上で巨乳で綺麗なお姉さんだけど、嫌いじゃないよ」

「そつか……お前は何もわかってない!ただ大きけりやいってもんじゃないぞーこのクソガキ!」

「は?意味わかんねえよ!」

「うるせえ!」

「てめっ!やんのかコラア!!」

「上等だ!かかってこいやああああ!!!」

数時間後……

「はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……疲れた」  
「だな」

僕たちは息を切らせながら布団の上に座る。

あの後、喧嘩になり、いろいろあつて性なる……じゃなくてお互いの好みをかけた聖なる戦い(○)をした結果、引き分けに終わった。

(訳 あの後滅茶苦茶セックスした)

「はあ……はあ……」

「はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……」

お互いに荒くなった呼吸を整える。

「提督の……馬鹿野郎」

「それはごっちのセリフだよ……はあ……はあ……はあ……」

僕たちはそのまましばらく動かなかった。

とりあえず、気分転換に外に出る。

夜風が心地よい。

空を見上げると満天の星が広がっていた。空気も澄んでいるのでとてもよく見える。

「綺麗だな」

「うん、すごく綺麗だ」

僕たちは並んで歩く。

「提督」

「ん？」

「この戦争が終わったらどうするの？」

「さあな。まだ決めていない」

「そう」

それから特に会話はなく、黙々と歩いた。

◇

提督に誘導されてついた場所。

「着いたぜ」

そこは……ただの居酒屋だった。提督お前まだ飲むつもりか。

「ほら行くぞ」

提督が扉を開ける。カランコロンとドアベルが鳴った。

中に入ると、何人かのお客さんがいた。中には艦娘も混じっている。

店員に案内され席に着く。

「いらっしやいませ。ご注文は？」

「生2つと枝豆お願いします」

「かしこまりました」

数分待つとお酒が来たので乾杯をする。

「お疲れ様」

僕たちはグラスを傾け、一気に飲み干す。

そしてまたすぐに頼む。

それを繰り返しているうちに結構酔ってきた。

ふと周りを見ると何やら騒いでいる艦娘がいた。

「だ〜か〜ら〜！皆寄ってたかって！」

「ちよつ!?大鳳さん！飲み過ぎですよ！」

(多分) 熱海鎮守府所属の大鳳と龍鳳だ。

「うるさい！空母なのに胸部装甲がないからってバカにして！」

「してませんってば！」

「嘘つけえ!!私だって好きでこうなったんじゃないのにいー！」

「装甲空母なのに、なぜ胸だけ装甲が薄いんですかね……」

「うわあああん!!」

泣き出してしまった。相当飲んでるみたいだ。というか、この二人ってこんなキャラなのか。なんか意外だ。

「装甲空母なのに、大破して『役立たず』って仕方ないじゃない！私は運が全くないのよ！」

確かに、大鳳は艦娘の中でも突出して運が悪いということである。だ。どれくらい有名かというと一般人でも知ってるレベルである。

「もうやだああ！なんなのよおお!!」

ついにテーブルに突っ伏して泣いてしまった。

周りのお客さんたちもドン引きしている。そりやそうだよ。いきなり目の前で泣かれたら誰だって引くと思う。

「提督」

「なんだ？」

僕は提督に耳打ちをした。

「あのうるさい大鳳黙らせてきたら？」

「嫌だよ。面倒くせえ」

「じゃあ僕が代わりに行ってくるね」

そう言つて立ち上がる。

大鳳に近づくと肩に手を置いた。

「大丈夫。君は役に立たないどころか、とても優秀な子だよ」  
優しく声をかける。

「本当ですか……?」

「もちろん。君はとても優秀で頼りになる存在だ」

「ありがとうございます……」

よし、上手くいった。

「ところであなた誰ですか?見たことありませんけど」

「え!?今日の昼にその提督と熱海鎮守府に来たけど」

「知らないわ」

あれえ?おかしいなあ……。確か来たんだけど……。まあいいか。

「とにかく、もっと飲んだらどうだい?」

「そうですね……いただきます」

「じゃあ次はビールを頼んでみようか」

「はい……すいませくん」

こうして、大鳳は無事に酔いつぶれた。

ちなみに、その光景を見ていた他の艦娘たちは口を開けてポカーンとしていた。

「ふう……任務完了」

僕はその場を離れ、自分の席に戻った。

「お帰り」

「ただいま」

「うまくやったな」

「まあね。それよりそろそろ帰ろうか」

「おう」

会計をして店を出る。

「今日は楽しかったぜ」

「僕も」

「また来ような」

「うん」

「今度はみんな連れてきてもいいかもな」

「いいかもしれない」

「じゃあ決まりな。さあ帰るぞ時雨」

「うん」

次の日の朝、熱海鎮守府にて二日酔いに苦しむ装甲空母がいたとか  
いなかったとか。

## 18話 常滑鎮守府での暴動

提督と一緒に横須賀に戻ったら、なんか磯波が出迎えてくれた。

「おかえりなさい。時雨さん提督さん」

「ただいま戻りました」

「今戻った。何か変わったことはあったかい？」

「いえ、特に何も」

「そうか」

「はい。それと、これをどうぞ」

そう言っただけで渡してきたのは封筒だった。

「これは？」

「命令書らしいです。昨日の夜、ポストに入っていました」

受け取って中身を見る。

そこにはこう書かれていた。

【常滑鎮守府にて艦娘の暴動が発生。鎮圧のために増援を求む 常滑  
鎮守府提督 水城浩史少佐】

「……水城少佐は一体何をやらかしたんだ……？」

「さあ？」

「あと、艦娘の暴動なんて表沙汰にできないので出来るだけ少数で行ってこれて言っていました。あと水城少佐は留守だったらいいです」

「注文が多いなおい！」

そんなわけで、僕一人で常滑に行くことになった。

「なんで僕だけなの？」

「お前一人で横須賀の戦力の半分以上だから」

「マジか……」

「細かいこと言っていないで。ほれ、行ってこい」

「了解……」

という訳で、僕は一人寂しく旅立った。

艦装を展開して海を航行する。何時間か経って常滑に到着した。



常滑鎮守府の建物は一部が燃えて崩壊していたり、瓦礫などが散乱していて酷い有様だ。

鎮守府の敷地の外から野次馬達が「なんやなんや」と騒いでいる。そして、僕の目の前に艦娘達が現れた。全員武装して臨戦態勢に入っている。

(なるほど。提督がいない隙を狙って反乱起こしたってところかな) そう思った瞬間、一部の艦娘達の目が赤く輝いた気がしたが、すぐに消えた。気のせいだろう。多分。

とりあえず話しかけることにした。このままだと戦闘になってしまいそうだし。

「こんにちは。僕は横須賀鎮守府から来た白露型駆逐艦2番艦の時雨だよ。君達はどうしてこんな事をしているのか理由を聞きたいな」

なるべく穏便に済ませたいんだけどね……。そう思いながら返答を待つ。すると一人の娘が進み出た。確か……。赤城という艦娘だ。

「あら時雨さん。お会いするのは初めてですね」  
彼女は穏やかな口調で言う。しかし、目は笑ってなくて殺気に満ちていた。

「えっと、君の名前は赤城だよな？僕に敵意をぶつける前に自己紹介して欲しいな」

一応笑顔で答えると赤城の瞳が再び赤い光を放ち始める。やっぱり気のせいじゃなかった！

「ふふ……。そうですね。初めまして時雨さん。私は航空母艦の正規空母、赤城にです。これから死ぬ貴女には名乗っても仕方ないですが」  
彼女の声は低く冷たかった。他の娘たちも同じで全員が僕を睨んでいる。

(これは困ったね……。どうしたものか……)

そう考えていると、一人の軽巡が叫んだ。

「赤城ー!!多摩にもあいつ殺させるにゃ!!」

その一言を合図にして一斉に艦娘達が襲い掛かってきた。

(あくこれは駄目っぽいね……。まあいいか。ちよとど暴れたかったからね……。ちよとどくらい本気でもいいか)

襲いかかってくる艦娘たちに向かって言った。

「ごめんね……手加減しないよ」

「え?」

最初に攻撃を仕掛けてきた大井に砲撃を叩き込む。

「ぎいあああああ!!!」

叫び声を上げて倒れ込んだ。それを見ていた他の娘たちの動きが止まったようだ。

次に後ろから近づいてきた重巡の首にテイルワイヤの刀身をぶつ刺してして即死させた。

さらに後ろにいる空母娘の頭を掴んで持ちあげ地面に叩きつけるようにして殺した。

その後、近くに居た駆逐艦の一人を蹴飛ばすとその艦娘が動かなくなった。おそらく気絶したんだろうね。

僕は残った艦娘たちの方を見たが、彼女達は恐怖に満ちた表情を浮かべて後退っているだけだった。

とりあえず、僕を殺す宣言をした多摩の口に拳銃を突っ込んで撃ち殺した。

残りは三人。さて、誰から片付けようか。そんなことを考えているときだった。

突然横から誰かの攻撃が飛んでくるのを感じ取った。反射的に回避行動をとるも左腕を切り落とされてしまった。痛みに顔を歪めつつ相手を確認しようと顔を向ける。

そこに太刀を持った赤城の姿があった。多分、赤城改二戊なんだろう。

彼女は血塗れの笑みを浮かべると、もう一度斬りかかって来た。僕は右手に持っている太刀で弾いてバックステップをする。

それからすぐに左手に持っていた短銃の銃剣を向けたけど既に遅かったみたいだ。

僕は右腕の手首を切断された。

※両腕ともに秒で再生しました。

でも激痛があるので苦悶の顔になる時雨。

「ば、バケモノが！」と怯えの声を上げる赤城に「失礼だな……」と思いながら主砲と拳銃を撃つ時雨。しかし赤城は紙一重でかわし続け、反撃を繰り返す。だが時雨はすぐに再生する。その繰り返し。

しかし、徐々に赤城の身体中に裂傷や打撲痕が出来上がっていった。

このままでは埒が明かないと考えた赤城は時雨を野次馬達の方に吹っ飛ばした。

飛ばされた先を見て「げえ！」と叫ぶ時雨。野次馬の数がとんでもないことになっていたのだ。

ちなみに駆逐艦の艦装でも普通の人間は余裕で押し潰されるのでとりあえずヤバイ。

時雨は地面にテールワイヤの刀身をぶっ刺して態勢を整えてうまいこと着地した。

赤城は一般人もお構いなしに艦載機を飛ばして攻撃する。

赤城も一般人共が邪魔なのか戦闘機の機銃で掃射して始末していた。

僕は主砲と拳銃を撃つが、外れた弾が一般人に当たって死傷者が出たの言うまでもない。

という訳で、僕達二人は一般市民を巻き添えに殺し合いを始めましたとさ……。

……まあ、別に気にしないんだけどね。ただ今回は場所が良くなかっただけだし。

それにもうすぐ終わりだしさ。多分ね。そう思いながら、僕達は戦闘を続行することにした。

2時間後……。

そこには無惨な光景が広がっていた。僕達二人の周囲には大量の死体が山積みされている状態だ。

辺り一帯は火の海と化している。この惨状の原因が何かというと赤城が放った艦載機のせいだ。僕は民間人には被害を与えていない（多分）。

僕の方は無傷だが、赤城は満身創痍の状態。彼女は膝立ちの状態

だった。僕は彼女を見下ろすように立っている。

すると彼女が笑い始めた。まるでこの状況を面白がっているかのよう。いや実際に楽しんだんだろうね。何しろ笑ってるもん。

「くつくつく！ふふふふ……ハアーツハツハツハ!!アーツヒヤヒヤ!!」

「……気持ち悪いなあ」と僕がボソツと言ったのを聞いて、彼女は僕を見る。そして言った。

「あらあらあら！時雨さんったら、随分派手にやってくれたじゃないですか！おかげで私は死にそうだわ!!」

赤城が狂った様に笑うと、赤城は懐に手を入れて何かを取り出す。

それは注射器だった。どう考えても違法な薬品にしか見えない。それを自分の首筋に刺すと中身を打ち込んだ。

打ち込むと同時に、赤城が苦しそうに暴れだす。

「ア……グウ……ガガガガツ!!アガ……ギイ!!」

赤城の身体や髪が白く染まり、服装もセーラー服みたいな物に変わった。

さらに肌にも赤黒い血管のようなものが現れ始め、赤いオーラが出始める。

彼女の変貌ぶりを見た僕は驚いた様子もなく言った。「うわーキモい……」と。

それを聞いた赤城？は、こちらに向かって途轍もないスピードで迫ってきた。僕は避けようとしたが無理だった。赤城が刀を振り下ろす。なんとか防ぐことに成功したがあまりのパワーに僕の腕の骨が砕けてしまう。※やつぱり秒で（ry

というか双方の力が強すぎて赤城の刀が折れて僕の刀は吹っ飛んでいってしまった。マジで僕の刀何でできてんだ……？と思いつつ赤城を見ると彼女はニヤリと笑みを浮かべていた。

「残念だけど刀が無くなっても私はまだ負けていませんよ」と言っただけで彼女は拳を振るってくる。

それをかわすために後ろに跳ぶと、彼女は空中で回転しながら蹴撃を放ってきた。僕は両腕でガードしたが、衝撃を殺しきれずに後方に

吹き飛ぶ。

そのまま鎮守府の壁を貫通。背中から血が噴き出す。

(こいつ、なんて馬鹿力だよ!!完全に艦娘辞めてるじゃないか!?)

そう思った直後、今度は腹部に強い痛みを感じた。赤城に蹴り飛ばされたようだ。僕は口から血を吐いた。

やられてばかりではつまらないので深海制御術式第3号を解放。

僕はテイルワイヤの刀身を抜いて刀代わりに使うことにした。

それから赤城と戦闘を開始する。最初は互角だったが、徐々に赤城が押され始める。

やがて赤城はボロ雑巾のように叩き伏せられた。

僕は倒れている赤城に近づくと、彼女を見下ろして言う。

「まだ続ける?」と聞くと、彼女はバツつと立ち上がり、グーの手で殴りかかってくる。

僕はパーの手で赤城の拳の中指と薬指の間に手を差し込んで腕を

真っ二つに切断した。

「ぎゃあああつ!!!」

悲鳴を上げる赤城を無視してもう片方の腕をちぎった。

そしてパーの手で心臓をぶち抜いて絶命させた。

その後、死体を放置してその場を後にした。

……ある野次馬がその死の直前まで配信していた映像が世間を騒がせたことは言うまでもない……。

## 19話 ヒトか兵器かバケモノか

横須賀に帰ってきたらもう夕方になっていた。

晩飯を食った後、提督に呼ばれたので執務室に足を運ぶ。

「なんだよ急に呼び出して……」

「いやなんかテレビに常滑鎮守府の映像流れたんだよ」

「マジか」

「それでお前のこと調べようとしてる奴がいるんだ」

「誰？」

「知らん」

「なんだそりゃ」

「とにかく気をつけろよ」

「わかった」

「あと、『極秘でやってって言ったのに！』って大本営がぶんすかして  
た」

「なんなんだあの役所は……？」

まあそんな感じで提督との会話を終えた。

次の日、テレビを見ると昨日のニュースをやっていた。

『常滑鎮守府での暴動事件について』というテロップが出ている。

そこには僕と赤城が映っていた。動画サイトにはライブ中継された物もあるらしい。

『現在、常滑鎮守府の暴動は既に鎮圧されておりますが……えー、常滑  
鎮守府とその周辺が焼け野原になってそこら中に死体が散乱してい  
ます』「うわあ……」

これ放送事故だろ。

するとスタジオのコメンテーターが言った。

『やはり艦娘は危険ですね。兵器にとって意志なんて邪魔でしかあり  
ません。人間に危害を加える可能性があります。即刻処分すべきで  
しょう。こんな危険な存在は人類にとって害悪でしかありません。  
早く解体しましょう。そうすればこの様な事件も起きないはずす

よ。皆さんもそう思いませんか?』

『いや海軍の大本営が艦娘を人間として扱えって言っていましたよね?それに、艦娘だって感情を持っています。意思があるんです。それを無視した発言はどうかと思いますね』

『でも、今回の事件は海軍本部の命令を無視して勝手にやったことでしよう?これは立派な反逆行為です。艦娘は人間の敵だ!今すぐ殲滅すべきだ!!』

『その考えこそ間違っていると私は思うんですよねえ。そもそも、今の時代は軍より民間の方に権力がありますから。軍の命令に従わなくても良いんじゃないですか?例えば、民間が軍に命令できるとか』

『はあ!?何を言っているんですかあなたは!!そんなこと出来るわけがないじゃないですか!!』

『いや出来ますよ。現に今、我々がこうして議論しているのもそうじゃ無いですか。軍が暴走しないように監視する為に我々はこのに居るのです。軍は民間人の意見を聞こうともしない。それでは駄目なんですよ。だからこそ、艦娘の反乱は止めなければならぬ!!その為にも、一刻も早い解決を望みたいものです。はい、これで私の話は終わりです』

かなり論点がずれたところで番組は終了した。

「おいおい、また面倒なことになってきたぞ……」

「そうだな……」

「どうすんだよこれ……」

「どうしようもない。俺達は軍人だからな」

その後1、2週間ほどたったある日、僕は横須賀の食堂で昼食をとっていた。ちなみに今日のメニューはカツカレーである。

なんか提督が話しかけてきた。

「おい時雨、出撃だ。仙台鎮守府で反乱が起きたらしい」

「またかよ!?!」

「ああ。しかも今回は30体とかそれくらい参加してるらしい」  
「マジで?。」

「マジで」

「うへえ……」

マジで？と言いつつ僕は心の中でガッツポーズをしていた。

「まあ頑張れよ。私も串本鎮守府に仕事があるから」

「はいよ」

「あ、時雨さん」

明石が話しかけてきた。

「お疲れ様です」

「なんか用？」

「はい。『ジンカクイレカエール』が完成したのでお礼に新しい装備を作ってみました」

そういつて明石はデザートイーグルみたいな見た目の銃を渡してきた。

「これは？」

『『メツエライ』と言って、深海棲艦の20インチ砲の倍以上の威力のある12.7ミリ弾を撃って、妖精さんの技術によって装弾数100万発になってます』

「おおっ！」

僕は喜んで受け取り、仙台に向けて出発した。



## 20話 最近出番無かった奴らの奮闘

side 初月

時雨が仙台の方に出撃して、提督が別の鎮守府に出張した後、この横須賀鎮守府に異変が起きていた。

なぜか通信障害が起こり、外部との連絡が取れなくなったのだ。

「どういうことだ……？故障か……？」

僕は不安になりながらも、食堂に行ってみた。

そこには、翔鶴、瑞鶴、葛城、扶桑、山城の5人がいた。

僕は彼女達に話を聞いてみることにする。

「君達、通信がつかないんだけど何か知らないかい？」

するとリーダー格の翔鶴がボソツと言った。

「……ああ、そういえば初月さんは邪魔になりますね……消さないと……」

「は……？」

翔鶴達は艤装を展開して襲い掛かってきた。

僕も艤装を展開して応戦する。

だが、彼女らの攻撃は凄まじく、僕の体は傷だらけになっていった。僕が元駆逐水鬼じゃなかったら既に死んでいただろう。

「クソ……こうなったら……」

僕は駆逐水鬼から艦娘に改造された時に付けられたリミッターを強引に解除する。そして、一気に距離を詰め、翔鶴の首を刎ねた。

「はあ……はあ……」

「……ふふふ、なかなかやりますね。ですがその程度では私には勝てませんよ？」

そこには翔鶴改め空母水鬼が立っていた。

「なんなんだお前は!?何が目的だ!!」

「さっき言ったでしょう?邪魔になる者を消すと……」

そう言つて空母水鬼は艦載機を飛ばしてくる。僕も迎撃するが、数が多すぎて捌ききれない。

「ぐあつ!？」

「あら、まだ生きていましたか。しぶといですね。まあいいですよ。すぐに死にますし。それにしてもこの姿になってから体が軽いです。今までの恨みを全て晴らせるような気がします」

「何を言ってるんだ？」

「分からないならいいです。どうせ死ぬんですから。じゃあ死んでください」

そう言うと、翔鶴は大量の爆弾を落としてきた。

僕は咄嗟に回避したが、その隙に接近を許してしまう。

「しまった!？」

「じゃあ、バイバーイ」

だが次の瞬間、夕立がどこからともなく飛び出してきた翔鶴を蹴り飛ばして僕を物陰に連れ込んだ。

「大丈夫っぽい？」

「ああ助かったよ」

「良かった。それより、早く逃げるっぽい」

「え？でも他の皆を……」

「そんなことしてる場合じゃないっぽい。ここは逃げないとまずいっぽい」

「分かった。じゃあ行こう」

僕達は食堂を出て行った。

「逃がすと思っっていますか？」

翔鶴の声が聞こえたが、僕は振り返らずに走り続けた。

「はあ……はあ……」

「ここまで来れば安心かな……」

「そうだな……。しかし、いったいなんでこんなことに……」

そんなことを言った瞬間、鎮守府の建物が爆発炎上した。どうやら翔鶴達が砲撃を開始したようだ。

「くそっ!？」

「急ごう!？」

僕達は急いで建物から出た。

建物の外に出ると、そこにはどっかで見たことのある奴がいた。

「お前は……レ級改!？」

「久しぶりだね」

※レ級改は遂に本格的な言語機能が実装されました。

「喋れるっぽい!？」

「な、なぜここにいる?」

「それはもちろん復讐のためさ。あんたらのせいで私は死んだ。だから今度は私が殺す番さ」

そう言いながらレ級改はこちらに主砲を向けた。

仕方ないので、僕と夕立は戦闘態勢に入る。

「夕立、援護頼むぞ」

「了解っぽい!」

レ級の砲撃をかわしつつ反撃をする。だが、装甲が硬くあまりダメージを与えられていないようだった。

「チツ……やっぱり火力不足か……」

「諦めちゃダメっぽい!」

「分かってる。だけどこのままだと……」

そうこうしているうちに、僕は追い詰められていった。

その時、鎮守府の屋上から磯波が降ってきた。

磯波は落下中に魚雷を投げつけ、それがレ級改に命中して大爆発を起こした。爆風で吹き飛ばされた僕達は、なんとか着地した。

「無事ですか?」

「ああ、助かったよ。ところでお前そんなキャラだっけ?」

「ありがとうっぽい。ところであなた、いつモブから出世したっぽい?」

「いや、この前時雨さんが暇だからって稽古をつけてくれたんですよ。ちなみに練度5から練度80くらいまで上がりました」

「一体どんな訓練をしたんだ……」

「それは秘密です」

そう言っている間にも敵艦隊は次々と現れ、僕達は囲まれてしまった。

「えーつと……逃げろぞ！」

「つばい！」

「分かりました」

3人でその場から逃走する。

## 21話 仙台鎮守府での暴動

side時雨

仙台鎮守府。そこでは……めつちや暴動が起きていた。

僕は仙台鎮守府に上陸して、まずはここの提督である橋本智樹中佐を探して、秘書艦の川内も一緒に押し入れに隠れさせた。

仙台だけに川内っていうダジャレではない。

鎮守府の本館を出ると、そこには艦娘達が集まっていた。

「部外者は出ていけ！」

彼女達は僕に向けて砲弾の嵐を撃ってくる。僕はそれを避けられ  
たが、あえて避けなかった。

ミンチのようになって倒れたが、数秒で再生して立ち上がった。

「な、なによこのバケモノ!？」

「お、おい！誰かあいつを止める!!」

「無理だよ!!あんな化け物相手にできるわけないじゃん!!」

そうやって逃げ出す者もいたが、大半は残ったままだった。

そして、一部の者が武器を持って襲いかかってきた。

「……格の違いを見せてあげよう」

僕は南部拳銃とメツエライでガンⅡカタを決めていく。

すると次第に攻撃してくる者は少なくなっていく。

「クソツ!?なんなんだこいつは!？」

「お前ら、いったん引いて体制を立て直すぞ！」

そうやってほとんどの者が逃げ去っていった。だが1人だけその  
場に残っていた。

「お前は確か、島風か……痴女みたいな格好しやがって」

「うっさい。私だって好きでこんな服着てるんじゃないし」

「そうなのか?じゃあ今すぐ着替えて来いよ」

「…死ね」

そう言うと島風は目を赤く光らせ急接近してきた。

速いけど、対処できないほどじゃない。

僕がカウンターを決めると、彼女はそのまま吹き飛んでいった。だ

がすぐに起き上がってきた。

「へえ……まだ動けるのか」

「当然……私は最速だから……」

「ふうん……じゃ、お疲れ」

僕は島風の腹部にメツエライを放ち、島風は臓物を撒き散らしながら倒れていった。

「さて、逃げた連中を始末しようか」

僕は逃げ出した者達を追いかけることにした。

仙台鎮守府は広いので、逃げている奴らを片っ端から潰していくことにした。

「なによこれ!？」

「どうしてこんなことに……」

「死にたくない!」

「助けて!」

悲鳴をあげながら逃げ惑う彼女達に、容赦なく弾丸を撃ち込んでいく。

「ぎゃああああつ!？」

「痛い!やめて!」

「嫌だああつ!？」

「やれやれ……。常滑鎮守府の件知らなかったのかな?」

そう言いながら次々と撃ち殺していった。

途中、他の艦娘と鉢合わせになり戦闘になったが、その度に瞬殺していった。

「なによこいつ……」

「つ、強い!？」

「怯むな!相手はたった1人だぞ!」

だが、彼女らの攻撃は僕には通用しなかった。僕は銃口を向けるだけだよかった。

そして数分後、生き残ったのは数名だけだった。

生き残り達は本館のエレベーターに乗って逃げようとしていた。そんなの、時間稼ぎにしかないのに、健気だね。

「くそおおおっ!!」

「止まれ!!」

「このバケモノめ!!」

彼女達は僕に向かって砲撃をするが、僕の身体は傷一つつかなかつた。

「無駄だよ。君達の攻撃は僕に届かない」

「ふざけるな!？」

ふざけるなど言った軽巡の胴体をメツエライで吹き飛ばした。

「ぐえっ……?」

上半身と下半身が真つ二つになった彼女は、意味不明な言葉を呟いた後に死んだ。

「ひっ……」

「こ、殺される……」

残り5人はガタガタ震えてエレベーターの閉めるボタンを連打していた。

「逃がすわけないじゃん」

僕は閉じかけているエレベーターの扉に拳銃を突っ込んで、

「OPEN ☆S A ☆S A ☆M E ☆」

と言いながら扉をこじ開けて、中にいる彼女達に向けて引き金を引いた。

「艦娘共、反乱任務ご苦労。さようなら」

「ぎゃああああっ!!」

「ひいいいっ!」

「た、助けてええっ!!」

「お、お願いだから撃たないで!」

彼女達は泣き叫び、許しを請うたが無視して処分した。

◇  
仙台鎮守府から横須賀鎮守府への帰路で妙な気配を感じたので、好奇心でその気配の方向に行ってみたら……

深海棲艦化した白露がいた。

「…き、君、白露…かい…?」

「ん?...時雨...?」



## 22話 深海棲艦の力使ってるのに深海棲艦にはな りたくない人

「き、君、白露かい……?」

「ん? 時雨……?」

「うん、そうだよ。君はどうやら、完全に深海棲艦化しちゃったみたい  
だけど……」

「そうなんだよ」

白露は急に真面目な顔になり、こう言った。

「横須賀のみんなを守ってくれた?」

「ああ、守れたよ」

「そう、良かった……」

白露の目から涙が流れた。

「ねえ、白露はこれからどうするの?」

「分からない……。でも、私はまだ生きてたい。みんなの所に行きた  
い」

「そうか……。なら、一緒に行こうか」

「え……?」

「ほら、早く」

「私、こんな姿になっちゃってるんだよ……? それでも良いの……?」

「構わないよ。だって、君は君のままじゃないか」

「……ありがとう」

そう言うと、彼女は涙を流しながら笑っていた。

「じゃあ、行くよ」

僕と白露は手を繋いで、再び横須賀への帰路についた。



しばらくして、接近してくる艦娘が見えた。

「……磯波?」

「はい……そうです……」

「なんでここに……」

「……早く横須賀に戻ってきてください!……このままじゃみんな死んじゃいます!」

「分かった。すぐに戻る」

僕と白露と磯波は急いで横須賀に戻った。

するとそこには、地獄が広がっていた。

鎮守府の建物は半年前の防衛戦以上に破壊されていた。建物だけでなく、港もめっちゃくちゃになっていた。

そして、あちこちに血塗れになって倒れている艦娘達がいた。

彼女達は皆息絶えていた。

僕は彼女達の亡骸を見て、怒りが湧いてきてしまった。

「許さない……!絶対に許さない!!」

「落ちていくください!」

「これが落ち着けるか!」

「……あ、あれを見てください!」

「なっ!」

見ると、レ級改が手刀で夕立の心臓を貫いて殺し、その返り血を浴びて狂喜しているのだった。

「ゆ、夕立……」

「あははははははははははは!!あははははははははは!!」  
「……」

僕は無言で深海制御術式第2号を解放して、レ級改に急接近し、奴の頭を掴んでそのまま地面に叩きつけた。

「うわあっ!」

「貴様アツ!!」

僕は何度も地面を叩きつけて、最後に思いっきり踏み潰した。

「グギャアアツ!!」

「これで終わりだ!!」

レ級改を鎖でぐるぐる巻きにして拘束し、心臓にメツエライを撃ち込んでやった。

「あがつ……!?!」

「はあつ……はあつ……。ふうーっ……」

「時雨さん!!」

背後で倉庫が爆発したかと思っただら、その爆発から空母水鬼と片腕を失った初月が飛び出してきた。

「死ねえ!」

初月が罵声を浴びせながら空母水鬼に斬りかかる。

しかし、彼女はそれを軽々と避けた。

「ちいっ!」

「いたぶるのも飽きたわ。死になさい」

空母水鬼は艦載機を次々と発艦させ、初月と僕達に攻撃してきた。

「ぐあっ!」

「きやああっ!」

「このおっ!!」

僕は空母水鬼に向けて主砲と南部拳銃とメツエライを発砲する。

だが、それは全て避けられた。

「遅い。そんな弾当たらなければどうということはないわ」

「ふざけるな!!」

僕は更に連射する。

「ふんっ!」

空母水鬼は弓の弦をどこぞのウォルターみたく使って弾丸を全て切った。

「なにいつ?!」

「さようなら」

彼女は僕の目の前に秒で移動して、腹部に蹴りを入れた。

「ぐええっ……」

蹴られた衝撃で吹っ飛ばされて、壁に激突してしまう。

「ぐほっ!げぼおっ!」

口から血が出る。

身体中が痛くて、意識が飛びそうになる。

「あら?まだ生きてたのね。しぶといわ」

「こつちのセリフだよ……」

「なら死んで？」

「断る」

空母水鬼は弓の弦を使って僕の右腕を切断する。

※秒で再生されました。

「ぐああっ!!」

「いい声で鳴くわねえ……」

「くそつたれが……!」

「安心して。すぐに楽になるから」

今度は左腕を切断しようとしてくる。

「させないわ!」

白露が空母水鬼の後頭部をぶん殴った。

「いったあ……! 何するんですか!」

「あなたにはやらせない……! これ以上みんなを傷つけるのは私が許さない……!」

「うるさいですね……。あなたから殺しますよ?」

「やってみろ……!」

白露と空母水鬼が睨み合う。

僕も加勢しようとしたが、深海棲艦化した扶桑と山城がそばの壁をぶち破って現れ、僕の前に立ち塞がる。

「どけ!」

「お断りです」

「そうか……深海制御術式第1号、部分解放。行くぞ、防空棲姫」

『YES, MY マスター!』

僕は足元から禍々しい液体を流してその中の亜空間から防空棲姫を取り出した。

「なっ!?!」

「嘘でしょ!?!」

「なんであなたがここにいるの!?!」

彼女達は驚いていたが、僕は気にせず、防空棲姫に命令を下す。

「奴ら……いや片方だけ殺せ。もう片方は僕が殺る」

『了解』

防空棲姫は艤装を展開して扶桑に攻撃を開始する。

僕は山城に近づき、その顔面を思いつき殴りつける。

「ぐへっ!？」

「死ね!」

僕は山城の首を掴んで、思い切り締め上げる。

「うぎゃあああっ!!くるじいっ!!しぬうっ!!」

「お前のせいでどれだけの仲間が死んだと思ってるんだ!!」

僕が山城にとどめを刺そうとしていた時だった。

突如として新しいレ級改が現れ、砲撃を放ってきたのだ。

「あぶなっ!？」

僕は咄嗟に山城を突き飛ばして回避する。

「……お前ワンオフじゃなかったのか?」

「いや、あいつは試作型のレ級改で私は量産型のレ級改だ」

「なるほど。つまりあいつよりは弱いってことか」

「……まあ、廉価版だから」

「よし……なら死ね」

僕が南部拳銃とメツェライで量産型レ級改を撃ったら、なんか普通に頭が吹っ飛んでそのまま死んだ。

試作型と違って再生能力は無いか低いらしい。

「さてと、後は……山城お前まだ死んでなかったのか……」

「げほっ……。死ぬわけじゃないですか……」

「そうかい。……普通の殺し方じゃつまらないしな。お前は……犬の餌だ」

僕は右腕を禍々しい液体のようにして犬というか狼のような形にする。

「ひっ……」

「大丈夫。すぐ終わるから」

僕は右手を山城に向けて振り下ろす。

すると、彼女の頭上から大きな口が現われ、彼女を飲み込んだ。

「きゃあああ!!」

「いただきます」

「ぐちやつ……。ぐくんっ」という音が聞こえる。……うん、美味しくないなこれ。カニバリズムは性に合わないわ。

僕は右腕を元に戻す。

防空棲姫の方を見たらあいつは扶桑を殺した後、扶桑の残骸を咀嚼していた。

うん。アレにはなりたくないな。深海棲艦

僕は防空棲姫を回収すると、白露と空母水鬼の所に向かった。

## 23話 姉妹愛は素晴らしい

向かった先では白露と空母水鬼が激闘を繰り広げていた。

「はああっ!!」

「ふふん♪」

「くそおっ!!」

「ほらほらどうしました？そんなんじや私に傷一つつけられませんよ？」

「くそつたれ!!」

「あら？あなた、意外と根性がありますね。いいですよ。もっと遊びましょう！」

「ふざけんな!!」

「でも残念。あなたの負けです」

「があっ!!」

「はい。これで終わり」

「させないよ」

僕は白露と空母水鬼の間に割り込み、主砲と二丁の拳銃で水鬼の艦載機を撃墜する。

「あら？あなたも生きていたんですか？」

「当たり前だろ？」

「……なら今度こそ殺してさしあげましょう」

空母水鬼は無数の艦載機を発艦させながら弦で攻撃してくる。  
「くそつたれが！」

僕は主砲と拳銃を使って撃墜していくが、それでも撃ち漏らしが出てくる。

さらに弦で腕や足が切られる。

「ぐあっ!？」

「時雨！」

「この程度じゃ死なないよ」

「チツ……。面倒な奴め」

空母水鬼は舌打ちしながら弦で僕を包囲する。一気に全身を切り刻む魂胆だろう。

「無駄だよ」

僕は右腕から鎖を出してそれを空母水鬼に巻き付けた。

「何!?!しかしこの妙に禍々しい鎖に殺傷力は無い!私の勝ちです!」

そう言うとき空母水鬼は弦で僕の身体を切り刻んできた。

全身がバラバラになったので流石の僕も再生に時間がかかり全身血まみれ&半身ぐちゃぐちゃという衝撃映像とかそういうレベルではない状態になってしまった。

「な!?!なんで生きてるんですか!?!」

「はは、バーカ」

僕はそう言いながら空母水鬼の鎖をさらにきつくして水鬼を拘束する。

「うわああっ!!離せえ!!」

「うるさいな」

僕はどう見ても瀕死に見える状態で立ち上がり、メツエライを空母水鬼に向ける。

「なっ!?!私はあるあなたを殺すまで死ねないのよ!瑞鶴を弄んだ人でなしがっ!!」

「へえ、姉妹愛が素敵なこと」

空母水鬼がアホウドリがなんとかって言ってたような気がしたが、気にも留めずメツエライを空母水鬼の心臓に打ち込んだ。

「うぎやああああっ!!」

「じゃあね」

僕は空母水鬼の残骸を海に蹴り飛ばしてその場を後にした。

side 初月

空母水鬼達を時雨に任せした後、僕と磯波は混乱に乗じて侵入してきた深海棲艦を始末していった。

ちなみに僕の左腕は空母水鬼に切られたが、途中で拾った高速修復



材で治した。

「ふう……。大体片付いたかな」

「はい……」

「後はあのレ級改だけだな」

「ですね……」

「行くか……」

「はい……」

僕達は散開しながら量産型レ級改に接近する。

「おらっ!!」

「甘い」

「ぐおっ!!」

僕は太刀を振り下ろすが避けられる。

そして反撃の拳を受けてしまう。

「ぐはっ……」

僕は吐血しながらもすぐに体勢を立て直す。

「……強いな。お前……」

「それはこっちのセリフ。私の攻撃をここまで食らっても倒れない

……。でも、これで終わり」

「くっ……。やらせません!!」

磯波は魚雷を投げつけて、その爆発で出来た隙を利用して急接近し、レ級改の顔面に砲撃を叩き込む。

「くっー!」

流石のレ級改といえども非装甲部分への砲撃は効いたようで少し怯む。

僕はその隙に急接近し、レ級改の心臓に太刀をぶっ刺してレ級改を撃沈した。

……。しかし、その直後だった。

「きゃああっ!!」

「なっ!?!」

突然、瑞鶴が降ってきて攻撃してきたのだ。

## 24話 駄目天使といつか墮天使

side初月

突然、瑞鶴が降ってきて攻撃してきた。僕は咄嗟に太刀で防いだものの吹っ飛ばされ、壁に叩きつけられる。

「くそつたれ……!!」

「あら、まだ生きてるのね」

「当たり前だろ？こんな所で死んでたまるか！」

「ふーん？まあいいわ。死になさい」

瑞鶴はそう言いながら艦載機を発艦する。

「くそつたれ……！」

僕と磯波は主砲と機銃で次々と艦載機を撃ち落としていくが、やはり数が多く被弾してしまう。

さらに瑞鶴の攻撃で僕は右腕を失い、磯波は腹部に大きな傷を負う。

「くそつたれが！」

僕は残った左手で太刀を持ち、瑞鶴に向けて振りかぶるが、艦載機の爆撃によつて阻止される。

「うぐっ！」

「もう終わりよー！」

「させないよ」

時雨が主砲やら機銃やらを撃ちまくりながら割り込んできた。

「時雨!？」

「大丈夫かい？二人とも」

「ああ。なんとか」

「はい……。ありがとうございます……」

「なら良かったよ」

「っ！邪魔するんじゃないわよクソ野郎！」

「嫌だね。君こそ僕達の前から消えてくれないかな？アホウドリ」

「ッ！ぶっ殺してやる！この偽善者が!!」

「やってみなよ？」

「ええ！殺つてあげるわ!!」

瑞鶴は時雨に向かって弓を構える。それに対して時雨は拳銃と太刀を構え、普通の艦娘なら失禁するレベルのオーラを出している。

「さあ、始めようかアホウドリ」

「ええ、そうね」

「死ね!!」

二人の戦闘が始まった。

「おらあつ!!」

「ふんっ!!」

瑞鶴は矢を連続で放つが、時雨は全て回避し、逆に銃弾を放つ。

「くっ！小賢しい真似を！」

「アホウドリにしてはよく避けたね」

「アホウドリ言うなクソ野郎！」

「事実じゃないか」

「うるさい!!」

二人はお互いの攻撃を紙一重で避ける。

時雨が放った銃撃を瑞鶴は身を屈めてかわす。

「危ないわね」

「そりやどうも」

時雨は拳銃をしまい、太刀を両手に持ち替える。そして一気に距離を詰める。

「速い!?!」

瑞鶴は慌てて艦載機を放つて牽制するが、時雨には当たらない。それどころか時雨はそのまま太刀を振るう。

「くっ……」

「じゃあね」

時雨は瑞鶴の首を切り落とそうとしたが瑞鶴はそれを飛行甲板を使ってどうにか防ぐ。

「っ！意外とやるね。アホウドリ」

「あんまり舐めないでよね」

瑞鶴は甲板を時雨に投げつける。時雨はそれを避けようとしたが、瑞鶴は投げつけた後に艦載機を時雨に特攻させる。

「っ！」

「油断したな!!」

時雨は咄嗟に太刀で防ごうとしたが、その隙に瑞鶴は接近してきて蹴りを入れる。

「ぐあっ……」

「はっはっは!!ざまあみる!!」

「……」

「何黙り込んでるのよ? 恐怖で声も出なくなったのかしら?」

「……いや、違うよ」

「はっ?」

「君が頭までアホウドリだからだよ」

「は?……っ! 何すんのよクソ野郎!」

時雨は左腕から鎖を出して瑞鶴を拘束していた。

時雨は刀を鞘に収めて、右腕で瑞鶴をぶん殴る。

「がっ!」

「これで終わりだね」

「がっ……ごっ……!」

「まだ生きてるんだ。しぶといね」

「くそつたれ……!」

「でも、もう動けないだろ? ほら」

時雨は瑞鶴の腹に思いつきり太刀を突き刺す。

「あっ……ああ……!」

「ははは。いい顔するね。もっと見せてくれよ」

「ひっ……!」

時雨は瑞鶴の顔を掴み、無理矢理上を向かせる。

「やめろ! このクズ野郎!」

「ふーん? まだそんな口が叩けるなんて凄いな」

「くっ……!」

「時雨、後ろ!」

「ん？」

時雨が後ろに振り向くと2基の巡航ミサイルが時雨に迫っていた。

時雨は瑞鶴を蹴飛ばしてミサイルを避け、明後日の方向に飛んでいくミサイルを拳銃と主砲で撃墜した。

「くそつたれが！」

「まだ生きてたのかい？ゴキブリみたいだね」

「お前だけは殺す!!」

「それはこっちのセリフさ。死ねよ」

時雨は瑞鶴に接近しようとしたが、二人の間を割って赤い星が描かれた攻撃ヘリが飛んできた。

「!？」

「ロ、ロシア？」

「瑞鶴、回収作業を開始」

ヘリの中にいた人影はそう言いながら時雨に巡航ミサイルを撃つ。

「ちっ……。邪魔しないでくれないかな？」

「……」

時雨の言葉を見捨てて攻撃ヘリは再び飛び立つ。そしてそのまま去って行った。

「……逃げられると思うなよ？」

時雨はそう呟き、メツエライを逃げるヘリに向けて撃ちまくるが、全て避けられ逃げられてしまった。

「っ！逃げましたか」

「あ、あの……。ありがとうございます」

「気にしなくて良いよ。それにしても大丈夫かい？怪我とかしてない？」

「はい。私は平気です」

「良かった。なら早くここから離れようか。広場に戻ろう」

「はい」

3人は横須賀鎮守府の広場に戻った。

## 25話 深海の真相

side時雨

広場に戻ると、白露が亡骸となった夕立に泣きついており、他の艦娘達も涙を浮かべていた。

「明石さん」

僕はあることを思いついて明石さんに声をかける。

「時雨さん。どうしました?」

「『ジンカクイレカエル』は使える?」

「ええ、でもどうするつもりですか?夕立さんに使うにしても入れ替える相手がいませんよ」

「うん。それについては考えうる限り最高のスペックの奴を用意したから」

「?」

僕は夕立の亡骸を持ち上げ、レ級改を鎖で引つ張り、明石さんを連れて半壊した工廠の中の『ジンカクイレカエル』の元に向かう。

「時雨さんどうするつもりですか?」

僕は転生チートの『篡奪』の派生技能の『供与』でいろいろやってレ級改の心臓を復元し、夕立とレ級改を『ジンカクイレカエル』の椅子に座らせて起動させる。

数分後……レ級改が目を覚ました。

「あれ?夕立生きてるっぽい!?!あれ?深海棲艦になっちゃってるっぽい!?!」

正確には夕立の人格のレ級改だが。まあ細かいことは気にしなくてもいいだろう。

「時雨ちゃん!私夕立つぽい!殺さないで!」

「いや、入れ替えたの僕だから殺さないけど」

「あ、そうなんだ。ありがとうっぽい!」

「……最後の仕上げをしようか」

僕は(約1年前に自称神から奪った)変成魔法でレ級改(夕立)の

見た目をもとの夕立の姿にする。だいぶ強引だが多分大丈夫だろう。

「……これでよしと」

「うわ！なんか元通りになったっぽい！」

「一体どうやったんだ……？」

明石の技術者魂に火が付いたという。

「さあ夕立、みんなのところに行こうか」

「っぼい！」

こうして夕立は、鬼畜艦夕立を超えた最終鬼畜超弩級重雷装航空駆逐戦艦夕立として生まれ変わったのだった。

この後、時雨が白露の見た目ももとの白露に戻したり、出張から帰ってきた提督が（。D。）って顔になったりいろいろあったのだが、作者にこれ以上書くやる気も文章力も無いので割愛させていただけ。

翔鶴が横須賀鎮守府で反乱を起こしたのとほぼ同時刻、深海棲艦中枢区域、オアフ島にて。

「クソッ！なぜこんなことに……」

深海棲艦の提督であり横須賀鎮守府の前任の提督である西馬義時は中枢区域の要塞の最深部にある最終司令部に逃げ込んでいた。

「くっ、まさか中枢棲姫が鹵獲されるとは……予想外だったな……」

つい1時間前、軍人と思われる白い肌に白い髪、男約1000人の軍団が海中から中枢区域に奇襲を仕掛け、瞬く間に制圧されてしまったのだ。

彼らは単体でも戦艦ル級とほぼ同等の戦闘力であり、それが徒党を組むことにより、さらに強力になっていた。

中でも赤い目をした身長190センチくらいの大男は、その圧倒的な力で次々と姫級を沈めていった。

「……どうしようかな……■■■さんに助けを求めるか」

西馬は■■■にビデオ通話をかけた。

「もしもし、■■■さん」

「ん？誰？」

「あ、すみません。西馬です」

「ん？ああ、君か」

「はい……。実はですね……。かくかくじかじか」

西馬が事情を説明すると、■■■はため息をつく。

「はあ……。それは大変そうだね。わかった。お望み通りテレポーターのパスワードを教えよう。あれ？なんか通信に割り込んでくるん——」

「ちよつ！■■■さん!？」

通信が切り替わる。

『通信は届いているかな？』

そこには、ソ連軍の士官の軍服を着たロシア人が映っていた。

「誰だお前は!？」

「ん？ああ、私か。私の名はウラジーミル・クズネツォフ。ソビエト社会主義共和国連邦軍、秘匿された第6軍、特務戦略技術軍の大佐だ」  
「ソビエトだと……!?!? 貴様ら何者なんだ!?!？」

『我々？我々はただの科学者とその実験結果だよ。まあ一般人からすれば悪魔みたいなものかもしれないが。君たちが深海棲艦と呼んでいるモノたちは我々が1997■■■年に開発し、201■■■年に量産に成功した生体兵器だ。連邦の崩壊やらなんやらでいろいろあつてここまですり引き延ばしてしまつたし、混乱によって流出して野生化した奴もいるし、機密が漏れて艦娘とかいうやつベースになつてしまつたが』  
「そんなバカな……!？」

『ちなみに私は見た目は若々しいが、191■■■年生まれだから今年で1■■■になる。そろそろ引退して余生を送ろうと思つていたんだが……ちよつどいい敵がいたから最後に実験結果の兵士たちで一心不乱の大戦争がしたいだけだ。じゃあな』

そう言つて一方的に切られ、■■■との通信が復活した。



「な……なんてことだ……」

『おい、どうした？』

「いえ、何でもありません。それよりパスワード教えてください。坂本大将」

『わかった』

その後、パスワードを教えて通信を切った坂本大将は自室で不敵に笑う。

「ふふふ、転生者にソビエトか……なかなか面白くなりそうだ。じきに元帥の座は私の物になるだろうし、この世界は私が支配するにふさわしい」

翌日、山本元帥は自身の邸宅にて、頭を撃ち抜かれた状態で発見された。

## 第二章 完

転しぐ改 外伝 零 神風零式編  
神風零式編

私の名は神崎美風。■■■県の中学校に通ういわゆる戦災孤児だ。

両親は第三次世界大戦の空襲で死んだ。私は運よく伯父の家に引き取られて、今はそこで暮らしている。

伯父はともかく伯母はひどい人で、私を厄介者扱いして、ご飯は残飯とか腐った食べ物ばかり食べさせられたし、たまに貰えるお金も全部取り上げられていた。

学校でも私の扱いは変わらない。

私のお家が貧乏だから、クラスのみんながいじめてくる。

先生たちは私がいじめられていることに気づいているはずなのに、見て見ぬふりをしている。

今日もまた、クラスメイトからいじめられる。

一着しかない体操服がはさみで破かれて、私の机に見せつけるようにして置いてある。

「お前にはこれが似合うよ」と嘲笑する声が聞こえる。

それで泣きそうになる私をみて、いじめて来る子たちはまたニタニタ笑う。

それでも、満足できない子たちが、私に暴力を振るってくる。

でも、ご飯もぜんぜん食べれなくて、いつも暴力を振るわれている私はみんなより小さくて、細くて、ガリガリで、傷だらけで、みんなが思っているよりずっと痛い。

痛い、辛い、いやだ、こんなのもういやだよと心の中で思っても何も変わらない、誰も助けてくれない。

ずっと、ずっと、辛いままなんだ。そう思うと、また涙が出てきてしまった。

どうして？なんで私がこんな目に遭わなきゃいけないんだろう？私はただ普通に暮らしたいだけなのに……。

そんな日々が続いたある日、伯父が死んだ。死因は心臓発作だった

らしいけど、ストレスか何かが原因だろうと思う。

そして、伯母は「金ないから養えないわw」とか言いながら私を追い出した。

「あんたみたいな穀潰しは出て行ってもらおうわ！」

なんて言われたけれど、実際問題行く当てなんかないし、住む場所もない。

どうしよう……これからどうやって生きていけばいいのか分からない……。

数時間後、私は路上に倒れた。空腹に耐えかねて、ゴミ箱の中にあつた賞味期限切れのお弁当を食べたら、吐き気に襲われてそのまま倒れてしまったのだ。

ああ、死ぬのかなあつて思ったその時、誰かが私の体を揺すつてきた。

目を開けてみると、そこには若い男性がいた。

その人は私を助けてくれた人だった。

彼は私の体を抱き上げると、「大丈夫？」と言つてくれた。

それが彼との出会いだった。

彼の名は坂本藤雄といい、ある研究所の所長らしい。何の研究をしているのかは知らないけど。

彼が言うには私は餓死寸前だったという。

「君は死にかけていたんだよ」と言われてもピンとは来なかった。だって、今まで死にかけてきたことが何度もあつたから。

その後、私は彼に保護されて、研究所に住むことになった。彼はとても優しい人だと思つた。

しばらくして彼はこう言つた。

「私の研究を手伝ってくれたら死ぬまで面倒見るよ」と。

私は迷わずそれに応じた。

そして、私は実験体となった。

カプセルに入れられて、しばらくして「出ていいよ」と言われたのを見ると、「うおお実験は成功だ！」とか「素晴らしい！」などと周りにいた白衣を着た大人たちが騒いでいた。

坂本さんが寄ってきて、「それじゃあ、君の力を見せてくれ」と言うので、だだっ広いところに行つて、走つてみた。

すると、信じられないことが起こつた。

「速い！速すぎるぞー！」

「こいつ人間じゃない!?」

「すごいじゃないか!!これは期待できる!!」

「おい、あれ持つてこい!!」

「はいー」

そう言つて一人の研究員が持つてきたのは大きな機械だつた。艦装と言ふらしい。それを私は身に付けた。

すると、私は海の上に立てるようになり、服装も白い着物の上に緋色の振袖を着て桜色の袴を穿いた姿になつた。

「おお、最高だ。神崎美風。君の名は今日から神風零式だ。」

こうして私は新しい名前を得た。

それからしばらく経つて、私と同じような境遇の子たちが何人か来て、そのうち半分くらいが私と同じようになった。

中でも時雨と不知火が私と仲が良かった。

二人には特に仲良くなつた理由がある。それは、彼女たちも両親を亡くした戦災孤児だからだ。

私は親の顔を知らないけれど、二人の両親は戦争で死んだらしい。だから、私たちは似たもの同士だねつて笑い合つた。

不知火はもういなくなつちやつたけど……

私は坂本さんを信頼している。体を許すくらいには好きだ。あの時は少し痛かつたが、彼は優しくしてくれた。

だから、今は幸せだ。

2031年■月■日、吹雪・叢雲・漣・電・五月雨の五体、初期艦と呼ばれる初期の艦娘達が東京湾の深海棲艦を駆逐した日だ。

その日、私たちは神風、陽炎、不知火、時雨、綾波の五体の艦娘、表向きには艦娘の別タイプと言われる元人間たち『零式艦娘』の艦隊で

津軽海峡の深海棲艦を駆逐した。

この時の様子は現地住民に見られていたようで、私たち五人は『影の初期艦』という渾名をつけられたらしい。

そして、20年後の現在。坂本さんは海軍の元帥になり、私は彼の秘書艦兼第零艦隊の旗艦として働いている。

彼は私のことを愛してくれているし、私も彼を愛している。

今はとても幸せな気分だ。

だが、彼に反抗的な提督や艦娘がいる。館山鎮守府の東郷少佐や横須賀鎮守府の時雨がその筆頭である。

私の使命は坂本さんに逆らう愚か者や艦娘もどき共を殺すこと。

いつか必ずこの手で殺すと決めている。

坂本さんに仇なす者は誰であろうと許さない。

たとえ、それが自分であつてもだ。

おまけ 神風零式の実験記録

実験対象：実験体035 「神崎美風」、鹵獲深海棲艦 ■ ■ 「重巡り級 エリート」

実験結果：実験体035の身体能力が大幅に向上。鹵獲深海棲艦 ■

■は生命反応が消失。

### 第三章 時雨の割と甘々な日常

#### 26話 私は網走の終局の記憶がありません。

side時雨

『時雨、そろそろ目を覚ませ。大本營のデータベースの■■■■■を見るんだ。みんなが待っている。■■元帥に託されたことを忘れたのか？私は彼を裏切る気か？私は一度失敗したくらいで諦めるような潔い奴じゃないだろ？さあ、闘争の場に戻るんだ。みんなもそれを望んでいる。ついぞと言ってはなんだが■■■と一緒に裏切り者共も殺せ。みんなと自分の仇を取ってこのくだらない戦争を終わらせるんだ。今の私なら簡単だろ？』

最近、こんな感じの語りかけてくるような夢ばかり見る。まるで私が僕を呼んでいるみたいだ。

横須賀鎮守府での反乱から2ヶ月が経った。

反乱に参加して唯一捕まった葛城は大本營で解体されたらしい。

ある意味僕以上に横須賀の守り神と言える白露が還ってきたことで、連日どんちゃん騒ぎだった横須賀鎮守府も今はだいぶ落ち着いてきた。

そして僕はというと……。

「さあ夕立、今日も訓練するよ」

「ぼいっー」

鬼畜艦夕立改め最終鬼畜超弩級重雷装航空駆逐戦艦夕立の訓練に付き合っている。

レ級改の身体は滅茶苦茶にハイスペックなのだが、武装管制や操作系についてはまだ完全ではないらしく、完全に使いこなすには練習が必要とのこと。

なので、最近はどうして夕立に戦い方を教える日々を送っている。

ちなみに装備はレ級改固有の20インチ連装砲はそのままで、12.5インチ連装副砲改と深海五連装(酸素)魚雷後期型と夜深海艦爆はぶっ壊れたので、明石が開発した12.7センチ連装砲B型改四(戦時改修)+高射装置と試製61センチ四連装(酸素)魚雷とF-86 セイバー(空自カラー)とそれを発艦させるためのM1ガーランドみたいなやつを使っている。

「いくつぽい!うりゃあ!」

「うん、いい動きになったね」

「えへへ、ありがとっ♪」

「でもまだまだ甘いかな?」

「むう!もう一回やるっぽおーい!!」

「はいはい」

まあ、たまにこうやって手合わせすることもあるけど、基本的には毎日基礎的なことを教えた後に模擬戦をしている。

←現在の夕立のスペック

夕立改三 白露型 4番艦 駆逐艦

耐久 500 (＋自動修復)

装甲 200

搭載 200

速力 超高速

射程 超長

火力 190

雷装 180

対空 140

装備

20インチ連装砲

12.7センチ連装砲B型改四＋高射装置

61センチ四連装(酸素)魚雷

F-86 セイバー(空自カラー)

M1ガーランド  
日本刀

「そろそろ時間だし、終わりにしようか」

「はあ……はあ……はい……ぽい……」 夕立は息切れしながらもなんとか立っている。

ちなみに僕の方は汗一つかいていない。

ちなみに、これは別にわざとやっているわけではなく、単純に僕がチートだからである。

まあ、普通に考えて素のスペックで時雨改二十防空棲姫÷2くらいなのに、そこに深海制御術式解放によるステータス上昇値が加わるわけで、もうそれは無敵に近い。

「お疲れ様。はい、タオルと水」

「ありがとうっぽい！」

「それじゃあ寮に戻ろう」

「ぽいっ！」

艀装を工廠に戻して僕たちは寮に戻ってきた。

「ふわあ……夕立ちよっと寝るっぽい」

「うん、お休み」

夕立を部屋まで送り届けた後、僕は執務室に向かう。

「失礼します」

中に入ると萩原提督が書類とにらめっこしていた。

「ん？ああ、時雨か。あ、お茶入れてくれないか？」

「わかった」

僕は給湯室でお茶を入れてから席に戻った。

「どうぞ」

「おう、サンキューな」

一口飲んでほっとした表情を浮かべたあと、再び仕事に取り掛かった。

「ねえ、僕も何か手伝うことある？」

「いや、そろそろ終わるからいいよ」



十数分後、提督は書類を全部かたづけした。

「ふう……やつと終わった……。そういえば、なんか坂本元帥が話があるから時雨を連れて大本営に来て言ってたぞ」

「え？ そうなの？ いつ？」

「2週間後だそうだ」

「了解。じゃあ準備しとくよ。てか大本営にしては妙に伝達早いな」

「はは、そうだな」

「あ、提督」

「ん？なんだ？」

僕は最近見る夢のことを提督に話した。

「へえ、あれじゃないか？ 前世の記憶の飛んでる部分と関係あるんじゃないか？ 知らんけど」

「うくん……多分関係してるとは思うんだけど、あんまり思い出せないんだよねえ……」

「まあ、焦らずゆっくり思い出すといいさ」

「ああ」

僕はそう言い寮に戻った。

## 27話 バカを捜して約100キロ

翌日、僕は提督のベッドで目を覚ました。

昨夜は提督のマグナム（）と格闘していたのだ。

訳 夜の営み

(ちなみに荻原のマグナムは杉野のそれよりデカイ)

「んっ……朝……?」

「おはよう、提督。今日もいい天気だよ」

「おう、おはようさん。ところで、お前なんで自分の部屋に戻らないんだ?」

「だって、この方が効率的だろ?」

「はは、たしかに」

そんな感じで僕と提督は朝の支度をして食堂に向かった。

ちなみに朝食のメニューは焼き鮭に味噌汁と納豆だった。

「おいしいね!」

「おう」

数分後……

「ごちそうさま」

僕は食事を済ませて、執務室に行き、黙々と仕事をこなした。

「ふう、今日のノルマはこれで終わりっど……」

「お疲れ様」

そして、僕が紅茶を入れていると、電話が鳴った。

「はい、こちら横須賀鎮守府」

提督が電話に出る。

『誰か! 助けてくれえ!』

「え?! どうしました!」

『深海棲艦! 深海棲艦が襲撃してきた! 息子が! 何故か海辺で遊んでいた息子が海に流された! 助けてくれ!! あ、ここ下田! 私、島津!』

「わかりました!! すぐにそちらに艦娘寄越します!」

「え? どういうこと?」

「ああ、島津とかいう下田の住民のバカ息子が深海棲艦の襲撃で行方不明になったらしい。その子を助けに行ってこい」

「了解。すぐ行くよ」

僕は夕立を連れて出撃した。

「急ごう。早くしないと犠牲者が増えるかもしれない」

「ぽいっ!!」

僕達が現場にたどり着くと、そこには大量の深海棲艦の群れがいた。

「なんじゃこれ……」

「すごい数っぽい……」

しかし少し様子が変で、人型、特に姫級はまるでどっかから逃げてきたような感じだった。

「とりあえず殲滅しようか」

「ぽいっ!」

僕たちは戦闘を開始した。

僕は拳銃と太刀を持って突撃し、夕立はF-86 セイバーを発艦させながら20インチ連装砲を撃ちまくっていた。

敵を半分くらい蹴散らした後、残りは夕立に任せてバカを搜索することにした。

「提督の話だと、確かこっちの方角に行ったはず……」

しばらく捜すと、男の子が木の板にしがみついて海に浮かんでいた。

僕はすぐさま駆け寄る。

「おっい、大丈夫か?」

反応が無い。ただの屍のようだ。

ただ、それだと報告書が困るのでどうかして起こそうとする。とりあえず、瞼を開いて懐中電灯を目に当ててみた。

※良い子はマネしないでね。悪い大人は別にいいです。

「うわっ眩しっ!」

「よかった生きてた……」

どうやら意識はあるみたいだ。

「え？誰？え？何？」

混乱しているようだったので説明をする。

「ああ、驚かせてごめん。君を救助に来たんだよ」

「え？僕助かったの？」

「うん。でもまだ安心はできないよ。今から安全な場所まで連れて行くけど、もしまた襲われたら今度は死ぬかもしれない。だから僕の臍装に掴まってて」

「わかりました……」

僕は男の子を背負って歩き出した。

side男の子（島津渉くん）

僕は海辺で友達と一緒に遊びに行った。

お父さんは、行っちゃダメと言っていたけど、どうしても行きなかった。

だって海に近いところに住んでるのに一度も行ったことがなかったから。

何分か遊んでいたら、海に黒いやつらがたくさん出てきた。

そいつらに襲われて僕は海に流されてしまった。

偶然流れていた木の板にしがみついたおかげで沈まなかったけど、しばらくしたら意識を失った。

でも、懐中電灯の光で目を覚ました。

時雨と名乗る艦娘のお姉ちゃんが僕を背負って、安全な場所まで連れて行ってくれるらしい。

お父さんやテレビの人は、艦娘は危険だって言ってたけど、このお姉ちゃんはずごく優しくかった。懐中電灯当ててきたけど。

それに、背中越しに伝わる体温がとても温かくて、いい匂いがした。しばらく海上を移動していたら、お姉ちゃんが急に止まった。

「どうしたのお姉ちゃん？」

「……ちよつと不味いね」

お姉ちゃんがそう言った矢先、海面が盛り上がって、巨大なクジラ

とそれに乗った青白い女の人が見れた。

「……太平洋深海棲姫か」

「え？」

お姉ちゃんがそう呟いた瞬間、その女が砲撃してきた。

「っ！」

お姉ちゃんは僕を背負ったまま避ける。

着弾したところは火を起こし、波飛沫が上がった。

「大丈夫かい!？」

「う、うん！」

お姉ちゃんはそう聞くと再び走り始めた。

そして数分後……

「あ！あそここの岩場に隠れてて！」

僕は小さな洞窟を見つけて中に隠れた。

深海棲艦も入って来れないらしく、なんとかやり過ごすことができた。

side時雨

僕は男の子を岩場に隠すと、深海棲姫と対峙した。

「太平洋深海棲姫……。たしか、1年前くらいに発見された奴だったかな？なんでこんなところにいるんだか」

僕は疑問を抱きつつも、戦闘を開始した。

「まずは小手調べだ！」

僕は主砲と南部拳銃を撃ってみる。

しかし、相手は全く動じない。

「やっぱりダメか……」

僕は太刀を構えて斬りかかる。すると、敵は水柱を立てて潜ってしまった。

「しまったーどこへ!？」

探していると、いきなり後ろから砲撃された。

「っ！」

相手は命中精度の高い16インチ3連装砲だったので9発のうち2発が僕の左腕に命中して吹っ飛んだ。

※やっぱ秒で再生しました。

「くそー深海制御術式第3号解放！」

僕は右腕だけで太刀を振り回して反撃する。

しかし、敵はそれをひらりと避けた。

「くそっ！ならこれでどうだ!!」

僕は切り札のメツエライを発砲しまくったが、クジラモドキが庇うおかげでそんなに効かない。

「ちい……」

「大丈夫ですか!？」

男の子が心配して声をかけてきた。

「平気だよ。これくらいなんてこと無いさ。引っ込んでて」

僕は拳銃を取り出して撃った。

「喰らえっ！」

弾丸は全てクジラの顔面に命中したが、ダメージを与えた様子はない。

「やっぱ硬いな……」

その時、クジラの口が開いて何かを吐き出す準備を始めた。

僕は直感的に危ないと察知し、すぐに回避行動を取る。

クジラの口から出てきたのはビームだった。

「っ!?!革命人形のやつかー！そーういや回収してたなー！」

クジラはそのまま首?を振り、僕達に向かってくる。

で、結果久しぶりに全身大火傷を負った。

「っ！やるじゃねえかクソクジラが！」

僕は太刀を振ってクジラの脳天に叩きつける。しかし、全くと言っていいほど効いてなかった。

「うそお……」

僕はクジラの尻尾による薙ぎ払いを受けて吹き飛ばされる。

「ぐあっ……」

僕は近くの岩礁に激突し、血反吐を撒き散らしながら倒れた。

side男の子（島津渉くん）

僕が隠れていると、突然お姉ちゃんが攻撃されて吹き飛んできた。

「お姉ちゃん！」

僕は思わず飛び出してしまった。

「馬鹿野郎！隠れろ！」

お姉ちゃんが怒鳴りながら立ち上がる。

「で、でもお姉ちゃんが！」

「僕なら大丈夫だから隠れてて！」

お姉ちゃんが僕を押し戻す。

「……深海制御式第2号、解放」

お姉ちゃんがそう言うとお姉ちゃんの体が禍々しいオーラに包まれた。

「お姉ちゃん……？」

お姉ちゃんがゆっくり歩き出す。

「……行くよ」

次の瞬間、お姉ちゃんが一瞬で太平洋深海棲姫に近づき、刀を振るった。

「……え？」

お姉ちゃんの攻撃によって、クジラの頭が真っ二つに斬られた。

そして、そのままクジラが沈むと、太平洋深海棲姫は焦ったような顔をしてお姉ちゃんから逃げようと杖のようなものを投げつけて海の中に消えようとしたが、お姉ちゃんは海面を蹴ると太平洋深海棲姫を追いかけて、殴り殺した。

お姉ちゃんは返り血を浴びて、お姉ちゃんの顔は狂気に満ちた笑みを浮かべていた。

「お姉ちゃん？」

僕は恐る恐るお姉ちゃんに声をかけた。

「ん？ああ、ごめんね。ちよつと興奮しちゃった。大丈夫かい？」

お姉ちゃんはいつものお姉ちゃんに戻っていた。

「うん……あの、助けてくれてありがとう」

僕がそう言って頭を下げると、お姉ちゃんが優しく頭を撫でてくれた。

「どういたしまして。君は怪我は無いかい？どこか痛むところとかあるかな？あ、とりあえず陸に上がろうか」

「う、うん」

僕はお姉ちゃんに背負われ、海岸に向かった。

side 時雨

僕は男の子を砂浜まで連れて行き、座らせた。

「ふう……」

僕は一息つくくと、自分の傷を治した。

「あれ？もう治ってる……」

少年が不思議そうな顔をしながら呟く。

「まあ気にしないで。それより君の名前はなんていうんだい？」

「僕は島津渉です」

僕が名前を聞くと、少年は素直に答えた。

「そっか。僕は横須賀鎮守府所属の白露型駆逐艦二番艦、時雨。よろしくね」

僕が手を差し伸べると、彼は少し躊躇いながらも握手してくれた。

とりあえず、提督にこいつの親がいまどこにいるのか聞いて、海路で連れて行った。

「渉！」

少年の父親と思われる人が駆け寄ってきた。

「お父さんー！」

渉くんは嬉しそうに父親に飛びついた。

僕はそれを微笑ましく見つめる。

「息子を助けてくださりありがとうございます。いやはや、艦娘ってテレビではただの暴力装置だと言ってますけど、実際は違うんですねえ」



「いえ、当然のことをしただけです。それでは僕はこれで失礼します」  
「はい。本当になんとお礼を申し上げたら良いか……」

「大丈夫ですよ。では、またいつか」

僕がそう言うと、少年は笑顔で手を振ってくれた。

「バイバイ！」

僕もそれに答えるように手を振り返し、その場を去った。

おまけ

深海制御術式第3号解放

深海制御術式第2号解放

深海制御術式第1号部分解放

深海制御術式第1号解放

Unknown

深海制御術式第0号解放

Unknown

## 28話 帰ってきたアHoward

僕は横須賀に戻ってきて、執務室へと向かった。

「やっぱ子供って可愛いね」

「そうだな。私達も昔はあんな感じだったのかな……」

提督は感慨深げに言った。

「さあね」

僕は適当にはぐらかす。

「そういえば、お前って何歳なんだ？」

不意に提督がそんなことを聞いてきた。

「女性に年齢聞くのはセクハラだよ？」

「いやお前中身男だろ。じゃなくて、気になっただけだよ。別に嫌なら言わなくてもいいぞ」

「まあいいか。前世も含めたら44になるよ」

僕がそう言うと、彼は固まった。

「は？え？は？」

「だから、前世から含めたら44だって」

「いや、冗談きついぞ。嘘ついてるならもつとマシなものをつけよ」

「残念ながら本当だよ」

僕がそう言うと、提督は頭を抱え始めた。

「まじかー……てことは今年で45……？おっさんっぽいなとは思ってたけど、私のマグナムでアンアン喘いでたのが40代のおっさんだと……？」

「……ぶっ飛ばしてやろうか？」

「いや、いくら見た目が可愛くても……ねえ？」

「お前……時雨はただの可愛いじゃない！スーパープリティー僕っ娘だぞ！」

僕が提督を睨むと、提督は慌てて言い訳を始めた。

「わ、悪かったよ。だからその目をやめろ！」

「ふん……まあ、これからはあんまり変なこと言うんじゃないよ？次

は無いからね」

「お、おう」

提督はまだ何か言っていたけれど、僕は無視して部屋を出た。  
「お疲れ様です」

僕の後ろからは、なぜか青葉が付いて来ていた。

「……ところで、どうして君は僕についてくるんだい？」

「いえ、取材しようと思ひまして「帰れ」……ひどいですね」

「別にひどくはないだろ。そもそも、君に話すようなことはない」

「つれないですね。時雨さんの過去に興味があるんですよ」

「……………」

「あ、今のは聞かなかったことにしてください」

「まあ、それはそれでいいとして、僕の過去を知ってどうする気だい？」

「ん？もちろん記事にして新聞に載せて広めます！」

「よし、死ね」

僕は青葉の頭を掴むと、そのまま握力だけで締め付けていった。

「いだだだだだだ!!ギブアップ!ギブアップ!!」

「なら最初から言うなって話だよ。まったく……………」

僕は呆れつつも、手を離した。

「ぐえ……………」

「ほら、早く行くといいよ。それと、この事は誰にも言うな。もし言うてみる。明石と結託してお前の記憶を全て消す」

「そ、それだけは勘弁してください!」

「わかったなら良いんだよ。さ、行った行った」

「はい……………」

青葉はトボトボと歩いて行った。

「……………なんだあいつ」

そう言いながら僕は自室に戻った。

side 神風

一方その頃、日本海の要衝である舞鶴鎮守府では、めっちゃ暴動が起きていた。

その暴動の制圧に私たち第零艦隊が駆り出されていたのだ。

「クソッ！なぜこんなにも暴れる！」

私は目の前の暴徒を薙ぎ倒しながら言った。

しかし誰も答えない。まるで何かに操られているように。

「チィー！」

私は舌打ちしながら、短刀8本を投げ飛ばした。

8本の短刀は見事に暴徒共の脳天を貫き、その場に倒れ伏した。

「ふう……これで鎮圧完了か」

ふと叢雲の方を見ると向こうも終わったようだ。

「こつちも終わったわ」

「ああ、ぐっ苦勞」

そう言った時だった。

「うわあー！」

突然背後で悲鳴が上がった。振り返るとそこには真つ二つになった味方の死体があった。

「おい！何が起きた!?!」

「わからん！いきなりこいつの上半身が飛んでった！」

「そんな馬鹿な!?!」

私は周囲を警戒すると、瓦礫の影から誰かが出てきた。

見た目はぱつと見瑞鶴改二甲のようだが、髪が白くなっており、瞳は赤く光っていた。

「貴様は誰だ?」

私がそう聞くと、女はニヤリと笑って言った。

「私? 私は瑞鶴。正規空母・瑞鶴よ」

「ほう、それが本名か？」

「ええそうよ。もつとも、もうその名前は捨てたけどね」

「どういう意味だ？」

「……死ねばわかるよ」

そう言うのと瑞鶴は黒い球体を発生させて私たちを吹っ飛ばした。

「くっ……バケモノめ！」

私は短刀を投げつけるが、瑞鶴は弦を使って弾き飛ばした。

「そんなもの効かないって」

「ちい！」

私はすぐさまリボルバーを取り出して発砲したが、全て避けられてしまった。

「無駄だったの」

「黙れ！」

私は叫ぶと、一気に距離を詰めて斬りかかった。

だが、瑞鶴はなんなく避けた。

(なんて反射神経だ……)

「まだまだ！」

私はさらに攻撃を続けたが、全く当たらない。それどころかどんどん追い詰められていく。

「へえ……まだやるんだ？」

「当たり前よ！」

「でも、勝てないよ？あなたじゃね」

瑞鶴はそう言うのと、何故か大の字になって目をつむった。

「(何するつもりだこいつ……?)」

数秒後、信じられないものを見た。

瑞鶴の四肢が倍に増えたのだ。

何言ってるかわからないかもしれないが、どこぞのオリンポス山のホワイトイベントで湧いた人型実体みたいな感じだ。

「な！」

あまりの出来事に一瞬固まったが、すぐに我に帰った。

瑞鶴は四本の腕でさっきの黒い球体を発生させ、私たちを吹っ飛ば

した。

「ぐあつ！」

私たちは海まで飛ばされ、そのまま海中に落下した。

「げほっ！げほ！」

「大丈夫？」

叢雲の声を聞きつつ立ち上がろうとすると、足に違和感を感じた。

「これは……」

見ると、私の両足が無くなっていた。

ふと瑞鶴の方を見ると、何故か血を吐きながら苦しんでいた。

そして、増えた四肢を元に戻すと、「まあ、これくらいかな……」と言っどどこかに立ち去った。

その後、私は叢雲にお姫様抱っこされながら大本営に帰投した。

## 29話 心のおにんにん

side時雨

「ただいま……」

僕は自室のドアを開けると、そのままベッドに飛び込んだ。

「疲れた……」

僕はあのあと、提督といかがわしいことをした。

「あれくらい普通だと思っただけだなあ……」

僕は独りごちる。

「でも、やっぱりあの体位が一番楽なのかな……」

僕は少し考えてみた。

「いや、やっぱり正常位は恥ずかしいな……」

結局、嫁時雨と相談したが結論は出なかった。

「はあ……」

僕は大きいため息をつくとき、ベッドから出てシャワーを浴びることにした。

「気持ちよかったな……」

さつきまでの行為を思い出しながら体を洗う。

「それにしても、あんなに激しかったなんて……」

思い出すと顔が赤くなる。

「ダメだ……またシたくなってきた……」

僕は頭を振って煩惱を振り払う。

「だめだ……このままじゃ提督を襲いかねない……」

僕はもう一度大きいため息をつきながら湯船に浸かる。

「はあ……なんだかんだで楽しんでる自分が居るのが怖いね。僕が僕でなくなっていくみたいだ」

僕は苦笑しながら呟いた。

「まあ、仕方ないか。まあ体は女の子だしね」

僕は再び大きな溜息をついたあと、風呂から出た。

「ふう……寝ようかな」

部屋に戻り布団に入るが、なかなか眠れない。

「やっべえ、ムラムラしてきた」

僕は起き上がると、部屋の中をウロチョロし始めた。

「あーもうー！」

そしてついに我慢出来なくなった。

「ちよつとだけ……ちよつとだけだから……」

そう自分に言い聞かせながら、僕は再び提督の部屋に向かった。

「……本当に最低だよ」

僕は自分でも分かるほど興奮していた。

「提督、入るよ？」

返事は無いが気にせず入っていく。

「ああ……これが提督の匂いか……」

僕は無意識のうちに提督の服を手に取り嗅いでいた。

「はあ……はあ……提督……」

自然と手がスカートの中に伸びていく。

「はあ……はあ……提督……提督……！」

「呼んだかい？」

突然後ろから声をかけられた。

僕はビクツとなって振り返るとそこには提督がいた。

「え？なん……で……」

「いやー、私の部屋に用があったから来てみれば、まさかこんな事になっているとはねえ」

ニヤリと笑う提督を見て、僕の背筋には冷たい汗が流れた。

「いや……これは違うんです……」

「何が違うんだ？人の服を着て、自分の股間を触りながら名前を呼ぶなんて変態じゃないか」

「だからそれは……」

提督が近づいてくる。

「お仕置が必要だね」

僕はこの後、散々弄ばれましたとさ。



く夢の中く

『時雨、頼むから心のおにんにんを維持してくれ。マジで  
すまん私、多分無理だ。』

### 30話 普通にデート

side時雨

朝起きると、僕の隣では提督が寝ていた。

「ん……」

「おはよう」

「うん……おはよ……」

まだ眠そうな目をこすりながら挨拶をする提督。

昨日はかなり激しかった。正直死ぬかと思った。まあ、すごく良かったけどね。

「なあ時雨、今日は休みにしないか？」

「んくそうだね。いいよ」

僕は提督の提案に賛成した。たまには休んでもいいだろう。

「じゃあ二度寝しようぜ」

そう言うと、提督は再び眠りについた。

(なんか猫みたい)

僕はクスッと笑いながら、その横顔を眺めていると、不意に唇を重ねられた。

「ちよ……」

「しよっか」

提督は悪戯っぽく微笑むと、そのまま舌を入れてきた。

「ん……」

「ちゆ……」

2人で抱き合い、そのままベッドへと倒れ込む。

僕はそのまま提督に押し倒されてしまい、再びキスされた。

「はあ……はあ……」

息が上がり、頭がボーツとする。

「時雨」

「なあに……?」

「好きだ」

「うん……僕も……」

そのまま2人は体を重ねた。

一時間後、僕らは朝食を食べに食堂へと向かった。

「いやあ、腹減ったな」

「ほんとにねえ」

僕たちはそんな会話をしながら歩いていると、前方から誰かが走ってきた。

「おつはよーございまっすー!」

青葉だった。なぜか息を切らしている。

「おう、どうした?」

提督が聞くと、青葉は息を整えてから言った。

「いやあ、昨日の件について調べてきまして……」

「ほう……」

「あのお……もしかして昨日の夜、お楽しみでしたか?」

………は? 一瞬時が止まった気がした。

「はあ!? なな何を言ってるんだお前は! 馬鹿か!」

「いやだってえ……執務室に鍵かかってませんでしたしい……」

確かに閉め忘れた記憶はある。だが、まさかそれを見られていたとは……。

「いやまあ……それはだね……色々あってだな……」

提督が慌てる。僕も同じ気持ちだよ。恥ずかしくて死にたい。

「あと、さつきもお取り込み中だったみたいですし……」

「あーもう! うるさい! 黙れ!」

提督が叫ぶ。僕は顔から火が出そうになっていた。

「まあ、別に良いんですけどね。あ、ちなみに写真ありますよ」

「……殺す」

僕は青葉の頭を掴んで、出撃ドックに連れて行くと、そのままぶん投げた。

「あばよ」

「あああ! ちょっと待ってくださいよ時雨さん! 提督! 助けてください」

「い！」

「自業自得だよ」

「あああああああああー！」

そして、青葉は夕方頃に帰投したという。

「……飯食いに行くか」

「……そうだね」

提督の一言により、僕らは食事をするために食堂へ向かった。

その後、食事を終えた僕達は、再び部屋に戻った。

「提督、どこ行こっか」

「うーん……特に決めてないんだよなあ」

「じゃあ散歩でもする？」

「おお、それいいな」

そういうわけで、僕は提督と一緒に街へ出かける事にした。

「さて……まずは何から見ようかな」

「服とかは？ほら、前に一緒に買いに行ったじゃん」

「ああ、あれか。よし、行くぞ」

「うん」

それから数時間後、僕はある店の前で立ち止まっていた。

「なあ時雨、これなんか似合うんじゃないか？」

提督が持ってきたのは白いワンピースだった。

「そっ、そうだね……」

「着てみるよ」

「え？」

「だから、試着してこいよ」

「わ、わかったよ……」

結局押し切られてしまった。

「ど、どうかな……」

着替え終わった僕が提督の前に立つと、提督は顔を赤くしながら固まっていた。

「……可愛いな」

ボソツと呟く。その言葉を聞いて、僕の体温が上がったような気が

した。

「ありがとう……」

「じゃあ買うか」

「うん」

僕は提督に笑顔を向けた。すると、提督は照れたように目を逸らす。

（可愛すぎだろ）

そう思いながら会計を済ませ、店の外へ出ると僕は提督に抱きついた。

「おいおい、どうした時雨」

「なんとなく……」

僕は提督に甘えたかったのだ。理由はわからないけど、多分寂しかったんだと思う。

「全く……仕方のない奴だ」

そう言いながらも、提督も僕を抱き締めてくれた。

その温もりを感じながら、僕と提督はそのまましばらく抱き合っていた。

「さて……次はどこに行こうかね」

提督は僕に聞いてきた。

「ん〜そうだなあ……」

「時雨、行きたいところはないのか？」

「僕が行ってみたい所かい？」

少し考えてみる。今まであまり興味がなかったから、全然浮かんで来なかった。

「あ、じゃあ映画館に行ってみたいなあ」

ふと映画が観たくなってそう提案してみると、提督はすぐに賛同してくれた。

「おっ、いいじゃないか。よし、行こう」

こうして僕らは映画を観に、駅前の映画館に向かった。

◇

映画を見終わり外に出ると、辺りはすっかり暗くなっていた。

「面白かったな」

「そうだね」

上映中はあまり話すことが出来なかったため、2人で感想を言い合  
いながら歩いていた。

「なあ、せっかく来たんだしどこか入ろうぜ」

提督の提案でレストランに入る事になった。

2人用のテーブル席で向かい合わせに座って料理を注文する。

待っている間にドリンクを飲み、適当に雑談していると、店員が来  
て注文していた品々を持ってきて僕達の目の前に置いた。僕達はい  
ただきまずをして食べ始める。そして、食べ終わる頃に頼んでいたデ  
ザートが運ばれてきた。それを見た提督が言った。

「なあ時雨」

「何？」

「あーんしてくれ」

……………。一瞬沈黙が訪れる。

「嫌だ」

そう答えると、提督がショックを受けた。いやいや無理だって！恥  
ずかしすぎるよ！それに周りに人いるし！こんな所でできるわけな  
いだろ！

そんなことを思っていたのだが、結局断り切れずに、結局提督の要  
求を受け入れてしまった。その結果……………。

(……………死にたいなあ……………穴があつたら入りたい……………というか穴を掘つ  
てそこに埋めて欲しい)

僕は顔を真っ赤にして悶絶しながらそう考えていた。

恥ずかしさのあまり何も喉を通っていかない。だけど、隣にいる男  
は幸せそうな顔を浮かべてこちらを見ているので、さらに僕精神力  
が削られていった。

(今なら……………殺せるかも……………)

本気で殺意を覚えていたその時、ようやく食事を終える事が出来た  
のだった。

店を出てしばらく歩いてみると、急に腕を引つ張られたので振り返ってみた。すると、提督の唇がすぐそこまで迫ってきている。僕は思わず目を閉じた。その直後、頬に当たる柔らかな感触。それはすぐに離れて行ったが、それでもドキドキは止まらなかつた。目を開けるとそこには微笑んでいる提督がいた。それが妙に悔しくて、今度は僕の方から口づけをした。

その後ホテルに行き、お互いを求め合ったが首絞めプレイによって僕は気絶してしまい、朝を迎えた時に起きた提督から謝られる事になるのだった。

side 仕事を押し付けられた白露さん

「ああクソ……あのバカツプル共め！」

### 31話 物理的おにんにん

side時雨

数日後、僕は提督と執務室で書類の処理を行っていた。

「なあ時雨」

書類を片付けた提督が僕を呼ぶ声が聞こえたので振り向くと、提督は真剣な表情でこちらを見てきていた。どうしたんだろう？何かあったのかな？

「えっと……どうかした？」

「いや、よく考えたら時雨って結構おっぱいおっきいよな」

その瞬間、空気が凍りつく音がした。

数秒経つても反応が無い僕に、提督は焦ったように言う。

「あ、悪い、いきなり変なこと言つて」

「別に気にしてないよ。前任や提督に揉まれすぎて大きくなったただけだよ」

提督の言葉に僕は笑みを作つて答えた。だけど、その笑顔の裏には怒りが見え隠れしていたと思う。

「まあ……そうか……」

僕の怒りを感じ取ったのか提督も苦笑いを浮かべているようだ。

……さてと、提督をいじめるのはこれくらいにしておいてあげようか。

「ところで、今夜もやるんだよね？」

「……その予定でございます……」

提督が小声で返事した。それを聞いた僕の顔は再び笑みの形に変わっていった気がする。さて、じゃあそろそろ反撃させて貰おうか。まずは何からいこうか……。うん、あれがいいね！

「ねえ、今日はいつもより激しいやつがいいなあ……」

「……了解しました」

「楽しみにしてるから、頑張つてね」



◇

その夜。僕は提督の自室にいた。

「時雨、そろそろヤろう」

「あ、提督。せっかくだから見せたいモノがあるんだよ」

「？」

疑問符を浮かべた様子の提督を前に僕はいつだったかに自称神から奪った変成魔法を使って前世の10代前半くらいの姿になった。ちなみに服は時雨の制服のままである。

「……胸と髪無くなった？」

「いや、性転換してみた。前世の若い頃」

「杉野中佐の若い頃可愛すぎだろ。顔ほとんど時雨と同じだし、背ちっちゃいじゃん！」

可愛いと言われてしまった。ちよつと照れる。あと背が低いと言われたのは地味に傷ついた。一応高校生の時には165まで伸びただけどなあ……。

そんなことを考えながら、とりあえず提督の反応を見るために少しからかう事にする。

提督の隣に座って、わざと身体を寄せたりなんかしていると提督は僕を抱きしめてきた。

提督の腕に抱き締められ、僕の心臓がバクバク音を立て始めるのを感じた。

しばらくして提督に抱かれ続けている事に耐えられなくなった僕は、顔を真っ赤にしながらも離れるように言った。

しかし提督は僕を押し倒し——  
ア”ツツ—————!!!!

提督の自室には美少年の姿になることで物理的なおにんを取戻したバケモノの号哭が響き渡ったという。

(美が重要)

「時雨お前、ふたなりにもなれるのか……」  
「……黙れや……」

### 32話 時雨、シヨタコンに目覚める。

side時雨

翌朝、僕はいつも通りに目を覚ました。だが昨日は色々あったせいか身体が重い気がする。気怠げな状態で服を着る。そして身支度を済ませた後、部屋を出る前に鏡の前で髪を整える。

(……よしっ！今日も可愛い時雨が見れたね)

鏡を見ながらそう思うと気分が良くなり笑みがこぼれてくる。

それから僕は朝食を取るために食堂へ足を運んだ。

今日の朝食は鮭定食と味噌汁である。

朝食を食べ終わった僕は執務室へ向かい、提督と書類を片付けた。しばらくして昼食の時間になり提督と昼飯を食べることになった。

ちなみにうどんと唐揚げを食った。

昼食後は特に用事が無かったので、僕は部屋に戻って本を呼んで過ごした。

(ん、暇だ……)

僕は本を読んでいたのだが次第に飽きてしまい、ベットの上に寝転ぶと天井をボーツと見上げながら考え事をしていた。

とりあえず、暇つぶしに散歩する事にした。

外を歩くが特にあてもなくただぶらつくだけである。

ふと通りかかった鎮守府の近くの公園で、僕はこの前助けた男の子を見つけた。その子は僕の方を見ると嬉しそうに駆け寄ってきた。

「こんにちはお姉ちゃん！久しぶりだね」

「うん、久しぶり。元気だった？」

僕が尋ねると、その子は元気良くなずいて返事した。

「ねえ、良かったら一緒に遊ぼうよ」

「そうだね。何して遊ぶ？」

そう言っ僕が笑いかけると男の子もつられて笑顔になった。その表情に心が安らいできた。

「えつとね〜……」

2人でしばらく遊び続けた。最初はボールを投げ合って楽しんだ後に追いかけて、次は砂場で泥団子を作り、今はブランコに乗っている。その間も僕はずっと楽しくて幸せな気持ちに包まれていた。

しかし突然雨雲が立ち込めてきて、ポツリポツリと小粒の雫が落ちてきたかと思うとザーザー降りに変わった。天気予報でも晴れって言っていたのに……仕方なく僕は男の手を握りながら、鎮守府へと戻ることにした。

鎮守府に民間人を入れるのは御法度なのだが、バレなきや犯罪じゃない理論のもと自室に連れて行くことにした。

部屋に戻ってくる頃にはお互いにすっかり濡れてしまっていたので着替える事にした。

僕は着替えのために服を脱いだ、そこで男の子の視線が一点に集中していることに気付いた。

(あ……胸見られてるな……まあ気にしなくていいや。男同士だし)

そんなことを思いながらスカートを脱ぐと、やはりというべきか釘付けになっている。そして何故か息遣いが荒くなっている。ちよつと引くくらい興奮していた。……流石に見過ぎなので注意することにする。

「ねえ君。あんまりこつちばつかり見ないで欲しいな」

「あ……ごめん」

そう言っただけ顔を赤くしながら目を逸らす。それを見て微笑む。

なんだかんだいって可愛い子だから怒るのは少し可哀想かな?とか思っただけ声かける。

「次やったら駄目だよ」

それを聞いた彼は慌てて弁明してきた。

「だ、大丈夫!ちゃんと気を付けるから。本当にゴメンなさい!もうしないから許してください!」必死になって謝るので今回は許すことにしようと決めた。

(別に減るもんじゃないし、見たかったら見せてあげるけど)

僕は男の子に背を向けるとブラジャーを外す。それをじつと見ら

れている気がするがスルーしておくことにする。

(……そういえば女の子になってから提督と艦娘以外に見られるのは初めてかも)

下着姿の自分を客観的に見ると結構ドキドキしてしまう自分が居た。

そして、男の子のほうを見る。すると案の定ガン見している。

その視線を感じつつ僕は新しい服を手に取り、手早く着替えを済ませる。

そして振り返ると相変わらず目が血走っていた。僕は苦笑しつつ話しかけた。

「あのさ、僕の身体見て楽しいの？なんなら脱ごうか？」

冗談交じりで聞いてみると顔を真っ赤にして答えた。どうやら恥ずかしかったみたいだ。

それから、少し雑談をした。ちなみに彼は妖精さんが見えるらしい。

「ねえ渉くん。妖精さん見えるなら提督でも目指したら？」

と言ってみたら意外にも興味を示してくれたらしく食いついて来た。

僕は、彼に提督を目指すための方法をいくつか教えた。例えば士官学校の入り方などだ。(渉くん、現在小3)

そういう話をしている内に雨も上がってきたため、別れを告げることに。

僕は渉くんをバレないように担いで近くの公園に戻したのだが、その時にある事実を知らされた。

それは、彼が鎮守府の近所に引っ越してきたということである。なんでも親の仕事の都合らしいが……まあ細かいことはいいだろう。

僕はこれからも仲良くして欲しいと伝えると嬉しそうにはしゃいでいた。

僕もまた、彼と一緒に遊ぶのがとても楽しみになっていたのだった。

### 33話 コスプレを…強いられているんだッ！

side時雨

(うーん、困ったなあ)

僕は今の状況に戸惑っていた。

今日は提督と書類を片付けた後、休憩していたのだが、その最中ある問題が起きてしまった。

「時雨、これ着てくれ」

と目の前に差し出されたものはフリルがいつぱいいたメイド服だった。僕が困惑していると、いつの間にも用意したのか、別の衣装がテーブルの上に並べられている。……………え？何この悪夢のような展開は？

「嫌だよ！どうして僕がこんな格好をしなくちゃいけないの!？」

僕はそう叫んで抵抗したが、提督はどこ吹く風である。まるで僕の言葉が聞こえていないかのように振舞っている。僕は思わず溜息が出た。そして、半ば諦め気味に言う。

「はあ、仕方がないね」

僕はメイド服を着ることになってしまった。……………ああ、何やってんだろ僕……………



僕は鏡の前で自分の姿を確認していた。……………うわ……………なんかすつごく惨めな気分だな……………はは……………ははは、と力無く笑いながら執務室へ戻る。

するとそこには先程のメイド服の他に色々な服装が置かれていた。猫耳尻尾付き、ゴスロリ、巫女服にスクール水着、チアリーダーetc……。

僕はその光景を見た時思った。

—もしかして、僕はこのままだとずっと着せ替え人形にされ続けるのではないか？ 僕はそんな事を思い、恐る恐る聞いてみる。

「ねえ、提督……一体これは……」

「いやまあなんだ。串本鎮守府の石川中佐から郵送されて来ててな」

「あの人また変な趣味が……というかそれなら提督自身が女装すれば良いんじゃない？」

……我ながらなかなか無茶苦茶なこと言ったと思う。自分でもどうかと思っただけど他に言いようがないんだよなあ。すると提督はその問いに対して真面目に答える

「いや、石川さんは秘書艦に着させたらしいから私も時雨に着せたくてだな……ダメか？」

その目は完全に子供モードで上目遣いになっていた。

しかもちよつとうるさくさせて来ていて妙に罪悪感が芽生えてしまう。……ずるいな、そんな表情されたら断れないよ。でも一応念のために聞いてみることにした。

「じゃあ提督はこの格好する？」

「いや、遠慮しとく」

即答した。

そんなやり取りをしていると部屋の外から誰かきた。どうやら青葉が来たようだ。

「っ!?!……時雨さん、撮りますね」

彼女は入ってくるなりいきなりカメラを構え、シャッターを押した。

僕は咄嗟のことで反応できずに呆然とする。

パシャツという機械音と共に写真を撮られてしまった。そして写真を確認した後に僕を見る、そしてニヤリと笑った。

「時雨さん、似合ってます！最高です！これは永久保存版ですね！」

「そ、そうなんだ……よかったよ。あはは……って良くない！消して！早く！」

僕の懇願に青葉は残念そうな顔をしながら言う。

「うーん。出来ればそうしたかったんですけど無理っぽいですよ。ほら、もうばら撒いちゃったので♪」

そう言って画面を見せてくる。僕は絶望の淵に立たされていた。

(終わった。もう僕お嫁に行けない)

そう思っていたら青葉が声をかけてきた。

「そう落ち込まないでくださいよお、きつと大丈夫ですから。それにしても……時雨さんのこの格好凄く可愛いですよ。もう抱きしめたくなってきました！」

「……提督、首吊ってきていい？僕もう疲れたよ」

「いいけどお前首吊っても死ねないだろ」

「それもそうだね。……はあ」

結局この日は日が暮れるまで僕は着替えさせられた。

そして後日僕の画像が大量に出回ってしまい僕は羞恥心に駆られる羽目になるのだった。

……数日後、大本営にて。

「神風」

「何ですか？坂本元帥？」

「これ着てみて」

坂本はそう言うのとメイド服を神風にわたした。

「……………何ですかこれ」

「いや、横須賀の荻原から送られてきたんだよ」



### 34話 まるでヘル○ング

side時雨

僕は今日、いつも通り提督の執務を手伝っていたのだが、仕事を終えた後休憩していたら明石に工廠に呼ばれたためそこに向かった。

するとそこで僕は信じられないものを見てしまう。そこにはアホみたいな数の装備が所狭しと積まれており僕は言葉を失った。

「……明石……これなに？」

「見ての通り新しい装備品です！趣味で作ってみたかっただけですよ  
ねえ」

「……へえー、すごい数だね……」

そう呟いて目の前にあるデンドロビウムモドキに目をやる。

（これは確かに……凄いなあ。てかヘル○ングに似たようなの出てきたよな……）

僕は素直に関心してしまった。これを作った本人は満足そうにしていた。

「時雨さん、これあげますね」

明石はそう言いながら12・7センチ単装砲と瓜二つな物を差し出してきた。僕は少し困惑しながらも受け取る。

「なにこれ？今の主砲と変わらないじゃん」

「いえいえ、これは12・7センチ単装砲型のレールガン、『12・7センチ単装電磁砲』です！弾速も威力も今までと段違いです！」

「試してくるわ」

僕は嬉々として勝手に戦闘海域へ向かった。早速、12・7センチ単装電磁砲を使用してみた。まずは重巡り級を狙う。そしてトリガーを引く。次の瞬間とんでもない速さで砲弾が飛んで行った。そしてその先にあったモノは一瞬にして粉微塵になった。

「oh……」

しばらく余韻に浸っていたら、どっかから短刀が8本ほど飛んでき

たので拳銃とレールガンで撃墜する。

そして後ろを振り返ると神風率いる第零艦隊の連中がいたのである。

彼女らはとてもいい笑顔をしていた。……なんだろう嫌な予感しかしないなあ。

まあ、どうせろくな事じゃなさそうなのだけど……とりあえず聞いてみる。

「な、何か用かい？」

僕は引き攣った笑みを浮かべながら聞くと神風はこう答えた。

「いや、大したことじゃないわ。ただ気晴らしついでに坂本元帥に反抗的なお前を粛清しに来ただけよ」

彼女はとてもいい顔をしながら短刀を構えた。……あーうん、はい。

とりあえずこちらも深海制御術式第2号解放して刀と拳銃を構える。……さあ、殺り合おうか。

……ちなみにこの間、約1秒程である。

この場にいた全員で戦闘になったが結果から言ってしまうと一応僕の勝ちで終わった。

戦闘開始から4分くらいたつたくらいに、神風を全力で蹴飛ばしてそこに腹パンを叩き込んだら口から血を吐きながら退散していった。

(なんかあっけなかったなあ……あいつら弱くなったのか？それとも僕が強くなったのか？)

正直こんなあっさり終わるとは思ってなかったため少し拍子抜けしてしまう。まあ別に構わないんだけどね。とりあえず僕は工廠に戻っていった。そして明石には感謝の意を述べておいた。

その後、執務室で提督に第零艦隊の連中との戦闘のことを話しておいた。

「ふむ、やべえな第零艦隊。まあ、これは大本営への大きな貸しになった。よくやったぞ」

「それは良かったよ」

「でもな時雨、やり過ぎるなって言っただははずだぞ」

「ごめんなさい……」

僕はしゅんとした顔をしながら言う。

彼は頭をかきながら続けて喋る。

「話は変わるが、最近艦娘の反乱が相次いでるだろ？私はあるには何か裏で暗躍している奴がいると思ってるんだよ。例えばヘル○ングのミレ○アムとか」

「ははっ……何言ってるのさ？提督」

僕は思わず苦笑いをする。だってあの漫画が実在するはずがないじゃないか。僕がへ○シングの主人公と同じようなことをしたことは置いておく。とにかく提督の妄言が凄すぎて笑えてくる。そんなことありえないのにな……

「そうだよな。まさかあるわけないよな。ははは」

「当たり前じゃん。全く何を言っているんだろっねこの人は」

事態の黒幕がミレ○アムみたいな連中であることを僕達はまだ知らない。

### 35話 時雨、駄犬になる。

side 提督

ある日の午後、私は執務室で執務をしていた。ちなみに時雨は自分の分を終えてどっかに行った。今は誰もいない。まあ、どうでもいいが。

「ふう〜終わった〜」

書類仕事をようやく終えた私は背伸びをしてそう呟く。そしてそのまま椅子に座りながら天井を見る。すると、ドアの方からノック音が聞こえてきた。

「はいどーぞー」

私はやる気のなさそうな声を出す。そしたら時雨が入ってきた。

「……なんでお前ここにいるの？ 私が困惑している間も彼女はニコニコしていた。そして口を開いた。

「ねえ、ちよつとお散歩行こうか」

「はあ？」

突然そう言い出す時雨。よく見たらこいつの首には犬がするような首輪がついていた。

「……え？ お前なにしてんの？ という疑問が頭の中でぐるぐる回る。混乱して言葉が出てこねえ。とりあえず会話を試みることにする。  
「あのさ……その格好は何か？ 私は別にそういう趣味は持ち合わせていない」

「……僕を提督の犬にして欲しいな」

おい待てコラ。なにド変態みたいなこと言い出してやがる？ しかもなんか嬉しそうにしているじゃねえか。そもそもどうい風吹き回しだよ。私は呆れながらも聞く。

「一応聞いとくが……何故そのような発想になったのかな？」

「実は僕……もう我慢できないの……」

顔を赤らめながら恥ずかしがっている。……ダメだこいつ早く何とかしないと（使命感）。このまま放置していたらヤバいことになりそうな気がしたので、ここは一つ優しく対応することにした。まずは理由を聞き出す。

「はいはい、話なら聞くからちゃんと言ってみな」  
「……」

時雨は無言で懐から写真を取り出す。

「……この写真なんだと思う？」

彼女はその写真を私に見せた。……あ。

「これ、昨夜提督が夕立と犬プレイをしているところを青葉に依頼して隠し撮りしたもののなかだけどき……僕とやっているときよりも夕立を抱いている時の方が表情豊かだったんだよね……」

「い、いやーそれは気のせいだから！」

いかんいかん。思わず口調を崩してしまった。私はなんとか誤魔化そうとするが彼女は許してくれなかった。

「今から、服を乱れさせて憲兵の詰所の前でこれを掲げるね？」

時雨はとてもしつこい笑顔で言う。……ああ、もう終わりか。こいつに逆らうとロクなことにならないからなあ。私は観念して彼女に要求を飲む旨を伝える。

「わかった、降参だ。で、私は何をすればいい？」

「提督と散歩がしたい」

「……はい？」

「提督と一緒に散歩に行きたいんだ」

彼女はとても可愛い声で言った。……まあ、たまには良いだろうと思いは了承する。すると時雨の顔がパアツとなり嬉しそうにする。なんかこういう仕草をされると普通の子にしか見えない。中身のおっさんはどこに飛んで行ったんだか。

とりあえず彼女の首輪にリードを付ける。

私は彼女を連れ外に出ると、何人かの民間人に出会ったが皆微笑ましそうに目をしながら通り過ぎていく。……やばい恥ずかしくなってきた。そんなことを思いながら散歩をしていた。しかし彼女は全

然気にしていなかった。

私は彼女に疑問をぶつける。

「時雨、お前なんでこの状況で落ち着いているんだよ」

彼女は首を傾げて言った。

「別に？僕はこう見えても結構メンタル強い方だし慣れてるよ？」

「……まあ、そうなるな。とりあえず面倒なので黙っておくことにした。」

それからしばらくして彼女は急に立ち止まる。私は「どうかしたのか」と言う前にいきなりしやがみ込んだ。

そして自分のスカートに手をかけ捲ろうとする。咄嗟の判断で手を掴んで止める。

「お、お前外で何をするつもりだ!？」

焦った顔をしながらそう問うと、彼女は無邪気な笑顔を浮かべながらとんでもないことを口に出した。

「犬が服を着てるのは、おかしいと思わないかい？だから脱ぐね？」

「待てい!!」

慌てて彼女の手を止めさせる。

「そういうのはせめて鎮守府でやってくれ!!ここだと流石にマズイだろ!？」

「そっか、じゃあ後でね」

えへへと笑いながらそんなことをのたまいやがった。

その日の夜、鎮守府にて。

「あつ……はあ………僕、外ですっぽんぽんになっちゃった……」

「……」

「ねえ…提督。僕を見てよ。もつとよく見てよ」

「……」

「ねえってば。ねえ………ワォーン（意外と上手い遠吠え）」

「……」

時雨が犬になった。もうどうしようもないくらいに頭が狂ってし

まったらしい。

「ぽいぽーい」

「!?!」

私達が声の方向を見ると夕立がいた。

「木の裏にかくれろ! (小声)」

時雨を急いで近くの木の裏に隠す。夕立はこちらに向かって歩いてくる。

「ん?」

「ど、どうしたんだ?」

「時雨を探してるんだけど……どこにもいないっぽい」

「まずい、バレたか?」

「そ、そうか。私は知らないぞ」

「わかったっぽい」

そのまま立ち去って行くかと思っただが……なぜか彼女はその場で止まった。何か考えているようだったが、すぐに私の方を向いた。

「提督さん。その手に握ってる紐はなあに?」

「しまった。リードを握ったままだった……。」

「……もしかして……」

「まずい、まずいまずいまずい。」

「隠れて犬飼ってるっぽい!?!」

「え!?!」

「あ、ああ。じ、実はこっそりな……」

「良かった。うまく誤魔化せそうだ。」

「だが、安心したのは束の間だった。」

「夕立にも見せて欲しいっぽい!」

「やべえ……!」

「ち、ちよっと待った!」

「どうしたの?」

「いや、その……」

「？」

side 時雨

……裸に首輪姿。僕のこんな変態みたいな姿みたら……夕立は  
どんな反応するのかな……。

今、夕立と僕を隔てるのは木一本だけ……提督に握られたリードは  
僕に繋がれている……夕立の目の前で……。

ドキドキが止まらないよ……ああ、興奮しすぎておしっこ出そう  
……。

……出したくなってきちゃった……。

……犬だから……いいよね。

side 提督

チヨロチヨロチヨロチヨロ

「?!」

「おしっこ?」

……ちよっ!時雨さん!?……あ、そうだ!

「ゆ、夕立、実を言うところの犬すごく怖がりだな」

「ぼい?」

「……今も怯えておしっこを漏らしちゃったんだよ」

即興で作った話だが何とか誤魔化せそうだ。

「そんなに怖がりさんなの?」



「ああ、そうだ。だから、見せるのはまた今度ってことにしてくれないか？……」

「ぽい。わかったっぽい。ごめんねワンちゃん……」

「あと、これは秘密にしてくれ」

「わかったっぽい」

夕立はそう言っただけで回れ右して帰っていった。

よし、なんとかあったか。時雨の方を見る。

そこには――

「えへ………あは………♡」

「」

――顔を真っ赤にして大量の液体を流す全裸の駄犬がぶつ倒れていた。

私は彼女を抱え、大急ぎで執務室に帰還した。幸い近くに人はおらず誰にも見られることは無かった。

side 夕立

ふふふ、提督さんも時雨ちゃんもお馬鹿さんっぽい。

夕立改三の知覚能力舐めないでほしいっぽい。

二人の気配なんてばっちりわかってるっぽい。

とりあえず眠いから寝るっぽい！

### 36話 ああ、そういうことだったのか

side時雨

なんやかんやあつて提督と大本営に行く日になった。  
今日はちゃんと服を着ている。

まあ、さすがの僕でも羞恥心ぐらひはあるからね。

……ただやっぱり首輪だけは付けっぱなしにしている。なんだかんだ言つて結構お気に入りになったからだ。

「そろそろ着くぞ、時雨」

「うん、分かった」

車を出て少し歩き、建物に入る前にふと思った。

「そういえば……何でわざわざ車で来たんだい？電車を使えばいいじゃないか」

すると提督は苦笑いしながら言った。

「お前、自分が痴女みたいになつてること気付いてないのかよ……」

……あ。確かに……今の僕は服着てるけど……それでも十分ヤバい奴に見えるもんなあ……。それに提督が隣に居るからつて安心しきつてた。……反省だな。

そんなことを考えながら、僕たちは建物の中に入った。

「元帥が来るまで時間があるから、その間にお前が前に言つてた大本営のデータベースのなんちゃらを見に行こう」

「そうだね」

僕たちは階段を上がり2階の廊下に出る。そしてそのまま一番奥の部屋に歩いて行つた。部屋の前には警備兵が立っているが提督の姿を見るとすぐに敬礼をする。

「苦勞」

彼が軽く言うのと警備兵はビシツとした動作をして、扉を開いた。

僕たちが入ると同時に、後ろのドアも閉じる音がした……退路を塞いだつもりなのか？ 中には10人程度が入れるスペースがあり、壁一面にモニターと端末が設置されていた。部屋の中心に机が置かれているだけで特に目立つ物は無かつた。

とりあえず、端末の検索欄に夢で出てきた『文章■■■■■■■■■■』を入力する。すると検索結果が表示される。……あつた。これがそれか……。

画面には大きく『警告』の文字。どうやらかなり重要なデータであるらしく嚴重に注意事項が書かれているようだ。……ん？ この注意書きって……どこかで覚えがあるような気がする……。

とりあえず無視して続行する。

『警告』：これ以上ページを閲覧しないでください！！』

『警告』：これ以上ページを閲覧しないでください！！』

『警告』：これ以上ページを閲覧しないでください！！』

くどいくらいに警告メッセージが表示され続けている。だが僕は一切の躊躇なくページを開いていった。

『警告はした。後悔するぞ、私みたいに』

そしてその下には、

『私は貴方を罵り、蔑もう。だが、貴方の好奇心と覚悟に賞賛を送ろう。そして賞賛の代わりとして見せてやろう。この戦争の真実と網走鎮守府の最後を。もしも既に警備兵共が乗り込んでいたり、読む途中で乗り込んできたとしたら「今、杉野中佐のメッセージを読んでいる所なんだ」とでも言えば彼らは少しだけ待ってくれる。多分』と書かれていた。

……杉野……？まさか……!! 次の瞬間画面が大きく切り替わり、一枚の資料が大きく映し出された。

資料に書かれた文字を読んでいく。何故か頭が痛くなる。吐き気さえ感じるほどに気持ち悪い。……しかし僕の手は動き続ける。その文を目で追うのを止められなかった。

side 提督

時雨が文章を読み始めて30秒ほど経った時、警備兵が扉から銃を向けてきた。

「今、杉野中佐のメッセージを読んでいる所なんだ」と言って待ってもらうことにした。

しばらくして、時雨が口を開く。

「……ああ、そういうことだったのか」

「……どうということだ？よくわからん。

「何がわかったんだ？」

時雨はしばらく無言のまま固まっていた。……やがて彼女は顔を上げた。彼女の右の瞳は……憎悪と哀しみの色に染まっていた。

「おい、終わったな？じゃあ射殺するから抵抗するなよ」

警備兵の一人がそう言う。だが、警備兵がマシンガン撃つよりも早く、時雨のメツエライが火を噴いた。

ちなみに普段メツエライに装填している弾は装弾筒付徹甲弾（APDS）らしいのだが、今日は何故か榴弾（HE）なので、まあ、なんて言うか、警備兵たちはよく燃えた。……警備兵たちが哀れに見える。

「ア”ア”ア”ア”アアアアア!!!」

……なんか叫んでるが、放つとごう。

私は気にせず話を続けるように催促する。

「分かった……全部話すよ」

そう言っただけで彼女は再び口を開き、語り出した。

「……この戦争の黒幕は坂本元帥だ」

「どうということだ？」

「そのままの意味だよ。坂本は深海棲艦を操って、深海棲艦と人類との戦争を引き起こさせた。そして、彼の思惑通りに事が運ばなければ……自分の身内すら容赦なく殺した。最初にこの事実気づいたのは何代か前の元帥である山内元帥。彼はどうにかして坂本の動きを止める為に手を打った。でも、山内元帥はその後暗殺された。それから、横須賀の青山少将とか、大湊の中川少佐とか、山内の後継の清水元帥とか……色んな人達が動いてくれたんだけど……どれも上手くいかずに、みんな殺された」

淡々と喋っているが声に悲しみが含まれていることがハッキリとわかる。

そして彼女は悲しそうな顔をしていた。

「で、清水元帥が死ぬ3日前に「後は頼んだ」的なニュアンスで全部教えられたのが、僕の前世の杉野時雨中佐なんだよ」

……そういうことなのか……。

……それにしてもコイツがこんな表情をしているのを見るのは初めてだ。なんか泣き出しそうさ。

「あと、このページを書いたのは前世の僕だ。多分、僕の性格上残さなきゃいけないと思って書いたんだろう。僕が死んでもこれに向き合えるような人が読んでくれるだろうと予想を立ててね。だから、僕が死んだ後に読まれることを前提で書いている」

なるほど……。

俺はふと思ひ、画面の端の方にあるボタンに目をやる。……これ、押せばいいんじゃないか？……だが俺がボタンを押すよりも先に画面が切り替わり別の資料が現れた。どうやらここから先はパスワードが必要のようだ。

「パスワードは？」と尋ねる。

時雨は「□□□□□□□□」と答える。するとパスワードを入力しろというウインドウが出てきた。

俺はそこに数字を打ち込む。

するとまた資料が表示されるが……これはなんだ？

時雨に聞くと、網走鎮守府の戦果及び被害が書かれているとの事だった。

資料をよく見ると、最後の1週間の被害だけ異常に多い。

他の部分はそこまでではないが……ここだけ、2047年深海大侵攻の時期だけ不自然に多いような気がする。

「これはね、僕は坂本が裏で糸を引いていると思ってるんだ……」

「つまり、深海大侵攻はお前を殺すためのカバーストーリーだと言うことか？ いや、待てよ、他の知った連中は本人だけ暗殺したんだよな。なんでお前は鎮守府ごと消されたんだ？」

「……多分、一部の艦娘達に話しちゃったからだろうね。……は

はっ、僕のせいだよな。僕が、僕が一人で死ねばよかったんだ……」

時雨はこちらを見て笑った。その笑顔はどことなく痛ましい。

……その目から一筋の涙が零れる。

「ごめん、取り乱しちゃって」

時雨は涙を拭き、話を切り替えるようにそう言った。

私は資料を見ていて少し疑問を抱いた。

「なあ時雨、轟沈数より網走鎮守府に所属していた艦娘の数の方が多くないか？全滅したと聞いているんだが……」

そんなこと言いながらながら時雨を見ると……あ……ヤバ。完全にキレてる時の顔してる……。しかもこっち睨んでるし……。

「……ああ、網走が全滅する前に脱走したり、行方不明になった子が居たんだよ。多分嫌な予感でもしたんじゃない？」

すごい不機嫌そうな表情で返してきた。

「それより、そろそろ時間じゃない？坂本の所に行こうか」

「……わかった」

「それじゃあ、僕の後についてきて」と言って部屋を出る。

「おい、ちよつと待ってくれ」と警備兵が止めるも無視。そのまま彼女は部屋の外に出て行った。

私もその後ろについていくが、時雨は何も言わなかった。

しばらく歩くと、坂本元帥との約束の場所である会議室に着いた。

中に入ると、串本の石川中佐や、舞浜の齋藤少将、館山の東郷少佐がいた。

「石川さんも呼ばれたんですか？」

「ああ、おかげでもっとハゲそうだよ」

そう言っ頭を触り出す。

しばらくすると会議室に2人ほど入ってきた。

「っ!お、お前はー!」

時雨が驚く。私も驚いた。

「いやあ、お待たせしちやっみたいで(笑)」

坂本元帥が笑いながらそう言う。だが、私と時雨の視線はその右後ろの人物に集中していた。

「お前……なんでここにいるんだよ!?!」

「よお、久しぶりだな。元気してたか？」

坂本の右後ろにいる人物とは、我らが深海提督、西馬だった。

### 37話 一般提督から見た時雨たち

side 立花中佐

私の名は立花桜。柱島鎮守府の提督だ。

今日は報告のため大本営に来ているのだが、会議室に誰かで誰かが口論になっているのを見つけて現在覗き見中だ。

中には坂本元帥や、知らない人(西馬)、横須賀や舞浜などの提督と横須賀の提督の秘書艦と思われる時雨(何故か犬の首輪を装備)がいる。

私はつい気になってスマホで動画を撮り始めてしまった。

「よお、久しぶりだな」

知らない人(ここからは西馬と呼称)が提督たちにそう言う。

それと同時に元帥と西馬は提督たちに近付いていく。

「それ以上近付くな!」

横須賀の提督がそう言う。

「誰と面面向かっているとと思っている!グダグダ抜かさず話を聞け!クソガキ共!」

元帥が怒鳴る。それに横須賀の提督と時雨は黙ってしまった。

「まずは謝罪だ。お前らが俺に復讐したいのは分かる。俺はその恨みを買った覚えがある。だがそれは、今は水に流してくれ」

そう言うのと西馬が頭を下げる。

すると時雨と横須賀の提督は困惑し始める。

「実を言うとな、最近立て続けに起きている艦娘の反乱の原因がわかったんだよ」

元帥が続けてそういう。……マジですか。

「……どういうことだ?」

時雨が訝しげに聞く。

「艦娘が元帥にとつていい態度じゃない気がするが……まあ、大目に見てやる。この事態の元凶はロシアだ」



「……は？」

元帥の言ったことがよくわからなかったのか西馬以外の者たちが間抜けな声を出す。かくいう私も同じ反応をした。……ロシア？なんでここでロシアの話になるんだ？

「お前ら、深海棲艦の正体を知ってるか？」

唐突な質問だったが誰も何も答えない。誰も知っているはずがない。

「あれは旧ソ連が開発した生体兵器、『祖国超兵』が野生化した奴らだ」  
なんだそのめっちゃ左な名前は。というかロシア製ならなぜ日本語を話しているんだ？

……あ、翻訳器かな？

「まあ、そんな事は置いといて、艦娘の反乱の原因を話そう。……あいつらは祖国超兵を作り、教導し、編制し、現在も運用する『特務戦略技術軍』通称『ソ連軍最後の遺産』によって洗脳され、反乱に見せかけられた、と俺は考えている」

「な……」

提督たちが絶句する。そりゃあいきなりソ連とか出てきた上に艦娘が洗脳されていたなんて言われても信じるのは難しい。

一方時雨は合点がいったという風な様子だ。

「ああ、どうりで奴らの瞳が赤かったわけだ」

「ああ、あと、あいつら体内に爆弾があるから殺さずに無力化する方法がない。この前反乱を起こした艦娘を鹵獲したら爆発して数人の死傷者が出た」

さらっと怖い事言うなあ……。

「ところで元帥、少し聞きたいことがある」

時雨がそう言う。

「ん？なんだ？」

「お前は、黒か？」

「……知ったような口を利いてくれる。その様子だと記憶を取り戻したようだな。おかえり、杉野中佐」

「……なんで正体バレてるのかは察したよ。……久しぶりだな、坂本

少将」

「今の俺は元帥だ、艦娘モドキ」

時雨と元帥が睨み合う。時雨が杉野ってどういうこと？

「……お前は今まで好き勝手やってきた。そして今も提督を侮辱した」

時雨が懐から拳銃を取り出し、それを元帥に向ける。

「お前（ここ）から生きて帰れると思うなよ。ぶち殺すぞ、フィクサー黒幕」

「おおこわいこわい（SCP）こんなに恐ろしい番犬に銃を突きつけられては話もできまい。ならばこちらにも考えがある。拮抗状態を作るとしよう」

元帥はどこ吹く風のように涼しい顔をしている。

「神風え!!!」

元帥が叫ぶと会議室の天井をぶち破って元帥直属の特殊部隊、第零艦隊の旗艦、神風が降りてきた。

「元帥の暗殺を目論んでいる不屈き者はここですか!?!……やっぱお前か!」

なんか時雨にリボルバーを向けながら怒鳴り始めた。

「……ほう」

時雨と神風は互いに殺気を出しまくりながら少しずつ近づいていく。

「ちよっ!お前ら落ち着け!」

「時雨!お座りだ!」

西馬と横須賀の提督が2人をなだめようと必死になっている。元帥はニヒルな笑みを浮かべているだけだ。

「元帥!さすがにやりすぎでは!止めないと大変な事に!」

「……面白そうだからしばらくほっとこう」

「おい!」

そんな事を言っていたら、ついに双方の距離が1メートルほどになり、互いに武器を構える。どちらもすごい殺人的な笑顔である。……あれ?今私とんでもない修羅場見ちゃってない?ヤバくないこれ?

「時雨！やめろ！お座りだ！」

「さあやろうぜ？神風」

「ハハハ、ぶっ殺してやるわよ深海棲艦！」

横須賀の提督がの叫びも虚しく時雨vs神風で開戦しようとしたその時、横須賀の提督が「クソツ！」と悪態をつきながら拳銃で時雨の頭を吹き飛ばした。……え？何してんの？

頭がえらいことになった時雨は血を周囲にまき散らしながら神風の方に力なく倒れた。……ちよつとまで、どういう状況？頭がこんがらがって来た。

「何やってんだよお前!?!」

西馬を除く全員が横須賀の提督に詰め寄る。

「……何って、躰ですけど」

「躰で殺してどうするんだよ!?!」

「殺してどうするかって？いや、あいつは一度死んだだけで死ぬようなヤワな生き物じゃないぞ。なあ、西馬」

「まあ、そうだな」

西馬が腕を組みつつそう言った。……どういう事？

「ほら、そろそろ元に戻るぞ」

横須賀の提督の言葉を待っていたかのように倒れていた頭の傷口が逆再生されるかの如く塞がり始める。数秒後には完全に治った時雨がいた。

バケモノすぎるでしょ。普通の艦娘そんな事できないよ？

「時雨、少しは頭冷えたか？あと、私の命令は無視するなよ」

「チツ……。分かったよ」

「わかったならいいぞ」

そう言うと二人は仲睦まじく握手していた。なんだこの夫婦は。

「さあ仕切り直した。とりあえず、これからの方針を相談しよう」

元帥が話を戻した。

「だが、無関係なオーディエンスがいるのは邪魔だからな。立花中佐、

「ご退室願おう」

やばい！バレてた！

時雨と神風は私に銃を向けている。

私はその場から逃げ出した。

「あつ逃げた」

おまけ 会議後の提督たちと時雨

齋藤「いやあ、なんて言うか、お前マジで杉野だったんだな」

時雨「まあね」

東郷「いや、お前ほんとに杉野か？あいつが生まれ変わったにしてはいい子すぎんだよな」

時雨「僕は正真正銘、杉野時雨中佐だよ。ね？東郷元大佐」

東郷「……やっぱお前杉野だな」

### 38話 呉越同舟って知ってる？

side時雨

大本営でいろいろあった数日後、僕は第1艦隊を率いて第零艦隊と共に特務戦術略技術軍の拠点の一つである南樺太の大海泊にあるコルサコフ基地に乗り込んでいた。ちなみに現在、僕たちはコルサコフ基地内部に突入して、敵と交戦中だった。……まあいかなれば制圧戦かな？今は地下に向かってる。

敵は祖国超兵と思しきミレ○アムの吸血鬼みたいな挙動のやつが何人かいたが、他は普通の人間の兵士だった。

対深海棲艦の訓練でも受けているのか妙に手強い。ただ、それでも所詮は人間の範疇であり、そこまで脅威ではなかったが。……人間にしてはなかなか鍛えられた身体をしている奴も居たな。アー○ードあたりに好かれそうなやつだった。

そんなこんなで地下施設への入り口を見つけた。扉を開けるとその先では数十人の超兵と思しき連中が待ち構えていたが特に気にすることなく戦闘を始めた。

「よし、神風、行くぞ。準備しろ」

「私に指図するな、艦娘モドキ」

「はっ、言ってる雑魚が」

約30秒で殲滅し終わった。あれ？こいつら戦艦ル級並みの戦闘力だって聞いてたんだけど？

まあいいか、早く行かないと元帥や提督に何を言われるかわかったもんじやない。さっさと済ませて帰ろうと思えば、僕は次のエリアに向かうため扉のスイッチを押したとき、背後から神風が短刀をぶん投げてきた。

「つちよ、お前ここでやるのはヤバイだろ。共同作戦ではせめて停戦しようぜ？」

神風はニヤリと笑い、短刀の柄を口にくわえる。

「安心しろ。誰もここにはいないさ」

そう言って神風は短刀を投げてくる。……危ねえ!! もう少し遅かったら首刺さって命のストック1つ減ってただろこれ!

なんちゆうことすんのよ!?!というツツコミを脳内で行う暇もなく、神風は足の裏にある2本の短刀を引き抜いてこちらに向けてくる。

僕は南部拳銃とメツエライを抜いて応射しつつ、後方に下がって神風との距離を取る。神風は短刀で銃弾を防ぎながら距離を詰めてくる。

そしてある程度距離を取った後、急停止して僕の顔に向かって蹴りを入れてきたが、ギリギリ顔をずらすことで直撃は免れた……と思っただが、頬がざつくりと切れていた。

マジ? お前のその脚どうなってんだよ。

「っ! 深海制御術式第2号3号、解放」

僕は瞳を赤く光らせ髪が白くなり、普通の艦娘なら失神するレベルのオーラの的なものを発する。自分でも中二病的だなど思っている。でも仕方ないのだ。作者が中二病だもの。

「はあああ!!」

僕は神風の懷に飛び込んで、鳩尾に向かって全力での右ストレートを放つ。

神風はそれを同時に殴りかかって相殺しようとしたが衝撃に耐えられず後ろの壁に吹っ飛んだ。

……あ、まずい。やり過ぎたかも……。大丈夫かなあいつ? 生きてると良いなあ……。

そんなことを考えながら吹き飛んだ方向を見る。なんか壁に埋まっていた。

まあ、大丈夫だろ。そう思い僕は神風をおんぶして地上に戻った。……軽いなコイツ。

地上に上がると第零艦隊(総勢17体)の皆さんがとてもいい笑顔でお待ちだった。うん怖いね、これは流石に。

しばらくしたら地下から夕立が戻ってきたので2対17の抗争を

始めた。結果？言うまでもないよ。

僕は少し悪い事を思いついたので、第零艦隊の時雨零式はオモチカエリすることにした。

フルボッコにされた第零艦隊の連中を放置し、時雨零式を担いで横須賀鎮守府に帰投した。

### 39話 時雨、ロシア出張。

なんやかんやあつて横須賀に帰ってきた。

報告は他の娘たちに任せて、僕は誘拐オモチカエリしてきた時雨零式を拘束し、手足を動けないようにして工廠に連れて行った。……まあ正確に言えば工廠にある『ジンカクイレカール』の椅子だが。

「ほら時雨、さっさと目を覚ませよ」

僕はまだ気を失っているであろう彼女を軽く叩く。すると彼女の目はゆっくりと開かれた。彼女は自分の状況を確認するように首を動かし、僕の方を向くと睨み付けてきた。おおこわいこわい。

「……僕に何をするつもりなんだい？言つとけど変なことをした暁には……」

僕はポケットの中からスタンガンを取り出し、スイッチを入れると放電音を響かせる。それを見た時雨は怯えるような目で、

「ごめんなさい」

……意外とチョロいな。あと普通に可愛いと思うのだが。さすがは時雨と言ったところか。

そんな事を考えながら僕も『ジンカクイレカール』の反対側の椅子に座る。

「明石さん、やってくれ」

「はい」

「……へ？え？え？何するの？」

困惑している彼女に微笑むと、

「お前は僕の嫁の入れ物だ」

というわけで『ジンカクイレカール』使つて僕の二重人格の嫁時雨と時雨零式の人格を入れ替えてやった。

その後、精神世界で防空棲姫と共に時雨零式をフルボッコにして消滅させてやった。

目を覚ますと、嫁時雨（ここからは網走時雨と呼称）の方が先に目



を覚ましていたようで、僕の前に突っ立っていた。とりあえず変成魔法で時雨零式の『時雨っぽいけど時雨じゃない姿』から網走の時雨の『寒冷地仕様の時雨の姿』にしておいた。

「提督ー」

網走時雨はそう言って僕に抱きついてきた。見た目がほぼ同じの艦娘同士が抱き合っているのはなんかシユールだなとは思いつつも、彼女と現実で再会できたのはとても嬉しかった。だから僕は優しく彼女を受け入れ頭を撫でた。

その後、僕は提督に彼女を紹介すべく執務室へ向かった。途中、彼女が腕を絡めてくるから胸の感触が直に伝わるわ柔らかいわ幸せすぎるわもうどうしようかと思った。

そんなこんなで着いた執務室の扉を開けると提督が執務を終えて本を読んでいた。

とりあえず網走時雨の紹介をしておいた。

僕達が話し終わる頃に電話が鳴ったので提督が出る。しばらく話すと彼は僕に視線を向ける。僕は嫌な予感がしたのでその場を離れようとしたが遅かったようだ。

「時雨、ロシア行ってこい」

「はー?」

「いやな、元帥が特務戦略技術軍のロシア本土の拠点を諜報ついでに襲撃してこいって言っててな」

「いや、やなんだけど。突っぱねてくれない?」

「すまん、行ってくれないとないと私の首が飛ぶ」

僕は彼の頼みを断ることもできず、ロシアへと行くことになった。ちなみに網走時雨は「仕事なら仕方ないよね」と納得していた。……ああ、行きたくない。

とりあえず、旅のお供が欲しかったので防空棲姫を取り出して見た目を涼月にして涼月と呼ぶことにした。

数日後、僕は涼月と共にウラジオストクへと向かった。

第三章 (一応) 完

おまけ

網走時雨

涼月

転しぐ改 外伝 零 網走時雨編  
網走時雨編

僕が建造された頃の鎮守府はつきり言つて最悪だった。

艦娘をまるで道具のように扱い、そのくせ自分達の欲を満たすために僕達を使い潰した提督と、そんな提督に媚びへつらう役立たずの艦娘達。

そんな環境で毎日毎日無茶な作戦に駆り出され続けた結果、仲間たちは次々と沈んでいった。

僕は残った仲間たちと生き残るために死に物狂いで戦った。そして提督が逮捕されるまで何とか生き残ったけど、他の仲間達はほとんどが轟沈してしまった。

生き残れたのはたった十人くらいだった。

「……みんな」

今でも目を閉じれば仲間の最期の姿が瞼の裏に浮かんでくる。

ボロボロになって沈んでいく仲間たち。もうこれ以上誰も沈ませないって決めたはずなのに、またこうして同じことを繰り返してしまった。

『助けて！死にたくない！』

『誰か……誰かあつ!!』

『うわあああつ!!痛いよおつ!!』

『時雨え！助けてえ!!』

沈んで行くみんなの悲鳴が耳から離れない。

どうしてこんなことに？なんでみんな死ななきゃいけなかったんだろう。………答えなんてわかりきっている。

全部あのクソ提督が悪いんだ。あいつさえいなければこんな事にはならなかったはずだ。

そう考えると腸が煮えくり返る思いだ。

でも、それはただの八つ当たりだってわかっている。だからといって許せるわけじゃないけれど。

「……時雨？」

「……ごめんね。ちよつと考え事をしてたんだ」

いけない。今は目の前の事に集中しないと。

「それじゃあ行こうか。案内するよ」

「ああ」

僕は今、新しく着任した杉野という提督に鎮守府を案内している。偶然か運命か、苗字が僕の最初の艦長と同じ人だ。多分偶然だろうけど。

彼はなんて言うか、無気力でなんか残念な感じの雰囲気を持っていて。とても軍人には見えない。……正直少し頼りなく感じる。でも悪い人ではないと思う。さつき会ったばかりの人をこう思うのも変だけど。それにしてもこの人は本当に艦娘を大切に思ってくれているようだ。僕達のことを兵器ではなく人として見てくれていることが何よりも嬉しい。

彼の言葉を聞いたとき、思わず泣きそうになったほどだ。

彼ならきつとみんなを助けてくれるかもしれない。そんな期待を抱いてしまう。

「ここが執務室だよ」

「ふむ……なにこれ」

提督は前任の提督の巨大な肖像画を見て固まっていた。気持ちはよくわかる。

僕もこの絵を見たときは何とも言えない気分になったものだ。

「なんでも『この世界で一番偉大な功績を残した人物(自分)』らしいよ」

「やばいだろwww」

その後、二人で笑いながら執務室に入った。

数日後、僕は提督と工廠に来ていた。理由は勿論、艦娘の建造を行うためである。

僕はこれから新しい仲間を迎えに行くための準備をしているのだ。「提督、建造に使う資材の量を決めて欲しいんだけど……」

「んー？どれくらいがいいんだろうねえ」

提督はあまり興味が無いのか、適当に資材を投げ入れ始めた。

慌てて止めようとしたが既に遅く、かなりの量の資材を投入してしまっただけだった。

「あつ……まあいいか」

よくはないと思う。しかしここで文句を言うと怒鳴られそうな気がしたので黙っておくことにした。……大丈夫かなあ。

それからしばらくして工廠妖精さん達が慌ただしく動き出した。どうやら完成したみたいだ。

僕達は出来上がったばかりの少女の前に立つ。すると彼女はゆっくりと目を開いた。

「翔鶴型航空母艦2番艦、妹の瑞鶴です。提督さん、よろしくね」

「ああ、よろしく頼む」

これが僕達と後に何度も敵対することになるアホドリ瑞鶴との出会いだった。

提督と共に殺されて、彼の二重人格として転生してもう2ヶ月で2年経つ。

早いものだと思う。

提督はあの頃とはだいぶ変わってしまった。

心のどこかが壊れてしまった。

人を殺してもなんとも思わなくなってしまった。

悲しくても涙すら出なくなってしまった。

提督は横須賀鎮守府の時雨に転生したんだけど、いろいろあって横須賀の提督である荻原さんとラブラブになっている。僕としては複

雑な心境だ。

僕は提督が好きだったから。

でも彼が幸せになれるならそれでいいと思っている。

ただ、提督が荻原さんとやるたびに嫉妬してしまう。そしてその度に僕は提督との思い出を思い出してしまう。

提督が僕を抱きしめてくれた時の温もりとか、寝起きのぼけつとした顔だとか、頭を撫でられたときに感じる安心感だとか、とにかく提督と一緒にいる時間が大好きだった。

もし神様がいるならお願いします。どうかもう一度だけ現実で提督に会わせてください。

そしてその願いが叶ったのか、僕は新しい体(時雨)を手に入れた。これでまた提督に会うことができる。そう思った瞬間、心の底から喜びが湧き上がってきた。

提督を見つけた瞬間抱きついた。提督は最初驚いていたけど、すぐに優しく微笑んでくれた。

「久しぶり、提督」

「うん、久しぶりだね。会いたかったよ、時雨」

提督は優しい声で言ってくれる。それだけで胸が一杯になる。

やっぱり好きだ。この人が大好きだ。

今度こそずっと一緒にいたい。

……なのに、どうして君は、先に逝ってしまうの？

「っ!?……はあはあ、夢か……」

嫌な夢を見てしまった。まだ夜中なので部屋は真っ暗だ。

提督はロシアの方に出張しているだけなのに、変な想像をしてしまった自分に呆れてしまった。

……そうだね、提督が僕を置いて死ぬはずないもんね。

「……ふふっ、おやすみなさい、提督」

僕はそう呟いて眠りについた。

## 第四章 時雨の奇妙な出張 40話 時雨のロシア出張（旅行）

### side時雨

「え、今日はですね、ロシアのウラジオストクにやって来ました。目的はシベリア鉄道沿線にあるいくつかの特務戦略技術軍の基地に潜入or襲撃して資料を回収することらしいです」

「いやあのマスターなんで虚空に向かって話してるんですか？」

涼月はそう言いながら僕についてくる。うん、結構可愛い。

「ん？ああ、気にしないでくれ。ただの独り言だ」

「アツハイ」

そう言っ僕達は歩き出す。そういえば僕達、ロシア語なんてほぼわかんないんだよな。

仕方ないんで路地裏にいたロシアンマフィアと思しき2人を早撃ちで射殺して、篡奪で言語能力（ロシア語）を2人分奪って供与で涼月に1人分渡した。これで言語問題は解決、ついでに社会の癌が2人減った。やったね！

ちなみに南部拳銃で早撃ちした時、涼月に「どうやったらそんなに銃速く抜けるんですか」と聞かれたが「手首に亜空間のポータルを展開してそこから拳銃を取り出している」と説明するとなんかドン引きされた。なぜだ……。

まあ、なんやかんやしている内に日が暮れてきたので、近くの酒場に入った。

カウンター席に座るとバーテンダーからウオツカの入ったコップを受け取る。僕は一気にそれを煽り喉越しを楽しむと「おかわり下さい」と言っ注文。

すぐにお代わりがきてまた一気飲み。ふう……うまいぜ……。

4杯目を半分ほど飲んだ頃だろうか、よくわからんおっさんが「な

んでこんな嬢ちゃんが酒飲んでんだよ」と言ってきた。

そして何故かどちらが多く酒を飲めるかという競争をする羽目になった。

おっさん曰く「嬢ちゃん、酒を舐めてんじゃねえよ。こうなったらこの、故郷では誰にも負けない大酒飲みだったこの俺が教育してやる！嬢ちゃんが勝ったら金は全部俺が払う。俺が勝ったらやらせろ！」らしい。

僕はそれに承諾し、勝負が始まった。結果は……おっさんは意外と善戦したが僕が勝った。

「や、やるじゃねえか嬢ちゃん……名前は何？」

「ナンパかな？まあ、シグレ・スギノさんだよ。一応日本人」

「シグレ……そうかい、いい名前だな……」

おっさんはそのまま倒れると寝息を立てて眠り始めた。うくん、僕にはそういう趣味はないからパス。とりあえずその辺に転がしておきました（酷い）。

その後適当に飯食ったりしながら夜を過ぎすと、朝になっていたので僕はウラジオストク駅に向かった。そこで切符を買って列車に乗り込んだ。予算の関係で2等車に乗った。おい大本营、金くらい出せや。

そして発車してからしばらくして僕は気づいた。涼月がめっちゃ酔っていることに。顔は真っ赤で口元からは唾液がこぼれ落ちていて目は焦点が定まっておらず時々白目になっている。こりゃあ重症だな。とりあえず手刀で気絶させた。

数時間後、ようやく1つ目の目的地、ハバロフスクに到着した。

とりあえず涼月を起こすと下車準備をし出した。

どうやらまだ気分が悪いらしく少し足元がおぼつかない感じだったが無事に降りられたようだ。よかったよかった。

それから僕達は歩いて移動を開始する。ひたすら歩くこと数十分、目的の施設が見えてきたので制圧した。めぼしい資料は特になかった。まあ、超兵がいなかった時点で察したけど。

とりあえず涼月を回収してシベリア鉄道を使って次の目的地であ



るモゴチャとかいう人口1万人くらいの町へ行き、基地を制圧した。  
モゴチャの住人に一部始終をバッチリ見られたのでとりあえず全員「削除済」しておいた。

涼月も特に何も言わず、無言で首を横に振っていたので多分問題ないだろう。

その後僕達は列車に乗り込み、次の目的地、ペトロフスク・ザバイカリスキーに向かった。

この日、人間1万人と、モゴチャと言う町が世界から消えた。



いろいろ（涼月が吐いたり）あってペトロフスク・ザバイカリスキーに到着した。

ちなみに現地でニュースを見たら『モゴチャの住民が全員死体で発見された』という報道をしていた。

涼月がガタガタと震えてたが、知らないふりをしておいた。ちなみに僕達が今いる場所は特務戦略技術軍の基地の中。なんやかんやあったが無事に潜入成功。

今は休憩室で電子タバコを吸いながら寛いでいる。

涼月はまだ気持ち悪そうだ。あとで薬でも渡すか。

そんなことを考えていたら、休憩室のドアが開き、入ってきた兵士と目が合った。

数秒間お互い見つめ合うと、兵士はAK74を発砲した。しかし、僕はそれを全て避けた。

兵士はテンパったのかAKをトリガーハッピーで撃ちまくるが僕に掠り傷一つ負わせることはできないで弾切れになったのだろう、すぐに弾倉を取り替えようとしたので腕を掴み床に押し倒した。

「初対面の人にいきなり銃を撃つちゃダメだよ？」

僕は笑いながらそう言い兵士の頭を踏み潰した。すると突然警報音が鳴り響き、重武装の兵士がぞろぞろと出てきたので、全て殲滅した。残念なことに雑魚しかいなかった。

もちろん兵士が持っていた兵器類やお金などは全て剥ぎ取った。うんうん♪やっぱり金だよな。

僕は満足そうにしていると涼月はなんだか恐ろしいモノを見るような目で僕を見ていた。うん、まあ、慣れてくれ。

その後、資料がないか探したが、特に何も無かったのでさっさと撤退することにし、駅へと戻った。

駅で列車に乗ってしばらくすると眠気が襲ってきたので少し仮眠をとる事に。涼月に膝枕してもらおうとそのまま眠りに落ちた。

そして目が覚めるともう既に次の目的地であるタイシエトに到着しており僕は慌てて下車準備をした。

ちなみに涼月は僕の寝起きの顔を見て何故か頬が紅潮していた。え？なんで……？

列車から降りた僕は駅にある売店に立ち寄り、新聞を購入した。

涼月に「なんか欲しいのあるか」と聞くと「特にないですが」と言われた。まあいいや。そう思って僕は新聞を開いた。

一面記事の内容は先ほど僕達が「削除済」したモゴチャについてだった。

そこには『突如現れた謎の部隊によって、たった数時間で住民が殺害された』と書かれていた。

そのことについて、現地の警察と軍は捜査を進めているが今のところ犯人の目星がっていないらしい。

うん、大事になっていらっしやる。ちなみに涼月は相変わらず顔が真っ青で冷や汗を流している。大丈夫かなこの人……。僕は心配になつてきた。

とりあえず、涼月は置いておいて僕だけで基地に乗り込むことにした。

ペトロフスク・ザバイカリスキーのロシア兵から？ぎ取ったAK74とRPG（ロケットランチャー）を装備して基地に突撃することにした。

まあ、なんとかなるだろ。そう思い僕は意気揚々と基地へ乗り込み、数十分で制圧した。

おかしい。マジでなんで超兵が出てこないんだ？そして資料は口に見つからずとつとと撤退することにした。

このままではモチベが死ぬので思い切って観光しながら任務遂行することにした。

そして十数日後、各地の基地を潰しながら、シベリア鉄道の終点であるモスクワのヤロスラフスキー駅に到着した。

その後一泊して、第三次世界大戦の被害から復興しつつあるモスクワ（なお中心部から少し離れるとスラム街）を観光しながら、最後の目的地、サンクトペテルブルクへ行く列車に乗るためレニングラーツキー駅へ向かった。

途中で食ったピロシキ美味しかったです。

ちなみにモスクワでテレビ見たら『シベリア鉄道沿線の町の一部が全滅し、住民及び基地の兵員が全員死体で発見された。犠牲者の数は

10万を超えた』というニュースがやっていた。  
こわいなくおそろしいなく誰がやったんだろなく (小並感)

時雨 in ロシア (イメージ)

## 41話 圧倒的思い込み

side提督

時雨がロシアに行っている頃、横須賀にいる私は、執務を終えてのんびりしていた。

最近はいろいろとあり、元帥の秘密を知った他の提督たちと〇〇〇M使つて会議をしたり、時雨がいない間、代わりに秘書艦を務める夕立&網走時雨が暴走しないよう監視したりなど、忙しかったのが、ここ最近落ち着いているおかげでこうしてのんびりと出来るのだ。

ああ、平和（かどうかは神のみぞ知る）って素晴らしいな。しみじみと感じていたその時、電話が来た。

私が出た途端、相手は大声で怒鳴ってきた。

一体誰だこんな失礼な奴。私が誰か分からないとは礼儀を知らないな、と呆れていた時ふとあることに気づいた。そういえば最近一度も電話に出ていなかった。とりあえず誰だこいつ。

「え〜と誰ですかあなた？」

そう言うともたもやブチ切られてしまった。

なぜそんなに切れる。こっちは知らないのにそっただけキレるのはおかしいだろ。

「ペチャクチャペチャクチャ……はあ、はあ、銚子鎮守府の植村綾子少佐です」

どうやら怒りすぎて息切れしているらしい。

そんな怒らなくてもいいじゃないか……。

「お、おう、そうなのか。で、なんでそんな怒ってんだよお前……」

恐る恐る聞いてみた。

「あなたが部下の艦娘たちに酷いことをしていると聞いたので大本営に査察を申請させてもらいました！それで明日、査察をすると言いに来たんですよ!!なぜ電話に出なかったんですか!?!まさか、自分がしていることに気づいてないともいうんじゃないでしょうね!!!」

どうやら私の所業（時雨＋αの頭をナデナデする、抱きつく、抱く、飼う）について査察が入ったようだ。確かに抱くとか飼うとかはそれなりに問題かもしれないが今ここで言ってもしょうがないと思う。なのでここは穏便にいこう。

「おい、待てよ、別に悪い事は何もしていないはずですよ？」

一応反論はしておく。しかし……

「うるさい!!」

なぜか逆効果だった。さらに興奮して話し続ける。………これは面倒臭くなりそうだぞ。

「あなたの横須賀鎮守府はブラック鎮守府と聞きました」

いや、この鎮守府がブラックだったの前任の頃なんだが。

「あの、この鎮守府、ブラックだったの前任だから今は普通なんですけど」

そう言うのと電話越しから鼻で笑う声が聞こえた。

なんかむかつくわコイツ。殴っちゃだめかな？ここにいないから殴れないけど。それになんかイラついてきたしもう切ろうか。

そう思った私は受話器を置きかけた。その時、向こうから

「ふざけるなあ!!」

という叫び声とともにドンツという音の後ツーツツツという音が響いた。

なんか知らんけど切られたわ。なに？情緒不安定か？

あんな勘違い女が明日査察に来るのか。絶対元帥に上手くコントロールされてるだろ……。

まあいい、夕立を抱くことで明日に備えて英気を養っておこう。

あく癒されるんじゃあ……。時雨に内緒で夕立を抱いて癒された。これ、時雨と植村少佐にバレたらヤバイな。

せつかくだし、植村少佐について調べてみようか。

というわけでパソコンでデータベースにアクセス。

そして出てきた情報によると、彼女は現在19歳で、半年前に銚子鎮守府に着任した提督らしい。

提督としての経歴を見ると特に目立ったことはせず、普通に艦隊指

揮してるらしい。

ちなみに士官候補生時代のあだ名は暴走列車だったらしい。一度思い込むと、周りの話を聞かずにとりあえず突っ走るという意味らしい。やっぱ面倒くさそう。

ちよつと待て、なんでこいつのスリーサイズが流出してんだよ!? B 98・W56・H88とか書いてあるんだけど……。

何この個人情報のかみみたいなデータ。怖い、怖すぎる……。てかこいつボンキュツボンじゃねえの。すげえな。

あと趣味が男そのものなんだけど、一体どうなつてんだ? まあ、それは置いておいて彼女の性格は典型的な正義バカらしい。

そのことについて詳しく検索してみる。

まず最初に出て来たのは中学生時代の話。

成績優秀でスポーツ万能。さらに生徒会副会長を務めるなどの完璧ぶり。しかも美人でスタイルも良いため、ファンクラブが存在したほどらしい。……うん、すごいキャラだ。

そして、次に彼女が所属していた高校。

なんでも、文武両道で全国一の偏差値を持つ超名門の進学校であるらしい。

そこで生徒会長を務めただけでなく、陸上部ではインターハイに出場したとのこと。……ホントにスペック高いなコイツ。

その後、海軍の士官学校を……飛び級しまくって1年で卒業。海軍に入隊。いろいろあつて銚子鎮守府に着任したらしい。

最後に、彼女の父親。元海自の海将であり、自衛隊時代に海上幕僚長を務めたこともある実力者らしい。ちなみに、現総理と防衛庁長官と仲が良いとのことだ。

……コイツスペック高すぎだろ。なんなの? 人生のチーターなの?

まあいいや、寝よう。とりあえず時雨が二体いると説明がいろいろ面倒なので網走時雨には隠れておいてもらおう。

## 42話 頼りにならないが多分裏切らない味方

side 植村少佐

翌日、ついに横須賀鎮守府の査察の日となった。私は今、横須賀鎮守府の門の前に立っている。隣には私の秘書艦である江風がいる。

この鎮守府は前から艦娘に対して横暴なことをやっていたりセクハラをしていたりしているという噂が立っていた。

今日は証拠を見つけ次第憲兵に通報してやると決めている。何としてもこの鎮守府の艦娘たちを助けてみせる。

そんなことを思っていたら門が開いて一人の艦娘が来た。おそらく秘書艦が出迎えに来てくれたのだろう。

「提督さんの秘書艦の夕立っぽい。今日はよろしくね♪」

そう言つて、笑顔を見せてくれた夕立ちちゃん。

か、可愛い……っ！こんな可愛らしい子に手を出すなんて許せない。

私は絶対に証拠を見付けて、あの男を牢屋に入れさせてやる!!私は深くそう決意した。

「うん、ありがとうね。早速だけど案内をお願いできる?」

「もちろんっ！ついてくるっぽい!」

夕立ちちゃんに先導されながら執務室に向かう。道中にすれ違う女の子たちはみんな楽しそうにしている。どう考えてもこの鎮守府はブラックなのに、おかしいと思う。これは徹底的にやらないと。

そんなことを考えていたら、執務室の扉の前に着いた。この扉の先に悪の親玉（提督）が……。

覚悟を決め、ドアを開ける。中にはそれなりにイケメンの男……横須賀鎮守府の提督が椅子に座って待っていた。

「……初めまして、横須賀鎮守府提督、荻原大輔中佐です」

「初めまして、銚子鎮守府提督の植村綾子少佐よ」

お互いに自己紹介をした。この提督がこの前言った通りなら最低



な奴のはずなのだが……全然悪い人とは思えない。

なぜだろうか……。とりあえず聞いてみることにするか。

「で、あなたは一体どんな不正をしているのかしら?」

「い、いきなり失礼ですね……。私、何もしてないんですけど」

本当に何もやっていなさそうな顔をしている。

この男は本気で言ってるのかもしれないけど、何か怪しい。

だって普通あんな酷い噂が立ってる鎮守府に着任しないでしょう。

絶対こいつ嘘ついてるわ。そう思い、私は尋問を始めることにした。

「そう。じゃあ質問を変えるわ。どうしてここに来たの?ここに来るまで色んな艦娘の人たちと会ったけど誰も嫌な顔はしてなかった。それどころかみんなすごくいい笑顔だった。それはなぜかしら?教えてもらえるかしら?」

「うーん、私といつも秘書艦をしている時雨がめっちゃ頑張ったからですかね……」

つまり荻原提督と時雨で艦娘たちを脅迫でもしていたということか。

それで笑顔だったから問題ないと。

ふざけんなクソツタレ……。

やっぱりここはブラック鎮守府だ……。

私はそう確信する。しかし一つ質問すべきことが増えた。

「その時雨はどこに行ったのですか?」

「時雨ならロシア行きました」

……はあ!?なんでそんな急に!?てかなんでロシア!?わけわかんない……。

とりあえず、艦娘たちに酷いことをされてないか聞きに行くことにした。

「ねえ、夕立ちちゃん。こここの提督とか時雨とかに酷いことされてない?」

単刀直入に尋ねる。すると夕立ちちゃんは大変立腹したような表情で

「そんなことないっばい！提督さんは優しくて面白いし、時雨ちゃん  
はここがブラックだった頃身を挺してみんなを守ってくれたっばい  
！」

と答えた。その言葉に偽りはなさそうだ。

だが、夕立ちちゃん以外の艦娘はどうなのか。

とりあえずその辺を歩いていていた暁型4姉妹に声をかける。

「ええっと、あなたたちが第六駆逐隊の四姉妹かしら？」

私の呼びかけに反応したのは響ちゃん。

「うん、そうだよ。私たちになにか用かな？」

その子が答えてくれたので続けて話しかける。

「ええ、ここの提督とか時雨とかに酷いことされてないかなって思っ  
て。大丈夫？」

「大丈夫だよ。みんな優しい司令官の下で楽しく暮らしてるよ」

他の3人も同じように返してきた。

……もしかしたらこの子たちもあのクズ男を庇っているのかもし  
れない。

そしてそれ以外にも何人かに聞いてみたのだがみんな口をそろえ  
て提督も時雨も優しいと言っていた。

私がそれに頭を抱えていると私の秘書艦の江風が「なあ、やっぱこ  
こ普通の鎮守府なんじゃねえか？」と言ってきた。

だが、私はまだ諦めない。近くを白露が通りかかったので話しかけ  
る。

「ちよつといいかしら？あなたは白露ちゃんね？ところで、ここの時  
雨にいじめられたりしてないかしら？あとここの提督に酷いことさ  
れてない？」

矢継ぎ早に質問を浴びせかける。すると、白露は呆れたような、ど  
こか怒ったような表情でこう言ってきた。

「そんなことあるわけないじゃん！提督は私たちに優しくしてくれる  
し仕事もよくしてくれてて助かるって感じ。時雨は私との約束を命  
懸けで守ってくれた自慢の妹だよ！」

そ、そうなんだ……。この子たちは騙されているんだ！助けなくて

わ!!

「あなたは騙されているのよ……この提督を逮捕するために査察に協力して! さあ早く!」

「あ、終わったっぽい」

夕立がそう言うて私を止めてきた。は? 何が終わったっていうの? まさかこの子はこのクズが実は改心してました! なんていう展開があると思ってるの!? 馬鹿じゃないの!? そんなのあるわけないの! !

そんなことを思った瞬間、白露が私に殴りかかってきた。私は避けきれずモロに食らって吹っ飛んだ。そして床をゴロゴロ転がった後壁に強く体をぶつけた。痛い……。この子、なんて力してるの……。「いきなり殴ってきてどういうつもり! ?」

私が声を荒げながら言うとな彼女は落ち着いた様子で、そして静かにこういった。

「今のはあんたは提督と時雨のことを悪く言った。だから殴った」

私はその発言に絶句した。確かに今の言葉には悪かったところはある。しかしそれは悪徳提督を罰するためのものだ。何も間違ったことはしていない。なのにこの子は私が悪いみたいなことを言うの……! ?

「あんた、自分が正義の味方だとも思ってるんじゃないの?」

その一言で頭に血が上るのを感じた。気付けば再び彼女に立ち向かっていて、さっきより強烈な一撃をお見舞いされていた。意識が遠のいていく。

薄れゆく視界の中、私はこの鎮守府に来てから聞いた言葉をもう一度思い出す。「優しい」「楽しい」「助かっていた」というみんなの発言を。

あれ? もしかしてこの鎮守府普通にホワイト???

目が覚めると医務室にいた。そばには江風と白露がいた。どうやら彼女たちは私の看病をしてくれたらしい。起き上がりお礼を言う。「ありがとう。あなたたちが私をここまで連れてきてくれたのよね?」

あと看病までしてもらって……」

2人は微笑み、口々に気にするな、と言うと去って行った。それを見た私は大きく息を吐き心を落ち着かせる。

すると今度は萩原提督が部屋に入ってきた。

「あ、起きたんですね。どうですか体の調子は？」

私は彼の問いに対し、少し考えて「大丈夫です」と答えた。すると彼はほっとした顔をした後、「よかったです」と言った。

その言葉を聞いた私は彼に尋ねた。

「で、なぜここに来たんですか？」

「ああ、そうですね。まあ話したいことがあったから来たんですよ。正義中毒なあなたなら協力してくれそうだなと思って。あー、単刀直入に言います。この戦争の元凶は坂本元帥です」

私は彼が発した言葉の意味を理解することができなかった。坂本？元帥の名がどうしてここで出てくるのか？そう思った。

だが、彼（と途中でビデオ通話を始めて会話に参加してきた齋藤少将）の説明を聞いていくうちに一応理解できた。

「分かりました。あなたたちに手を貸します。あと、先程はご無礼を働いて申し訳ありませんでした」

「いやいや、いいですよ謝らないで。それより、これからよろしく頼みますよ」

その後、萩原提督と雑談したりした後、江風と共に銚子鎮守府に帰った。

s i d e 提督

なんか、そんなに戦力ないけど多分裏切らないであろう味方ができ  
たわ。やったぜ！

### 43話 涼月のロシア出張（旅行）

side 涼月

なんか、マスターがおかしくなりました。

いや、まあいつもなんですけどね……。ロシアに来てからさらに拍車がかかっています。

具体的に言うなら……あれ？どう表現したらいいでしょうか。

そうですね、いつも以上にハイテンションで無茶苦茶やっています。

（10万人大虐殺）

なんかヤバいくらいに笑っていました。怖いくらいに。

あと、夜中に列車のベッドで「はあ、はあ……提督……提督……」とかぶつぶつ言いながらかなりハードな慰めをしてました。

私は疲れてぐったりしてるのにそのせいで眠れなかったです。

まあ、そんなことは置いといて、現在レニングラード州のサンクトペテルブルクに向かう列車、赤い矢号に乗っています。

私はマスターに高速鉄道を使おうと提案したのですが「発展途上国の高速鉄道なんか使えるか」と却下されてしまいました。なぜだ！どうしてなんだ！解せぬ。

それからマスターに膝枕をしてあげたり、お菓子食べたり、ふたなり化マスターに襲われたりしました。

一応初めてだったのに……初体験がふたなりって……なんか悔しかったのでお返しにキスしたり胸揉んだりしましたけど全然平気そうな顔してました。

そして現在、レニングラード州に入った途端に列車が停車しました。

どうやら検問に引っかかったようです。なんでも10万人ぶつ殺したテロリストがこの列車に乗っていると通報があったそうで警戒態勢になっています。

……これ絶対私たちのことですよね。

とりあえず全部マスターに任せたらいろいろあつて列車は再び動き始めました。多分大丈夫でしょう。

その後何事も起こらず、無事にサンクトペテルブルクに到着。さすがはマイマスターです。惚れ直します。

ちなみに現在午前8時。ここからは歩いて移動するらしいので準備をしましょう。

◇

時雨と涼月の二人が必要な荷物をまとめて駅を出ると、駅前で髪が白く瞳が赤く光る軍服を着たドイツ人と日本人の二人組と遭遇した。

「ご機嫌よう、お嬢さん方、<sup>フロイライン</sup>特務戦略技術軍准尉、フリーデマン・アウフレヒトと申します。以後、お見知りおきを」

「やあやあ諸君、はじめまして。私は特務戦略技術軍の准尉、櫻井磯三郎、だ。今回は同志に菌向かう君たちに会いたくてわざわざ来たよ。これから一緒に遊ばないかい？」

「はあ……あの、僕達はこれから用事があるんで失礼します」

そう言つて立ち去ろうとすると突然背後から銃撃された。咄嗟の判断で涼月を抱え回避する時雨。

「時雨くん、あと隣の白いの、君の命は我々が貰う。君は我々の実験材料の一つになるのだ」

そう言つて櫻井は再び改造99式小銃を発砲してきた。

銃弾は時雨に命中したかと思われたが、時雨の頬を掠めていった。頬からは血が流れだし、いつもと違い止まらない

「危なっ……なかなか面白そうじゃないか。いいよ、相手してあげるよ」

時雨はそう言つて南部拳銃とメツエライを取り出し、駆け出した。

櫻井も99式小銃を構えて応戦。二人は銃撃戦を始めた。

………周りに野次馬やら報道やらがいる状況で頭のおかしい威

力の銃を撃ち合ったらどうなるかは容易に想像がつかだろう。

当然の如く、二人の周囲は地獄絵図となった。

櫻井と時雨は並走し、銃を撃ちまくる。しかしお互い決定打にならず、膠着状態が続いていた。

というか、時雨の弾はなんか知らんが全部避けられており、逆に櫻井の弾は結構な確率で命中している。だが、それでも致命傷にはなっていない。

しばらく撃ち合いが続き、時雨が「飽きたし殴りかかろう」と思い始めた時、涼月と戦っていたアウフレヒトがおもむろにパンツァーシュレックを取り出し、発射した。

ロケットランチャーであるそれをまともに喰らい、吹っ飛ぶ時雨。

「ふっ、かかった♪」

「マスターー!」

「お嬢さん<sup>フロイライン</sup>、君は私と一緒に遊ぼ「黙ってるー!」フゴツ!」

アウフレヒトは涼月に手刀で真つ二つにされ、退場した。まあ、この涼月の中身は防空棲姫なので仕方なからう。

「……っ、意外とやるね、お前ら」

時雨は不敵に笑いながらそう言うと言と艤装を展開し、テイルワイヤを壁に引っ掛けてサンクトペテルブルク駅の屋上に上がった。

「……はっ、逃がしはせんよ、時雨」

櫻井はそう言うのと、壁に垂直に歩くというニュートンが見たら憤死するような方法で追いかけてきた。

「駆逐艦だか吸血鬼だか知らんが、何のこともないな」

時雨はなんか知らんがひれ伏しながら笑っていた。

「っ、全身の穴から血が止まらない。どうなってるんだあの弾は。それに動脈ばかり狙ってきやがって。趣味の悪い奴だ」

時雨はどうにかして立ち上がる。いつもと違いまだ傷は癒えていないが、血は止まっていた。

「んっふっふ、あっはっは、櫻井磯三郎か……おもしろい遊び相手だ。こんなに楽しい気分になったのは久しぶりだよ。……なあ?」



「ああそうかい。じゃあその楽しさのまま死んでくれや」  
「やってみなよ」

時雨がそう言った瞬間、櫻井は改造99式小銃を発砲した。  
銃弾は時雨に直撃したが、その直前に時雨の身体が霧のように消え去った。

「なんだ!？」

「深海制御術式2号3号解放」

どこからか時雨のそんな声、処刑宣言が聞こえたかと思うと、次の瞬間には時雨が目の前にいた。

「ぐあっ!!」

時雨の拳が櫻井の顔面に突き刺さり、吹き飛んだ。

「ふう、すつきりした。これで終わりかな」

「なめるな、小娘エツ!!」

櫻井が吠えると、時雨はまた消えた。

「ぐおっ!？」

今度は後ろ回し蹴りが炸裂し、櫻井を吹き飛ばす。

「くそつたれ! 舐めんなよガキエツ!!」

櫻井は改造99式小銃を乱射するが、当たらない。ちなみに時雨はどこぞのルーク・ヴァレンタインのような挙動で弾を避けている。

「こつちだ」

いつの間にか櫻井の背後に回り込んでいた時雨は櫻井の襟首を掴み、空中に放り投げた。

「ぬおっ!？」

「終わりだよ」

時雨はそう言いながら跳躍すると、空中で櫻井の両足を掴んだ。そしてそのまま地面に叩きつける。

櫻井は馬鹿の一つ覚えのようにまた改造99式小銃を乱射するが、日本刀で銃弾を切られて無効化された。

「なっ!？」

「腕は鈍ってなくて安心したよ。最近ガンカタばかりやってたからね」

そう言うとき時雨は再び櫻井の足を掴むと、先程と同じように振り回して投げ飛ばした。

「があっ……」

櫻井は地面に激突し、動かなくなった。時雨は櫻井に近づくと、櫻井の頭を鷲掴みにして持ち上げた。

「まだ、生きてるよね？君には情報を吐いて貰わないといけないんだけど」

「誰が……喋るか」

「うーん、残念だ。でも仕方ないね」

時雨は櫻井の頭を持ち直すと、勢いよくコンクリートの床に叩きつけた。

「がはっ……」

「ほら、まだまだいくよ」

時雨は何度も何度も櫻井の頭に衝撃を与えた。

「が、やめろ……」

「あれ、もしかしてもう壊れちゃった？」

櫻井はまだ意識はある。彼は超兵の中でもかなり上位に位置する超兵なのだ。この程度で気絶するはずがない。

「それならそれでいいけど」

時雨はそう言うとき、櫻井の両腕を切り落とした。

「ぎゃあああああ!!」

「うん、まだ元気そうだね。よかったよ」

「や、やめて、お願い、許してえっ」

「ふふっ、可愛い子ぶつてもダメだよ。君は僕に情報を渡すまで死んじやいけないんだ」

時雨は櫻井を壁際に追い詰め、逃げられないように拘束した。

「さあ、話してもらおうかな」

「ひいっ!？」

「僕は気が短いんだよ?」

時雨はそう言うとき、櫻井の腹に日本刀をぶっ刺した。

数分後……………

side 涼月

「お前は社会主義者か？外人か？バケモノか？それとも日本人か？」

「うげええ……………もう殺してくれえ……………」

あ、やばい。なんかマスターがめっちゃ笑顔で刀で滅多刺しにしてる。怖すぎるんですけど。

「じゃあ、なんか情報話してくれるなら殺してあげてもいいけど」とマスターは満面の笑みで問いかけた。

「ひいつ……………!?な、なんでも話すから命だけは勘弁してください！ソビエトなんてクソ食らえだ！私たちはあいつらに脅されて無理やり協力させられてたんです！信じてください！私には妻子がいるんだ……………ぐぎやあつ……………」と言い残して彼は死亡した。

……………うん。なんかかわいそうですね。

ちなみに殺した日本人の記憶を奪ったマスターによると彼は二次大戦後のシベリア抑留の時に洗脳されて祖国超兵に改造されたとのこと。

何歳なんだこの旧日本兵。少なくとも100歳は超えてると思う。ちなみに記憶を覗いている時なんかマスターがすごく興奮してたので怖いと思いました。

さっきの旧日本兵は(一応)特務戦略技術軍の幹部クラスらしく、超兵の連中の大半はマガダンとか言う海港都市の基地に待機してるらしい。

ちよつと待って、マガダンってオホーツクの方だった気がする。レニングラード州とは真逆の方向なんですが……。  
というわけでキレ気味のマスターと共に、サンクトペテルブルクのプルコヴォ空港から飛行機でマガダンのソコル空港に向かいました。

君と僕を例えるなら、何になるだろうね？

……きつと、君は月。優しく僕を照らしてくれる綺麗な光だ。君がいなかったら、僕は暗闇の中に独りぼっちで立ち尽くしているだけだったろう。

君が側にいて初めて安心できる。君の温もりを感じるだけで僕は救われるんだ。

君がいない今はすごく、寂しいんだよ。

44話 同志ロリババアよ、敵（どんどん狂っていく系主人公）を撃て

side???

艦娘とやらの小さなラジコンのような偵察機が我が祖国の領空に侵犯した。

私は愛銃の長銃身型モシン・ナガンを手を持ち、その小さな機体へ照準を合わせて引き金を引く。

偵察機は爆発四散し、機体は破片となり海に落ちた。他にも何機かいたが、全て同じ末路を辿った。

最近、稚内基地に所属するという艦娘……我々の模造品が定期的に領空、領海を侵犯している。

そのため我々は艦娘共の迎撃の任務についている。正直言って、我々の方が遥かに優れているのだ。

確かに性能は異なるだろうが所詮はただの小娘なのだ。そんな小娘の相手をするだけ無駄である。

というかあいつらは深海棲艦と戦うために作られた存在ではないのか？なのになぜ我が国を脅かす？本当に意味不明だ。

あ、そう言えば名乗り忘れていた。私の名はエカテリーナ・ノヴィコフ、元ソヴィエト連邦特務戦略技術軍少尉。今はロシア共和国特務戦略技術軍中尉。ちなみにあだ名はロリババアだ。

side時雨

「ねえ涼月、なんかこの飛行機ガタガタ言ってるじゃない？」

僕は不安になり涼月に話しかけると、涼月も同意してくれた。

すると機体の振動がだんだん大きくなってきた。まさか故障した

んじやないだろうな?」と思っていると、突然機体の高度が落ち始めた。

「何だ!何が起きている!」

「事故だ!事故が起きている!」

ヘル○ングごっこをしながら機長は何してんのか見に行こうとする。まあたしかにすごい音だしなあ。

で、制止しようとするキャビンアテンダントを無視し、機長室の扉を破壊して中に入ると機長と副機長と思しき二人の頭が吹き飛んでいた。どう見ても死んでいる。

さらに床には真っ赤な液体がぶち撒けられていた。

「血じゃん!ヤバいつて!」

「マジすか」

戻ると乗客たちの悲鳴と、それを止めようとスタッフの声と怒号が響き渡っていた。

「さて、どうしよう」

とりあえず機長を殺ったのが誰か探すことにした。機体は既に地上が見えるくらいに高度が下がっている。

深海制御術式第2号解放で視力を上げて機体の外を見るが、ボロいライフルを持った女くらいしか見えなかったので再び視線を落とす。

しかし次の瞬間。機内に銃声が鳴り響き、窓が割れた。慌てて避けたが頬が浅く切り裂かれる。

見るとさっきのボロいライフルを持った女がこちらに銃を向けていた。

少し(?)イラついた僕は再び機長室に突撃し、操縦桿を握ると地上のボロいライフルの女に機首を向ける。

そして一気に降下させ、相手を押し潰すことにした。よく見ると女がいるのは基地のような所の屋上なので基地ごと吹っ飛ばすことにした。

「ちよっ!マスター!これ墜落しても私たちは大丈夫だと思えますけど乗客死にますよ!」

「……この飛行機が攻撃されてる時点で乗ってる人らの死は確定して

るようなもんだから。殺したの僕じゃなくてロシア軍だから」  
「理不尽すぎィー！」

そんな会話を繰り返しながらどんどん地面が近づいていく。  
「マスターー！」

「うるさいちよつと黙ってろ」

涼月がうるさかったので亜空間にinしておいた。これでよし。  
女の方を見るとこちらがカミカゼしてくるのに焦っているのかライフルを撃ちまくってくる。

当然機体にダメージが入るが、機体はさつき僕が取り込んで同化しており致命的な損傷を食らうことはない。

そもそもこれは僕の体のようなものになっているわけで、常に再生を続けている。故に壊れた部分は瞬時に修復されてゆく。よって全く怖くない。

「な、なんだこのバケモノオ!？」

そんな事を喚きながらライフルに抱きついて、逃げ出す女。  
その10メートルほど前方にカミカゼ旅客機が到着した。

火の海となった落下地点から僕は「ねえねえ君可愛いね？僕時雨ちゃん。よろしくね？」と女にどこぞの444-KO-5みたいなポーズで話しかける。

すると「ひつ……」という小さな叫びを上げ、彼女は失禁しながらライフルで僕の左肩と右腕を的確に吹っ飛ばしてきた。

意外とやるね。なお、僕の損傷は秒で再生した模様。で、そのまま女の首を掴む。

「やめて！殺さないで……」

「やだね」

僕は笑みを浮かべ、彼女の顔を思いつきり殴りつける。

鼻血を出しながらも必死に許しを請う彼女を更に殴打し続ける。

「こ……殺じで……も……うや……めで……」

「あははははーやめないーやめないーやめるわけ無いじゃんー！」

……ああ、いいなあ。なんかゾクゾクしてきた。もっとやろう。  
もっとだ！

ああ……もう我慢できないや。

僕は大きく口を開け、その女の首に噛み千切った。その途端口内に溢れ出した血。とても美味しかった。

数か月前に深海棲艦化した戦艦、なんだっけ、山城とか言ったかな？そいつをカニバリズムしてまずかったのが嘘みたいだ。

その後しばらくすると女は完全に動かなくなった。死んだらしい。でも僕はまだ満足していなかった。この子を食べたい。食べたくてしよがなかった。

その後、四肢を食った。ムチムチの太ももが素晴らしく、柔らかく、甘美だった。

しばらくしてこいつどんな見た目だっけと思ひ顔を見た。

うん、なかなか可愛らしい顔をしている。気に入った。

それに良いスタイルをしているしね。

という訳でふたなり化して犯しました。最高だった。

何発ヤツたか覚えていないくらいにめちやくちやりました。

これがいわゆる屍姦って奴か。

……ふう。おなかいっぱいになった。ああ気持ちよかったなあ。

しばらくして僕は「あつ……ごめん。夢中になっちゃった」と言っ

て涼月を出した。

涼月の顔は真っ青になっていた。

「どうしたの涼月」

「どうしたのじゃないですよ！なにやってんですか！」

「食っただけだよ？」

そう言っただけ多分女だったモノを見せた。

「ひいー！」と悲鳴を上げて目をそらす彼女を抱き寄せるとその柔らかさを堪能する。うん、素晴らしい。

それからしばらくして落ち着いたのか僕の方を向き直り聞いてきた。いや、質問というよりは文句のようであった。

「で、結局マスターは何がしたかったんでしょーか」

「そんな事を言われても困るんだけど。強いて言うならあのクソアマに腹立ったから？なんとなく惨たらしい殺し方をしたくなった」



そう答えたら頭を抱えられた。意味わかんないよとでも言いたげだ。

「というかお前深海棲艦だし、この前深海化扶桑食ってたろ。」

「そういう反応するのはどうかと思うんだよね。僕は悪くない。」

「さて、そろそろ基地に突撃しようか」

「アッハイ」

僕は涼月の頭を撫でると特務戦略技術軍のマガダン基地に向かった。

基地の門番を瞬殺して中に入る。

その直後、基地の奥の方の格納庫から全長100m、全幅200mくらいのクソデカ飛行機4機と護衛と思しき戦闘機隊が飛び立ち、そのまま南の空に飛んで行った。

とりあえず艀装を展開して撃ち落とそうとしたが、いつの間にか超兵たちに包囲されていた。

「あく、君たち誰？というかなんでここにいるわけ？」

僕の問いかけを無視して攻撃してくる彼ら。僕は面倒なので飛んで回避するとそのまま彼らの背後に着地し、メツエライを撃ちながら刀で超兵たちの首をスパスパ斬ってゆく。

超兵共をジエノサイドした後、涼月と共に基地の中に入り、なんか資料とか無いか探すことにした。

## 45話 元帥の宣戦布告

side 提督

「おいおい……これは一体どういうことだ」

私はそう呟いた。

私は齋藤少将や東郷少佐や植村少佐やその部下の艦娘を引き連れて大本営にやって来た。理由はもちろん坂本元帥を逮捕or殺害するためだ。ちゃんと証拠は持っている。だが……

「どうなってる……」

「わかりません」

何故か大本営には元帥を含めた重役が一人もいなかった。ついでに言うとも第零艦隊の連中もいなかった。つまりここにはいないという事だ。……ふざけやがって。

「まあいいでしょう。そのうち戻って来るでしょうしね」

植村がそう言った時、私のスマホに電話が入ったので確認すると鎮守府の白露からであった。

「なんだ？」

『なんかテレビで坂本元帥が演説始めようとしてるんですけど』

『はあ!? あいつどこにいたんだよ!』

『いやわかりません。提督もテレビ見たらどうですか? NOK総合でやってますよ』

「ちっ……! とりあえずテレビ点けるぞ」

私はそう言うのと元帥室の壁に埋め込まれている60インチの有機ELディスプレイに視線を移した。

そこに映っているのは軍服を纏った狐のような細い目が特徴的な壮年の男性、こいつが坂本だ。

その隣にいるのは秘書艦の神風零式である。

スマホで掲示板の実況スレを見ると結構人がいる。みんな暇なのかな?

……というか何を言うつもりだろうか？まさかここで特務戦略技術軍について触れるとは思わないが、警戒する必要があるだろうな……。

そんなことを考えていると、画面内の坂本が喋り出した。

『7500万の日本国民の皆さん、こんにちは。私は日本国防海軍元帥、坂本藤雄元帥であります。本日は皆さんにお話したいことがあります』

『単刀直入言いましょう』と言う彼に対してスレ民や○コニコ生放送で見ている人らはなんやなんやと騒いでいる。

私達は騒ぎ出すことはなく画面を凝視する。そして彼はこう言った。

『艦娘は兵器であります。人権などいりません』

「坂本お前マジか」

私は唾然とした。天国の山本元帥が泣いてるぞ。

こいつは何を言っているのだろうか。こんな発言を堂々としたら普通は批判殺到するはずだ。しかしそういつた書き込みは一切ない。

まるでそれが当たり前かのような空気が漂うのを感じる。

『兵器に人権など必要ありません。それは当然の事であります！』

坂本は大きく手を振り、大袈裟なほど声を上げた。まるで芝居の演者ようだ。その姿は、私たちにとっては滑稽に見えると同時に酷く気持ち悪いものに見えた。

『約20年前、深海棲艦が現れたあの日から、世界は未曾有の危機に直面しております。深海棲艦の侵攻により、我々、生物の故郷である海は奪われ、沿岸部の住民は惨たらしく殺され、今もなお遺族の皆さんは悲しみに包まれております……』

かと思えば今度は下を向き、悲痛な面持ちで握りこぶしを作った。

私たちは、どの口が言う！と憤りを感じながら握りこぶしを作る。

○コニコの画面を見ると、誰一人としてコメントしている者はいない。

『そんな悲劇を終わらせるために作られたのが、皆さんご存じ艦娘という存在です。……少女の姿をした、軍艦の化身……つまるところ武

器、兵器……』

坂本は顔を上げると、笑みを浮かべ、こう言った。

『道具に人権を与えるような大馬鹿者がこの世にいますか?』

「坂本てめえー」と怒鳴りそうになるが、私は堪えた。ここで私が怒鳴ったところで、こいつはこの場にはいないからだ。

ちなみに植村少佐は真っ赤になっていた。

『……残念ながら、いるのですよ。そんなどうしようもない大馬鹿者が』

『艦娘だって人間だー大切にしよー』と馬鹿丸出しなことを平然と言う連中がいます。山本前元帥や一部の提督らがいい例です』

『きつと彼らはこの国を滅ぼしたいのでしよう。もしくは兵器を愛玩用に使うのはちよつとあれだから人間ということにしておきたい趣味の悪い方々かもしれません』

『まあどっちでもいいのですけど。要はそういう奴らがいるせいで、我々軍人も困っております。何故だかわかりますか?それはですね……そういう艦娘を人間だと主張する愚かな提督が反乱を起こすのですよ。見ているか?元帥室に乗り込んできた青年将校諸君。君たちの事だよ』

坂本はニヤリとした笑顔をカメラに向けた。

やばい、バレてた。

てかよく見たら元帥室の隅っこに監視カメラあるぞ!

「夕立…その監視カメラを壊せー!」

「ぽいっ!」

速攻で夕立に壊してもらった。

『ああ、あとついでに伝えておこうと思いますが……今回の反乱に関わった提督と艦娘は把握しているので、二階級特進させてやろうと思っております。もちろん後で提督たちは死刑台、艦娘は解体装置に送りますがね』

『まあ、青年将校諸君、戦いたいなら戦ってあげますよ?もちろん海軍のトップとしてですが。ただし私に逆らった以上、1か月後に生きていられるとは思わないで下さいね?』

そう言つて坂本は手をひらりと動かし、演説を終えた。画面には【放送が終了いたしました】と表示される。

スレ板や〇コ〇コがえらいことになっていたので、とりあえず私はその場の全員を連れて横須賀に戻ることにした。

ちなみに今日の騒動は後に海軍四・三事件と呼ばれることになる。

side 西馬

坂本が演説を終えて控室に戻ってきた。

「坂本元帥、お疲れ様です。見事なスピーチでした」

「はは、ありがとな」

「俺ではあそこまでうまくやれませんよ。やっぱりすごいです元帥殿」

俺は苦笑いする。正直言つと少し気持ち悪い内容だったので、俺にはあんなに上手く言える気が全くしないのだ。

反乱煽るとか頭湧いてんじやねえの？

「それほどでもないよ、西馬君」

そう言つた坂本の細い目はいつも以上に細くなり、不気味さが増していた。いやマジで吐き気がするからやめて。

「それで、これからどうするんですか？」

「そうだな、今はまだ大っぴらに行動できんからな……」

坂本の言つとおりである。今はまだ海軍元帥という立場なのだ。

「今は、まだ、な……。まあ、その時が来たら、迎えに来てくれ」

そう言つて坂本は立ち上がって出て行った。

……これ以上好き勝手出来ると思うなよ、坂本。

## 46話 深海棲艦（及び祖国超兵） Ⅱ 吸血鬼説

包囲してきた超兵共をジェノサイドした後、涼月と共に基地の中に入り、なんか資料とか無いか探すことにした。

……しかし広い。広すぎるんだよ。そしてここが本拠地なのか知らんが結構な数の超兵がいる。

「ねえ、ちよつと待って……さすがにこれ疲れる」

僕と涼月はそう呟きながら歩いて行く。すると目の前から超兵2名がAKを乱射しながら走ってきた。

「止まれ！これ以上近づくと撃つぞ！」

警告に僕らは一切応じず無言で近づいた。つか、お前らもう撃ってんじゃん。

「く、くるなあ!!」

僕たちが近づくの比例して、彼らの恐怖の表情がだんだん絶望の色を帯びてきたところで僕は「うるさい」といって二人同時に殺した。

その兵士の腿を食った後、死体を投げ捨ててさらに歩き続けた。

少し歩いたところの曲がり角に普通の人間の兵士が待ち伏せしていたので、あいさつ代わりにぶん殴ったら静かになってしまったので食っておいた。

何て言うか、添加物まみれの深海棲艦や超兵よりも美味しく感じる。え？艦娘？食ったことないからわかんないよ。

でも人間の方が美味しいのは間違いないなあ。

あとこいつら弱すぎ。こんなんじゃ話にならないじゃん。

つまんねえの。

まあとにかく適当に探し回ろうと思い、再び探索を開始すると奥に部屋を見つけたので入った。中には超兵らしき男がいて、銃口向けられたけど問答無用で首に噛みついてぶつ殺した。

そいつの足をもしましやしていると超兵が五人程突撃してきたので、一人目をメツエライで射殺し、二人目も蹴り飛ばして即死させ、

跳びかかってきた三人目を避け、カウンターの右ストレートでぶち殺す。しかしその後四人目にナイフで心臓を刺されて残機が一つ減ってしまった。

……痛いじゃないか。ぶち殺すぞ。そう思いながらナイフを奪い取り四人目をめつた刺しにして殺した。

ちなみに五人目はいつの間にか涼月が殺ってくれていた。

ありがとうございます。お礼は体を使って返しますね？と冗談半分で言うと言われた。酷い。

ともかく部屋にあったものはすべて回収した後、部屋を出て再び探索を再開するのであった。

そうこうしていると大きな扉の前だったのでノックもせずを開けると、そこには身長190センチを超える軍服を着た大男がいた。

彼はこちらを見ると無言のまま殴りかかってきた。

……ふむ、こいつは良い拳を持っているようだ。そう判断した直後僕は反射的に左フックを放ち相手の頬を砕いた。

男は勢いよく吹っ飛んだが、直ぐに立て直し、頬はすぐに元通りになった。

なるほど。再生能力があるのか。だが問題はない。

僕は一気に近づくと彼の顔面に回し蹴りを放ったが、ガードされた上に後ろへ跳躍されてしまった。

とりあえずメツエライを撃ち込んでみるが、撃たれたそばから再生していった。

うん、なかなか強そうだ。

僕は内心興奮しながら戦闘態勢に入る。

まずは彼の懐に飛び込む。それから膝裏を斬りつけて転倒させてマウントポジションをとると顔にメツエライトを撃ち込んだ。

案の定普通に再生された。

てか、思ったんだけどコイツ深海制御術式解放してる時の僕と同じで吸血鬼みたいな八重歯生えてるんですが……。

深海棲艦Ⅱ吸血鬼説を提唱する!!

そんな馬鹿げたことを頭の中で考えたが今は関係ない事だと思い、



今度はメツエライを腹に当ててから発砲し、撃ち出した弾丸を全て腹部を貫通させた。

しかしそれでも死ななかつたので、そのまま彼の両腕を切断した後胸部を蹴飛ばした。

流石にこれは堪えたようで両腕は秒でもとに戻ったが血を吐き出した。

あはっ、最高だこいつ！やっぱりこういう強い奴と戦うのが一番楽しい！

僕が今戦っているのはその極致みたな奴といつても過言じゃない。あくもうゾクゾクしてきたよお！

「いいね、もつとやろうか」

そういうと僕は艤装を展開してレールガンを彼に向けて撃った。当然彼はそれを防御しようとするが、レールガンの弾速には追い付かず腕を貫かれてそのまま脳漿を吹き出して倒れた。しかし直ぐ再生したが、

「……なんか飽きてきたな」

さて、どうやって終わらせようかな。

そう考えていると涼月が敵前逃亡していった。

一体どうしたのかと思っていると涼月が逃げた方向の逆の方にある部屋からRPG7やどっかから盗んできたジャベリンミサイルが何発も飛んできた。

……なにあれこわい。大体僕に着弾したが、僕は特にダメージを受けなかった。

そしてRPG7が飛んできた部屋に走って向かうと既にそこにいた超兵達は全員オーニクス（対艦ミサイル）を撃とうとして自爆していた。

ついでに言うと、190センチの男はいつの間にかどっかに逃げた。

……なんだろうこの気持ちは。まるで大切な玩具を取り上げられた子供のような感覚だった。

「てか、なんでお前ら室内で超音速ミサイル撃とうとしたの？」

僕の質問に誰も答える者はいなかった。

ただ超兵どもの死体を食って殺した。そして超兵の服と拳銃やら装備を奪った後その部屋を出る。

そしてしばらく進むと、涼月が頭にターバンを巻いた超兵（おそらくアフガン出身）数人と戦っていた。

「マスター！助けてください！私じゃ倒せませ」

さっき敵前逃亡してたので、ドアを閉めて放置しておくことにした。

「まあ、あいつ姫級だからいけるだろ」

僕はそう言い電子タバコを吸うのであった。

……5分後、涼月が部屋をこじ開けて出てきた。

「おつかれ、涼月。ところで大丈夫？少し涙目になっていないかい？」すると彼女はキツと睨み返してきた。

ええ……。

「誰のせいでこんなことに……ッ!!」

いや自業自得だろ、敵前逃亡君。

そう思っていると彼女の後ろに一人の超兵がいてそいつがナイフを突き刺そうとした瞬間、涼月がそれを避け、回し蹴りを放ち、ぶつ殺した。

やっぱお前普通に強いだろ。超兵ってル級と同等の戦闘力だからな？

その後僕達は適当に基地を探索した後、爆破して車を盗んで脱出し、その辺のホテルに一泊することにした。



「マスター！なんで私を部屋に閉じ込めたんですか!？」

「いやお前、さっきも言ったけど自業自得だよね？」

「そうかもしれないけど！私達仲間でしょう！仲間を置いて先に逃げなんて最低です！」

……何？僕が悪いっていの？

そう思うと無性に腹が立ったのでとりあえず涼月を押し倒し胸ぐらをつかんで壁に叩きつける。

そして壁と自分の手で逃げられないようにしつつ、股間を太腿にこすりつけながら顔を近づける。

「ちよっ!?マスタツんぐう……」

文句を言いかけた口を無理やりキスで塞ぎ、口の中に舌を入れ、中をかき乱す。それから数十秒ほどキスをした後に唇を離すと、彼女は顔を真っ赤にしながらもとろんと蕩けたような目でこちらを見上げていた。

その後いろいろあって涼月に逆襲され、僕はびしょびしょのベットに全裸で仰向けに倒れている状態になったのであった。

ちなみに坂本元帥からメールがきて今度はキフチクとか言うカムチャツカの方に行くことになった。

## 47話 特に誘っているわけではない

翌日、艦装を展開して海を渡ることによってショートカットしてキフチクの基地に到着した。

まずは、タバコを吸いながら正門から堂々と侵入した。案の定門番に止められたが、殴ってぶっ殺しつつ、金目の物を奪っておく。

その後、建物内の見取り図を手に入れてから適当な兵士を脅迫して情報を聞き出す。

下っ端だったのかあんまりいい情報を持っていなかったので撃ち殺した。

「チツ、使えない奴だ」

「なら最初から聞かないで偉そうな人を殺して記憶を篡奪した方がいいのでは……」

……なるほど。それは思いつかなかったわ。というか涼月、なかなか頭が回るね。

さて、とりあえず探索するでしょう。

それからしばらく進むと警備している人間の兵士がいたが……なんかもう雑魚にしか見えないんだが。まあいいか。

「ypaaaaaaa!!!」

なんか奥の方から普通の人間が銃剣付きAKを構えて何十人かバシライアタックしてきた。

……うん。僕を倒そうとは良い度胸だが。流石にこの程度じゃ話にならないな。

「あゝ、鬱陶しいな」

そういうと僕に向かって突撃してきた兵士達を素手で蹂躪していく。

一人の兵士の首を掴み持ちあげると、そいつの顔面をぶん殴り首が折れた感触を味わった後、他の連中を蹴り飛ばしたり拳で頭を潰したり、手刀で首を斬り落したり、様々な手段で遊んだ。

そのせいか途中から兵士どもは完全に恐怖で動けなくなってしまう腰を抜かし失禁までしていた。

……ふむ。まあ楽しめたしいつか。そんな感じのことを思いながら、死体を食って、ついでに金も奪った後その場を離れた。

しばらく探索を続けていると、超兵20人くらいの小隊を見つけた。

僕は涼月を連れて彼らの目の前に出る。すると、彼らは僕達を見た途端にいきなり銃を構えた。まあ当然の反応だよな。

「お、おい！お前らなんだ？侵入者か!？」

僕は超兵の隊長らしき男が発する言葉を気にせずタバコを吸い始める。

「おい!!無視をするな!」

うるさいなあ……と、内心ため息をつきながら、その男の顔面をわざわざかみにして握りつぶす。すると男は大量の血を噴き出し絶命した。

「うあああああああああ!？」

他の超兵どもが騒ぎ始めたのを見て思わず笑ってしまった。涼月が僕の方を少し引いたような目で見ていた。

その後すぐに全員が戦闘体勢を取りこちらに向けて一斉に撃ってきたが、無駄な足掻きである。

全ての銃弾が僕の身体に当たるがダメージはほぼ無い。

そのまま歩みを進め超兵どもの懐に入り、彼らの手足や胴体を軽く蹴ったり掴んでへし折っていった。

そうやって虐殺を続けていくとついに最後の一人になってしまった。そいつは泣き叫びながらも銃で僕を撃ちまくったが、無意味だった。

僕は彼に近づくと、顔を覗き込んだ。彼は僕を見ると怯えだしガタガタ震えながら発狂し始めたが、うるさかったので口にメツエライを突っ込んで撃ち殺した。

それから、こいつの死体を食おうと思ったが、よく考えたらそんなに腹は減っていなかった。

「涼月、これ食べる？」

「え？じゃあ遠慮なく」

彼女は僕が差し出した超兵の死体に思い切り噛みつき食べていた。その顔はかなり幸せそうであった。

「ふう……ちそうさまでした」

彼女は口の周りの血をハンカチで拭いながら僕に向かって笑顔を向ける。……こういうところが可愛いと思う。

その後は、特に何も無く、基地から外に出ようとしたところで涼月に服を引つ張られた。どうやらまだ探索が足りないとのことなので彼女の言う通りにすることにした。

適当にぶらついていると兵士を見つけ、後ろから近づき殴り殺そうとした時、背後に人の気配を感じた。

反射的にその方向に拳銃を向けた瞬間僕はこの前の190センチ超えの男に殴り飛ばされた。

「痛っ……」

僕は倒れた衝撃で口から漏れた声を抑えながら起き上がり、敵を見据える。

相手の顔には見覚えがあり、以前僕達がマガダンの基地を襲撃した際に出てきたかなり強い超兵だったはずだ。名前は確か……思い出せないしそもそも聞いてないな。

「えくと、誰だっけ君」

一応確認のため聞いてみると相手は呆れた表情になりつつも答えてくれた。

「……俺の名はアレクサンドル・コズロフスキー、階級は中佐だ」

なんか微妙に名前がカツコイイ……。

まあいいや。とりあえずコイツもぶつ殺して食うか……と、思ったが……あれ……なんか急に寒気が……

「まあいいか。それではいただきます♪」

僕は気を取り直して襲いかかろうとしたが、相手が機関銃のようなものを両手に持ったかと思えば突然目の前から消えた。

慌てて周りを確認すると、真後ろから機関銃による掃射をくらっ

た。

「くっ……」

ギリギリで回避に成功するが、その隙に距離を取られてしまう。

クソツ、なんてスピードだ。昨日は本気出してなかったのか……ヤバイ、興奮してきた。

戦ってるだけでもイキそう。なんか股間が湿ってるきが……まあいいか。

「深海制御術式第3号、2号解放、ぶっ殺してやるよ！」

僕はメツエライとAK74を両手に持ち、同時に引き金を引こうとした瞬間に僕の身体が吹っ飛んだ。

どうやら奴に殴られて吹き飛んだらしい。

思わず笑ってしまった。こんな状況で笑いが出るのだから僕は狂っているに違いないだろう。

でも楽しいのは事実だし仕方がないじゃないか。

僕は地面に叩きつけられながら心の中で呟いた。そしてすぐに立ち上がり構え直す。もうさつきまでであった痛みは完全に無くなっていた。

相手は機関銃を交互に向けて撃ってくる。ならばこちらも、とメツエライとAK74を撃ちまくる。

だがお互い銃弾を掠めることもせずに撃ち合いは続く。

AKが弾切れを起こしたので、とりあえず突っ込んで殴りかかった。

が、相手は散弾銃を抜いてこちらに向けて撃つてくる。ならば僕を狙って発砲。僕はそれをモロに食らって、追い打ちと言わんばかりに回し蹴りを食らう。

僕は吹き飛ばされ地面を転がる。僕はだいぶグロい状態になってすぐに再生したが、服とコートがボロボロになってしまった。

「これ結構気に入ってたんだけどなあ……君のせいだよ？ねえ、責任取ってくれないかな」

服が穴だらけになり、黒い下着が思いつきり奴に見えてしまっている。流石の涼月も驚いたような表情をしていたが、すぐに目をそらし





タツクを仕掛けてきた。

どう考えても敵うはずが無いのに無駄に突撃する彼らの行動を見てるとなんだかバカっぽくて滑稽に思えた。

そして彼らに対して憐れみの気持ちを抱き、彼らを殺そうとしたら、アレクサンドルが脱兎の如く走り去り、僕達と兵士の間をすり抜けていき、兵士に紛れて彼を見逃してしまった。

「……チツ」

僕は軽く舌打ちをし、兵士共を殺す。

ついでに死んだ兵士から武器と金目の物を剥ぎ取りつつ、アレクサンドルが逃げた方向に歩きだす。

だが、奴は既にヘリコプターで逃走した後だったようだ。

ヘリが飛ぶ音が微かに聞こえたが、すぐにそれは小さくなり完全に聞こえなくなってしまった。

……あの野郎……絶対ぶっ殺してやる……。

とりあえず新しい服を着て僕と涼月は町に出ることにした。

## 48話 夕立に沈黙させられた艦隊

side夕立

私は提督さんの命令で、第1艦隊+第2艦隊で館山鎮守府近海に現れた坂本元帥麾下の潜水艦隊、通称沈黙の艦隊と戦いに来ていた。

ちなみに艦隊の旗艦は白露がやってる。なんか白露に指揮されるの久しぶりかも。懐かしいなあ。

それにしてもなんだろうこの嫌な予感は……？さつきから胸がドキドキしている。まるでこれから起きるであろう何かに緊張してるかのような……。まあいい。とにかく戦いに集中しよう！うん！

「みんな行くよ！」

「おー!!」

白露が叫ぶと全員がそれに応え、艦隊は動き出した。

なお、ソナーなんて高価なものはないので、敵は原潜艦娘だけ爆雷で攻撃する。こんな当たるのかしら？まあいいや、当たれ！

そう思いつつ敵に近づき爆雷を投射するが、まあ当たらない。

そして逆に誘導魚雷で攻撃してくる。私と白露、網走時雨、初月、磯波はジャンプして回避に成功したけど、他の半分くらいが被雷してしまった。

まあ、多分大丈夫っぽい。

でも、なんて言うか、潜水艦って怖いっぽいね。原潜だから深く潜れるし見つからないし。

海に潜れば奇襲できるし、追い詰められても海に潜れば逃げられる。ん？潜る？

「そうだ、潜ればいいっぽい！」

私の体、今スペックはレ級改だから水の中に潜れるっぽい！

「え、ちょ!?!ゆうだ……」

慌てて制止しようとする白露の声が聞こえてきたが、無視しそのまま海へダイブ。

体がどんどん海中へ沈んでいく。やっぱりすごい性能っぽいねレ級改。

そのまま敵の方向へ泳いでいく。呼吸は問題無いし、水圧の影響も受けない。

そのまま潜水しながら敵に向かって雷撃。すると向こうもこつちの存在に気付き誘導魚雷を発射して来た。そして爆発した。

視界を潰しに来たつもりなのだろうが、生憎こちらの方が目がいい（レ級改の視力は姫級と同等かそれ以上）ためそんなことは効かないのだ。

「さあ、素敵なパーティーしましょ！」

そう呟くと同時に魚雷をぶち込む。相手も誘導魚雷を放ってきたが、全力で泳いで魚雷を引きつけ、腕に赤いサソリのタトウーのある金髪原潜を捕まえて魚雷の方向にぶん投げた。

直後、ドガアーン!!という凄まじい爆音と共に海水と原潜の残骸が激しく飛び散り、あたりに鉄片をばら撒いた。

やったっぽい！

黒髪ポニーテールの原潜が「○ツドスコルピオン！」と叫んでいたので、たぶんさっきのタトウー原潜の名前はなんとかスコルピオンとか言うんだと思うっぽい。

なんか、なんとかスコルピオンの背中に付いてたワイヤーを投げる直前に？ぎ取ったので、白髪原潜2体、おそらく姉妹の奴らに巻き付けてみたんだけど、なんかすごい暴れてる。ちよつと大人しくして欲しいっぽい。

「うるさいっぽい」

と言って口に魚雷を突っ込んで爆発させたら静かになったっぽい。

あとは黒髪ポニーテールの原潜だけになった。

せつかなので、私はそいつの目の前に移動し、話しかけてみる事にする。

「初めまして、私は駆逐艦夕立っぽい！あなた名前は？」

「……やまとだかシー○ツトだかよ」

へー、別に興味ないっぽいけど覚えておくっぽい。とりあえず適当

に魚雷発射しながら話を続ける。

彼女がそれを必死になつて避けたせいで全然当たらなかつたっぽい。なんかむかつくからさらに撃ち続けたけど全部避けられたっぽい。

悔しいしいラつく。魚雷も無限じゃないのに……ぶつ殺してやるっぽい。

そんなことを考えていたらなんかシーなんとかが全力で逃げ始めた。

「逃がさないっぽい！」

私は追いかける。しかしシーなんとかは中々に速いみたいで結構距離を離されつつある。

このままじゃ逃げ切られちゃうと思つた矢先、気の狂つた量の爆雷、爆弾、砲弾、明石さんが開発した対潜短魚雷、アスロックが降り注ぎ辺りに凄まじい衝撃波と轟音が響き渡つたのである。

「ぎやああ!?なにごとっぽい!？」

思わず声が出てしまうほどに驚いた。

だが、シーなんとかは大爆発の反動を使って海上に跳躍。魚雷を艦娘たちに投げつけながら逃走する。私は海上に浮上しシーなんとかを追いかける。

シーなんたらは海面からジャンプしつつ後ろを振り返ると同時にハーブーンミサイルを飛ばしてきた。私も主砲と機銃を撃ち込み応戦する。

「沈めえ!!」

私の言葉が引き金となり激しい接近戦が始まる。お互いがすれ違い、魚雷を発射し合うその刹那の時間の中を駆け抜ける。

で、何分か経つた時、シーなんたらが一気に接近して魚雷で殴りつけてきたけど、それを躲して

「チェックメイトっぽい!!!」

そう言つて至近距離で顔面に砲撃を叩き込んだ。そしてシーなんたらは吹き飛ばされそのまま海の底へと沈んで行つた。

……終わつたっぽい? いや〜疲れた。さつさと帰ろつと。

その後私たちは無事に帰投した。

## 49話 空中艦隊出撃

2051年4月5日、旧深海棲艦中枢区域、オアフ島にて。

私の名はニコライ・コフトウン。ロシア特務戦略技術軍の軍曹だ。

今、私は空中戦艦『モスクワ』に搭乗している。そして、私と同志たちの目の前には我らが同志、ウラジーミル・クズネツォフ大佐がいる。

そして同志クズネツォフの演説が始まった。

「同志諸君、ついにこの時が来た。私はこの日、この時を20年以上も心待ちにしていた。それは何故か？ 私は別にドイツ人でもデブでも少佐でもないが戦争が好き、いや、大好きだからだ。祖国の為だとか、国の名誉の為だとか、家族の為に戦うなどというお題目は好きではない。ただひたすらに戦い、勝利を掴んで喜び、敗北して絶望する、それがいい。そんな私が好きで戦争の形とは何かわかるかね？ 蹂躪だよ!! 一方的に敵をなぶり殺しにするあの快感!!……………諸君らはウクライナでの特別軍事作戦に参加した際感じたことはあるだろう。あれこそ私の求めていたものだ!……………まあ、あの時は諸君ら祖国超兵の数が少なかったり、忌々しいネオナチ共がウクライナに武器や義勇兵という名の援軍を送り込んできたせいで中途から劣勢に追い込まれ、作戦失敗、同志たちが何人か死ぬ羽目になったがね……………」

「カラシニコフを構えた歩兵の横隊が敵の戦列を蹂躪するのが好きだ。対戦車ミサイルで戦車が吹き飛ぶ瞬間の高揚はたまらない! 戦場で負傷した同志の首をナイフで跳ね飛ばした時の感覚が好きだ。悲鳴を上げて逃げ惑う兵士の後頭部に機関銃を撃ちこんだ時の快感が愛おしくて仕方がない。戦場の緊張感と敵の死体によってもたらされる死臭の入り混じった匂いが好きだ。血まみれになり、傷つき、倒れ伏す敵の兵士達の姿が好きだ。哀れにも死んでいく味方の兵士の姿が、助けを呼ぶ声が! 死にたくない!と泣き叫び許しを求める無様

な捕虜達の姿を見るのが好きだ!!同志を殺した報復として敵国の女子供を犯しながら殺していく様を楽しむのが好きだ!哀れなレジスタンス達が雑多な小火器で健気にも立ち上がってきたのを情け容赦なく叩き潰すのが好きだ!反革主義の逃亡兵共を街灯上に吊るして、手足を引き裂き、泣き叫ぶ奴らの耳を切り落とし、命乞いをするその口を樂しげに切り裂く光景が大好きだ!!」

同志クズネツオフはそう言い切った。私を含めた多くの兵士たちが歓声を上げた。もちろん私も例外ではなかった。そして同志たちは同志の演説に興奮しまくっていた。

すると同志は一拍置いて再び話し始めた。

「私は常に祖国のために、ソヴィエトのために、ロシアのために戦ってきた。だが、結果はどうだ?祖国はウクライナやアメリカをはじめとするネオナチ勢力によって滅ぼされ、大統領は暗殺され、残ったのは祖国を愛する心のない愚民共と西側の傀儡、ロシアシベリア共和国だけだった!これのどこが国家と呼べるのだ?こんなものはただの国じゃない。国家ですらない……………私は、我々は十分に戦った。しからば我々は……………我々の欲求のために戦って何が悪い?」

その言葉を皮切りに同志たちは騒ぎ始めた。中には涙を流し始める者もいた。

「そうだ、我々の戦いはこれからだ」

誰かの声が響く。同志のボルテージが更に高まる。そして

「同志諸君、私は戦争を、地獄の如き戦争を望んでいる。私を狂気だという者がいるなら勝手にしろ、だが、私と一緒に来るといふならば喜んで歓迎しよう!!」

同志クズネツオフが拳を天に突き上げながら叫んだ。それに釣られるかのように皆が一斉に

「Урааа  
a!!!!」

と叫んだ。無論、私も一緒になって叫んでいた。

◇ 「エンジン起動開始、最終点検終了。問題ありません、いつでも出撃できます！」

整備員の報告を聞いたクズネツオフは満足げに笑いながら

「そうか、わかった。これで準備は全て整った。待ってるよ  
МОНСТР<sup>レ</sup>、よし！旗艦『モスクワ』及び僚艦『レニングラード』  
『ヴォルゴグラード』『カリーニングラード』『ミンスク』『キエフ』離  
陸せよ！」

そして5分後に空中戦艦6隻は空高く飛び立った。

「ロシアIIシベリア共和国特務戦略技術軍、総司令官より全空中艦隊  
へ、目標、日本国、首都東京上空!!」

「了解！高度1万まで上昇後、ステルス状態のまま巡航、進路変更なし  
!!」

モスクワ、レニングラードなどの空中戦艦は一気に速度を上げ、日  
本の上空へと向かった。

ミンスクは横須賀鎮守府、それ以外の空中戦艦は東京へと向かつ  
た。



## 50話 開戦の刻

side提督

現在執務室にいるのだが、なんか館山鎮守府近海に送り込んだ艦隊が、館山の東郷少佐改め大佐と館山の朝潮を連れて帰ってきた。

「東郷さん何しに来たんですか？」

「いや、艦娘が一人しかいない鎮守府で決戦を迎えるのは危ないからな。まあ俺の鎮守府なんだけど」

「それで？」

「いや、朝潮が提案してきたんだよ。お前のところに艦娘が大勢いるみたいだし、しばらくここに厄介になることにするよ。よろしくな」

私はそれを聞くなりため息を吐いて執務室から出て行った。まあ戦力が増えるのは非常にありがたいことだから良しとする。それにしても…… 東郷のやろう……面倒事を持って来やがったな……。

そんなことを思いつつコーヒーを飲もうとしたら舞浜鎮守府の齋藤少将から電話がかかってきた。私はすぐに受話器を取って応答した。

「はいこちら横須賀鎮守府」

「俺だ、舞浜の齋藤だ。君たちに朗報だ。今、大本営襲撃してる」

「はい？」

『だから今、艦隊を率いて大本営を襲撃している』

「いやなんで!？」

私は思わず声を上げて叫んでしまった。

『ちなみに第零艦隊の連中はいないけど第1艦隊から第4艦隊までの連中が抵抗を続けてるんだがそろそろ陥落しそうだな』

「いや、理由聞いているんですが……」

『元帥と第零艦隊が所在不明の間にクーデター起こして深海棲艦と大本営のつながりを断つことにしたんだよ。後で大本営に来てくれ』

「アッハイ」

そして私は通話を終えた。そしてまた大きな溜息を吐き、東郷にこのことを説明した。

東郷は大層驚いていたが納得しているようだった。

そして数時間後、明石が開発し鎮守府に設置された大型レーダーが6機の超大型航空機を確認したという連絡が入った。

おそらく特務戦略技術軍の奴らだろう。どうしてあんなに巨大なトンデモ兵器を持っていたのか疑問に思うことは多々あるがそれは一旦置いておこう。それよりどう対応するかの方が問題だ。

とりあえず時雨に電話をかけることにした。

side 時雨

プルルルプルルル

「？」

僕は突然鳴り響いたスマホに首を傾げながら、その音の発生源であるスマホを取り出す。

まあとにかく僕はその着信に出た。

「はいはい、何の用かな？」

『おい時雨！』

「ん？提督？なんか慌てるみたいだけど何かあったのかい？」

『ああ実はな、今晚、特務戦略技術軍の連中が東京と横須賀を攻めに来るらしいんだ。早く戻ってきてくれ』

「うくん今晚はちよつと無理かな」

『は？お前今どこにいますよ！』

「え？南樺太のユジノサハリンスクだけど」

僕はその言葉を聞いた瞬間、提督がフリーズする気配を感じた。僕

が何をしたと言うのだろうか。

『……………なんでウラジオストクからロシアに行って二週間後ユジノサハリンスクにいるんだよ』

提督が呆れ半分怒り半分で言ってきた。

『ところでお前今何してんだよ』

「え？酒飲みながら涼月と飛行場見てるけど」

『……………』

あれ？もしかしてこれダメなことした？

『……………お前……………こっちは結構ヤバイ状況なんだぞ……………頼むから真面目にしてくれ……………今夜には帰ってきてくれ……………マジで』

「やだ」

『おいコラテメエ』

「帰りたいのはやまやまだけどき、さっき大量の酒買ってまだそんなに飲んでないんだよ？アル中から酒を取り上げるとは残酷なことだとは思わないのかい？」

『……………アル中でいいからとつと帰ってこい馬鹿野郎！』

ツーツー……………

電話を切られてしまった。僕はそれを見て肩を落としてつつもスマホをバックにしまい込み、代わりに酒瓶を取り出し一気に煽った。

「ツ……………僕が何も考え無しに飛行場の近くにいるとでも思ったのかな？涼月、行くよ」

「何しに行くんですか？まあろくでもないことだとは察してますけど」

「まあまあ、大したことじゃないよ。ちよつと軍と共有されてる飛行場に戦闘機を盗みに行くだけだから」

時雨は戻ってくるだろうとして、齋藤少将が早く来いとメールを送ってきた。仕方ない、齋藤少将の指示通り、大本営へと行こうか。とりあえず、東郷に全指揮権を渡しておいた。あと、石川中佐改め准将からもメールが来て元帥に騙された柱島鎮守府に石川の串本鎮守府が攻撃されているらしい。数は向こうの方が多いが善戦しているとのことだ。

まあそんな感じのことをやって執務室から出て、单身大本営へと向かった。



side 東郷

一時間後、横須賀鎮守府にて。

「明石、迎撃準備はできてるか？」

「はい、全ての兵装及び試作兵器の配備と防空陣地の設営が完了しました」

「よし、わかった。白露、艦隊の編成と配置は終わったか？」

「うんー！ばっちり！」

「ところで明石、敵のバカでか飛行機との距離はどのくらいだ？」

「はい、およそ1万メートルです」

「なるほど」

「あ、そのレールガンを撃つ夕立が飛行機を視認したらしいです」

「おっけ、そんじゃあそろそろ迎撃始めるか……」

俺はそう言いつつ椅子に深く腰掛ける。そして目を閉じてこれらの戦闘に備えた。

side 夕立

今私が装備しているのは『40ミリ大型電磁砲 ブリッツ』だ。

明石さんには「敵に照準を合わせてぶつ放せばとりあえずあたりますよ」としか言われていないのだが本当にそれで良いのか疑問に思う今日この頃。

でもなんか雲の向こうから巨大な飛行機みたいなのが見えてきたっぽい。

たぶん敵だ。

とりあえず通信で報告しておいたら東郷さんから指示がきた。

『……射撃開始だ。わけわからんロシア人共に目に物見せてやれ』

「了解っぽい！」

私はブリッツの銃身を構え照準を合わせ、引き金を引いた。

ブリッツは凄まじい発射音をたてながらレールガン特有の轟雷を響かせ、砲弾を発射した。

マツハ7で飛び出した砲弾は1秒たったか否かの内に空中戦艦ミンスクの左翼を貫き、二射三射も命中した。

—— 決戦の火蓋は切られた。

第四章 完

転しぐ改 外伝 零 白露編  
白露編

私の名前は青山一秋。なお、今は白露に憑依している。

……今の言葉の意味が分からなかった人に手を挙げさせたら九割方拳がりそうなので説明しようか。

さつきも言った通り私は、横須賀鎮守府の元提督の青山一秋大佐だ。

ちなみに私は東郷や杉野の同期で、三人で艦娘は人間だと言った結果『士官学校の三馬鹿』というあだ名をつけられてしまった。まあ、二人はなんか笑っていたが。

三馬鹿呼ばわりされてトリオ扱いされていた私たちはそれなりに仲が良かった。

杉野はなんか知らんが私のことを青くんと呼んでいた。

士官学校を卒業した後、いろいろあつて横須賀鎮守府に着任した。

この横須賀鎮守府はいわゆるブラック鎮守府で、ここの前任は不正がバレて刑務所送りにされたらしい。

私はとりあえず食堂に艦娘を集めて演説的なものをやったのだが、敵意、恐怖 ect: めっちゃ怖かったが言い切った。

その後は苦難の連続だった。夜伽だなんだと戦艦が寝室に突撃してきたり、巡洋艦がナイフ片手に襲撃してきたり、潜水艦による水遁の術(意味不)を仕掛けてくる奴らがいたりとそれはもう大変だった。まあなんとか追い払ったけど。

なんていうか、一番精神に來たのは駆逐艦に怖い怖いという感じの視線だった。はい。新卒のいじめかと思った。

まあ、何か月かしたら艦娘たちとの関係はだいぶ改善し、結構話せるようになった。駆逐艦たちともかなり仲良くなった。

その後、鎮守府戦果ランキング1位を取ったり、杉野のところでもいろいろあつたらしい瑞鶴を引き取ったり、駆逐艦たちと鬼ごっこしたり……まあまあ、楽しいこともあつた。だがそんな生活も終わりを告げることになる。

大本営から西馬と言う男が副官として着任した。彼は寡黙だったが頭がよくキレていたらしく坂本少将からも信頼が厚いとかなんとか聞いていた。まあ、そんな話はどうでもいいが。

ただ、ある日のこと、執務室で仕事していたとき、唐突に西馬がコーヒーを入れて渡してきた。

好意に甘えてそれを飲んだ瞬間、いきなり視界が揺れた。

「ぐっ!?がああああッ!!な……なんだこれ……」

私は床に倒れたまま動けず、意識を失いかける寸前の西馬の表情をみて「こいつが仕組んだことか」と理解し、そして気を失った。

次に目を覚ましたとき、何故か体が白露に乗り移っていた。これが転生か憑依だかというやつか。

私はそのことに少し興奮を覚えつつも現状把握に努めた。……今思うと冷静過ぎないか? いやまあ、いい。とにかくだ。

西馬は私を殺した後、この鎮守府の提督になって、ブラック鎮守府へと作り変えてしまっていた。

私は艦娘たちが傷つき苦しむ姿を見たくなくて身をなげうって彼女たちを守ると決めた。

戦場では無茶なことをして、何度死にかけたかわからない。でも後悔はしていない。彼女たちを守り切れたことに安堵感さえ覚えるくらいだ。

性的暴行を受けたり、暴言を浴びせられたり。暴力も受けたし罵倒もたくさん浴びせられた。それでも守り続けたのだ。

ある日、西馬が建造をやった。そして建造されたのは時雨だった。だが、私は直観的にその時雨の中身というか人格は杉野だと感じた。

まあ、時雨の方は私が青山だとは気づいていなかったが。

その後、私と時雨は今世でも親友のような関係になった。

ただ、どつちも強すぎたせいで艦娘の一部が私たちを深海棲艦だと

勘違いして暴言とかを言ってくるようになった。

私は別にいい。

ただ時雨（とそのゆかいな仲間たち）のことが心配だった。あいつの心に深い傷を負ってしまっているのではないかと。

まあ大丈夫だった。少なくとも現時点では。

そんな日常は急に終わりを告げる。

ある日の出撃で時雨を庇って私は撃沈してしまった。

沈む寸前に時雨に後のことを託した。あいつはなんやかんやで誠実だからまあ大丈夫だろう。

そんなことを考えながら私は目を閉じ……………目が覚めたら深海棲艦になつていた。それも姫級だ。

どうするべきか考えた結果、その辺の深海棲艦を片っ端から沈めて艦娘たちを裏方から助けていくことにした。

そしてその1年くらい後、時雨とぼったり出会った。彼女は深海棲艦になった私を白露だと気付いてオモチカエリして見た目を元の白露に戻してくれた。

まあ、あの時はかなりびっくりしたが、すぐに慣れた。

だが、時雨はかなり変わってしまった。誠実なところや優しい部分、割とウザい部分はそんなに変わってはいなかったが、性格がかなり荒んでしまったようだった。

ついでに言うとう表には出していないが、一部の、自分を虐めていた艦娘たちを怖がってもいるようだ。まあ無理もないが。

本人は隠したがっているので放っておくが。

さて。そんな感じで色々あつて今に至る。

「白露、なんで明後日の方向向いてぶつぶつ言ってるんだい？」

んー。どうするか…………。とりあえず適当にはぐらかすか。

「いや…………なんでもないよ」

「ふうん？なら良いけど」

よく考えたら今出撃の帰りだったわ。なんかいろいろありすぎて疲れたし今日はもう休も…………。



## 最終章 時雨の一番長い夜

### 51話 こいつ艦長にしたのマジで誰だ

空中戦艦ミンスクの艦内は大混乱に陥っていた。

「なんだ！何が起きている!?!」

そんな声を上げたのは一応ミンスクの艦長であり、ミンスクに搭乗している超兵部隊の隊長でもあるゲオルグ・リザンスキー少佐だった。

「狙撃です！横須賀鎮守府屋上からの遠距離砲撃です！」

「ええい、よくわからん！」

コイツ艦長にしたの誰だよ。

艦橋は混乱により大騒ぎになっていた。

そんな中、突然大きな爆音が響くと同時に機体が揺れる衝撃が起きた。

「艦長！第一尾翼が吹っ飛びました！」

「よくわからん！」

「艦長う！砲弾が機体を貫通して艦内通信機能が死にました！」

「よくわからん！」

「副艦長！艦長のおつむが死んでます！指示ください！」

「えーつと、攻撃指示不能。CICは勝手に判断して攻撃するように」

副艦長からの攻撃命令が飛んでくると同時にミンスクに搭載されていた砲、機銃、ミサイルによる攻撃が始まるも、あまりの効果はなかった。

「艦長！極左……じゃなかった、左翼の半分くらいが吹き飛びました！」

「よくわからん！」

「誰だこんな馬鹿を艦長にした奴は！」

「やばいです！火災が原子炉の付近で発生！」

「消火だ！今すぐ消せ！」

「誰だよあの狂人についていくつて言った奴！」

「神イ！」

もう滅茶苦茶だった。

「あ、左翼吹っ飛びました！」

「ミサイルコンテナが引火あ！」

「電源停止！予備電源を使用します！」

「敵の攻撃でC I Cが撃ち抜かれて全滅しました！」

「もうおしまいだあ！」

「右翼が粉々に！」

「もう中道と右派しか残ってないぞ！」

「なんでイデオロギーの話してんだよ！」

「死にたくない！」

「神イ！」

「よくわからん！」

「クソお！」

「あああああ！」

「同志！助けてくれ！」

「プロレタリアート！」

「同志、どうしよう（笑）」

ミンスクの乗組員達は絶望していた。そして彼らは思った、どうしてこうなった？と。

「艦長！不時着しましょう！」

「よくわからん！」

「ダメだコイツ！」

「全原子炉が機能停止！」

「うおおお！著しい高度低下！」

「うわあああああ!!!」

ミンスクはどんどん降下していき遂には海上に墜落した。

だが、搭載していた超兵100体はほぼ無傷で、もちろん超兵であるゲオルグも無傷だった。普通の人間の兵士は全滅したが。



## 52話 ソロモン深海棲姫

ゲオルグ率いる超兵100体を迎え撃ったのはバケモノ（半分くらい中身姫級）揃いの横須賀鎮守府第1艦隊だった。

ちなみに旗艦は白露で僚艦は夕立、初月、網走時雨、加賀、金剛だ。

『白露、攻撃開始だ。ぶっ潰してやれ』

「了解！」

加賀と金剛以外の艦隊が突撃し、遊撃を開始する。

白露は一番に突撃し、日本刀や主砲、魚雷をぶっ放し、初月はなんか握力にものを言わせて日本刀で斬りまくっている。

夕立はなんかブリッツの砲身部分を振りまわしたり殴ったりして超兵をミンチに変えて回っていた。さすがにこれはグロい。

網走時雨はと言うと、主砲を撃ちながら魚雷をダーツのように投げつけ、敵に当てたり、敵の砲弾や魚雷やらを別の敵で防ぎながら肉薄し、敵の口に魚雷やら爆雷を突っ込んで爆破させながら倒している。

もはや駆逐艦のすることではない。いやまあ戦艦でもそんなことやらないだろう。

ちなみに金剛と加賀は突っ込んだらえらいことになりそうなので後方支援に徹している。

「なるほど、なかなかやるではないか。貴様らに問う、我々の同志になる気はないのか？」

「ないよ！絶対嫌！」

「よくわからん！」

「なら死ねっぽい！」

ゲオルグはシンプルに馬鹿だったみたいです。

「あ、同志リザンスキー！艦娘たちが退却していきます！おそらく弾薬が切れたと思われます！」

「よくわからん！」

「同志、チャンスです！ここは一気に行きましょう！」

「よくわかった！」

「よし、同志につづけええ!!」

「Y p a a a a a a a a !」

約60体の狂人（それもル級と同等のスペック）が横須賀に押し寄せてくる。

それを横須賀の艦娘たちは砲弾の嵐で迎える。

だがゲオルグ達は砲弾が命中してもそんなにダメージを負っていない上にほとんど避けている。

そしてついに射程内に入ると同時にAKやRPGの発砲を始める。

ちなみにこれらの武器は艦娘や深海棲艦の装甲を実質無効化するように改造されている。

つまり並大抵の艦娘はこれ食らったら普通に死ぬのだ。

ただし時雨にはほぼ効かなかったのは秘密である。あと夕立にも多分効かない。

あの2人は理不尽な程の再生能力と回避能力をもっている。

2人にとっては銃弾なんて止まって見えるのかもしれない、きっとそうだ、そういうことにしよう。

ゲオルグ達が放った弾丸が横須賀鎮守府を蹂躪するかのようになり注ぎ始めると同時に、ゲオルグ達の足元から炎が吹き上がる。

ゲオルグ達は何が起きたかわかっていなかった。ただ足下がいきなり燃え上がっただけなのだから。まあ実際は事前に設置されていた地雷原を作動させて、ゲオルグ達を焼き尽くそうとしたのだが、超兵の防御力が凄すぎてあまり効いていないようだ。

「うお〜なんだ!?!」

「クソッ！よくわからん！」

だがそれでもダメージはあるようで、何人かの超兵が火だるまになった。

「クソッ！突っ込め！ぶっ殺せ！皆殺しだ！」

ゲオルグが痲癩を起こすとそれに答えるように超兵たちが動き出し始めた。

「Y p a a a a a a a a !」

超兵たちは一斉に叫び、鎮守府の本館に向けて突っ込み始めた。

艦娘たちは扉の影に隠れ、超兵たちの進撃を防いだ。しかしゲオルグは超兵の中でもぶつちぎりに頑丈な身体を持っているため全く怯む心配がない。

そしてゲオルグが向かう方向には指令室がある。東郷がいるのだ。襲われたらひとたまりもない。

「夕立！あいつを止めて！」

「任されたっばい！」

side夕立

私は白露の言う通り、ゲオルグの進行を妨害しようとはぶん殴る。

「うおお！よくわからんけど邪魔するんじゃないやねえ!!」

その言葉を見無視し、ゲオルグの頭を掴み、思いつき投げ飛ばす。

ゲオルグはそれを受け身を取り、すぐに走り出す。

私もそれを追いかける。

「ちよこまかとお!!俺様についてこれるかあ!!」

ゲオルグの言葉は気にせず追いつき、またぶん投げる。それを何度も繰り返すとだんだんと減速していく。

「ク、ソがあ！なんなんだよテメエは!!」

「白露型の4番艦夕立、っばい？」

「知るかなこと!!もういい、ここで殺すう!!!」

どうでもいいけどこの男、喋り方キモいっばい。

「うおお！これでトドメえ!!」

男は持っていた拳銃を取り出し発砲してきた。

それは私に向かって真っ直ぐ向かってきて、命中した。

「やったぜい！それは祝福儀礼的なやつがかけられてるんだわあ、死ぬい!!」

確かに痛い、すごく熱い。血も出てる。体の動きが鈍くなっていくのも感じる。このままだと動けなくなるのだろう。だけど…そんなの知らない、中身のスペックがレ級改並みだから大丈夫！

「クソオ！死ねやあ!!」

男は同じ拳銃を撃ちまくってきた。

これ以上当たったらアウトだろうけど、平気っぽい！私は拳を振りかざし、男の顔面に叩き込む！男は吹き飛ばされ、壁を突き破っていった。

「やったっぽい！私の勝ちっぽ……」

「夕立危ない！」

「え？」

私が勝ったと思っていたその時、白露の声が聞こえた気がして振り向いてみると、さっき倒した男がいて、手にはナイフが握られていた。(まずっ!?避けられないかも！)

「ぐっ!!」

心臓にナイフが突き刺さり、血が流れ始める。

それと同時に意識が遠くなり始めた。ヤバい、本当に死にそうっぽい……。

「あばよ」

男は一言告げ、そのままどこかへ行ってしまった。私はそこで完全に倒れてしまった。体が全然動かない。多分もうすぐ死ぬっぽい？なんか目の前が暗いや……。

………なんで私が死ななきゃいけないっぽい？私、何も悪いことしてないのに……。

どうしてこんな目に合わなくちゃいけないっぽい？

……嫌だ、絶対に生き残ってやるっぽい！生きて時雨たちのそばにいたい。

それにまだやり残したことだってたくさんあるし！絶対諦めたくない！

……どうやってたら生き残れるっぽい？あの男を殺すしかないっぽい？殺れるっぽい？……いや、殺れる……殺ってやるっぽい。

「ふぎ、けんじゃ、ない、っぽい」

全身から熱が抜け、力が湧き上がるような感覚に陥ると視界がクリアになり立ち上がることができるようになった。そして自分の髪に

目を向けると白くなっていることに気づく。肌は元の肌色のままだが。

これは、なんだろう、不思議と怖いとは思わない。ただ、何故か何かを壊したいという衝動に駆られる。

「ぶっ殺してやるっぽい！」

私は男に向かって駆け出した。

sideゲオルグ

なんだアイツは、なんだアイツは!?

雰囲気からしてヤバイ。なんかよくわからんがヤバイ!俺が本能的に怯えてしまうくらいにはおかしい存在だっ!

「クソツッ！」

とりあえず逃げるしかねえ!殺される!!俺は一目散に逃げ、裏口から出て海沿いまで走る。

後ろを確認すると奴はまだ来ていないようだ。良かったぜ……。だがそれも束の間、大きな衝撃を受けて吹き飛ばされる。

俺を吹き飛ばした奴を見ると、奴は俺の右腕を食ってた。

「ひい!食われた!」

「はむはむ……おいしい!」

美味しいだとお!何が美味しいんだよクソが!てかコイツ、超兵とか深海棲艦みたいに髪が白い。

「バ、バケモノめ!」

「うるさい!殺すっぽい!!」

すると奴の姿が消えたと思ったら一瞬にして背後を取られ、背中を蹴られ吹き飛ばされた。そしてその勢いで岩場に当たり身体中に激痛が走った。

「あぐあ!」

ダメだ……殺される!勝てねえ!

「こうなったら……」

俺は通信機で本隊に助けを求めることにした。



「同志クズネツオフ大佐！助けてください！バケモノに追われているんです！すぐに来てくれ!!このままでは死んでしまいます!!」

『……同志クズネツオフ、いかがいたしますか?』

『……あのクソ脳筋野郎は放っておけ』

『しかし……了解いたしました』

「うわあああああああ！ふざけんな！助けるお！あああああああああ！来るな！こっちに来るなあ!!」

俺を殺そうと向かってくるバケモノ。

必死に走って逃げ回るが、遂に捕まってしまふ。俺は地面に転げ落ち何度も殴られる。

そして最後に手刀で心臓を潰された。俺の意識は遠退き、そのまま暗闇の中に堕ちていく。

side 夕立

さっきのゲオルグ?とか言う奴をぶっ殺してやったらだいぶ落ちて着いたっぽい!

……でもまだ戦い足りないっぽい。あ、そういえばゲオなんとかが本隊がうんたらって言ってたっぽい!そいつらぶっ殺しに行くっぽい!

「行つてきまゝす!」

私はそう言つて艦装を展開して東京に向かった。

おまけ 各提督たちから見た艦娘

ホワイト鎮守府 グレー鎮守府 ブラック鎮守府 艦娘

人間 荻原、東郷、青山 艦娘 軍人 杉野 坂本(大

本営) 艦娘 兵器、道具

西馬

杉野（時雨）は艦娘を軍人と見て、信賞必罰（飴と鞭）を徹底したことで網走鎮守府を地方鎮守府の戦果1位に押し上げた。（ちなみに杉野は太平洋戦争などの戦史を勉強して補給を重視したドクトリンを立てていた。艦隊指揮の腕は微妙だが総合的に見れば優秀な部類の提督）

坂本は演説では兵器だと言っていたが本人は軍人だと思っている。

## 53話 首都侵攻

旗艦モスクワ率いる5隻の空中艦隊は遂に首都東京上空へ到達した。

そんなモスクワの艦内では最後のブリーフィングが行われていた（出撃前にやっとけよ）。

「諸君、ようやくだ。ようやく着いたぞ、我々が望んだ戦場に……」

「Y p a a a a a a !!」

「……第一目標は東京23区、皇居、国会議事堂、都庁、東京駅、国技館、霞ヶ関ビル、国立博物館、全て燃やせ」

「同志、スカイツリーはどういたしましょうか」

「破壊しろ、東京タワーもだ」

「六本木ヒルズは？」

「もちろんぶつ壊せ。不愉快だ」

「大佐、明治神宮はいかがでしょうか？あれだけ神聖な場所でありますし……」

「燃やせ、私、というか世界の大半は神道など知らん」

「新宿御苑は如何でしょう」

「爆破だ」

「……畏まりました。靖国神社や湯島天神、東京大神宮はいかがいたしますか」

「全て燃やせ」

「はい」

「秋葉原はどうしましょう？聖地と聞いていますが……」

「日本のアニオタの趣味など知らん。燃やせ」

「レインボーブリッジは……」

「爆破だ、東京湾の藻屑とせよ」

「了解」

「……目に付いたものは片端から壊せ。目に付いたものは片端から食

らえ。存分に暴れ狂え！……この人口1000万の首都は諸君らの物となったのだ」

「さあ諸君、戦争の始まりだ。殺したり殺されたりしよう。死んだり死なせたりしよう。さあ、全ては諸君らの自由だ。好きなようにやり給え。では……… R—17VTOミサイル（スカッドD）、第一射用意！」

突然上空に現れた空中戦艦に、都民は騒然としていた。

「なんじゃありやあ!？」

「なんかすごいのきたぞ！」

「写真撮っとけ！」

「誰か撮影者いねえのか！SNSに投稿しろ！#空の覇者襲来ってな！」

「警察！誰か警察呼べ！」

「空軍は何やってんだ!？」

阿鼻叫喚の中、突如として爆発音が鳴り響く。すると地上にあつた建造物が次々と炎に包まれていく。そして次々と人が死んでいった。

「なんだ！何が起きてるんだ!？」

「逃げろ！爆撃だ！」

「防空壕だ！逃げ!!」

地上の光景を見たクズネツオフたちはほくそ笑む。

「同志！このまま畳みかけましょう！」

「ああ！R—17VTOミサイル、第二射用意！次いで祖国超兵の全部隊、降下用意！」

「了解！」

空中戦艦モスクワの出撃準備室にて、特務戦略技術軍曹長のアントン・グリアゼフは部下たちと出撃準備を整えていた。

「さあ、準備しろ同志たち。俺が先陣を切る」

「了解！」

「さあ、行くぞ！」

アントンはカタパルトを起動させる。そして轟音と共に発進する。そしてその部下や同志たちもカタパルトにより発射され、降下を開始する。

アントンは部下たちと合流すると手当たり次第に民間人に発砲し始める。

「うわあああああ!!!」

「誰か助けてく」

「ハハハ！死ね死ね死ねえ！」

「殺れえ!!一人残らず殺せ！皆殺しだあ!!!」

そして東京23区の各所で虐殺が始まる。それは瞬く間に都内全域へ広がっていく。人々は逃げ惑い、抵抗虚しく殺されていく。

東京の各所に駐屯していた陸軍は反撃に出るが、超兵の戦闘力に圧倒され瞬く間に蹂躪されてしまう。

「フッフ、最高だ」

クズネツオフはモスクワ艦内で地獄と化した東京の中継を見ていた。

『キヤー!!』

『お母さん!!!』

『た、助k』ドオン！

『嫌ア”アツ!!』

『へへへ』パンパン

『お姉ちゃんが！うわっ!』

『助け……ウワアアア!!!』ザシユ

そんな光景を見て彼はニヤリとする。

「ところどころから銃声が、爆発音が、悲鳴が、誰かが犯される音も聞こえるな……ク、フフ……」

そして映像には次々と東京各地の建物が爆破されていく様子や、血

飛沫が舞っていく様子が映し出されている。  
それを見たクスネツオフは再び口角を上げた。

## 54話 第零艦隊推参

横須賀鎮守府提督である荻原大輔准将は大本営を制圧したという齋藤少将の所に行くため、軍用車で東京に来ていた。

「う〜ん……地獄だな……」

東京はまさに阿鼻叫喚となっていた。そこかしこでは銃撃戦が行われ、人々が無惨にも死んでいく。

また、建物は燃え上がり、スカイツリーはなんか上半分が無くなっている。そんな悲惨な光景の中を走りながら進む。

「しかし……これどうすつか……」

そこら中に死体が転がっているのを見ながら眩いた。

「時雨が戻って来ない限りはこんななんどうにもならないんだよなあ……」

彼がそう言って頭を抱え込んだその時であった。いろんな方向からRPGの弾が飛んできたのは。

「ぬおっ!? あぶなっ!!」

彼はアクセルをべた踏みしてハンドルを回すと、間一髪のところまで避ける事に成功した。

しかしその後も次々に撃ってくる。どうしようかと考えていると、超兵の一人が銃剣付きのAK74を持って車の上から彼を刺そうとした。

「死ねえ! グフツ!」

だが、荻原は間一髪のところでは対化物用拳銃『メツエライ改』で超兵の頭を吹き飛ばし助かった。

ちなみにこのメツエライ改は時雨が暴走した時に殺すために明石が開発した代物で、実際に大本営で時雨が暴力沙汰を起こした時にはこれで殺した。

とりあえず荻原は車から降りることにした。

「ふう、死ぬかと思っただぞ。超兵共」

「往生際が悪い男だな」

荻原の前方には100体以上の祖国超兵の姿があった。その全員が銃を持ち荻原を狙っているようだ。

「いくら足掻こうが逃げようが無駄だ。諦めろ。もはやこの東京には、逃げる場所も隠れる場所も存在しない。諦めろ、人間」

超兵は降伏するように勧告する。しかしその超兵を荻原は鼻で笑った。

「ハハッ。無駄だど？諦めろだど？まあ、お前たちらしい言い草だな。人間でいることに耐えられなかった、人間から逃げた卑怯者共が。……人間をなめるな。人間はな、そんな簡単には負けない。さあ来い！かかってこい！全員まとめて叩き潰してやる！」

荻原の言葉を聞いた超兵たちは笑い始める。

「クハハハハ！いいだろう!!望み通りぶっ殺してやる!!」

「行くぞ!!」

ザザア!!と彼らは駆け出した瞬間。

グサグサグサツ!と、超兵の一人に無数の短刀が刺さり死亡した。

「なんだ!」

超兵たちと荻原は上を見上げる。そしてそこには……大本営第零艦隊旗艦、神風零式がいた。

「お前は、神風か!」

荻原がそう言うのと超兵たちがざわざわしだす。

「神風って大佐が見せたビデオでシグレと戦ってたやつだよな?」

「ああ、本人なら相当強いぞ」

「上から来るぞ!気をつけろ!」

神風は荻原の目の前に降り立つとこう言い放った。

「荻原准将、お久しぶりです……フフ、ただの人間が、生身の人間が、バケモノ共にかかってこい?叩き潰す?笑わせてくれますね。まあ、坂本元帥からあなたを監視するように伝えられているので、監視対象であるあなたに死んでもらっては困ります。おとなしくじっとしててください。まあ、心意気は買いますよ、それでこそ私の宿敵の上官です」



「おい小娘、邪魔をするな」

超兵たちがそう言うが彼女は逆にこう返した。

「あなた方には聞いてません。バケモノ共が」ギロツ

それを聞いた超兵たちの顔から汗が流れる。どうやら恐怖を感じているみたいだ。すると神風は超兵の方に振り向きこう言い放つ。

「元帥に仇名す者は駆逐する。バケモノは駆逐する」

神風はそう言う袖から短刀8本を出し指と指の間に挟む。

「この私の眼前にバケモノ共が歩き、喋ることを許した覚えはない。元帥に刃向かう者、盾突く者、元帥に対する障害は全て、私が、我ら第零艦隊が排除する！」

神風がそう言い切ったと同時に第零艦隊の陽炎、叢雲が神風の後方の建物から降下、その他の第零艦隊の艦娘たちもぞろぞろと現れる。

「我ら第零艦隊に盾突く者は！震えながらではなく！道端のゴミのように死ぬのだ!!」

神風はそう言い8本の短刀を超兵たちに向かって投げる。その短刀は正確に超兵の胸元や頭部へ刺さっていく。

「総員！突撃イ!!!」

そして、戦闘が開始された。しかし戦況は完全に一方的であった。超兵たちは次々に撃破されていく。

ある者は短刀が全身に突き刺さり、ある者は槍によって頭を貫通、またある者は対深海棲艦用の拳銃で滅多撃ちにされミンチ状態になって死ぬなどなど、様々な方法で殺されていく。

「クッ！」

「ガアッ！」

「クソッ！なんてバケモノだ……」

「こいつら本当に、本当に艦娘なのか!？」

「バケモノ共め!!」

超兵たちは悲鳴を上げながらどんどん死んでいく。

「うおおお！捉えたぞおー！」

ある超兵が第零艦隊の叢雲に完全に照準を合わせ、AK74を発砲した。

AKの弾は完全に命中コースだったが、叢雲は「見てから回避、余裕でした」とい言わんばかりに避け、その超兵の顔面に槍をぶつ刺した。

「ぐはっ!!」

ザシュツ!!という鈍い音が鳴り響く。他の超兵たちはさらに銃撃を強めた。

だが艦娘たちはそんなものは意味が無いといわけんばかりに次々と撃たれる銃弾を軽々と避けて、超兵を惨殺していく。

「バケモノが!」

「勝てるわけないだろ!こんなバケモノ共!」

「ちくしょう……俺はまだ死にたくない!嫌だ!いぎだい!」

「もうダメだよ。死んだよ。俺たちは」

絶望の声を呟きながら、次々と超兵は殺されていく。そしてついに残った超兵達は10人弱まで減った。

萩原はしかめ面で腕組んでそれを見ている。

(うわあ……)

「どうしましたか?」

「お前ら、やっぱり結構エグいな」

「え?何がです?」

神風はとぼけたような顔をするが、これは確実にわかっている反応である。萩原は苦笑いしたという。

神風はラスト10人になった超兵の群れに突っ込むと「うらああああああ!!」と叫び声をあげながら短刀を投げまくり攻撃を開始した。

超兵たちはマシンガンやアサルトライフルなどで神風に応戦しようとするが弾丸は全て外れていき神風の投げつけた短刀が次々と彼らの体突き刺し、殺していく。

そしてあっという間に残りの超兵は神風に虐殺された。

◇

荻原は一人、大本営に向かおうと歩き出した。

だが、陽炎に銃を向けられた。

「どこへ行く気ですか」

「大本営だ。少将が呼んでいる」

「齋藤とその配下の艦隊は既に始末しました」

「とりあえず大本営に行く。私には一応将官としての仕事があるのでな」

「あなたの身柄はこちらで預からせてもらいます」

「……………なら、水か酒寄せせ」

「……………は？」

「だから捕虜にするのなら水か酒でも寄せせや。気の利かんやつだな。おもてなしの精神を知らんのか」

そう言いつつ、荻原は陽炎の手にある拳銃を蹴って飛ばした。

「水だ。その辺の自販機のペットボトルでもいいぞ」

荻原はそのまま歩き続ける。第零艦隊の艦娘たちはなんか呆れていたとか。

陽炎と叢雲の2人はしばらく考え込んだ後、荻原に水を渡そうとしたが「酒が良い」と言われ、キレだした。

「もうコイツの脚切り落として攫っちゃおうかしら」

「いつそ銃で撃っちゃおう？」

「聞こえてるぞ、お前ら。……………それでいいのか第零艦隊、それでいいのか神風」

荻原は2人の暴言を聞き流しながら神風に問うた。

すると神風の瞳が一瞬だけ揺らいだ気がしたのだが、次の瞬間こう言った。

「艦娘の存在意義は、一応、日本国民を守ること、人間を傷つけるのは、我々の任務ではありません」

「じゃあ今の行動はなんだ？」

「元帥の命令により、あなたの確保を命じられました。それが私の任

務でしたので遂行しようとしただけです」

荻原はこの回答に「ふーん」と生返事をしただけだった。

「じゃあ私は行くぞ。だが、この夜道は物騒すぎる。送ってくれ」

「わかりました。送りましょう」

「はあ!?!」

こうして荻原は第零艦隊に送られることになったのだった。

荻原と護衛の第零艦隊の移動は、ポーカーフェイスな荻原、全体的にイライラしてぶつぶつ言っている第零艦隊、そして真顔で無言の神風という組み合わせであったという。

## 55話 坂本、調子に乗る

side 坂本

俺の名は坂本藤雄。いや、それは今の名前か。

本名は覚えていない。一つ知っているのは俺はいわゆる捨て子だということだ。

俺を拾ってくれたのは坂本研究所とかいう所の所長の坂本治三郎という人だった。

彼はとても優しい人であつたし俺にも色々世話を焼いてくれた。

彼は現実値なるものを研究していた。曰く、いろいろな世界が階段のように積みあがっており、現実値はその世界ごとに決まっているという。

彼は魔法も何もない世界のことを『基底世界』と呼び、現実値は100・0だと言う。

ちなみにこの世界は95・0らしい。

俺はこんなオカルトチックな事は信じなかつた。いや、むしろ信じたら負けだと思ひ込んで疑っていたくらいだ。

そして、治三郎さんは研究が実を結ぶことを見ることなく、病気で亡くなった。

研究所は俺が引き継ぐことになった。

そしてそこで様々なデータを見ていて気づいたのだ。現実値は本当に存在する。平行世界も、世界の階層も存在する。

それから俺は研究を進めた結果『異世界』への転移方法を発見した。それは、古代のシムール文明の残した遺跡で発見された謎の材質の棒とそれを解析した結果製造した機械を使うというもので、この器具と装置を使えば理論上誰でも異世界に行くことができるということがわかつた。

というか上層世界に行つてその人間と会話した。

そしてこの謎の材質の棒は少なくとも世界に5本存在するという。

とりあえず3本回収することができた。

そして数年後、日本海で部下たちと研究をしていると、髪の毛の白い海の上を航行する珍妙な生き物だか人間だかを見つけた。  
のちの深海棲艦だ。

俺たちは彼女を鹵獲すると、研究所に連れ込んで調べた結果驚くべき事実がわかった。

なんと彼女はロシアが異世界の『妖精さん』という技術を使って人間を改造して作り上げた生物兵器だということが判明した。

そして俺は、俺を捨てやがった人類に、治三郎さんを馬鹿にした人間たちへの復讐として『深海棲艦計画』を実行することにした。

計画は成功した。深海棲艦を量産し、それを世界中の海に放した。だが、日本海軍がロシアから流出した妖精さんの技術で『艦娘』と言うものを開発していることを聞きつけた。

ならばこちらもと孤児を集めて深海棲艦の技術で『零式艦娘』を開発した。

零式艦娘はなぜか俺に心酔しており、なんやかんやあつて大半が撃沈、もしくは解体され、今残っているのは俺の直属の第零艦隊の10体だけだ。(横須賀鎮守府に1体攫われたが気にしないこととする)

ちなみに今、第零艦隊の面子には横須賀の荻原を監視するように命令を出しておいたので監視してるだろう(小泉構文)。

「坂本元帥、起きてください」

部下であり深海提督である西馬が話しかけてきた。

「ああ、なんだ」

「神風零式率いる第零艦隊が荻原大輔准将を確保、追撃する特務戦略技術軍と戦闘に入りました」

「……はあ、監視だけで交戦は控えろと言ったのに……」

俺は深いため息を吐く。

とりあえず立ち上がろうとしたが、めっちゃやよだれが出ていた。

「これを」

西馬がハンカチを渡してくる。

「ありがとう。洗って返すから、2日ほど待っていてくれ」

「わかりました」

俺は椅子から立ち、燃え上がる東京都心を見る。

(坂本たちは葛西臨海公園の西なぎさ島にいます)

「おお、よく燃えているな。まるで、東京大空襲の再現のようだ」

俺はニヤリと笑う。するとそれに答えてか西馬もニヤリと笑って言った。

「はい、坂本元帥。死者行方不明者の数は見当もつきません」

「これは神罰だ。この坂本藤雄という神を捨てやがった国家の末路だ！」

「……左様で」

そんな会話をしていたら配下の深海棲艦(全員人型)が後ろからぞろぞろ来て整列した。

「米国は？」

「大混乱です。ホワイトハウスやニューヨークに深海棲艦を派遣した結果、米国の政府機能は完全に機能停止しました」

「中国は？」

「北京、大連に侵攻、中華民族統一評議会のメンバーを皆殺しにしました」

「朝鮮は？」

「平壤の朝鮮統一政府を壊滅、指導者の一族は処刑しました」

報告を聞いた俺は満足げにうなづく。

「特務戦略技術軍は東京侵攻以外は特に動いていません。何故でしょう？」

「あのわけわからんジジイはあの時雨以外には興味がないんだろう。深海棲艦すら興味の対象外だ」

俺は東京上空の空中戦艦を見て言う。

「だが、そうは行くか！脇腹を思い切り殴りつける！我々は、愚かな日本人から、日本列島を収奪するのだ！」／( ^ 〇 ^ )／

その言葉に配下全員が「オオーツ！」と声を上げる。

深海棲艦のうち、特に立場の高い6体の姫級が前に出てくる。

「深海棲艦日本方面軍、総勢1280体、推参！」

「深海棲艦南方方面軍、総勢340体、推参！」

「深海棲艦欧州方面軍、総勢650体、推参！」

「深海棲艦地中海方面軍、総勢490体、推参！」

「深海棲艦インド洋方面軍、総勢160体、推参！」

「深海棲艦アフリカ・アラビア方面軍、総勢130体、推参！」

6体は俺に向かって頭を下げる。すると西馬が話しかけてきた。

「現在松本にいる日本国総理大臣、小泉一郎から、『坂本藤雄海軍元帥を大元帥に昇格する』との伝言を受け取りました。あと、大元帥のバッチも送られて来ました」

俺はそれを聞くと、笑みを深めた。そして小泉総理から送られてきた大元帥の階級章を付ける。それは旭日のマークが刻まれた物であった。

ちなみに大元帥は旧自衛隊における統合幕僚長と同格の扱いだ。

「……捨て子だった俺は……遂に大元帥に……日本で一番偉い男になった。……次は世界だ……全身全霊を以て号令する！目標は日本国、首都東京！進撃せよ！殲滅せよ！日本人を根絶やしにするのだ！」

「オオオオッー！」

総勢3000体以上の深海棲艦が東京に放たれるのだ。（ちなみに50体くらいはヘリで出撃）

俺もヘリ乗ろうとしたその時、西馬が話しかけてきた。

「大元帥」

「なんだ？」

「これを」

西馬が手渡してきたのは衛星写真だった。

「ロシアの樺太から離陸した戦闘機が真っ直ぐ東京に向かって来ています」

「なんだと？領空侵犯か？」

「まさか、時雨が？」



姫級の1体が言った。

「……かまわん。日本も特務戦略技術軍も、時雨も消えてなくなる。最後に勝つのは我々だ」

俺は笑いながら言う。

「さあ、全軍進撃！日本国滅亡の、時来たれん！」

深海棲艦たちは俺の号令で進軍を始める。

俺もへりに乗り、東京に急ぐ。

side西馬

俺は坂本の命により、残った200体程の深海棲艦を率いて横須賀鎮守府に向かう。

「坂本、お前じゃあの時雨バケモには届かない」

そう小さく呟いた。たぶん誰にも聞こえなかったと思う。

## 56話 坂本、調子に乗りすぎる

特務戦略技術軍の侵攻を受けた東京は阿鼻叫喚の地獄となっていた。

そこに、坂本の乗ったヘリが飛来した。

そのヘリには日の丸が描かれており（海軍所有なので当たり前だが）都民たちは藁にでも縋るような気持ちで、坂本を乗せたヘリコプターに視線を送った。

「助けてくださいー！」

「おい！軍は何やってんだよー！」

「俺たちどうなるんだ!？」

坂本はヘリに吊り下げられたガラスの箱の中にいた。その顔は、満面の笑みを浮かべていた。

『これより生存権に対する裁判の判決を行う！』

マイクを通じたエコーがかった声が流れ始める。

『被告、日本人！被告、バケモノ！判決は死刑だ！死刑！絶対！異議のある奴いるか？』

『お前たちは哀れだ。だが、許さぬ！脱兎のように逃げ回り、野良犬のように死ねえ!!』

「ぎゃああああ!!」

「いやだああー!!」

「うわああん!!」

「死にたくない!!」

「助けてくれ!!」

都民は逃げ惑う。脱兎のように。

東京の江戸川や荒川、隅田川など、海につながっているあらゆる場所から深海棲艦の大群が列をなして上陸する。

『そこを見張れ（適当）、あそこを見張れ（適当）』

「(どこ?)」 by 深海棲艦, s

『我々の敵を根絶やしにせよ！目標、前方（適当）！死刑！執行!!』  
深海棲艦たちが、次々と地上にいる人々に襲い掛かる。それはまさしく、殺戮の現場であり、血の惨劇であった。

その姿を見た人々は発狂したり失神したりする者が続出し、ある者、ただ黙々と歩き出す。立ったまま呆然とする。

「逃げろ！」

「死にたくない！」

「どけ！早く行け！」

「やめろ！押すな！」

「うわああああああ!!！」

「なんだ!？」

「群衆雪崩だ!!！」

「逃げろお!!！」

「く、くるじい……」

逃げ惑う無数の都民の中で倒れ込んだ者は群衆雪崩を引き起こし、周りを巻き込んで圧死する。

そして砲撃で死者生者関係なく吹き飛ばされる。

その地獄という言葉ですら表しきれないような惨状の中に、深海棲艦と祖国超兵がダメ押しと言わんばかりに突撃する。

もう、東京は完全に崩壊していた。この世の終わりのような風景だった。

そしてその地獄の中心にいるの人間たちは、逃げ続けた。死という絶対の運命から逃れるように。

「うおおお！」

「逃げろ！ジグザグだ！ジグザグ！」

「何やってんだ馬鹿野郎お!!！」

「うわああああ!!！」

「もうこんなところに!!！」

「クソがあ!!！」

そして死んでいった。道端で野垂れ死ぬ野良犬のように。

『フハハハハ、死ね！死ね！死ね！死ね！死ねえ!!動いてる奴は皆殺しだあ

！』

坂本が狂気を帯びた声でそう言い放つ。

『いいぞー！これが俺の力だ！これが深海の力だ！死んだ人間だけがいい人間だ！ハハハ！』

そしてまた死んでいく。死体が増えていくだけだ。何も生まれず、何も進まない。ただ死体が積み上がってゆく。

とある姫級によると『地獄と言うのもおこがましい光景だ。これはまさに無間地獄、人間の終焉の地のようだった』とのことだ。

まさに終末。この世に生きるもの全てが消え失せてゆく地獄の如き光景。それが目の前にある現実なのだから……。

の·だ·が·、·哀<sup>坂</sup>れ<sup>本</sup>な男は知らなかった。この世には、これ以上に抗いよう  
な·理·不·尽·が·あ·る·こ·と·に·。

## 57話 地獄

深海棲艦により東京がさらにえらいことになっていった頃、荻原とゆかいな第零艦隊は大本営にやってきた。

「ふう、やっと着いたな。それじゃあ、第零艦隊、帰っていいよ」

「いや、私たちの仕事あなたを監視することなんです……」

「そうですね、荻原准将。勝手な行動をされては困ります」

「いや、ごめん。まあ許して？ほらっ飴あげるから」

「いらないます。子供扱いしないでください」

神風は意外と冷淡だったという。

「あー、はいはいわかったわかった。てか、坂本の奴演説してるけどかなり、いやめっちゃヤバイなあいつ」

「き、貴様、元帥を愚弄するな！殺すぞ！」

神風は坂本関連の話になると感情的になるようだ。

「はあ、あんなキ○ガイが元帥になるとか世も末だな」

荻原は神風の反応が面白く感じ、さらに煽ってみた。

「き……き、キチ○イだと！貴様に言われる筋合いはない！第零艦隊総員！コイツを囲め！」

案の定、彼女は怒った。やはり、煽り耐性が低いようである。

第零艦隊の艦娘たちが荻原に銃を向けて囲む。その時だった。

「~~~~~っぽい！」

夕立が突撃してきたのだ。

第零艦隊の艦娘たちはいろいろな方向に吹き飛ばされた。

「お前は……夕立か……なんか雰囲気と髪の色違くないか？……なんか姫級みたいな気迫を感じるんだが」

「ぽいっ！」

「なんか『ぽい』すら気迫が感じられるような……あっこいつ見た目が夕立改二っぽいだけで姫級に覚醒してるわ」

「なんですか！あの駆逐艦は！」

「ひ、姫級て……」

「新たな姫級として登録するなら名前が必要になりそうだから一応決めておくか」

何か知らんが荻原と第零艦隊で夕立の名前をどうするか話し合うことになった。

(ちなみに数10メートル離れると人間が深海棲艦に蹂躪されているような場所である)

(あれ、私は今何やってんだろう?)

そんなことを考えながらも真面目に話し合いを始める。で、結果『ソロモン深海棲姫』と命名された。

夕立の方は「かつこいいっぱい」となぜか気に入ったらしい。

「よし！これでいいだろ。それじゃあ、第零艦隊を追い払ってくれ」「了解っばい！」

夕立は第零艦隊の面子を全員蹴り飛ばし、荻原を担いで大本営の屋上上がった。

しばらくすると大本営の敷地内の広場に第零艦隊を先頭とした深海棲艦の集団とコスロフスキー少佐率いる祖国超兵の集団が向かい合うように現れた。

完全に拮抗状態と言えるので誰も手出しができない。

「やべえな」

「やばいっばい」

二人の語彙力が死んだ。

すると、深海棲艦や夕立の電探が音速を超える速度で東京に向かってくる飛行物体を捉えた。

「なんかくるっばい！」

「……何が来るんだ？」

それはすぐに見えてきた。それはロシア軍の戦闘機、SU57だった。

「いや何しに来たんだあいつ!？」

「あ、なんか急上昇したっばい」

下を見ると深海棲艦や超兵たちもざわざわしている。

まあそりやそうだろう。いきなりロシアの戦闘機が来たら驚く。そして戦闘機はいきなりバレルロールすると、コックピットから人型が………時雨が出てきた。

ちなみに戦闘機はしがみつく涼月を乗せたまま湾岸方面に墜落していった。

時雨は空中を滑空して大本営の広場、深海棲艦と超兵が睨み合う境界線にちようどスタツと着地した。

「おお、こんなに晩飯がたくさん……いい夜だね」

……なんか不穏なこと言ってるが気にしないことにしよう。うん。「で？提督、こいつらを殺せばいいんだよね？命令がないから動けないんだけど」

そう言う時雨の右目は獲物を前にした肉食獣のようであり、好物を好きなだけ食べていいと言われた子供のようでもあったという。

なお、荻原はだんまりしていて、時雨に神風やコズロフスキーが近づき圧をかけている。

しかし時雨は全く意に介していない様子で神風とコズロフスキーを見つめている。

その顔はとても美しく、同時に禍々しかったと夕立は語った。

「提督、命令出して」

沈黙を破ったのはまたもや彼女であった。時雨は少し寂しげに笑ったあと、今度は満面の笑みを見せたのだった。

「……」

荻原はまだだんまりを続ける。時雨は痺れを切らしたようにこう言った。

「命令だ、命令を寄越せ！海軍軍人、荻原大輔！」

時雨の言葉に覚悟を決めた荻原はようやく口を開いた。

「……命令だ！駆逐艦時雨！！私からの命令はただ一つ！！ここにいる敵を皆殺しにしろ！！殲滅しろ！！掃滅しろ！！奴らをこの都市から生かして帰すな！！」

彼の叫びが終わった数秒後、時雨は口を開いた。

「了解した。提督」



彼女は嗤っていた。

それは敵がこれから迎える運命を嗤ったのか、それともこんなこともできるようなバケモノになり果てた自分を嗤ったのか。それは誰にも分からなかった。

「深海制御術式第1号、解放」

だが、その場にいた全員が感じ取った。

このバケモノは、生かしてはいけないと。生かしておけば、恐ろしいことになる。

「うおおおお!!」

神風が時雨に短刀を投げつけたのを皮切りに深海棲艦や超兵が時雨に、襲いかかる。

あるモノ、砲撃の嵐を彼女に見舞う。

あるモノ、無数の銃弾を彼女に放つ。

あるモノ、人型ですらなくなった彼女に銃剣を何度も突き刺す。

あるモノ、液化化した彼女に殴りかかる。

しかしそれらは無意味に終わる。

——地獄の釜の、蓋は開かれた。

空中戦艦モスクワの艦橋にて、クズネツオフ大佐とゆかいな仲間たちはその様子を眺めていた。

「さあ、来るぞ……死が来る。死人が舞う。死が踊る。死に抗うこと叶わず、人は散るのみ……」

「何をブツブツ言ってるの？」

突然のロシア語のつぶやきに対して瑞鶴は当然のように反応する。

それに対してクズネツオフは何も言わずただ黙って見ていた。

「まあ、見ていればわかるさ」

再び地上。

「撃ち方やめ！撃ち方やめ！」

時雨の周囲を囲んで攻撃を続けていた超兵と深海棲艦は攻撃を中断した。

これ以上の攻撃は無駄だと気づいたからだ。

彼女の体は液体のような何かに変化しており、そこから生えている腕は数十、数百、いや数千にも達していた。しかもそれらはすべて触手のように動き回っていて、明らかにヤバイものだった。

そんな光景を目の当たりにしてもなお攻撃を仕掛けようとした勇敢な兵士がいたが次の瞬間彼は首と胴体を切り離されて死んだ。それはまるで鋭利な刃物で斬られたように鮮やかだった。

そして彼女の中から出てきた。それを為したモノが。かつて彼女に殺された空母棲姫が。

ある深海棲艦は姫級の命令を無視して攻撃を仕掛けた。だが、その深海棲艦はライフルで撃ち殺された。

そして彼女の中から出てきた。それを為したモノが。かつて彼女

に殺された狙撃兵と哀れな抑留者二人が。

もう手遅れだったのだ。彼女の中からは次々と彼女に殺されたモノたちが這い出てくる。

出てきたモノたちは全員深海化されており、民間人だったであろうモノたちまでもが怪物となっていた。

時雨に殺されたモノは十万以上。その全てが解放された。

『フフ、アハハハ』

彼女は笑った。それが何に対してなのかはわからない。笑ったのか嗤ったのかすらわからない。

死人の大群は瞬く間に深海棲艦や超兵を飲み込んでいく。

「撃て！撃てえ!!」

残った超兵や深海棲艦は攻撃を開始する。だが、彼らにできることはそこまですりゃなかった。

あるモノは頭を砕かれ、内臓をぶちまけ、脳漿を浴びた死体となつて倒れ伏し、またあるモノは腹から背中にかけて貫かれたり首を落とされたりと、原型すら残らないほど惨殺されていた。

へりに吊り下げられたガラスの箱にいる坂本はその光景を見て、若干失禁していた。

「な、何が起きている！一体、なんだ！なんだこれは！な、なんだ。なんなんだ!!」

そんな言葉も虚しく彼らの目の前に広がる惨劇は続く。

「撃て！撃ちまくれ！」

へりに乗った深海棲艦が叫ぶ。

「撃つても撃つても出てくるぞ!!」

「そもそも撃つても効かないぞ！うわあああ!!」

へりは全て時雨から出てきた狙撃兵により撃墜された。坂本が乗っていたものもだ。

「ああああ!!やめろ！止めてくれえ!!」

生き残ったモノたちは必死に抵抗する。だが、死人の物量には勝てない。すぐに取り囲まれてしまう。

「誰か！助けてくれ！」

『ハハ、無駄だよ。諦めなよ』

「だ、誰だお前！声しか聞こえないぞ!?!」

『この死人たちは全部僕だからね。まあ、そういうことさ。僕は深海棲艦やら艦娘やら人間やらの集合体だからさ、こういうこともできるんだよね。どう？驚いた？』

「うぎゃああああ!!」

深海棲艦の悲鳴が聞こえる。その深海棲艦がどこを切断されたのかもわからないが、首だけになって絶命していた。

そうしてまたひとり、ひとりと殺されていく。

建物の屋上に避難することができた神風と第零艦隊の面子は時雨から出た死人の大群に『屍海』と名付け、その屍海を観察することにした。

「な、あれは太平洋深海棲姫!?!?!?!道理で殺せぬはずだ。道理で死なぬはずだ」

神風が見たのはかつて戦ったことがある姫級であった。しかしそれは彼女が最後に確認した時とは違い、人の姿ではなく死人と、時雨の隷属と成り果てていた。

「まさかとは思っていたが……あの時雨は、ただのバケモノじゃない……死者の集合体だ。それも自分が殺した相手を取り込む質の悪い奴だ」

「あ、あんなのに勝てるの……?」

第零艦隊の陽炎が言う。無理だろう。誰もが心の中で思うことだ。「いつもなら無理でしょうね。でも、今はその死者が全て外に出ている。今の時雨は”ただの”艦娘モドキにすぎない。今なら殺せる」

神風が言い放つと全員が武器を構えた。

「……行くぞ。総員戦闘準備！」

「了解!!」

時雨が全ての命を解放した大本営の広場では、一体の人型実体が形成されようとしていた。

そう、それはただの艦娘モドキとしての時雨の本体だ。

だが、変成魔法によりその姿は時雨の前世である杉野時雨中佐と同じ姿をしていた。

大本営に殺された”彼”は五年後、再び”彼”となり舞い戻ってきた。

58話 もう”彼”は何処にもいない

屋上から夕立とともに降りてきた萩原は時雨に話しかけた。

「……お帰り、提督」

「ただいま、提督」

萩原と夕立は時雨の変貌っぷりに戸惑っていたが、彼の雰囲気あまりにも優しく温かいものだったために恐怖はなかった。

時雨はとりあえず夕立に近づき、頭を撫でた。

「……時雨って髭だったっぽい？」

そんなことを呟く夕立。まあ、駆逐艦娘（見た目中学生）がいきなり軍服着たチビで？せつぽちなおじさんになったら誰でも驚くだろう。

「まあいいじゃないか。ところで夕立ってさ……」

時雨の声音はとも優しくかったが夕立は気付いたらしい。何か嫌な予感がするようだ。

「もしかしてだけどき……姫級になった？」

ビクツ！ 夕立の顔が引きつっているような気がしなくてもない。

だが時雨は見逃さなかった。一瞬だが彼女の目が見開かれたからだ。

「いや、別に咎める気はないよ？むしろ嬉しいよ。仲間が強くなったんだから」

「ほんと!?良かったっぽい!!ありがと、時雨え〜」

嬉しさのあまり時雨に飛びつき、二人の後ろの方にいる萩原に微笑ましいものを見る目で見られていることに気付いた彼女は顔を赤くしてすぐに離れる。

（恥ずかしかったっぽい……。もう……）

夕立は赤くなった頬を押さえてため息をついた。

だが、この地獄の戦場でのひと時はすぐに終わることになる。

「時雨え！覚悟オ!!」

時雨の真上から第零艦隊の神風が刀を振り下ろす。それは完全に決まったと思われた。……のだが

「来たね」

時雨はさつきまでの『リバイバル杉野提督』から普段の時雨の姿（瞳は赤）に戻り、腰の日本刀を抜いてそれを迎え討つ。一瞬鏢迫り合いの状態になり、神風は後方に飛び退いた。

「提督、夕立、手出ししないでどこかに行つててくれるかな？」

「分かったっばい！」

そう言うなり夕立と萩原は走つて建物へと入つていった。

「さあやろうか、神風」

「そうだな、始めよう。艦娘モドキ」

時雨は日本刀を両手で持ち、神風は短刀二本を両手に持つ。そして同時に動き出した。

神風は走り一気に時雨に接近し、右手の短刀を振り下ろす。

対する時雨は日本刀を力任せに振つてそれを弾き飛ばした。

神風は後方に吹っ飛ばされたが、受け身を取り立ち上がる。そしてすぐに時雨に向かい走り始める。

そして接近するとまず右、次に左の短刀で斬りかかるが、どちらも防がれて後方に飛ばされてしまった。

それどころか時雨は神風に急接近すると、首を狙つて上から刀を振り下ろした。

神風は一気に走る抜けることでそれを回避し、今度は二回連続で切りかかったがやはり同じように全て防御された。

「クソッ！」

神風はボックスステップで後方に下がると、短刀8本を時雨に向けて投げた。

その動作を見て時雨は南部拳銃と主砲を取り出し短刀を撃墜した。  
「ふう、危ない危ない」

時雨はメツエライも取り出すと見せびらかすように構え、いつだったかに明石から渡された説明書を読み上げ始めた。

「対深海棲艦用大型自動拳銃『メツエライ』全長26センチ、重量8キ

口、12・7ミリ装弾筒付徹甲弾、うんいいねこの銃。いつかメツエライ口でも作ってもらいたいね」

一息ついた時雨に神風は短刀で突撃したが、主砲、南部拳銃、メツエライを撃ちまくられ防御に徹する。

だが、それらを防御した直後、レールガンを至近距離で撃たれたために神風の左腕の関節部が破損してしまう。

「うおおおおお!!」

しかし神風はそんなこと気にしないと云わんばかりに突撃する。

時雨はバックステップして攻撃を避け、そのまま死人たちの頭の上を飛びながら神風から百メートルほど距離を取る。

「さあ、第二ラウンドだ」

時雨の言葉の後に神風に向けて砲弾が次々と飛来し、爆発音が続く。死人と化した深海棲艦たちの砲撃だった。

「くそつたれ!!」

それでも彼女は走り続けようとするが、その足を止めるために死人の群れが襲い掛かる。

その様はまるで神風という商品に群がるバーゲンセールのご婦人方のようなだった。

「邪魔だアー!!!」

砲撃してきた戦艦ル級の頭を真上に飛んで蹴り飛ばすと空中でバク宙をして着地する。

しかしその直後、彼女の脇腹に銃弾が直撃してしまい、膝をついてしまう。

「クツ……」

「フ、フハハ、どうした神風？バケモノはここにいるぞ？殺すんだろ？殺せよ。さあさあ！ほらほら！立てよ！立てよ！刀を構えろ！僕の目の前に立って見せろ！僕の心臓にその短刀を突き付けて見せろ！」

「……言われなくてもそうするわよ……!!」

神風は再び駆け出した。

「神風！」

他の第零艦隊の連中16体が彼女の周りに集まってきた。



「あなたたち……」

「加勢に来たわよ。さあ、あのバケモノをぶっ殺しましょ」

第零艦隊副旗艦の叢雲がそう言う。

「……ありがとう」

「え？今なんて？」

「なんでも無い！……行くわよ！第零艦隊突撃!!」

神風の叫びと共に第零艦隊の艦娘たちは一斉に駆け出す。

そして時雨の方向へ殺到していく。

「へえ、感動ムードってやつだね」

若干呆れている時雨に対して第零艦隊は死人の群れを蹴散らしながら進む。

「うおおお！」

「バンザアアーイ!!」

「死ねやア!!」

第零艦隊との距離が近づくにつれ時雨の表情が綻んでいく。

「ああ、最高だ。艦娘は素晴らしい………肉が引き千切れ、温かい血が流れ出る感覚……それがまた堪らない。艦娘を死人の群れで押し潰す感覚、骨が砕け、臓物が溢れ出し、心臓の鼓動が止まっていく。僕に殺されていく。そしてその仲間たちは死んだ者の亡骸を踏みつけにしながら進む。そうだ、これは最高の余興じゃないか」

それを言い終わる頃には彼女は恍惚のヤンデレポーズのような表情になっていた。

狂っている。完全に。神風含む第零艦隊の艦娘全員が思った。

「艦娘は素晴らしい。まるで人間のようで、軍人のようで、兵器のようで。艦娘は美しい。容姿も、戦う姿も、散っていく様も。艦娘は優しい。彼女らの言葉に何度救われたことか。艦娘は恐ろしい。僕を殴ってくる、蹴ってくる、罵詈雑言を浴びせてくる。艦娘は妬ましい。艦娘の幸せそうな姿が、その言葉の全てが妬ましく感じる。艦娘は醜い。一見純粹そうに見える心の内は真っ黒なんだから！僕はそんな彼女たちが大好きだったのに!!憎たらしい!!!君たちが死ねばいいに!!!」

もう彼、いや彼女は”提督”でも”艦娘”でもなく、ただの”バケモノ”だった。

「こ、この狂人が……」

誰が言ったのか。だが、これは今の時雨をもつとも的確に表現している。まさにその一言だろう。

「な、ぼ、僕が、きよ、狂人？ハハ、狂っているのは君たちも同じじゃないか。『艦』であるくせに人のような言葉を吐いて、人間みたいに感情を露にして。……艦娘共が……」

時雨は若干過呼吸気味になりながら黙り込む。するとおもむろに視力のほぼなくなつた左目に手を突っ込み、一気に引き抜いた。左目があった場所からは血がドボッと溢れる。再生に消費する残機が全て外に出ているので再生されないが、割とすぐに血は止まった。時雨の顔の三分の一くらいは血で染まったが。

第零艦隊はそんなこと関係ないと言わんばかりに進撃を続ける。

「進め！進め！前へ！前へ！前へ！前へ！前へ！！前へ！！」

神風の声が死人の呻き声と砲撃音の中で響く。

「はあ……いい加減に諦めたら？こんな状況になつてもまだやる気？」

少し落ち着いたのか呆れた様子で時雨は聞くが第零艦隊は完全に無視して前進する。

時雨は静かに笑った。

次の瞬間、大和の砲撃により死人の群れの一部が一気に吹き飛ばされ、神風は砲撃による煙の中に飛び込む。

そして煙が晴れると満身創痍の神風の前には時雨が立っていた。

「……僕の前に立ったか。正直驚いたよ。流石だ。流石だ第零艦隊。流石だ神風。君は有象無象の鉄屑のような艦娘共とは違う！僕にとって特別な存在だよ。本当に感謝したいよ！」

時雨の目は虚ろだが、目の前の神風をしつかりと捉えていた。彼女は喋っていた。口を開いていた。

「さあ、僕を、私を殺して見せろ。私の夢を終わらせて見せろ。私を殺せば終わる。バケモノを倒すのはいつだって艦娘だ！私のようなバ

ケモノを倒せるのは艦娘ニンゲンだけだ！私のようなバケモノは艦娘ニンゲンに倒されなければいけないんだ！さあ、私を殺して見せろ！神風零式！」

「ええ、もちろん、ぶっ殺してやるわよ」

神風はそう言うのと艦装の下の方から注射器のような何かを取り出した。

「それは……深海棲艦化するやつか……はは、まさか君が使うとは思わなかったけど。ねえ、僕は艦娘ニンゲンのままの君と殺し合いたいんだけど」

「は？あなたの願いなんて知らないし、興味も無い。これは駆逐古姫と深海雨雲姫と軽巡棲鬼から抽出した成分でできた……例えるなら三種混合ワクチンね。スペックが防空棲姫の半分くらいの素の状態のあなたなら殺しきれる。覚悟しなさい」

そう言つて神風は躊躇なくその注射を自分の首に打ち込んだ。

「……君には失望したよ」

時雨もまた艦娘ニンゲンでなくなった神風に躊躇なくメツエライの銃口を向け、引き金を引いた。

## 59話 西馬死す

坂本が東京で調子に乗っていた頃、西馬率いる深海棲艦200体を迎撃するため、横須賀鎮守府は所属する艦娘を総動員してうって出た。

そしてこちら、敵中突破して深海提督である西馬を殺し、敵の指揮系統を潰すという任務を任された第1艦隊（駆逐艦オンリー）も必死になって戦っていた。

ちなみにメンバーは旗艦の白露、僚艦の網走時雨、初月、磯波の4体だ。

「魚雷！一斉発射！」

4体の放った計32発の魚雷が敵の先頭集団に命中、爆散する。

「突っ込めー！」

第1艦隊は白露を先頭に突撃する。

4体は必要最低限の弾薬消費で敵艦隊の最深部に向かって突き進む。そして遂に西馬のいる最奥まであと一步と言うところで敵に阻まれた。

敵は戦艦レ級改フラッグシップ6体。深海提督の親衛隊のような役割を持っていると思われるこの艦隊のエースたちだった。

そんな奴らがたった4体に襲いかかってきたのだ。

「ぶっ殺す！」

「やってみなさいよ、深海の木偶ども。行くよ、みんな」

白露は深海棲艦化し、初月もリミッターを解除し突撃する。網走時雨と磯波もそれに続く。

6体の敵が同時に攻撃を開始する。レ級改の砲弾、雷撃、爆撃。全が恐ろしいほどの精度で白露たちに襲い掛かる。しかし、それらはほとんど当たらなかった。ギリギリの位置を見極めて避けられた。

そして次の瞬間。

「そーおー！」

レ級改の砲撃に合わせて接近していた白露の攻撃がヒットする。そのまま続けて初月が斬りかかる。レ級改の右腕を切り落としつつバックステップで離脱。そしてそこに網走時雨と磯波が魚雷をばら撒くように叩き込む。

結果、2体の敵を撃沈することに成功。

網走時雨と磯波は西馬の下に突撃し、白露と初月がレ級改とそれの応援にきた深海棲艦と交戦を始める。

(提督を散々いたぶって汚したつけを払わせてやる)

(時雨さんにいろいろやった奴をぶつ殺す)

網走時雨と磯波はほぼ同じことを考えながら西馬とその護衛である戦艦水鬼に襲い掛かる。

「死ね！」

そして網走時雨と磯波は戦艦水鬼に狙いを定めると主砲を撃ち放つ。放たれたのは12.7センチ連装砲B型改二だ。しかし、その砲弾は明石が開発した新型砲弾だ。一発の威力は大口徑主砲に比べると小さいが、貫通力は意味不明に高くなっていた。

砲弾は戦艦水鬼の心臓と顔面に命中し、水鬼は沈黙した。

網走時雨と磯波は勝利の喜びに浸る暇もなく、西馬に攻撃を仕掛ける。

二人は西馬に向けて砲撃や雷撃を撃ちまくるが、西馬はそれを全て避け、対艦娘拳銃で反撃して来るが、それを二人も回避する。

「ほう、やるな。まあ、あの時雨に訓練されたんだから当たり前か」

西馬は余裕そうな表情で二人の攻撃を躲し続ける。だが、内心はかなり焦っていた。今はまだ良いがいずれは弾切れになってしまうだろう。だからといって下手に近接戦を挑めばコンピューターがバグって誤作動を起こし、機能停止してしまう可能性がある。

「どうしたのかな？」

そんなことを考えていたせいで一瞬、意識を別のところへ飛ばしてしまった。そしてその結果。その隙について二人は距離を詰めてきた。網走時雨と磯波の砲塔が自分に向いていることを確認する。

だが、ターミネーター西馬ver2.0 (横須賀鎮守府襲撃で時雨

と戦った時はverl. 0だった)は見事にその攻撃を回避して、二人を仕留めるべく動き出す。

西馬は網走時雨に一気に接近し、首根っこを掴み、持ち上げ、その勢いを利用して思いっきり海面へと投げつける。

海面は海面なので、網走時雨に大きな怪我はなかったが、それでも全身を強く打ち付け、すぐに動くことは出来なかった。その間に西馬は磯波に迫り、腹を蹴飛ばす。

「うぐっ」

蹴り飛ばされ、吹き飛ぶ磯波。網走時雨はそれを見ながら、痛みに耐え、立ち上がる。

「……殺すーぶっ殺すー!」

網走時雨は主砲を向け、発砲する。

砲弾は真っ直ぐ飛び、見事直撃……しなかった。

「危ない危ない、もう少しで死んでたぞ?次は確実にお前らを殺しグフツ」

西馬の言葉が途切れた。彼は降ってきた涼月にのしかかられたのだ。(なお、一緒に降ってきたSU57が近くの海面に墜ちた模様)

「ご主人様、大丈夫ですか!」

「お、重い……」

「ねえ、ちよつとどいてくれる?」

いつの間にかやって来た深海化白露が涼月に声をかける。

「あ、ごめんなさい、ちよつと失礼します」

そう言うと涼月はジャンプして西馬の上から退く。

白露は西馬の右腕を切り落とし、背中を蹴った。白露はそのまま西馬の顔に近づくと話しかける。

「やあ、私だよ。覚えてる?あんたに殺された青山さんだよ」

「……………ま、さか」

白露は自分の胸に手を当てながら話す。

「そっだよ。私は死んだけど、何故か白露に憑依しちゃったんだよ。で、あんたに犯されたりいろいろされてたら沈んじゃって、でも深海化してるけどまたあんたの前に立っている。これはきつと運命だと

思うのよ。だからもう二度と逃がさない。死ね」

「そ、そうか……俺は、負けたのか。くつくつく……」

そう言って笑いだす西馬。それにイラついた白露は彼の顔を殴りつける。何度も殴り続ける。白露の目には憎悪が渦巻いていた。

「ちよ、タンマー！タンマー！」

「黙れ！ぶつ殺す！……あ、時雨、一緒にこいつ殺しましょう？」

怒りに任せて白露は西馬を殴り続けた。そして時雨と磯波も参戦し、3人でタコ殴りにしまくった。

「ちよ、ちよ待てよ！おいグフツ！」

これが彼の最後の言葉になった。

「時雨、磯波、初月、あと涼月だっけ？そろそろ鎮守府に戻ろう」

しばらくして落ち着いた白露がみんなに呼びかけ、全員で鎮守府に戻って行った。

## 60話 深海神風

「……君には失望したよ」

時雨は艦娘でなくなった神風に躊躇なくメツエライの銃口を向け、引き金を引いた。

メツエライの弾丸で吹き飛ばされるのは神風の頭だった。そう、それは誰でもわかる。だが、その前に時雨の腹が切り裂かれた。

「グハッ!？」

時雨の腹を切り裂いたのは神風、いや深海化し、髪と肌が白くなった神風の短刀だった。

後ろに倒れようとする時雨。神風はメツエライの弾丸で吹き飛ばす頭を再生させ、立ち上がった。その手には短刀が握つてある。

時雨は口から血を吐きながらも倒れるギリギリで踏みとどまり、神風と相對する。すでに腹からの出血は止まっていた。

二人は睨み合う。時雨は今すぐ逃げれば助かるかもしれない、そんなことを考えていたがすぐにその考えを捨てた。彼女は自分を道連れにして死ぬつもりだ。それを妨げるわけにはいかないと思ったのだ。彼女はもう、ニンゲンであることを生きることを諦めたのだと。

時雨もバケモノとはいえ、一応艦娘である以上痛いものは痛く、苦しいものなのだ。時雨はそんな自分と同じ境遇に立たされた神風に同情しつつも殺意を向けたまま、彼女と対峙し続ける。

神風は短刀二本を十字に構え、両目から青紫の光を放ちだす。まるでアンデルセン神父のようだった。

時雨はそれに対抗すべくメツエライと南部拳銃を逆十字に構え、12.7センチ単装電磁砲二門も展開。右目を赤黒く光らせ、左目があった場所から赤黒いスパークを放つ。まるでアーカードのように……いや実際二人の戦い方は正にそれをなぞっているのだが。

二人が同時に飛び出したのはほぼ同じタイミングだった。



時雨は二丁拳銃とレールガンを接近してくる神風に向けて撃ちまくる。この至近距離では外す方が珍しいだろう。

神風は時雨の攻撃によりもみくちゃにされたが、撃たれたそばから再生する。そしてそのまま時雨に向かって突撃し、時雨の腹に短刀をぶっ刺した。

時雨は二丁拳銃で神風の短刀をぶっ刺してきた方の腕を吹き飛ばす。腹から微妙に臓物がはみ出ている来ている気がしたが、気にしない。

どうせ後で治るんだ。気にしても仕方がない、彼女はそういう思考をしているからだ。

そう思って時雨は再び攻撃に転じる。神風に向けて艤装のテールワイヤの刀身をぶっ刺すが、それは彼女の短刀によってあっさり受け止められてしまう。

そしてその刃は時雨を真つ二つにしようとするが時雨はそれをレールガンを撃ちこんで無理やり止めた。

神風は再び斬りかかる。確実に真つ二つになるコースだったが、時雨はテールワイヤを立体機動装置のように使ってビルの壁に飛び移り、なんとか回避に成功する。

「ちいッー」

流星に対応されにくい軌道を選んだはずなのに……、神風はその事に苛立ちながら次の攻撃を仕掛ける。彼女は時雨が着地したタイミングで空中へと飛ぶ。

時雨はメツエライとレールガンを撃ちまくるが、全て無効化され、神風の短刀の一本が首を狙っている事に気付いたが、避けきれず首元に突き立てられた。

「グッ………」

首を貫かれ大量の血を流した時雨は今度こそ自分にとどめを刺そうとする神風を見ながら意識を手放した。

side 時雨

真つ暗な空間で、僕は目を覚ました。

ここはどこだろうか。僕は死んだのだろうか。死ねたのだろうか。僕は立ち上がると、一つの人影を見つける。

「あれは、誰だ」

それは少女のようにも見え、壮年の男性のようにも、若者のようにも、少年のようにも見えた。

「あれは、誰だ」

そこで僕はようやく気付いた。

「……ああ、あれは……僕だ」

そこに居たのは、かつての自分自身だった。

## 61話 守り神は墮落した

昔からかなり病弱だった。とりあえず赤ん坊の頃はマジで大変だったと聞いている。

何回も風邪やらなんやらにかかりまくり学校も結構休んだ。提督になつてからも場所が場所なせいで冬はよく体を壊した。

父は自衛官だった。何故か名前は思い出せない。父は「必ず帰る」とか言つて戦争に行った。父は？つきだった。？つきは泥棒の始まりとかなんだとか言つてたくせに、帰つてこなかった。

母は優しかった。何故かこちらも名前は思い出せない。母はよく僕の頭を撫でてくれたりしていた。そんな母も支那のミサイルの爆撃に巻き込まれて死んだ。弟も行方不明になった。

その後、伯父に引き取られたが、扱いは酷いものだったと思う。伯母はよく怒鳴っていた。何かあればすぐに暴力を振るわれたものだ。ただし、食費とかその他諸々は出して貰っていたが。

ある日のこと、中学の友人にコスプレに誘われた。僕の顔が中性的で背も低かったせいも、艦これとかいうゲームの時雨とかいうキャラクターのコスプレを着せられた。てか、今考えたらあいつなんでもなんでも持ってたんだ？まあどうでもいいが。

なんかその後、時雨とやらの衣装とカツラを貰った。僕は自室でそれを着てみた。なんか結構似合ってた。そして毎晩その服を着ていたのを覚えている。何が楽しいのか全く分からなかったが当時は毎日楽しんでいた気がする。

しかしそんな楽しい生活は長くは続かなかつた。伯父に見つかったのだ。

そして僕は暴行を受けた。服を脱がされて写真を撮られまくったり、自分で言うのもなんだが短小だったアレをクリだなんだと散々弄繰り返されたこともし、無理矢理口に突っ込まれたこともある。最悪だったのは掘られたことだ。しかも何度も、本当に最低最悪の行為

だったと言える。あの時の記憶はトラウマもので今でもたまに夢に見るくらいだ。もう死にたかった。

その後、なんとか高校まで卒業できたが、伯父に「妖精見えるんなら提督にでもなって金入れる」と家を追い出された。

それから海軍の士官学校に入って寮生活をし、なんやかんやで網走鎮守府の提督になった。

そこに至るまで色々と苦労したことはここでは省略しよう。

それから十数年たったある時、私は大本營の秘密を知ってしまった。それがいけなかった。

愚かな私は大本營の坂本少将と対立し、最終的に大本營そのものを敵に回し、坂本により深海棲艦の襲撃を受け、鎮守府ごと消されてしまった。これが私の人生だったようだ。

『なあ、時雨、君は、神はいると思うかい？』

『さあ？いきなりどうしたんだい？』

『今のこの日本では日本古来の神道やキリスト教、終末論的なカルトが流行ってるらしい。なんならこの網走鎮守府にも神がなんだと言ってる艦娘もいるし。まあ、深海棲艦という謎の侵略者が現れたこの国じゃ皆生きるのに必死だし、そうなるのも当たり前かもしれないけど。だが私はそうは思わない。神はいない。いたとしてもそいつは人が苦しみ藻掻くのを見て楽しんで愉悦に浸るろくでもない奴だと思ってる』

なんだこれは。誰だこれは？

『神は、助けを求める者や、慈悲を乞う者を救ったりなどしない。あれはただ人を道楽の為に苦しめるだけの害悪だ。そう、神は、いない。私は神とかそう言うのは嫌いだ。あるのは人間とその集団である国だけだ。私たち網走鎮守府はこれから、その国の腐った一機能である大本營の、その腐った部分を叩き潰すために行動する。例えその先が地獄の一丁目であろうと突き進むだろう』

『死にそうだから神に祈ろうとか考えてる者もいるだろう。だが、それは神への祈りではない。虚像に縋っているだけだ』

なんだこれは。誰だこれは？何を言っているんだ？

『皆、国の為に、国民の為に戦え！軍人ならば、戦い続ける！敵を討ち倒せ！』

……………これは。

『戦い、戦い、戦い、勝て。戦いの果てに、勝利の果てに、報国の果てに、彼方の水平線に日は昇る。いつか雨は止む』

……………。

『呆れかえる程の戦いの果てに、報われる日が来る。惨めな私のもとに、哀れな私たちのもとに』

これは、私だ。私の言った言葉だ。私の口から出た言葉だ。

そして場面は切り替わる。私が死んだあの日の夜明け時だ。

私は杉野提督の姿で、傍らには大破した時雨が立っている。まさしくあの時と同じ状況だった。

「で？結局、君は、みんなは報われたのかい？」

時雨が私に向けて問う。

「分からない」

私は正直なところを口にする。

「みんな死んだよ。君に付いて行った艦娘は全員死んだ」

「それは知っている」

「君の作戦ミスで多くの艦娘が轟沈し、君の鎮守府は崩壊した」

「……………知っている」

「そして最後に残った君自身も、僕と一緒に深海棲艦の砲撃で死んだ」

ああ、分かっているとも。全部覚えてる。

「で、君は別の鎮守府の時雨として転生したわけだけど。まあ、ブラック鎮守府に転生しちゃったみたいだけどね」

確かに。私にとって鎮守府での日々は苦痛以外の何物でも無かった。

「毎日のように出撃させられ、毎日のように嬲られ、毎日のように犯された。そしてバケモノになった君は艦娘達からも忌み嫌われていたよね。毎日罵倒されて、毎日殴られて……………君は深海棲艦なんかより艦娘の方が怖いんじゃないかな？……………君は親に言われた嘘を

つくなどという言葉を馬鹿馬鹿しいくらい律儀に守ってきたよね？だからどんなにボロボロになっても約束を破らないために艦娘共を守ってきた」

「でも、自分には嘘をついたよね？艦娘は怖くないって、むしろ好きだって、君が一番わかかってるんでしょ？身内以外の艦娘なんてどうでもいい、大嫌いだって思ってたでしょ？君はそんな自分が嫌でリストカットとか自傷行為をしていた。まあそれでも艦娘達は止めようとはしなかったみたいだけど」

ああ、全く持つてその通りだ。ずっと、ずっと辛かった。ずっと死にたかった。あの地獄から逃げ出したかった。

仲間達に拘束され、拷問のような仕打ちを受けた。

体の至る所を焼かれたり、爪を全て剥がされたり。思い出すだけで吐きそうになる。

涙を流す度に、自分が自分じゃなくなっていくような感覚を覚えた。

そして、いつの間にか泣かなくなった。いや、泣けなくなった。

西馬が逮捕されて荻原が新しい提督として着任しても、待遇が格段に良くなっても、僕は艦娘共が怖かった。

「で、何時ものように自傷行為をしようとしていたところで提督に見つかった。彼は君を止めたんだっけ？」

そうだった。提督だけは僕を止めてくれた。あの時はなんか泣きついたっけ。情けないっいたらありやしない。

それからは少しづつ変わっていった。

提督にだけは本当の自分を見せられた。僕は素直になれなかったが、彼の前では心が楽になるのを感じていた。

深海棲艦を沈めて残機にするようになってから見るようになった幻覚も彼の前では見なかった。

彼に甘えるようになった。彼に寄り添うようになった。彼との時間が心地よかった。彼と共にいたいと思った。彼と触れ合いたいと思った。

彼と一緒にベッドに入って、朝を迎えるたびに愛しさが増していく

ようだった。

そして、提督を想えば胸のあたりがきゅつと締め付けられるような感覚に襲われるのだ。

これは恋なんだと自覚したのは最近になってのことだった。僕は提督の事が好きになっていった。好きになってしまったのだ。

提督を僕だけのものにしたくなかった。提督とずっと一緒にいたいと思うようになっていった。

提督の傍にいたい。そう思うようになっていた。

「でも、提督は他の艦娘共からも好かれている。彼も君を特別だとは思っているけど、他の艦娘共にも邪魔される。おかしいとは思わないかい？君はずっと耐え続けてきたじゃないか。辛いことも苦しいことも。そろそろ報われてもバチは当たらないはずだよ」

確かに。提督は優しい。だからこそ他の艦娘にも優しくするんだろう。

………僕はまだ死にたくない。こんな場所で死にたくない。たとえ心までバケモノに堕ちても。僕は提督と一緒にいたい。

「ねえ。このままだと確実に死ぬよ。バケモノに成り下がった神風とか言う奴に殺されて終わりだよ。ずっと提督と一緒にいたいんでしょ？好きな人とずっと一緒にいたいんでしょ？」

……ああ。そうだ。僕だっていつまでもこんなところにいるつもりはないよ。それに、私にはやり残したことがあるんだ。

「………そうだね。その意気だよ」

時雨は口を三日月のように釣り上げた。

◇

神風の短刀が時雨の心臓に迫る。

萩原と夕立はそれを黙って見ていることしかできない。

時雨の命を奪う凶器が迫っている。しかし誰も助けることは出来ないだろう。

何故ならもう時雨の死は免れ得ない状況まで来てしまっているからだ。

仮に時雨に危害が加えられなかったとしてももう既に致命傷なのだ。

だが次の瞬間。時雨は目を大きく開き、迫りくる短刀を掴んで止めた。手からは血が流れだす。

「な……なん……」

時雨が神風を見据えながら言う。

「僕が君なんか簡単に殺されるわけないだろ……！僕は死なない！僕のようなバケモノに逃げた弱い奴は、艦娘ミソゲンに倒されなければいけないんだ!!」

そう言いながら彼女は手に力を籠め始めた。短刀は徐々に徐々に押し返されていく。神風の顔が歪み、短刀を持つ手が震えだすがそれでも必死に押し返そうとしてくる。

(くそが……ッ！こいつ……強い……！)

その時、神風は強引に後ろへ吹っ飛ばされた。

「ッ!?!」

「深海制御術式第0号、解放」

突然の出来事だった。目の前で起こっている出来事が何なのか全く理解ができない。ただ、今起きていることだけが確かなことだった。時雨の肌は青白く染まり、髪も白くなっていた。そして手首足首に鎖の付いた枷が付き、左目は隻眼ヲ級の左目のようになった。

後にマレー沖深海棲姫と名付けられるその深海棲艦は、全体的にパーフェクト駆逐棲姫の時雨 *ver* のような見た目だった。

萩原は後に「その姿はまるで墮落した熾天使のようであり、死神の



ようでもあった」と語った。  
ただそこにいただけで、威圧感があった。圧倒的なオーラを放っていた。

イメージ

## 62話 マレー沖深海棲姫

「(なんだ!?!なにが起こっている!?!なんなのこいつは!?!)」

神風は戸惑っていた。恐怖していたと言ってもいい。恐らく同じ種族だろう。だが、冷や汗が止まらないのだ。

怒り、憎悪、悲哀、恐怖、苦痛、苦惱、嫉妬、呆れ、軽蔑……ありとあらゆる負の感情、そして空洞のような左目は空虚な光を宿していた。

その瞳を見てしまった時。身体が動かないことに気付く。それは本能的な恐怖に近いものだった。

その時雨につられたのか、急に雨も降りだした。

一瞬停止した神風の思考は高速に回転する。現状を整理して、次にどうするかを考えるために。

そして導き出された答え、撤退だった。この状況で勝てる気がしなかった。そもそも勝負は見えていたようなものだ。神風が何をしようとしたのを感じ、時雨は止めた。

「逃げるのかい? 僕を殺すんだろ?」

「ぐっ……!」

時雨の言葉に、思わず顔をしかめる。この状況下で勝てる自信はほぼ無く、さらに無理矢理深海棲艦化したせいで、これ以上戦闘すれば、たとえ勝っても体が自壊する可能性が高いこともわかっている。

「クソッ! いいわ、ぶっ殺してやるわよ!」

神風は叫びながら短刀を投げまくり、リボルバー型の14センチ砲を撃つが、砲弾はことごとく回避されてしまう。

「うおおおおお!!」

時雨も叫声を上げながら砲撃をし、銃弾を回避し、そしてそのまま神風に向かって突撃する。

いつもの如く回避せずに脳死で突っ込めばいいじゃないかと思う

かもしれないが、正直なところ、30年くらい煮詰められた負の感情と他の艦娘から盗ってきた深海のやつで深海棲艦化する深海制御術式第0号解放よりも、残機を磨り潰しながら戦う深海制御術式2号、3号解放の方が強いのだ。

ついでに言うと、普段なら被弾しても残機を磨り潰して秒で再生できるのだが、今は残機が全部外に出ている、マレー沖深海棲姫もレ級改のような再生能力があるにはあるが、被弾しすぎると流石にヤバイということもあつてなるべく被弾しないように立ち回っているのだ。

「あがつ!？」

時雨は神風に急接近すると、顔面に膝蹴りを叩き込み、ついでに手に握っていた魚雷を投げつけ吹っ飛ばす。

そして今度はメツエライと12.7センチ連装砲改め5インチ連装砲で追い討ちをかける。

(レールガンは深海棲艦化時にぶっ壊れました)

神風はそれを食らったが、秒速で再生する。

「くそつたれ!!」

神風は再び距離を取ろうとしたが、その前に時雨は神風に接近して殴り掛かる。時雨はそのスピードを生かし、拳を振る。一発目で肩口を粉碎し、更にもう片方の拳を腹に叩き込むと、腕が貫通した状態で、そのまま時雨は両腕を一気に引き抜きながら後ろに下がり、勢いをつけた回し蹴撃を繰り出して吹っ飛ばした。

「う……………くっ……………!!」

「……………」

神風はすぐに元通りに修復され、時雨は再び走り出す。

「はあっ……………!」

時雨は右手で手刀を作り、神風の心臓めがけて突きを放った。

神風は回避しようとしたが、手刀によって心臓が潰され、彼女は倒れた。

「グ、グボツ……………」

神風はそのまま口から大量の血を流しながらも必死に立ち上がるうとしたが。だが、立ち上がる事が出来なかった。なぜならもう彼

女の身体は持たないからだ。

そして時雨はゆつくりと歩いて近付いていく。その右目には、何故か涙が溜まって見えるように見えた。

(なによ……なんなのよこいつ……?)

神風の心の中で疑問が渦を巻くが、もうそれに応える者は誰もいない。もうじき死ぬ。だからその疑問はもう無意味なモノとなる。

「……………君は、僕だ。僕も同じような有様だった……僕も君と同じようにバケモノに堕ちたんだよ……」

時雨は語りかけるように、だが悲しみを感じさせる声で話した。

(意味分かんないわね……)

神風は、自分の心の中からそんなことを思っていた。何故こいつはこんなにも悲しい声を出せるのだろうか？そして何故泣いているのだろうか？

少しイラついたので、神風は最後の力を振り絞って口を開く。

「……………鬼が泣くんじやないわよ、クソ野郎が。泣きたくないから鬼になったんでしよう。違う？……………笑いなさいよ、いつものように、人を見下すように、人を面白がるように、笑いなさい」

そう言って神風は不敵に笑い、こう続けた。

「……………哀れで、本っ当に哀れなあんたは、一体いつまで生きるつもり？この世界に救いなんか無いのに。どうするつもりなの？」

「……………僕は、僕のまま生きてやるさ。君みたいな強者に殺されるその日まで。なにすぐさ、宿敵よ、いつか何処かで」

「へえ、じゃーねクソ野郎、また会いましょう。それまでせいぜい苦しむことね……………」

神風はそう言い終わると静かに目を閉じた。そして限界を迎えた彼女の身体は少しずつ風化していったが、その顔はとても安らかそうな顔をしていた……。

だが、神風の半身程が風化した時、深海化瑞鶴……………深海鶴棲姫が空中より舞い降り、神風の残骸を踏みつけにした。

「あら、久しぶりね、時雨。てかなんで泣いてんの？あんたにまだ泣ける人間性があったなんて驚いたわよ」

瑞鶴の言葉に対し、時雨は何も言わず、ただ見つめていた。  
だが、内心での怒りに比例したのか左目から出る赤黒いスパークの  
大きさは増していた。

## 63話 提督が提督なら艦娘も艦娘

「……お前は……瑞鶴か?!」

萩原は驚いたような声を上げたが、瑞鶴は心底興味なさそうに神風の遺骸を踏みつけている。

「ゴミよ。こんなモノ。人は死ねばゴミになる。ゴミに弔いなんていないのよ。まあ、生きてるのにゴミみたいな奴もいるみたいだけど」

瑞鶴は時雨を見ながら言うと、第零艦隊の方に視線を向ける。

第零艦隊の生き残り（4人）は旗艦である神風の遺骸を踏みつけてしている瑞鶴に今にも襲い掛かりそうだ。

「瑞鶴ウ!!」

第零艦隊副旗艦である叢雲が叫びながら槍を構え突撃して来たが、瑞鶴はオレンジ色の如何にも熱そうなワイヤーでそれを切り刻んだ。「ッ!」

叢雲は某サイコロステーキ先輩の如くバラバラになり、残骸は燃え盛ったまま地面に落ちるとジュワツと音を立てて消えた。

「む、叢雲……、このグツ!」

陽炎も突撃しようとしたが隣にひよこつと現れたコズロフスキーに頭を散弾銃で撃たれ即死した。

そして残りの第零艦隊の艦娘も瑞鶴に切り刻まれ、全員死亡した。

「……それは翔鶴の技か」

「ええそうよ。翔鶴姉よ、あんたが沈めた翔鶴姉よ」

時雨は少し驚くような表情で呟いたが、瑞鶴は嘲笑いながら答えた。だがその目は怒りや憎しみで煮えたぎっていた。

「自分からバケモノになるなんて、哀れなものだね、瑞鶴」

「言ってなさいよ、クズ。私は誰の指図も受けずに、ここに立っている。私は私として立っている。瑞鶴として、深海鶴棲姫として立っている。私は私自身の殺意を以って、この夜明けに時雨、いや杉野、お

前を殺す！」

その瑞鶴の様子を見て時雨は嘲笑うように、滑稽なモノを見たように言う。

「くくくくく、はははははは。僕を？殺す？はっはははは!!出来るわけないだろ。アホウドリ瑞鶴、お前は僕と同じバケモノなんだ。艦娘だった頃のお前の方が数千倍、いや数万倍美しかったのに、なんて醜い様だ。ああ実に、残念だよ、とても。哀れだな、惨めだな、愚か者だなお前は」

「……そうね！確かに私は愚かだ！でも、お前が言えたことなのかしら?!愚かにも大本営と喧嘩して死んで、律儀に約束守って気狂いになって、お前の方が哀れで惨めでしょうが!!!」

時雨は瑞鶴の言葉を聞いて、少し悲しげな顔をしたが、すぐに冷酷無比そのものといった感じの顔になった。

「……………提督、命令を寄越せ。アイツを殺せと、さあ、早く、アイツを殺させろ」

そう言う時雨の声にはいつものような温かみはなかった。

ただ冷たい声で命令を求めた。

「僕は殺せる、殺さねばならない。微塵の躊躇も無く、一片の後悔も無く殺し尽くす。この僕はバケモノだからだ。あのバケモノを建造したのは20年前の私だからだ。さあ命令を」

そう言い終わると再び時雨の右目から涙が流れたが、誰もそれには気づかなかった。いや気づけなかったというべきか。

そしてその涙を流しながら狂気の微笑を浮かべる少女の姿をしたバケモノはこう続けた。

「銃の手入れは僕がしよう、銃は僕が構えよう、照準も僕が定めよう、弾を弾装に入れてボルトを引き、安全装置も外そう。さあ、提督、引き金を引け、そしてその弾丸は勝手に戦うから君は夕立と露助の連中をぶっ殺しにいけ」

時雨の言葉を聞き終わると同時に萩原は彼女の背中を強く叩き、激励の言葉を送った。

「行け。そして終わらせて来い」

「了解」

萩原と夕立は東京湾に（二式大艇みたいに）着水した空中戦艦モスクワに向かい、この場には時雨と瑞鶴だけとなった。

「……………ふん、あの夕立がいなくても私に勝てるってこと？」

「はは、バカだなあ、お前は。まるであの頃から何も変わらない。命令無視して突っ込んで、翔鶴沈めて帰ってきて、僕に噛みついてきた。まるで、犬コロのようにな」

「黙れ！私はあるの命令に一度も逆らわなかったし、反抗なんてしなかった！全部従って来たのになんであんな仕打ちが出来るの!?!私の身体を弄んで！ふざけるんじゃないわよ!!」

時雨は心底愉快そうに大笑いした後、冷たい視線で瑞鶴を見ながら言った。

「……………弄ばれたってお前……………くふふつ。何言ってるんだい？あの頃の僕のアレは短小だったから代わりに苦悩の梨突っ込んだだけでしょ？別に弄ぶもなにも無いじゃん。それに、信賞必罰って知ってる？それに則って罰を与えただけだよ。まあ、網走時雨がどつかから入手してきた拷問器具やらなんやらを試したかったってのもあるけど。あっそうだ！確かお前の体に空母ヲ級フラッグシップの体液注射したこともあったっけな？あの時の顔は傑作で……………ああすまない、話が脱線したね。要するに君の身体を改造して弄んだのは罰であり、正当な理由があつてやったことで責められる言われなんてないんだよ、アホウドリ瑞鶴」

時雨が話し終わると沈黙が訪れていた。二人の周りには赤い彼岸花が咲き誇り、艦載機が飛んでいた。雨も一層と強まってきていた。瑞鶴は少し間を置いた後、端から四肢を倍に増やして黒い球体を発生させ、ワイヤーを振り回しながら時雨に向かって走り出した。

「怒ったかアホウドリ！怒れ！怒れ！お前との馬鹿踊りも今日で仕舞いだ、噛み締めろ！」

元提督のバケモノと彼が最初に建造した空母の闘争が始まる。

共に正面から駆け寄り、時雨の手の平が瑞鶴の眼前まで来た時、動きが止まった。瑞鶴のワイヤーが時雨の腕を捉え、千切り落とした。



そして黒い球体が時雨を吹き飛ばし、ワイヤーは足に巻きつき引き釣りビルの壁へと激突させた。

時雨が血反吐と共に立ち上がると瑞鶴は嘲笑った。

「はっーやっぱり弱いじゃない、バケモノ。これで終わりよ!!」

そう言うと彼女は再び時雨の足にワイヤーを巻きつけ、上に引つ張り上げた。

上空に吹っ飛ばされた時雨は自由落下状態となり、瑞鶴の艦載機達が襲いかかってくる。時雨は機関短銃と主砲で次々と撃墜していく。

次々と墜とされていく艦載機たちはまるで七面鳥のようだ。

だが、巻き付いたままのワイヤーで叩き落とされる。

ビルの屋上に叩きつけられ、屋根やら床やらをぶち抜いて一気に下の階へ。更に次の階も突き抜け、地面まで落ちていく。

時雨は着地の寸前に受け身を取り、座った状態でメツエライを瑞鶴に向け、引き金を引きまくる。

「効かないわよそんなもの!」

瑞鶴は艦載機を盾にしたり、ワイヤーを幾重にも張り巡らして盾にするなりして銃弾を防ぐ。

時雨は左腕を闇に変化させ、その闇が巨大な魔犬のような形になり瑞鶴に迫る。

「なに?この大道芸は?」

瑞鶴はワイヤーでその犬を真つ二つにし、艦載機による攻撃でトドメを刺した。

「吠えるんじゃないわよ、駄犬。さあ、次は何をしてくれるの♪? 駆逐艦時雨。ただの駆逐艦め!」

瑞鶴の言葉を聞くと同時に時雨はメツエライを瑞鶴に向けて撃とうとするが、引き金を引こうとした瞬間、いつの間にかメツエライに巻き付いていたワイヤーでメツエライは破壊された。

「ッ!」

「バカだねえ〜!私に武器なんて意味が無い!私にはこの力があるの! だからもうお前は何も出来やしない。お前にできる事と言えば私に殺されることだけ!ははっ!さあてどう料理しようかしら?」

瑞鶴は時雨の足にワイヤーを巻き付けると、思いつきり引つ張り上げ、東京湾（お台場の方）へ放り投げ飛ばした。

時雨は海面に接する直前にマレー沖深海棲姫の艦装を展開し、上手く着水できた。

そして瑞鶴自身も深海鶴棲姫の艦装を展開して東京湾へと向かうとしたが、さっきの犬の様子がおかしいことに気付く。

数秒後、（確か第二章で）犬に喰われた深海山城（海峡夜棲姫）が現れた。

「っ!?え、何?!何が起きたの?!何が起きてるの?!」

山城はあまりの急展開に動揺していた。

ちなみにその頃の空中戦艦モスクワの艦橋にて。

「え!?!なにあれ!?!」

俺たちの同志クスネツオフは、突然のことに困惑していた。

「あ、あれ確か我々が深海化した協力者の山城かなんかです。多分、犬に喰われて取り込まれていた様です。犬が死んで支配率が変わり奴が顕現したのかと」

再び瑞鶴の方。

瑞鶴は山城 in 犬にワイヤーを絡ませる、というか皮膚に in して山城の体を操る。

チイツ… ギツビツ

「っ!」

ギギギギギギ…

「ぎ……があ……が…ぎや…あ あ ぎい い っ い っ い っ い っ っ」

「まさかあんたが出てくるとはね!山城!あんたは協力者なんだから戦わせてやるわ!」

瑞鶴は完全に山城の支配権を掌握すると、突っ込ませようとするが

……

ビキツビキビキツ ビキ…ピキ…

「(やばい!体が!もう!?!いいや、まだよ。まだアイツを、時雨を倒してない!)」

バキヤツ！ブシユウー ボタ、ボタタツ

音を立てながら彼女の腕は潰れた。

瑞鶴の腕は一応元通りになったが、彼女自身はダメージを負ったままで動けなくなっていた。

仕方ないのでワイヤーで操った山城を突撃させる。

「行けエ!!」

「っ！お前はー！」

山城（犬とくつついてる）はそのまま時雨に向けて突撃し、彼女の左腕を食いちぎる。そのままに通り過ぎたかと思われたがUターンしてまた向かってくる。

時雨も時雨でもう体力がないのか左腕がなかなか再生しない。

「お前まだ消化されてなかったのかよ。糞になりかけの、わけわかんねえ外患野郎。面白いくぐつを手に入れたなあ、瑞鶴」

時雨はその山城に向けて発砲。弾は当たらず、ワイヤーの巻き戻しによる打撃攻撃により、腹を思い切り殴り飛ばされる。

「うぐえ!?お、おおおおっ!!」

胃液を吐き、苦しそうにしながらも時雨は攻撃を続ける。

ギギギギギギギ……

「ハア、ハア、ハア、ハア、ハア、ハア、ハア、ハア、ハア、ハア」

瑞鶴はなんとか立ち上がる。息絶え絶えになっていたが、それでも彼女は時雨を殺すつもりであった。

「だめだ！まだだめだ！まだ死ねない!!まだ時雨を倒してない!!!」

瑞鶴は時雨を睨みつけ、3連装46センチ砲を発射する。

時雨は日本刀を抜くと、主砲で砲弾2つを撃墜し日本刀で砲弾1つを斬って防いだ。

時雨も瑞鶴も息絶え絶えになっているが、瑞鶴の方は膝をついてしまふ。

空中戦艦モスクワ艦橋にて

俺たちの同志クズネツオフと博士はモニターに映る瑞鶴を見て言う。

「……やはり、我々としても新しい試みで、かなり無茶な施術でしたしねえ」

「……我々の与える物は全てあの女に与えた。我々が奪える物はあの女から全て奪った。自分の人生、深海棲艦と化した姉、自分の仲間、そして自分の”元”上官。全てを賭けてもまだ足りない」

クズネツオフは少し間をおいてから言った。

「……だから我々からも賭け金を借り出した。我々はそういう者には協力を惜しまないからな。たとえそれが、鶏鳴が暁を告げる時間になれば身を滅ぼすような、破滅的で法外な利息を伴うものであっても。10年かけてあの女は、あのバケモノと勝負するために全てを賭けた。暁の勝負に全てを賭けた。運命がシリンドーを回し、銃弾は1発！勝負は1度きり！相手は幸運艦と呼ばれた駆逐艦の化生！」

クズネツオフは時雨に目を向ける。彼は今の状況を見つめながら語る。

「さて、お前は何だ？正規空母瑞鶴！幸運の空母よ！」

## 64話 うしろのしょうめんだあれ

ガガガガ！ ギギギギギ！ ボツグバツ！

ようやく再生した時雨の左腕を山城は再び食った。

そして追い打ちと言わんばかりに砲撃を時雨に向かって叩き込む。  
ドゴオオン！ドゴオオン！

ついでにどっかから取り出した魚雷を投げつけながら突撃し、U  
ターンして再び時雨に襲い掛かる。

「カハツ、やるじゃあないか、海峡夜棲姫い！」

時雨は血を吐きながら笑う。

「犬に喰わせておくには、もったいなかったな」

そのまま犬に胴体を噛みつかれるが、時雨は5インチ連装砲を山城  
の頭に押し付ける。

引き金を引いたが、いつの間にか壊れたのか弾は発射されなかつ  
た。

「チッー！」

仕方がないので右手を使って艤装の2門ある5インチ単装砲の右  
側を掴み、その砲身を山城の頭に押し付ける。

「チエック、メイトだ！」

バガアンツ！

山城の頭には約13センチの大穴が開き、山城with犬はそのまま  
消滅した。

時雨はそれを確認すると瑞鶴を殺すべく陸に上がる。

「ぐ、グボツ………ツ、もうガタが来たのか………」

時雨が吐血すると同時に身体に古傷や火傷痕が現れる。

時雨が残機をバケモノになる前に刻まれ、高速修復材でも完治でき  
なかった傷だ。変成魔法でうまいこと隠していたが、体力が尽きかけ

ているせいだろう。

「……………いけるか？」

時雨の目つきは鋭くなり、八重歯が牙の如く伸びる。そして、爪がナイフの様に尖る。

その姿を見た者は皆、悪魔だと口を揃えて言い出すだろう。

そう言われても不思議ではない程の姿であった。

瑞鶴もまた立ち上がり、時雨と相對する。しかし足がふらついてい  
る。そして、彼女はこう呟いた。

「まだ……………まだ……………まだ……………負けてない」

瑞鶴は時雨を睨む。

「っ、人形が敗れたのね。でもね……………追い詰めたわよ！時雨え!!」

満身創痍の瑞鶴は同じく満身創痍の時雨に向けて叫ぶ。

「終わりよ時雨!!」

「へえ、馬鹿踊りも終いにするかい？」

対する時雨は何故か余裕そうな表情だ。

「死ねえ!!」

「っ!」

瑞鶴はワイヤーで時雨の四肢を切り落とし、皮膚にワイヤーを入れ  
ることで時雨を固定する。

「……………」

時雨は恐らく意識を失った。瑞鶴が奴を殺すことのできるチャン  
スは後にも先にも今だけだろう。

「ハア、ハア、ハア、ハア……………早く……………こいつの心臓を！」

瑞鶴は時雨が落とした日本刀を持ち、歩き出す。

「心臓を！心臓を！」

瑞鶴は時雨の胸元に刃を突き立てた。だが……………

「……………?違う！こいつは……………!違うッ!!」

瑞鶴が固定したと思っていた時雨は、時雨の変成魔法により見た目  
をマレー沖深海棲姫に変えられた山城だった。

「ああっ……………そんな……………なんで……………」

「はは、残念ハズレ〜（笑）」

瑞鶴は時雨の声が聞こえてきた方角を振り向く。そこに時雨は居なかった。

いや違う。時雨は瑞鶴の背後にいたのだ。  
「うしろの」

時雨の声が変わった。あの、聞くだけで虫唾が走るあの杉野の声に変わった。

「しようめん」

瑞鶴の肩に手が置かれる。

「だあれっ?」

瑞鶴はぶん殴られ、前方に倒れ込む。

そして彼女の目の前に現れた時雨を見た。

「お、お前……!」

時雨は口の端を上げる。

そこには在りし日の、新米提督だった頃の杉野時雨少佐が立っていた。

「どうしたツインテ、立てよ」

時雨は瑞鶴に向かってゆっくり歩き出す。

「一発殴ってハイ、お終いつて訳にはいかないだよ。鉄屑」

瑞鶴は立ち上がろうとする。だが力が入らないのか上手く立つことが出来ない様子だ。

「ろくでもない外法で深海棲艦なんでもものになるから、再生も回復もおぼつかない。まさか、中枢棲姫やら空母水鬼やらのキメラになるとは思いつかなかったよ。だが、そんなキメラみたいな無理矢理の施術じゃあ、拒絶反応も出るってもんだ」

時雨は瑞鶴の前で止まって言う。

「今のお前は拒絶反応と疲労で体を磨り潰している。さあ、どうなるかな? もう、深海鶴棲姫の、その姿を保つてもいられんのだろう。じゃあどうなる? 元の改二甲かな? いや、それとも……ガキに戻る」  
瑞鶴（深海鶴棲姫）の体はみるみるうちに瑞鶴（未改装）に戻りつつあった。

時雨はその光景を見て、嘲笑うように言った。

「よう瑞鶴、15年振りだな」

「ツ！あんた、何のつもりよ！ふぎけるな！」

瑞鶴が言っているのは恐らくリバイバル杉野提督（少佐）のことだろう。

「ふぎけていななどいない。ふぎけているのはどっちだ？お前の方だ。私はお前の余興につきあっているだけだ。お前のままごとにつきあっただけだ」

瑞鶴が反論する前に、時雨は話し続ける。

「姿形など私にとつては何の意味もない。何か月か前に見せたはずだ。私はなろうと思えば犬にも猫にもなんなら無機物にもなれる。物おぼえの悪い醜女だ」

「……ツ！」

「何の事はないさ。結局の所、突き詰めて行けばこんな物は、餓鬼の喧嘩なんだよ。だから餓鬼になったのさ。僕も！お前も！」

瑞鶴は顔を歪める。

「人は違う。この世に同じ人間はいない。趣味嗜好意見解釈、誰もかれも違う。闘争の本質だ。自分と違う者は認めない。認めない者とは敵対する。敵対した者とは闘う。闘う為に生きていくようなものだ。そしてそのためなら何もかもを引っくり返して叩き売りだ。そうしなければ生きることすらままならないそれが人というものだ。私たちのようなバケモノでもそれは変わらない」

時雨の声色が急変する。艦娘の時雨の声に戻る。

「私が憎かった？いいや、それもあるが少し違うな。僕に嫉妬したんだろ？僕と闘ってみたかったんだろ？だから殺したいんだろ？殺してみたかったんだろ？」

「………黙れ！」

「いいや黙らない。僕を殺さなきゃ、一步も前に歩めなくなったんだろ？お前は」

瑞鶴は顔を押しさえてしやがみ込む。まるで涙を隠しているようだ。

「………違う！」

「違わない。進む術も知らんのだろう？無用者になるのが怖いか？た



だの鉄屑同然になるのが怖いか？哀れな深海棲艦の姉と一緒に朽ちていくのが怖いか？僕に忘れられるのが怖いか？安心しろ。僕は多分お前のことなんて割とすぐ忘れるし、お前なんかよりその辺に転がったスクラップ共の方がずっと役に立ってる」

そこで一旦言葉を区切る。

「ふざけるな！ふざけているのはお前だ！！瑞鶴！！」

いつの間にか姿も艦娘の、深海に片足突っ込んだような、赤い瞳の時雨に戻っていた。

時雨は再び瑞鶴を嘲笑うように言った。

「お前は餓鬼だ。15年前から何一つ変わっていない、何も出来ないガリツガリの、文字通りの糞餓鬼だ」

瑞鶴の体がビクリとする。だが、それでもまだ足りない。まだまだ言いたいことはある。

時雨はニヤリと笑う。そして再び口を開く。

「さあおいで、糞餓鬼！」

## 65話 バケモノ同士の食らい合い（殺し合い）

荻原と夕立は空中戦艦モスクワ艦内に突入していた。

超兵数人が二人に向けてAKを乱射していたが、夕立に全て防がれ、荻原に当たることはなかった。

「おー、怖いっぽい」

夕立はそう言いながらAKを発砲していた一人に主砲でトドメを差し、もう1人の首を手刀で切断した。

その時後ろの方にいた別の超兵がRPGを取り出したが、夕立はその前に彼の顔面に艦装の下にマウントされた20インチ連装砲をぶっ放し、頭だけでなく全身を吹き飛ばした。

「うおおお！なんかやべーやつ来たぞー！」

「くそっ!!コイツら一体どうなってるんだ!!」

「クソツたれが!この化け物め!!」

「おお、お前が俺たちの死か!」

「Урааааааа!!!」

他の超兵は次々と襲いかかったが夕立は全て返り討ちに遭い全員殺されたりバラバラになったり、爆発したりして死んだ。

ちなみに彼らの戦果は主に夕立の砲弾を消費させたことと、夕立の制服に自分たちの返り血を大量に付けたことだったという。

その後二人は超兵たちの死体を踏み潰しながら進んだ。すると前方に扉がありそこを開けると中には一匹の犬がいた。

見た目はシベリアンハスキーっぽいのだが、普通のシベリアンハスキーよりも狼のようで、瞳が赤く、尋常じゃない雰囲気纏っている。

「おー、かわいいっぽい!」

「ちよ、夕立、こいつヤバそうだぞ、不用意に近づくな」

荻原の予想は的中し、突然シベリアンハスキー?が夕立に飛び掛かり襲い掛かってきた。夕立は咄嗟に反応し、飛び退こうとしたが、相手の攻撃が早かったのか、回避は出来ず右腕を食われた。まあ、秒で

再生したのだが。

「……ふうん？あなた、ワンちゃんじゃないっぽいね？正体見せろっぽい！」

夕立は犬？に主砲を向けながらそう言う。その瞬間、犬？は黒い霧のようなものに覆われ、そこから身長190超えの大男が現れたのだ。

「へえ……やっぱりアンタ、人間だったのね？」

大男は顔色一つ変えず、ただ夕立を見据えているだけだが夕立はそれを睨んでいると認識した。

「……俺の名はアレクサンドル・コズロフスキー、階級は中佐だ。……あと、俺は人間じゃなくて吸血鬼だ」

そう言った途端、コズロフスキーの姿は一瞬で消えた。

「!?消え……ああなるほど、移動速度が速いっぽいね」

次の刹那、コズロフスキーは夕立の目と鼻の先まで近付き拳を突き出し、それをギリギリ視認できた夕立も左腕でガードしたが吹っ飛ばされ壁に激突した。壁からはひび割れが生じていてかなり凄まじい衝撃だということが窺える。

「……提督さん、ここは夕立に任せて、先に進むっぽい」

そう言うと夕立は立ち上がり服に着いたホコリを払ってからこう言葉を発した。

「……わかった」

萩原は走ってその場を後にした。

「さあさ、来ないなら、こちらから行くっぽい。夕立の全力、味わってもらっぽいよ」

それを聞いた瞬間、今度は逆に夕立の方から接近し殴り掛かる。その一撃は通常の超兵や深海棲艦ならば首が吹き飛ぶほどの威力なのだ……。

コズロフスキーは夕立の腕を取り、背負い投げをし床に思い切り叩きつける。その瞬間床が粉碎した。だが夕立は即座に艤装にマウントされた20インチ連装砲を足と足の間から放ち、それは直撃しコズロフスキーの腹に風穴が空いたように見えた。だがあちらもすぐに

再生する。

「……ぐおっ」

「まだまだ!」

更に夕立は至近距離で魚雷を投げつける。

「……調子に乗るな」

魚雷が当たる直前、コズロフスキーは機関銃を連射し、魚雷を誘爆させ爆風で夕立を吹き飛ばした。

夕立はなんとか立ち上がる。

「……クフフ、楽しい!こんなで戦えて、ワクワクするっばい!!」

「……お前のような化物にそんな風に思われるのは悪い気しないな」

コズロフスキーは上の軍服を脱ぎ、上半身裸になる。そして彼のボデビルダー顔負けの筋肉が露になった。

しかし夕立は全く恐れずにむしろ歓喜しているようにすら見える表情を浮かべている。

「もっと遊んでほしいっばい!!」

夕立は再び飛びかかり蹴りかかるが、それも避けられる。コズロフスキーはそれを利用してカウンターを決めようとするが夕立はその動きを予想しコズロフスキーの攻撃をかわし、後ろに回り込んだ。コズロフの後ろをとった後回し蹴りを放ち彼の体を蹴飛ばす。その攻撃により、肋骨数個と内臓がいくつか潰れたがすぐさま再生される。

「……なかなかやるな……あの時雨と違って舐めプじやなみたいだな……じゃあそろそろこっちも本気出すぞ……」

「来いっばい!」

二人は同時に駆け出すとまずコズロフスキーは左ストレートを放つ。それに対して夕立は左手でそれを受け止めるともう片方の手で殴ろうとするも掴まれてしまう。

コズロフスキーはそれを見越し、もう片方の手を夕立の首元を掴み力を込めてそのまま地面に叩きつけた。そしてコズロフスキーは夕立の首筋に噛みつき吸血し始めた。

だが夕立はコズロフスキーを蹴飛ばし、刀を抜いてコズロフスキーの左腕を斬り落とし、咀嚼した。

血肉が彼女の喉を通る。

コズロフスキーも腕を再生させた後、機関銃を構え、夕立に向かって撃ち始める。しかし夕立は全て弾を避け、逆にコズロフスキーに接近し顔面に膝を叩き込む。それにより鼻骨と前歯が全て折れるが瞬時に再生。

夕立はコズロフスキーの胸倉をつかみ壁に打ち付けようとしたが、コズロフスキーに頭突きを食らい怯んだところを逆に壁に押し付けられてしまう。そして夕立は足を絡められてしまい抜け出せないままコズロフスキーに抱き締められる。そして彼は首を噛み始めたが……。

「あまいぽいいいいー」

そう言うと同時に夕立は20インチ連装砲を至近距離で発砲したので。

これには流石のコズロフスキーでもたまらず後退するしか無かった。その隙を見て、夕立は一気にコズロフスキーと距離をとり、体勢を整えた。

「クフフ……強い……強すぎる……これ程の実力を持っているとは思ってもみなかったな」

「そりやどうもっぽい」

夕立の顔には大量の汗が出ておりかなりの疲労が見えるが、それを感じさせないような余裕な態度だ。

「せっかくだから伝えておくが、俺はある能力を持っている。というか上位の超兵は大体持っている。……磯三郎は気の狂った俊敏性、エカテリーナは撃った弾が必ず当たるといふ能力、お前が殺した脳き：ゲオルグはただ単に体が頑丈だったな。アフレヒトに至っては何の能力もなかったな」

「何それ？そんなこと知って夕立が動揺すると思っつぽい？」

夕立は笑い飛ばした。

「……俺の動きが速すぎると思わなかったか？銃弾を時々全てかわせていただろう」

「……あなたは自分の動きを速くしているわけね……それ、反則っぽ

いよ……」

夕立は少しうんざりした表情をしている。

「……違う。俺が速くなってるんじゃない。お前が遅くなっているんだよ」

そう言い終わった瞬間、コズロフスキーの体は一瞬消えて見えなくなってしまったが、夕立の目はそれを追えているようで彼の姿を認識できている。そして彼が夕立の後ろに現れると、背中に回し蹴りを決めるが夕立はすぐに反応しガードに成功する。しかしその瞬間コズロフスキーの姿がまたも消える。だが夕立はそれを察し振り向きざまに拳を突き出しコズロフスキーを殴りつける。夕立の攻撃はクリーンヒットするがそれでも再生してしまう。

「……俺の能力は半径50メートル内にいる対象の時間を10倍に引き延ばす事ができる……お前にとつての6秒は俺にとつての1分だ。まあ使いすぎると疲れるからあまり使わないようにしてたが……もう限界に近い。全力で行く」

夕立は身構えるが、その時コズロフは既に夕立の背後にいた……。

夕立が振り向いたとき既にコズロフは夕立の懐に入り込んでおり強烈な一撃を放った。

それは夕立の脇腹を捉え大きくよろけさせ、更に蹴り飛ばされる。夕立の肋骨が何本か砕けたのを感じたがすぐに治る。だがダメージが大きいせいですぐに立ち上がれないでいた。

コズロフスキーは再生途中の夕立に近づくと、再び首筋を狙い噛みついてきた。その攻撃に対し夕立は何も出来ずされるがままになつてしまう……。

(やばいっばい……これは死ぬかもしれないっばい)

夕立は意識が遠くなつていくのを感じたが、目をかつ開いて12.7センチ連装砲をコズロフスキーの顔面にぶち当てる。

それにより夕立に噛み付いていた口は離れ、夕立の足を掴む力も弱くなる。夕立はその隙にコズロフスキーの右脚に食らいつき噛み千切った。

そして刀を抜刀して一閃しコズロフスキーの両断に成功したが

……  
まだ終わらない。再生する。今度は左半身を喰らう。そして刀を振り上げようとするも再生されてしまい、また首筋に噛みつかれる。ならばもう一度両肩を食う……。しかしこれも再生されてしまった……。

夕立とコズロフスキーの不毛な食い合いはお互いの血を混ぜながら二人を一つにしようとしていった。そして……

「……………ぐはっ……………!?」

遂にコズロフスキーの心臓に夕立は刀を差し込んだ。そしてそこから大量に血が流れ始める。

そして彼はその場に倒れた。

◇

(……………なんだ?なんだこの光景は?)

コズロフスキーはこれまでの人生の走馬灯のような映像を見ていた。だが、

(なんだこれは……?俺はこんなこと知らない)

彼は身に覚えのない光景を見ていた。

最初に見たのはロシア帝国の寂れた農村で子ども頃のコズロフスキーが父と母と一緒に畑仕事している姿だった。

次に見たのは全ロシア・ソビエト大会でのレーニンの演説だった。次の光景は同志を率いて帝国に対して蜂起したときのもの。

次には革命後にソビエト政府が樹立された時の様子、そして、赤軍大佐としてシベリアに侵攻してきた日本軍を迎撃するの映像……。そしてその次に、彼の人生において最も重要な日の出来事が映像として流れる。そう。

「スターリンの野郎めえ!!!!!!」

大粛清である。彼は怒り狂いながら大声で叫んだあと自分の胸に手をやり握り締めた……。

そして最後に牢獄での特務戦略技術軍の将校との会話が映る。

『同志コズロフスキー、我々に協力してくれれば君の命を助けられるし我々の計画を実行に移すことも出来る』

『……分かった……協力しよう』

そして彼は思い出した。

◇

夕立は目の前の安らかそうな顔で息絶えたコズロフスキーを眺めていた。

「終わったっばい……」

夕立の身体からは血が出ていたのだが、彼女の回復能力は尋常ではなくすでに傷は全て癒えており、返り血で服が真っ赤になっていただけだった。

(ん？なんか違和感が……)

得体の知れない違和感を感じた夕立が真後ろを見ると、そこにはス○ンドのように突っ立っている半透明のコズロフスキーの姿があった……。

「あ、あなたなにしてるっばい？」

『……食い合って混ざった結果お前と俺は今1つの生命体になっているようだ……俺の能力は共有されているようだな』

コズロフスキーはニヤリとする。夕立の脳内に奴の声が直接響く感じた。

「ええ……」

『まあ、よろしく頼むぞ、夕立』



そして、夕立は萩原を追って空中戦艦モスクワの艦橋へ向かった。

## 66話 スーパー煽り散らしタイム

「大佐！」

「おお、来たか、荻原大輔准将」

モスクワの艦橋では二人の男が対峙していた。荻原は拳銃を構えているのに対し、クズネツオフは座つて余裕そうに足を組んでいる。

「さて、私を捕まえるか……撃ち殺すかな？」

クズネツオフが煽るように言うが荻原は黙っているだけだ。

「ふむ、まあよかろう。いいものを見せてやる」

クズネツオフはそう言うとりモコンを操作し、モニターにとある画像を出した。それは……時雨が死亡した東京都民や深海棲艦etc…の命を吸い取っていく様だった。

それを見た途端、クズネツオフは高笑いし始める。

「……何をするつもりだ？」

「ふつ、君はこの私とともに目撃するぞ。あの忌まわしきバケモノが、この世から綺麗さっぱり消え失せるところをね」

「なっ……!?!」

◇

「フハハハハハッ！食い放題もいいところだなあ！最高だよ！ハハハ！」

瑞鶴に言いたいことは半分くらい言い終わった時雨は満足そうに笑う。彼女は彼女の屍海に沈んだ東京中心部の死体から命を奪い続けていた。すなわち、再び残機を増やし続けているのだ。もはや誰にも止められないであろう。

「まだよ！まだ私の勝負は……ついてない！ついてないわ!!クズネ

ツオフ!!やめさせろ!!」

「いいや、もうついたよ。もう遅い」

「もう遅いよ。バクカ」

時雨とクズネツオフがキレ散らかす瑞鶴を啜う啜う。

「もう全てが遅いのだ。お前ではもうそいつに勝てない。機会は永久に近く訪れない」

クズネツオフは嘲笑う。その笑みはととても邪悪であった。

「好機はくれてやった。千載一遇の、そのバケモノを物理的に殺すことのできるただの1度の好機だ。2000人の特別戦闘部隊、3000体の深海棲艦、そして第零艦隊、そして深海化神風、そしてお前のこれまでの人生。全てを犠牲にして得たチャンスだ」

クズネツオフの言葉に嘘はない。全て真実だ。

「それらの全てを犠牲にして作り上げた、お前の人生におけるたった一度の絶好の機会だ。それを無駄にした貴様にはもはや勝ち目などありはしない。あるわけがない。時雨の命の数はいつたい、いくつだ?100万か?200万か?お前ではもう勝てない」

クズネツオフはさらに煽る。

「瑞鶴、お前の人生は今、台無しになった」

「……………」

無言のままの瑞鶴を見て時雨は瑞鶴の胸倉を掴み持ち上げる。

「ポーっとすんなって言ったじゃん!ほら早くしなよ。もうすぐ僕のご飯になるんだし、最後までらい何か喋って欲しいなあ?」

「……………死ねえ!!」

瑞鶴は時雨の胸元に渾身の殴りを放ち、それは時雨の心臓を貫通し、彼女の体内で拳を引き抜く。しかし…………。

「……………残念だったね」

時雨は不敵に微笑んでいた。時雨は瑞鶴を殴り飛ばすと、傷を逆再生するように修復していった。

「気張りなよ、あとたった何万回だよ?そんな少ない数じゃないでしょっ!」

「あ……………」

瑞鶴は絶望したような表情をする。

「神風で勝てなかったこの僕を、お前みたいな顔色の悪い糞餓鬼が、どうやって倒すつもりだい？お前みたいな鉄屑が、10年や20年思い煩ったところで、勝てるわけないだろ！ばか!!」

時雨とクズネツオフの笑い声は、瑞鶴の精神を打ち砕くには十分なものだった……。

その頃、クズネツオフの命を受け、例のシユメール文明の謎の材質の棒（ソ連側名称『越界棒』）を持ったとある超兵は都内のとあるビルの上屋上にいた。

「……………ふう……………」

その男は深呼吸すると、越界棒を振り上げ、空へと投げた。

棒は放物線を描いて上空へ投げられ、時雨の屍海へ、ぽちんと落ちて沈んでいく。

「……………ふう、勝った♪」

クズネツオフはその光景を眺め、ほくそ笑む。

「お前の負けだ、時雨」

## 67話 救いようのない現実

「お前の負けだ、時雨」

……………負け？ 一体誰が？ 僕が負ける？ 誰にさ。

『負ける？ 僕が？ 冗談はよしなよ』

『負ける？ 私は、私達は負けん。負けるはずがない』

……………。

何だ、何を見ているんだ、僕は。これは幻覚か、夢でも見ているのか。

何だこの情景は、この有様は。

彼女が眺めていたのは、東京湾に映る朝焼けであった。

ああ、そうだ。そうだった。

あの時もこんな日の光だった。

私が死んだ光景は、いつもこのこれだ。

忘れかけていた、思い出せなくなっていた記憶が蘇ってくる。

……………日の光って、こんなに綺麗で、美しかったんだ  
なあ…………。

時雨の体から力が抜け落ちていき……屍海もろとも離散し始めた。

その頃、クズネツオフとともに時雨の様子を見守っていた荻原は（。ム。）とした様子であったが、すぐに気を取り直す。

「何だ！何が起きている!?時雨に何をした！」

「なにも。ただ、少し現実というものを押し付けただけだ。今の時雨は越界棒という物を吸収した。越界棒は文字通り世界を超えて別の世界へ行くことができる性質をもつものだ」

「どういうことだ」

クズネツオフは鼻を鳴らす。まるで理解のできないものを侮蔑するかのよう。

「わからないだろうな。我々だって原理なんてものを知らない」

クズネツオフの言葉通りだ。誰も知らない。なぜこの道具にその力があるのかすらも不明だ。だが事実としてあるのだ。その力が。

「だが、越界棒にはもう一つ性質があることが分かっている。それは、博士が考えたえくつと、現実値だったか？私は細かいことは知らないが、越界棒はその現実値がほぼ0だ。この世界のほとんどの物の現実値は95.0らしいんだが、越界棒は……まあ、すごいね」

「……話が見えんぞ?どういう意味だ」

「頭の固い若者だな、全く。要するに水の入ったコップに角砂糖を放り込んだようなもんだよ、それは」

つまり。

「越界棒と時雨はまもなく同化しようとしている。低すぎる現実値のせいで、時雨の存在は今にも消えてしまいそうなほど不安定になっているんだ。それが今のあいつの状況だ」

「何だと……!そんなバカなことがあつてたまるか!!」

「だから言ってるだろ。私だつて信じちやいない。そんなことがあるわけないんだから。だがな、事実だ」

「……そんなことが」

「ほら、この画面を見ろよ。もう屍海は霧と化したぞ」

いつの間にか屍海だったものが雲散し始めている。

「よく見たら時雨の方も若干半透明になってきているじゃないか。お前も見てみる、な?」

クズネツオフは呆然と立ち尽くす荻原を顎で指す。

「時雨!」

荻原は時雨に向けて叫ぶ。

半透明になり、瞼を閉じていた時雨は、目を眠たそうに開けると声の方に視線を向かせた。

「時雨! しっかりしろ!! 時雨え!!!」

荻原は続ける。何度も、時雨の名前を、呼び続ける。

「命令だ! 時雨!! 消えるな! 死ぬんじゃない!! お前はまだ……まだ……」

……僕は、僕を呼んでくれる人がいることを幸せに思った。僕の死を悲しんでくれる人のことを、愛しく思った。そして同時に怖くなった。

僕はこの人を……皆を置いていく。置いていってしまう……。

それが、堪らなく怖い。

「……っ……」

僕の頬には涙が流れていた。

「……ああ……」

……ごめんなさい、提督……。

「……っ……っ……く……」

……ねえ、お願いだよ。最後に君の顔が見たい。君の瞳に、うつつていたいよ……。

「時雨!」

「……あ……っ……っ……てい、とく」

やっと言葉が出てきた。でもやつぱりうまく喋れないや。

でも良かった。最後の瞬間に彼の顔が見られて。

「……………さようなら……………提督……………」

「……………時雨……………」

そして時雨の体は完全に消えてしまった……………。

後に残ったのは、彼女のつけていた髪飾りと刀、そして……………越界棒  
だけだった……………。



## 68話 作者がジョジョの漫画を読み始めた結果

「時雨！うわあああああああ!!!」

荻原は絶叫した……。

クズネツオフはしばらく無言だったが、やがてぼそりと呟いた。

「……勝った、か。……だが、なんというか、虚しい気分だな。あんな模造品のようなバケモノを倒したのが、我々の研究の最大の成果とは、ね」

その時だった。

「つばいー!!」

艦橋の床をぶち破って夕立が現れた。だが、以前よりさらに禍々しいオーラを放っている気がする。

クズネツオフも一瞬驚いたようだ。しかしすぐに余裕のある笑みに戻る。さすがロシア人である。メンタルも強いのかもかもしれない。

夕立は血のように紅く染まった双眼でクズネツオフを睨むように見ながら荻原の隣に並び立つ。

「ほう、その様子だと、コズロフスキーでも喰らったようだな」

「黙れつばい。クズは黙ってる」

「……口の悪いワンちゃんだな。まあいい。…………とところで、君たちは私が何者なのか知っているか？まあ、せつかくだから教えてやろうか」

「……………」

「まずは自己紹介から行こうか。私の名はウラジミル・クズネツオフ。ロシア＝シベリア共和国、特務戦略技術軍の大佐だ。年齢は141歳、結婚はしていない。見た目年齢は30歳くらいかな？趣味はボルシチを作ることだ。あと、酒が好きだ」

まるで友人に紹介をするように淡々と己について述べていくクズネツオフ。彼はどこか狂気じみた目をしながら言う。

「そしてなにより、越界とそれを使った越界装置の研究の責任者だ」

クズネツオフは少し間をあけてから再び話し始めた。

「我々は越界装置によって、平行世界や異世界の技術を現実世界へ持ち込み、活用することに成功した。PDC-202...君たちに伝わるように言えばツアー・ボンバか。それやミグ29戦闘機やソユーズ宇宙船など、ソヴィエトが生み出したさまざまなものに我々の研究チームは貢献した」

そしてまた一呼吸置いて続ける。

「しかし、それでも満足できなかった」

「？」

クズネツオフの言葉に怪しそうな顔を向ける萩原と夕立。だがクズネツオフはそのことについて気にすることなく話をすすめる。

「我々は見たんだ。我々が生み出してきたもののさらに上のものを。それを目にして、私は心を奪われた。それからの日々は楽しかったよ。本当にな。毎日が夢のようだった」

クズネツオフはまるで子供のようににはしやぎながら、語る。

「ロンドンでナチや十字軍が亡者の大群に押しつぶされる世界を見た。時を止める吸血鬼がいる世界にも行った。他にも多くの世界をこの目で見てきた。素晴らしい世界ばかりだった。そして同時に思った。その世界の生き物たちをこっちの世界に連れ込んだらどうなるのか、とね」

クズネツオフはニイツと邪悪な笑みを浮かべた。

「我々の実験の成果は、君たちが今体験しているものだ。妖精さんも我々が持ってきたものだ。あと、吸血鬼の血とかもな。...そして吸血鬼の血と妖精さんを使って祖国超兵、つまり深海棲艦を作った。まあ、別の平行世界の深海棲艦を参考に作ったのだがね。...ただ、脱走した深海棲艦が坂本とかいう奴の下で暴れていただけで、我々の祖国超兵は使う機会がほとんどなかった。第三次世界大戦も結局原爆使われなかったしな。あ、そう言えば、坂本が艦娘の反乱は我々が仕組んだとか言ったらしいが、洗脳したのは坂本だ。くれぐれも勘違いはしないでくれよ」

クズネツオフはいったん言葉を区切る。

「だが、その矢先だ。我々は……時雨を見つけた。そして、あのおもちや……バケモノを倒す方法を日夜考えた。童心に返って考えた。いやあ、楽しかったのなんの。……そして我々は、私はあのバケモノを塵も残さず消し飛ばしてやった。さすがに骨が折れたがね」

「……ふざけるな」

萩原は低い声で言った。

「時雨は物じゃない。お前が弄んでいい存在なんかじゃねえんだよ！」

萩原の叫びを聞いたクズネツオフは一瞬ポカんとした表情を見せたが、すぐに高笑いをした。

「ハハハッ！面白いことを言うなあ君は。アレが人？まさか。そんなわけないじゃないか。あんな醜悪でおぞましいバケモノが人間であるはずがない。そもそもアレは兵器だ。兵器は使い潰すのが道理だろう」

「貴様アツ!!夕立！奴をぶっ殺せ!!」

「ぽいーっ!!」

萩原の命令と同時に夕立はクズネツオフに20インチ連装砲を向けて砲撃する。

「ぎゃああああああつー！」

砲弾はクズネツオフに命中し、彼は右半身を吹き飛ばされて艦橋に倒れた。血しぶきが舞い散り、あたり一面を赤く染める。

しかしクズネツオフは生きていて、何事もなかったかのようにムクリと起き上がった。

「……チツ」

夕立は小さく舌打ちをする。

「危ないなあ全く。でもな、私は異世界のオカルトチックな技術で体を治せるんだ。だから君の攻撃は私には通用しない。残念だったな」  
クズネツオフが嘲笑うように言うと、彼の体が光に包まれ、見る間に元通りになっていく。

「これが私の方だ（笑）。君たちに勝ち目はな「コズロフスキー！」

夕立はコズロフスキーからパクツ……共有した能力で時間を遅く

する。

「Д!?! с а д ъ Ф и у л а х н в и у р е х ф г м х й ю т й ю н г т х й т т у ?!?!?」

夕立以外の存在の速度が十分の一になり、クズネツオフはロシア語で何かを喚くが、夕立には超スローに聞こえるのでマジで何言ってるのかわからない。ちなみに夕立以外から見ると夕立は超高速移動しているように見える。

「ぽいっーぽいぽいぽいぽいぽいぽいぽいぽいぽいぽいぽいぽいぽいぽいぽいぽいぽいぽいっー!」

夕立はクズネツオフにオラオララッシュならぬぽいぽいらッシュを浴びせる。

「ぎゃあああああ!!」

「ぽいぽいぽいぽいぽいぽいぽいぽいぽいぽいぽいぽいぽいぽいぽいぽいっー!」

「あばばばあ с д л й в и ф о к л й ; к п н ц х й х г @ :」

夕立はクズネツオフをボッコボッコに殴る。クズネツオフの顔が腫れ上がっていく。

「ぽいぽいぽいぽいぽいぽいぽいぽいぽいぽいぽいぽいぽいぽいぽいぽいぽいぽいっー!」

「こはあーぶべらぼげえ!」

「これでトドメツ、ぽいイイイイツ!!」

夕立は渾身の一撃をクズネツオフにぶち込んだ。クズネツオフは吹き飛び、壁に激突する。

「……………し、死ぬう」

クズネツオフは瀕死の状態になっていた。もう立ち上がる気力もないようだ。

「……………」

萩原はクズネツオフに近づき、拳銃を突きつける。

「動くな」

「うぐ…………クソ、ここまでか」

クズネツオフは観念したように呟いた。だが……

「……………なあ、荻原准将。我々の技術が欲しくないか？取り敢えず話だけでも聞いてくれ」

突然、クズネツオフは意味不明なことを言い出した。

「……………よし、聞こ」かかったなこの青二才がアツ!!死ねエツ!!」

その瞬間、艦橋の天井から機関銃が出てきて発砲される。

「ぼーっ！」

夕立は20インチ連装砲や12.7センチ連装砲を撃ちまくり、銃弾を全て撃ち落とした。

「何っ?」

クズネツオフが驚きの声を上げる。

「くたばれ」

荻原はクズネツオフを射殺した。

その頃、艦橋から少し離れた場所にある研究室では、博士が脱出の準備をしていた。

「クソー!こうなったら私も逃げなくては…………」

彼はバッグに研究のレポートや必要なものを詰め込んで背負う。するとその時、艦が大きく揺れてドアが閉まった。

「しまった!閉じ込められた!」

博士は焦りながら艦内電話を手取る。

「おい!私だ!誰かいるなら返事をしてくれ!」

しかし応答はない。どうやらみんなどこかへ行ってしまったらしい。

「畜生、こんな時に…………。まあいい、私は私で何とか脱出する方法を考えよう」

そう言つて彼が考える人のポーズをした時だった。

ドガアンツ!!

突如、研究室の天井から瑞鶴が落下してきたのだ。

「ひえっ!？」

予想外の事態に思わず変な声が出る博士。

「だめでしょ？あんたが逃げたら。ねえ、坂本治三郎博士？」

「き、貴様！大して役に立たなかった失敗作があ！」

博士は懐の拳銃を取り出して瑞鶴に向ける。

しかし……

ぐしやつ

瑞鶴のワイヤーで切られ、博士の拳銃を持っていた腕が弾け飛んだ。

「うぎゃあああっ!!」

「うるさいわね。静かにしなさいよ。早く元帥さんの所に行つてあげれば？」

博士の腕を切断すると同時に瑞鶴の機銃から機銃が展開され、瑞鶴は機銃で博士の全身を蜂の巣にする。

「あばばばば……！」

全身穴だらけになった博士は血を流しながら倒れ、やがて息絶えた。

「……ふう、終わった」

瑞鶴はその場に座り込む。

「……あく、殺したかったなあ、時雨を」

瑞鶴は残念そうな表情を浮かべる。

「………提督さんの役に立ちただけなのにな」

そう呟くと、瑞鶴はため息をつく。

「………どうしてこんなことになっちゃったんだらうなあ………」

その言葉を最後に、彼女の意識は途絶えた。

艦橋では思いつきり火災が起きており、荻原と夕立は脱出を急ぐ。

「早くしないと私達も燃えるぞ！」

「ぽいっ！」

夕立は艦橋のクソ厚いガラスを殴りで破壊し、萩原を背負って落下する。

「夕立、大丈夫か？」

「大丈夫っぽい！」

二人は海面に向かって落ちる。

そして無事、海に着水した。

ふと空中戦艦モスクワの方を見ると、大きな爆発音と共に艦全体が炎に包まれ、今にも墜落しそうになっていた。

「夕立、帰るぞ」

「ぽいー！」

こうして二人は横須賀鎮守府へ帰投した。

## 69話 とある時雨の物語

ある日の深夜、ある艦娘は追ってくる艦娘達から必死に逃げた。

「待って！止まれ！」

「くっ、しっこい……」

その艦娘の名は時雨。長門鎮守府の提督の秘書艦であつた艦娘だ。だが今は追われている身である。理由は単純明快。彼女が長門鎮守府の提督を監禁したからである。

何故そんなことをしたのか？それは時雨の提督に対する愛が歪んでいたからだ。彼女は毎日のように自分に優しくしてくれる提督に対し、恋心のようなものを抱いていた。

数年前……

「提督、今日の書類を持って来たよ」

「ああ、ありがとう」

時雨は執務室に入り、仕事を手伝っていた。

この頃の時雨はとても真面目であり、提督を常に気遣い仲間たちへの気配りも欠かさず行い、皆からも慕われ、秘書艦を任されている有能な艦娘だった。

「本当に時雨は気が利くなく。ありがたいよ」

「僕は別に当たり前のことをやっているだけだよ（//ノムノ）テレ」

この時、時雨は自分の顔が赤くなっていたことに気づいていなかった。

月日が経つにつれて、次第に責任が増えて行き秘書艦の他に旗艦ま



で行うようになった。

当然休日も減ることになるが、「皆のため」と頑張り、それからも提督と皆を支えた。しかし提督に褒められたり頼られたりする度に時雨は胸が締め付けられるような感覚に陥り、いつの間にか彼に恋するようになっていた。

いつしか時雨の気持ちは”提督のみ”と目標を変えていた。

「いつか僕だけの提督になってくれないかな……」

そう思いながら日々を過ごしていた。

そんなある日のこと……

「ケツコンカッコカリ？」

ケツコンカッコカリというシステムが導入された。大本営や横須賀鎮守府などの主力鎮守府では既に導入されていたのだが、長門鎮守府などの地方鎮守府にも導入されたのだ。このシステムは練度MAXになった艦娘に指輪が渡され、更に強くなれると言ったものだった。(仮) とも言えども、提督が艦娘に指輪を進呈するということはつまり「特別な存在」として認められた証なのだ。

これを知った時雨はチャンスだと思った。自分が一番最初にケツコンするんだと決意した。

「……でもね、提督」

彼女は一人、呟いた。

「本当はそれだけじゃ満足出来ないんだよ？」

そう言って微笑む彼女の瞳は黒く濁っていた。

そしていつしか時雨は提督に勝手な束縛を課すようになった。

「提督、何で他の女と話しているの？ダメじゃないか、僕の許可なく話しちゃあ」

「提督は他の艦娘には目移りしないで僕だけをずっと見ていないといけない」

「僕以外の艦娘に優しくしたり甘えたりしたら、その艦娘を殺すよ？」

どんどんエスカレートしていく彼女の要求。提督は嫌々ながらも受け入れざるを得なかった。拒否すれば時雨に何をされるかわからなかったからだ。こうして提督は徐々に彼女に依存されていった。

提督は時雨を怖く感じるようになり、ついにある日時雨が眠っている隙を狙って逃げ出したのだ。

「はあ……はあ……ここまで来ればもう大丈夫だろう」

彼はJR長門市駅の近くにきていた。ここから新山口駅へ行き、そこから新幹線で東京の大本営に逃げ込む算段だった。

だが……

「提督、どこに行くの?」

突然、背後から声をかけられた。振り向くとそこには……

「時雨?」

時雨が立っていた。まるで最初から彼がここに来ることをわかっていたかのように。

「なんで君がここにいるんだい?」

「さあ?それは提督が一番よく知っているんじゃないかな?」

「うっ……」

彼は悟った。逃げても無駄だと。

「さあ提督、僕と一緒に帰ろうか」

時雨は彼の腕を掴み、歩き出した。

「提督は酷い人間だねえ。近くで一途に思っている僕を簡単に捨てるなんて」

「な、何をやる気だ!?や、止める時雨!」

「提督が悪いんだよ……。僕以外を見るから……」

時雨は提督の顔に自身の顔を寄せ、

「んっ……」

唇を重ねた。そのまま提督の口内に舌を入れ、貪るように舐め回す。

「ぶはっ……」

数秒後、時雨が口を離すと、二人の口から唾液が糸を引いて垂れ下がった。

「提督は僕のものなんだから……そうだ、提督を地下牢へ入れよう。毎日決まった時間に会いに行つてあげるよ」

時雨は笑いながら言う。だが、その笑みは狂気に満ちていた。

数か月後、長門鎮守府は解体され、そこにいた艦娘達は別の提督の下へ行っていた。

旧長門鎮守府の提督を探すため、大本營の役人や憲兵があちこちを搜索したが、時雨が上手いこと言いくるめて追い返していた。

「提督、今日も会いに来たよ♪」

時雨は毎日のように長門鎮守府の地下牢に通っていた。

だがある日、呉鎮守府提督である山下中将が長門鎮守府を訪れた。

「提督？ううん、僕は見てもいないし会ってもいないよ」

時雨は何時ものように追い返そうとした。

「もういいかい？僕、忙しいんだけど」

「待て、提督はどこに居る？」

「知らないよそんなの」

「嘘をつくな！」

山下は時雨の頬を殴り飛ばした。

「痛いなあ……殴ることないじゃないか。僕は本当に何も知らな——」

次の瞬間、山下の拳が時雨の顔面を捉えた。

「ガッ……！」

時雨は勢い良く吹き飛び、壁に激突した。そして鼻血を噴き出しながら床に倒れた。

「貴様が提督を監禁しているのは調べがついている。今すぐ中佐を解放しろ」

「ぐう……提督は……渡さない……提督は……僕のものだ……誰にも

……絶対に……」

時雨はそのまま気絶してしまった。

数時間後、目を覚ました時雨の前には、武装した呉の憲兵隊がいた。  
「起きろ」

憲兵の一人が時雨を蹴り飛ばす。

「お前には提督誘拐の容疑がかけられている。証拠も上がっている。  
大人しく連行されろ」

「……ふふっ、あははは！バレちゃったか」

「何を言っている？」

時雨は笑い始めた。

「でも、提督を渡すわけにはいかないんだよね」

「何？」

「提督は僕のものだ。他の奴らに渡してたまるか」

時雨は立ち上がると、艤装を展開させた。

「なっ!？」

憲兵達はすぐに発砲しようとしたが、それよりも早く時雨の砲撃が  
彼らを襲った。

「ぎゃあああっ!!」

「提督を守るのは僕だけだ。邪魔をするなら殺す」

時雨は憲兵達を次々と殺していった。

「さあ、提督を迎えに行こう」

時雨は微笑む。その瞳はおぞましいほどに黒く濁っていた。

その時、呉鎮守府の艦娘達が次々とやってきた。

「時雨！貴方、何をやっているの!？」

時雨は声の主を見て舌打ちをした。それは扶桑だった。

「君か……。どうしてここに来たのかな？」

「私は山城と共に、私達の提督を助けにきたのです」

「ああそう。だったら、まずは君から死んでもらうよ」

時雨は砲塔を向けると、躊躇なく発射した。

次いで魚雷を投げつける。その当たり所が悪かったのか、扶桑と  
山城は轟沈した。

「これで邪魔者はいなくなったね」

だが、呉鎮守府の艦娘達は続々と集まっていた。

「ちっ……流石に全員は相手にできないか……」

時雨はとりあえず海に逃げることにした。だが、それは出来なかった。

「くそお……」

すでに回り込まれていたのだ。

時雨は主砲を撃つ。しかし当たらない。

「うわあっー」

遂に被弾してしまう。彼女はボロボロになりながらも、なんとか逃げ延びた。だが、既に体力の限界が来ており、逃げる気力もなかった。

呉鎮守府の秘書艦である海風が目の前に現れた。

「……君も邪魔するのかい？」

時雨は呟くように言った。すると、彼女は笑みを浮かべて、

「はい」

と返事した。

「ところで、普通の時雨さんの目は青いはずですけど、どうしてそんなにどす黒いんですか？」

「ああ、僕は生まれつき、イラついていたりしていたりすると目の色が黒くなるんだよ」

「そうなんですか。まあ、どうでもいいです。あなたは私の提督に危害を加えようと思いました。ですから、死ね」

時雨の身体に砲弾が直撃した。そのまま時雨は海面に倒れ込む。

「……提督は……誰にも渡さない……」

時雨はそう言い残し、息を引き取った。

その後、長門鎮守府の地下室から提督が発見された。彼の身体は衰弱しており、危険な状態だった。だが、なんとか一命を取り留めることができた。

ある海域の海面に横たわる少女の姿があつた。彼女こそ長門鎮守府の時雨だ。彼女の死体の怪我は深海の力か何かが作用したのか、綺麗に消えていた。

時雨は目を覚ます。だが、その中身はほとんど別人になっていた。

近くを漂っていた横須賀鎮守府の時雨の魂が乗り移つたのだ。体に残留していた長門鎮守府の時雨の魂の一部と混じること、今の時雨は生まれた。

「……………」

時雨は無言のまま立ち上がり、三つ編みのリボンをほどいて海に捨てる。

「提督……………」

時雨は微笑む。その瞳はどす黒くはなかったが、通常のスカイブルの宝石の様な瞳ではなく、青に黒がかった鉄紺色をしていた。

「……………さあ、帰ろう」

そう言つて時雨は海を駆けていった。

## 最終話 春時雨が降る夜に

「……もうすぐ2年か」

萩原は執務室でコーヒーを飲みながら呟いた。

あの日から、鎮守府の雰囲気は明らかに暗くなった。夕立や網走時雨、涼月などは部屋に閉じこもりがちになり、他の艦娘達も皆元気がない。

前よりかは幾分マシにはなったが。

「はあ……」

萩原は机の上に置いてある写真を見る。そこには楽しげに笑う時雨の姿があった。

「……………」

時雨が消滅してから2年が経った。

萩原は准将から中将に昇進。大本営は新体制に一新され、呉鎮守府提督である山下中将が元帥に昇進した。

また、あの三つ巴の戦いは深海棲艦の大侵攻ということにされ、祖国超兵の存在は闇に葬られた。

世論は未だに艦娘兵器派が多いが、徐々に変わりつつある。艦娘の人権保護や反戦デモなどの活動により、国内での艦娘に対するイメージは少しずつだが良くなってきている。

横須賀鎮守府には新たな艦娘が大勢着任し、現在は総勢150人となっている。だが……時雨はいない。ドロップや建造でも新しい時雨は着任しなかった。

「……………」

明日は時雨の二回目の追悼が行われる予定だ。

「……………」

今でも時雨のことを考えると胸が苦しくなる。辛い。苦しい。泣きたい。会いたい。愛している。様々な感情が入り交じる。

するとその時だった。

コンコン

ノック音が聞こえる。誰か来たようだ。誰だろう？

「はい」

扉を開けるとそこには何故か白露がいた。

「どうしたんだ？こんな時間に」

「えっと……ちよつとお話があつて」

「分かった。入れ」

「うん」

「それで、何の話だ？」

「時雨のこと」

「……！」

思わず心臓が跳ね上がる。

「……ねえ、提督」

「な、なんだ？」

「……まだ引きずつてるの？時雨のことを」

「……ああ」

「忘れろとは言わないけどさ、そろそろ立ち直つてよ。じゃないとみんな心配するよ。」

「分かつてる。だけど中々切り替えられなくてな……。すまない」

「ううん、謝らないでよ。無理もないよ。あんなことがあれば……」

「……すまん」

沈黙が流れる。

「ねえ、提督」

「ん？」

「聞いてほしいことがあるんだけどいいかな？」

「別に構わないが」

「ありがと。あのね、私……転生者なの」

「……は？」

いきなりとんでもないカミングアウトをされて呆然とする荻原。しかし彼女は構わず続ける。



「私の前世はこの横須賀鎮守府の提督でね、時雨の前世の杉野とは結構仲良かったんだよ」

「……」

「私は西馬の奴に殺されちゃったんだけど、何故か白露として生まれ変わっていたの」

「そう……なのか」

「まあ、信じてくれないよね……」

「……いや、信じるよ」

「へっ!？」

「……時雨も転生者だって本人が言ってたからな。ありえることだと思ってた」

「そう……なんだ」

「だからお前も転生者なんだなって思っただけだ。他に何かあるのか?」

「ううん、それだけだよ。じゃあ私、もう寝るね。お休みなさい!」

「おう、お休み」

「……」

「……」

再び二人の間に沈黙が訪れる。

「……ねえ、提督」

「どうした?」

「キスしてもいい?」

「……は?」

「その、なんていうか……提督に抱き締めてほしいというかなんというか……」

顔を真っ赤にして言う白露。

「……分かった。ほら、来い」

荻原は両腕を広げる。

「……ありがとう、提督」

そして二人はお互いを抱き締め合った。とても暖かい気持ちになる。

(……俺も寂しかったんだろうな)

「……ねえ、提督」

「なんだ？」

「あの、その、キスしたいです」

「はあ……分かったよ」

二人はそのまま唇を重ねた。最初は軽く触れるだけのキスだったが徐々に舌を入れていくデープなものに変わる。二人の息遣いが激しくなる。

やがて名残惜しげに口を離すと銀色の糸が引いていた。

「……」

「……」

白露の顔はすっかり蕩けていた。そんな彼女の姿を見て荻原は思う。

(やばい、滅茶苦茶エロい)

「あの……もう一回……」

「はいはい」

それから数時間、執務室からは甘い声が響き、白露は無事に荻原ハーレムの一員になった。

◇

夜。

荻原は鎮守府の広場で散歩していた。雨が降ったり止んだりしているが、傘は差していなかった。

「ふう……」

彼はベンチに座って一息つく。

『時雨のことは忘れない。だがいつまでも過去に囚われているわけにはいかない』

そう思ってはいるものやはり忘れられなかった。するとそこに。

「……………」

網走時雨がやってきた。

「どうしたんだ？こんな時間に」

「眠れなくて」

「奇遇だな。実は私も同じだ」

「隣に座ってもいいかな？」

「ああ」

網走時雨は隣に腰かける。

「……………」

沈黙が流れる。しばらくして網走時雨が口を開いた。

「ねえ、荻原さん」

「どうした？」

「どうして泣いてるの？」

「えっ？」

「涙、出てるよ」

そう言われて頬に触れると確かに濡れていた。無意識のうちに涙を流していたようだ。

「あれ？おかしいな……………。なんでだろう？」

自分でもよく分からなかった。気付けば勝手に流れていたのだ。すると網走時雨が背中をさすってくれた。とても心地よい感触だった。

「……………落ち着いた？」

「ああ、ありがとう」

「僕にできることがあれば何でも言っつてよ」

「ありがとな。それじゃあ一つ頼みがあるんだがいいか？」

「うん」

「抱きしめてもらってもいいか？」

そう言うのと彼女は微笑みながら言った。

「うん、分かった」

網走時雨は優しく彼を包み込むように抱擁する。

「ありがとうな」

「どういたしまして」

しばらくそのままの状態でいたが、どちらからともなく体を離す。

「そろそろ部屋に戻るよ」

「ああ、お休み」

そう言うのと網走時雨は歩き出した。荻原はそれを見送る。

（一番シヨックだったのは彼女だったんだろうにな……何をやってい  
るんだ、私は）

荻原はベンチから立ち上がり散歩を再開する。雨は一層激しく  
なっていた。

「ふう……」

すると前方から誰かが来るのが見える。艦娘だろうか？暗がり  
でよく見えない。よく見ると……。

「……いい雨だね。提督」

「……ッ!？」

聞き覚えのある声を聞いて心臓が跳ね上がる。ゆっくりと前を見  
るとそこには時雨がいた。

「し、ぐれ……なのか？」

「うん、そうだよ」

時雨は答える。荻原は動揺を隠せなかった。目の前にいるのは紛  
れもない時雨である。

「時雨！本当に時雨なのか!？」

「うん、体は別の時雨だけど中身は僕だよ」

「………時雨!」

荻原は駆け寄って彼女を力一杯抱き締めた。もう二度と会えない  
と思っていた大切な人がこうして自分の腕の中にいるという事実に  
心の底から喜びを感じた。

「時雨……」

「うん……」

「時雨……」

「大丈夫だよ、提督」

荻原は泣きじやくつていた。時雨はずっと荻原を抱き締め続けた。

「落ちついた？」

「……うん」

二人は今、雨に打たれながら抱き合っていた。お互いに言葉はなかった。

やがてどちらからともなく体を離すとお互いの顔を見つめ合う。

そして自然とキスをした。お互いの気持ちを確かめるような優しいキスだった。

やがて唇を離すと二人は再び顔を見合わせる。時雨はとても嬉しそうな表情をしていた。

「会いたかったよ、提督」

「私もだ。……時雨」

「やつと会えたね」

「ああ……」

それから二人は手を繋いで執務室へと戻った。道中で会話は一切なかったが、繋いだ手を通してお互いの気持ちは十分過ぎるほど伝わってきた。

執務室に着いた二人はそのままベッドへ入り、一晩中愛し合った。お互いの存在を確かめ合うかのように……。

そして翌朝。

「ん……」

カーテンの隙間から差し込む朝日で荻原は目を覚ました。横にはスヤスヤと眠る最愛の人の姿が。

「ふわぁ……」

大きく伸びびをして体を起こす。隣では時雨がまだ眠っていた。荻原は彼女の頭を撫でる。

「ん……」

時雨は身じろぎするとやがて目を開ける。そして自分に触れている荻原の手に気付いた。

「おはよう、時雨」

「おはよう、提督」

時雨は幸せそうに微笑む。

「ごめんな、起こしちやったか？」

「ううん、平気」

時雨は起き上がって背筋を伸ばす。

「ねえ、提督」

「ん？」

「これからまたよろしくね」

「ああ、こちらこそ」

しばらくして、荻原と時雨は鎮守府本館の扉から外へ出る。

「行こうか、提督」

「ああ」

二人は並んで歩き出す。

雨は既に止み、雲一つない空だった。

—  
完  
—

## 番外編 真面目に走れ杉野

杉野は激怒した。

必ず、かの邪知暴虐の上官を除かなければならぬと決意した。

杉野には艦隊指揮がわからぬ。彼は士官学校を何浪かして卒業した提督予備生であり、今のところ大本営の役人である。艦娘は軍人だと考えているが、艦娘人間派の一員であり、人間派のエライ提督のお金で暮らしてきた。けれども地方への着任に対しては、人一倍に敏感であった。

本日の午後、杉野は大本営を出発し、ビルのジャングルを越え、この上野の市（東京都台東区）にやって来た。

杉野には地位も、金もない。父も、母も無い。女房もない。数年前に購入した二眼レフカメラと二人暮らしだ。

大本営では近々、先の大規模作戦の戦勝記念パーティーが開かれる予定である。

杉野は、それゆえ買い出しを頼まれ、この市まで来たのだ。

まず、買い出しだとホラを吹き、それからカメラで鉄道の写真を撮った。

杉野には、竹馬の友があった。名をE233系と言う。

今はこの上野東京ラインを経由し、熱海から黒磯を結ぶ運用に就いている。その友を、これから訪ねる予定なのだ。

久しく逢わなかったのだから、訪ねて行くのが楽しみである。歩いているうちに杉野は、駅の様子を怪しく思った。ひっそりしている。

もう既に日も傾いて、外の暗いのは当りまえだが、妙に静かだった。基本的にのんきな杉野も、だんだん不安になって来た。路で逢った若い駅員さんをつかまえて、何かあったのか、十日まえにこの駅に来たときは、帰宅するサラリーマンで混沌としていて賑やかだったが、といい質問をした。

駅員さんは、首を振って答えなかった。



しばらく歩いて定年寸前の駅員さんに逢い、今度はもつと、語勢を強くして質問した。老人は答えなかつた。

杉野は両手でジジイのからだをゆすぶって質問を重ねた。老害は、あたりをはばかりる低声で、わずか答えた。

「海軍と陸軍は、物資を奪います」

「なぜ奪うと言うのだ。徴収だぞ。まあ続けてくれ」

「悪心を抱いている、というのですが、誰もそんな、悪心を持つては居りませぬ」

「たくさんの物資を徴収したのか」

「はい。まず、駅のベンチを。それから、駅の看板を。それから、電光掲示板を。それから、一部のホームの線路を。それから、旧型車両を」  
「驚いたよ。軍の人はご乱心か（自分が軍人ということは棚に上げる）」

「いいえ、乱心ではございませぬ。戦局が、悪化している、と言うのです。このごろは、通勤客をもお疑いになり、JR貨物は軍の管理下で大增発され、我がJR東日本は路線の使用料で儲かっておりますが、旅客列車の本数と比例して利用客は減っています。御命令を拒めば、深海棲艦が近海をうろついている千葉支社に、左遷されます。私事です、今日は、5編成のE231系が重機の餌食になりました」

聞いて、杉野は激怒した。

「呆れた上層部だ。こうしておれぬ」

杉野は、単純な男であった。仕事を、放ったまま、のそのそ軍用車に戻って行った。

たちまち彼は、上官の着信履歴に捕縛された。調べられて、軍用車に付いていたドラレコからは映像が出て来たので、騒ぎが大きくなつてしまった。

杉野は、上官の前に引き出された。

「上野駅で何をするつもりであったか。言え！」

暴君滝川は静かに、けれども威厳を以って問いつめた。その人の顔は色黒で、眉間の皺は、刻み込まれたように深かった。そして、髪はバーコードの如く。

「買い出しを」

杉野は悪びれずに答えた。

「お前がか？」

部長は、憫笑した。

「仕方の無いやつだ。お前には、軍人の仕事が変わらぬ」

「言うな！もっとハゲるぞ！」

杉野は、いきり立って逆ギレした。

「人の心を疑うのは、最も恥ずべき悪徳だ。滝川中将は、部下の忠誠さえ疑って居られる」

「疑うのが、正当の心構えなのだ、わしに教えてくれたのは、お前たち新人提督だ。人の心は、あてにならない。人間は、もともと私欲の塊。信じては、ならぬ」

バーコードハゲは落ち着いて呟き、ほっと溜息をついた。

「私だって、平和を望んでいるのだが」

「なんの為の平和だ。自分の地位を守る為か。このハゲ」

今度は杉野が嘲笑した。

「罪の無い人を叱りつけて、何が平和だ」

「黙れ。穀潰し」

バーコードハゲは、さっと顔を上げて報いた。

「提督予備の口では、どんな清らかな事でも言える。私には、軍人の腹綿の奥底が見え透いてならぬ。お前だって、いまに、軍法会議にかけてから、泣いて詫びたって聞かぬぞ」

「ああ、ゲーハーは伶俐だ。自惚れているがいい。私は、ちゃんと働く覚悟で居るのに。命乞いなど決してしない。ただ、――」

杉野は、そこで言葉を切った。

「ただ、なんだ？」

バーコードハゲが促した。

「ただ、私に情をかけたつもりなら、三日間の猶予を与えて下さい。たった一人の893の知り合いが、闇市の物資の取引に乗り気なので。三日のうちに、私は彼らとの契約を纏めて来ます」

「馬鹿か」

バーコードは、嗔れた声で低く笑った。

「とんでもない嘘を言うわい。逃がした無能が帰って来るというのか」

「そうです。帰って来るのです」

杉野は必死で言い張った。

「私は約束を守ります。私を、三日間だけ許して下さい。中山組の若頭さんが、私との取引を待っているのだ。そんなに私を信じられないならば、よろしい、この大本営の役人の一人に、白崎という大尉がいます。私の唯一の後輩だ。あれを、人質としてここに置いて行こう。私が失敗して、三日目の定時までには、ここに帰って来なかったら、代わりにその男を処罰してください。たのむ、そうして下さい。あと、その白崎もよく勤務時間帯にパチンコ店にいるのを見かけます」

白崎はとぼつちりを受けたという。

それを聞いて滝川は、残虐な気持で、そつとほくそ笑んだ。

生意気なことを言う。どうせ帰って来ないに決まっている。この嘘つきに騙された振りして、放してやるのも面白い。ついでに白崎とかいう男に、杉野から密告があつたと伝えてやるのも気味がいい。人は、これだから信じられぬと、私は悲しい顔して、その白崎とかいう男を柱島鎮守府送りに処してやるのだ。

世の中の、正直者とかいう人間にうんと見せつけてやりたいものさ。

「願いを、聞いた。その契約をとってくるがいい。三日目には定時までに帰って来い。遅れたら、白崎は殺す。ちよつと遅れて来るがいい。おまえの罪自体は、永遠に許してやる」

「な、何をおっしゃる」

「はは。私は国が大事だから、遅れて来い。お前の性根は、わかっているぞ」

杉野は口惜しく、地団駄踏んだ。ものも言いたくなくなった。

唯一の後輩、白崎楠男は、会議室に召された。暴君バーコードの面前で、先輩と後輩は、数時間ぶりで相逢うた。

滝川は、白崎に一切の事情を語った。白崎は無言で戦慄し、杉野をぎろと睨みつけた。後輩なんかは、それでよかった。

白崎は、こっぴどく締め上げられた。杉野は、すぐに出発した。東京駅の最終列車、総武線快速 東京行に一駅乗って。

杉野はその夜、電車の写真を撮った後、五里の帰路を急ぎに急いで眠りについた。

大本営へ到着したのは、翌日の午前、陽は既に高く昇って、同僚たちは皆、パソコンや紙と見つめ合って居た。

杉野の上官の一人であり、坂本研究所の所長である坂本中佐も、今日は何か作業をしていた。颯爽と歩いて来る杉野の姿を見つけて驚いた。

そうして、うるさく杉野に罵声を浴びせた。

「朝イチに呼ばれてまして……」

杉野は無理に取り繕おうと努めた。

「中山組に用事を残して来た。またすぐ中山組に行かなければいけない。あと明日、先月分の稚内鎮守府の戦果を纏めて挙げる。早いほうがよからう」

坂本は顔を赤らめた。

「うれしいか。この前のへこませたバンパーも直して来た。さあ、これから行って、お偉いさんたちに知らせて来い。先月分の稚内鎮守府の戦果の提出は、明日だと」

杉野は、また、颯爽と歩き出し、席へ帰って you O u b e で鉄道音 M A D を見始め、間もなく机に倒れ伏し、呼吸もせぬくらいの深い眠りに落ちてしまった。

眼が覚めたのは昼だった。私は起きてすぐ、中山組本部を訪れた。そうして、少し事情があるから、契約を明日にしてくれ、と頼んだ。

若頭さんは驚き、それはいけない、こちらには未だ何の書類も来ていない、せめて見積もりは出してくれ、と答えた。私は、それじゃ困ると食い下がった。

若頭さんも頑強であった。なかなか承諾してくれない。夕暮れまで議論をつづけて、やっと、どうにか若頭さんをなだめ、すかし、おだて上げ、ご機嫌を取り結んで、説き伏せられた。しつこく食い下がった結果、怖いお兄さんたちに連れ出され、帰宅することになった。

結局契約は、白紙になった。私の、若頭さんへの謝罪が済んでしばらく、黒雲が空を覆い、ぽつりぽつり雨が降り出し、やがて車軸を流すような大雨となった。

家のパソコンで you O u b e のジ O ジョの M A D を見ていた私は、何か不吉なものを感じたが、それでも、M A D の演出で気持を引き立て、狭いアパートの中で、一人笑いこぼしていた。

明日の定時までには、まだ十分の時が在る。ちよつと一眠りして、それからすぐに言い訳を考えよう、と考えた。その頃には、怒りも小ぶりになっていよう。少しでも永くこの環境にグズグズとどまつていたかった。

私ほどの男にも、やはり未練の情というものは在る。

今宵呆然、風俗にてヤケ酒に酔っているらしい白崎に電話をかけた。

「栄転おめでとう。私は脅されてしまったから、ちよつとご免こうむって白状しただけだ。眼が覚めたら、すぐに東京駅で新幹線に乗れ。暴君滝川はキレたら何するかわからんからな。私がいなくても、もう君には優しい自然と部下の艦娘があるのだから、決して寂しい事は無い。君の先輩の、一番嫌いなものは、人を疑う事と、それから、嘘をつく事だ。お前も、それは、知っているね。先輩との間に、どんな

秘密でも作ってはならぬ。君に言いたいのは、それだけだ。君の先輩は、おそらくエライ男なのだから、君もその誇りを持っていろ」

白崎は、話途中でワンワン喚きだし、うるさかったので「黙れカス」と一言言い、電話を切った。

そして私はス〇ロングゼロを一つ飲むと、布団にもぐり込んで、死んだように深く眠った。

眼が覚めたのは翌日の始業の頃である。私は跳ね起き、南無三、寝過ぎしたか。いや、まだまだ大丈夫、これからすぐに出発すれば、刻限までには十分間に合う。

今日は是非とも、あの暴君に、私の処世術を見せてやろう。そうして笑って軍の足元にしがみついてやる。私は、悠々と身仕度をはじめた。

おそらく怒りも、いくぶん小ぶりになっている頃合いである。身仕度は出来た。

さて、私は、安っぽいチャリに飛び乗ると、雨中、車の如く走り出した。

私は、これから、怒られる。怒られる為に出勤するのだ。身代りの後輩を吊う為に出勤するのだ。

暴君の奸佞邪智を打ち破る為に出勤するのだ。弁明しなければならぬ。そうして、私は許される。

若い時からの居場所を守れ。さらば、白崎。若い左遷は、つらかった。

幾度か、吹き出しそうになった。えい、えいと大声挙げて自身を叱りながらチャリをこいだ。

家を出て、ビルを横切り、高架をくぐり抜け、大本營の近くに着いた頃には、雨も止やみ、日は高く昇って、そろそろ暑くなってきた。私は額の汗をこぶしで払い、ここまで来れば大丈夫、もはや白崎への未練は無い。

白崎は、きつと良い提督になるだろう。私には、いま、なんの気がかりも無い筈だ。

まっすぐに大本營に行き着けば、それでよいのだ。そんなに急ぐ必要も無い。ゆっくり歩こう、と持ちまへの呑気を取り返し、好きな小歌をいい声で歌い出した。

ぶらぶら歩いて二里行き三里行き、そろそろ全里程の半ばに到達した頃、降って湧いた災難、私のチャリは、はたと、止まった。

見よ、前方の海軍陸戦隊の群れを。その中心に居る男こそ、邪知暴虐の滝川バーコード少将だ。

「……………」

滝川が振り向いて私を見た。私は慌てて目をそらし、俯向いて、そのまま立ちつくした。

「やあ、杉野少佐」

暴君滝川は妙にフレンドリーに私に話しかけてきた。

「な、何でしょう……………」

私の背骨は、凍り付いた。

「君には網走鎮守府への異動命令が出ている。ご苦労だが、荷物をまとめてくれ給え」

暴君はニコニコ笑っている。

「はっ」

私は、きよとんとした。

「聞こえなかったかね？ 私は何度も言わぬ。杉野、貴様、耳も遠いのか。それでは困る。網走に行けと言っている」

「アッハイ」

そうして、私は、網走鎮守府に左遷された。

◇

「まあ、こんなことがあつたんだよ」

話し終わった時雨は、どこか遠くを見るような眼をして、フツと微笑んだ。

「お、おう」

萩原は、めっちゃ戸惑った。

「まあ、そのおかげで網走の時雨と出会えたんだけどね」

時雨は照れくさそうに笑い、ス〇ロングゼロを飲み干すと、新しいのを取り出して栓を抜き、

「じゃ、もう一杯飲もつか」と言った。

「そうだな」

萩原も笑ってグラスを差し出す。

こうして、夜は更けていく。



転しぐ改アフター 時雨は静かに暮らしたい（フラグ）

時雨は静かに暮らしている

時雨が帰ってきてから数年が経った。

横須賀鎮守府の艦娘達は時雨との関係改善に努め、なんとか受け入れてもらえるようになった。まだ溝は完全に埋まったわけではないが、お互い少しずつ歩み寄っている。

時雨も以前のように無邪気な笑顔を見せるようになっていた。そのことが荻原にはたまらなく嬉しいことだった。

そんなある日の朝。時雨は自室でぐっすり眠っていた。今日は一番なのだが特に予定はない。ただ何となく寝ているだけだった。

するとそこにドアをノックする音が聞こえてくる。返事を待たずに入ってきたのは荻原だった。

「おーい、時雨」

「どうしたの？提督」

時雨はまだ少し眠そうにしていたが、荻原の声を聞いてすぐに目を覚ます。

「一緒に飯でも食わないか？」

「うん、行くよ」

荻原は先に行き、時雨は着替えて、髪を整えてから彼の後を追う。

「待たせたかな？」

「ん？私もさつき来たところだ」

「それなら良かった」

二人は食堂へ向かう。時雨は鮭定食を頼み、荻原は鯖の味噌煮を選んだ。

注文してから料理が来るまで雑談をしていると、不意に時雨が言った。

「提督」

「なんだ？」

「僕がいなくなった時、どんな気持ちだった？」

「……すぐく寂しかった」

「そっか」

時雨は俯く。

すると彼は箸を置いてこう告げた。

「時雨」

「……ん？」

「もうどこへも行かないでくれ。私は君がない生活なんて考えられない」

「……うんー！」

彼女は満面の笑みを浮かべた。荻原もそれを見て優しく微笑んだ。

それからしばらく食事を楽しんだ二人。時雨はいつもよりよく食べていた。

「提督」

「ん？」

「あくん♪」

「え？ちよ、ちよっと待ってくれ！」

「やだ、待たない」

時雨は強引に荻原の口に鮭を突っ込んだ。

「おいしいかい？」

「……ああ、うまいぞ」

荻原は赤面しながら答える。時雨はとても満足そうな顔をしていった。

その後、二人は食事を済ませると食堂を出て執務室へと向かった。

「提督」

「ん？」

「手、繋ごうよ」

「いいが……」

時雨は荻原の左手を取ると自分の右手と恋人繋ぎにした。そして

ギュツと握り締める。

「こうしてると幸せだね」

「そうだな……」

時雨は上機嫌だった。その様子はまるで子犬のようだった。そんな彼女を見ているだけで荻原も幸せな気分になる。

それから二人は執務室へと入る。今日は休日なので他に人はいない。

「ねえ、提督」

「ん？」

「ぎゅってして」

「ああ……」

荻原は時雨を抱き寄せる。時雨は彼の胸に顔を埋めた。

「提督の匂い、好き」

「……そうか」

「うん」

そのままの状態で時間が過ぎていく。荻原はとても穏やかな気持ちになっていた。やがてどちらからともなく体を離す。二人は見つめ合うと軽くキスをした。

そして、もう一度抱き合ったその時――。

突然、執務室の扉が勢い良く開かれた。

二人が驚いて振り返るとそこには網走時雨の姿があった。

「……執務中に何やってるんだい？」

「「じやれてるだけ」」

「そうかい……」

時雨と荻原は息ピッタリで答えた。それを聞いた彼女は呆れたように溜息をつく。

「……提督も僕に少しはかまってほしいんだけど」

網走時雨はそう言いながら時雨に抱きつく。その目はどこか悲しげだった。

「ああ、ごめんね。よしよし」

時雨は網走時雨の頭を撫でて慰める。時雨の瞳はいつかのように

慈愛に満ちていた。

「全く、君はずるいなあ」

網走時雨は苦笑いすると時雨の頬にチュツとキスした。

「ねえ、僕もぎゅーってしてほしい」

「ああ、おいで」

時雨が両手を広げると網走時雨はそこに飛び込むようにして抱きついた。時雨は彼女を強く抱きしめる。

「あったかいなあ」

「うん……」

二人の少女はその温もりを確かめ合っていた（なお、中身は46歳のおっさんとその嫁艦）。その様子を見ていた荻原の顔は緩んできた。

（この平和な日常が続くといいな）

彼は心の底からそう思った。

時雨は静かに暮らしている…？

時雨は萩原と網走時雨とイチヤイチャした後、自室でゴロゴロしながら漫画を読んでいた。

するとそこへドアをノックする音が聞こえる。

返事を待たずに堂々と入って来やがったのは夕立だった。

「しくぐくれ〜！遊ばお！」

時雨のベッドの上に寝転がっていた彼女の上に馬乗りになると、首に手を回して顔を近づけてきた。

相変わらず距離感というものがない奴である。時雨は露骨に嫌そうな表情をして言った。

「……僕はこれから読書をするつもりなんだけど」

「いいじゃん別に。私と一緒に遊びましょ？」

「……わかったよ。何して遊ぶ？」

時雨が諦めて言うと、夕立は笑顔になった。

「じゃあ殺し合「やだ」

間髪入れずに拒否する時雨。当然と言えば当然だろう。

すると彼女は頬を膨らませた。

「ええ……たまにはこういう遊びもいいと思ったのにい……」

「そういう事を言うなら別のことしようよ」

「他の……？他ねえ……？」

何か閃いたのかポンと手を打つ夕立。彼女は時雨を押し倒すような格好で言う。

「セ〇クス！」

満面の笑みだった。だが時雨の反応は冷たかった。

「絶対にヤダ」

きつぱり断る時雨。その目は完全にゴミを見るそれだった。

「むう〜……そこまで言われると傷付くっぽい」

「じゃあ、どうして欲しいのさっ？」

時雨が訊くと、夕立は再び満面の笑みを浮かべる。そして、彼女はこう言った。

「お昼寝しましょう♪」

結局はいつも通りの展開になる二人であった。

「ほっぺぷにっぷにー」

夕立は時雨の柔らかい頬を指で突いている。彼女は楽しそうにしているが時雨にとってはただひたすら鬱陶しいだけだ。

「ちよつとやめてくれないかな」

時雨の言葉にも夕立は動じない。それどころか調子に乗って更に強く触ってきた。その瞬間、プチッと何かが切れた時雨は反撃に出た。

時雨は両手を使って、夕立の胸を鷲掴みにする。

「きゃっ?!?ちよ、そこはだめ……」

夕立は慌てて抵抗するがもう遅い。時雨の手は既に夕立の胸に食い込んでいた。

「ん……ん……」

「どうしたの、夕立?」

「なんでもないっほい……。うゝ……」

夕立が恨めしげな目を向けてくるが、それは逆効果にしかならない。

彼女は仕返しにとばかりに時雨の胸に両手を当てて揉んでくる。

時雨はそれに抵抗するように夕立の乳首を摘んだ。

二人はお互いの敏感な部分を刺激しあう形になり、段々とエスカレートしていく。

時雨は夕立の首筋に舌を這わせ始めた。夕立も負けじと時雨の首元を舐める。そのまま二人の行為はエスカレートしていき――。

「マ、マスター、何してるんですか……?」

「何してるんだい?」

涼月と初月の声で我に返る。二人は今、ベッドの上で抱き合っていた。傍から見れば、完全に百合プレイをしていたとしか思えない光景だった。

時雨の顔に冷や汗が流れる。一方の夕立はどこか勝ったとでも言いたげな表情をしている。時雨は慌てて起き上がった。

「ご、誤解しないでね！これは……なんていうか……」

必死に弁明しようとする時雨だったが何も思いつかない。その時、夕立が先に口を開いた。

「私達愛を確かめ合ってたっばい！」

お前は何も喋るなど言いたい。時雨は心の中で叫んだ。しかし夕立は構わず続ける。

「ねえ、時雨ももつと素直になるっばい。私が何でもしてあげるから」  
「うん、分かった。だからこれ以上僕を巻き込まないでくれるかい？」

「……時雨って私の事嫌いななの？」

悲しそうな顔をする夕立。時雨はため息をつくと言った。

「……………好きだよ」

「やったあー！」

飛び跳ねて喜ぶ夕立を見て、涼月と初月は顔を見合わせた。この人たち大丈夫か？そんな感じだった。

### side 夕立

(ふふふ、コズロフスキーのおかげで時雨を上手く乗せられたっばい)  
夕立は内心でほくそ笑んでいた。実は先程までしていた行為は全て彼女の時のコズロフスキーに考えさせたことだった。

(次は時雨を襲うっばいよ)

果たして、時雨は静かに暮らせるのだろうか。

## ゴー・トウ・網走 前編

ある冬の日、時雨は網走へと独り旅に出ていた。

かつて網走鎮守府の提督を（左遷とはいえ）十数年務めていた彼女にとつてここは故郷のようなものだった。

彼女が乗っている列車は特別快速せきほく、数年前、深海大侵攻により網走鎮守府とその周辺が壊滅した後、廃止となった特急オホーツクのかわりとしてできた列車である。

※イメージ

「もうすぐ着くかな」

頬杖をしながら窓の外を見ると既に市街地が広がっている。車両の乗客は時雨1人で、先ほどまで老夫婦が乗っていたが、前の駅で時雨のことを奇妙なものを見たかのような様子で降りてしまった。

彼女は特に気にせず、車窓から流れる景色を眺めていた。その表情はとても懐かしいそうで穏やかだった。

『まもなく終着、網走、網走です。全てのドアをご利用いただけます』自動放送のアナウンスが聞こえる。かつての特急オホーツクの男声だった自動放送と違い少々機械的な女性の声だが。

列車が止まると同時に時雨は降りる。改札で切符を渡して外に出た。

◇

何だか町全体が暗かった。身を切るような風がびゅうびゅう吹い



ている。

僕が網走にいた頃はもつと活気のある土地だったと思うけど……。  
僕が想い出すこの土地はこんなところじゃない。もつと良いところ  
がたくさんあった。だが、その良いところの記憶が薄ぼんやりして  
いて微妙に思い出せないのも、もともとここはこんな土地だったとい  
うことにしておこう。

今回網走へ帰ってきた理由は観光のためではない。

最近、夢の中で網走鎮守府の沈んだ艦娘達に見つめられるような気  
がして寝覚めが悪いので、供養のために墓参りに行くのだ。それにし  
ても何だろうあの夢は。

網走が壊滅する直前に自分が経験したことをなぞるように繰り返し  
し見せてくる。あれはおそらく、僕を責めているのだろう。何故お前  
だけが今も生きているんだという無言の圧力を感じる。

「……早く行こう」

僕は足早に鎮守府の跡地へと向かった。

道中、店がたくさんある通りを通りかかる。店はほとんど閉まつて  
いてシャッターが下ろされている。たまに開いている所もあるが、品  
物はまばらだ。

「……」

僕の記憶の中にあるこの通りは多少寂れてはいたが、賑やかだった  
はずだ。でも今は誰もいない廃墟のようだ。とても寂しい感じがし  
た。まるで僕の心を映しているかのよう、何もかも灰色に見えた。

それから数十分ほど歩き、僕はかつて網走鎮守府があった場所へと  
辿り着いた。しかしそこは荒れ果てていて見る影もない状態だった。  
草が伸び放題になっている。かつて鎮守府だったであろう崩落した  
建造物がほとんど撤去されずに放置されている。

そしてそこに慰霊碑があった。前世の僕と艦娘達の名が刻まれて  
いる。僕はその中の一つの名前を見るたびに罪悪感に押し潰されそ  
うになる。

でもなぜだろう、彼女達の名前を見てもモヤがかかっているように  
顔すら思い出せない。

そしてその事実が僕をさらに苛む。そして頭が割れそうな酷い頭痛がしてくる。

「くっ……」

僕は頭を抱えその場にしゃがみ込んだ。痛みのあまり意識が遠のきかける。その時、突然後ろから誰かに声をかけられた。

「おい、どうした？大丈夫か？」

振り返ると、そこには50代くらいの漁師と思しき男性が立っていた。彼は心配そうにこちらを見つめている。

あれ？この人のことを知っている気がする。僕が提督だった頃よく会っていた人だったような……名前は確か――。

僕が必死に名前を出そうと記憶を探っていると突然視界がぼやけ、そのまま気を失ってしまった。

◇

「……は？」

目を覚ましたとき、見覚えのない和室の中にいた。身体を起こし辺りを見回す。隣には先程の男性が座っている。

「……登志夫さん」

「？なんで俺の名前知ってんだ？」

無意識のうちに声に出していた。……僕の友人の、彼の名前を。

「……そんなことよりここは俺の家だよ。お前さんが倒れてたところをたまたま見つけてな」

「そうですか……」

僕はゆっくりと立ち上がる。少し目眩がしたが、すぐに治った。

「もう大丈夫なのかい」

「はい、(´▽｀)迷惑をおかけしました」

「いいって、時雨ちゃん」

「……なんで僕の名前を？」

「どうして僕の名前を知ってるんですか」

「……杉野提督がよく君を連れて俺のここに来てただろ。大侵攻のとき、杉野と一緒に死んだと思ってたけど、生きてたんだな」

「……登志夫は網走時雨のことを言っているんだろう。確かに、よく彼女を連れて君に会っていた。」

「もう十何年も経ってるのに姿かたち何一つ変わってねえな。艦娘だからかな？俺はこの通り、黒かった髪がすっかり白くなっちゃまってなあ」

登志夫の頭を見ると確かに結構白かった。彼は禿げてはいないが、白いものがかかなり混ざっている。

「お前さんはずっとあのままなんだろ。若いまままでいられていいよなあ」

登志夫が羨ましそうに言う。

「あの……」

「おっとすまねえ、つい長話をしちゃった。じゃ、ゆっくりしていきな」

彼は立ち上がり部屋を出ようとしたところで、思い出したように振り返りこう言った。

「そうだ、時雨ちゃん。十何年も前に杉野提督に貰ったコート、俺には小さすぎて入らなかつたから置いといたままだったんだ。よかつたらやるよ」

シンプルにいらぬ服を中身本人に押し付けようとするな。しかもそれ、僕が坂本に反乱おこす直前に登志夫に渡したやつだね。まあいいか、処分してくれても良かったんだけど。

「はい。わざわざありがとうございます」

「じゃ、達者でな。また来てくれよ」

僕は彼の家を後にした。外は相変わらず寒い。とりあえずさっきのコートを着てみる。サイズは少し大きい割と着れた。あとなんか懐かしくてちよつと嬉しい。

さて、これからどうしようか。もう用事は済ませたが、もうすでに日が沈もうとしていて暗くなってきた。行きは新幹線と在来線

を乗り継いできたが、今から帰るのも面倒くさいし……。今日は宿に泊まることにしよう。とりあえず提督に電話するか。

プルルルル

『こちら横須賀鎮守府』

「提督かい？時雨だけど」

『ああ、時雨か。どうかしたか？』

「うん、あのね。実は――」

提督に今日のことを報告する。

『それじゃあ、明日の昼には帰ってこいよ』

「わかった。それじゃ、また明日」

僕は通話を切った。これでひとまず大丈夫だろう。

その後僕は適当に見つけたホテルにチェックインした。部屋の内装は綺麗で、広さもあって快適だ。

僕は風呂に入った後、寝間着を着た状態で窓際のソファに座り、電子タバコを吸いながらテレビを眺めていた。

ニユースでは、最近オホーツク海で深海棲艦の活動が活発になり、船の被害が相次いでいると言っていた。

自称軍事学や深海棲艦に精通している専門家やジャーナリストなどが議論している。

そんなとき、ヘリコプターからLIVE映像が流れた。映し出されたのは、カニ漁船の船団が深海棲艦に襲撃されている光景だった。僕はその様子を観て愕然とする。よく見るとカニ漁船に登志夫が乗っている。

「あ、そっぴゃあいつカニ漁師やってたっけ」

僕が登志夫の職業を思い出したところで、テレビの中の自称専門家たちがなんやなんやと騒ぎ始めた。

「……………助けに行くか」

僕はそう呟き、コートを取りホテルを出た。